金 剛 峯 寺 遺 跡

―高野山霊宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査報告書―

1990年3月

財団法人　和歌山県文化財センター

金 剛 峯 寺 遺 跡

—高野山霊宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査報告書—

1990年 3 月

財団法人　和歌山県文化財センター

序

高野山金剛峯寺は、宗祖弘法大師が弘仁７年に嵯峨天皇より官符を賜り、鎮護国家と修禅の道場として開創され、1,170余年の歴史を伝える。

八葉にかこまれた峯には法燈のたゆることなく、深遠な教義の象徴である密教美術品、大師を慕う人々の信仰に基づく宗教遺産など広範囲の文化遺産が伝存し、日本有数の文化財の宝庫であります。

しかし、高野山の歴史を振り返りますれば、創建以来５度にわたる火災に遭遇した大塔に象徴されますように、山上の諸堂塔や坊舎が再三にわたる落雷・炎上の災禍に遭遇し、その度に焼失と再建が繰り返されてきた歴史でもあります。

再建には、大師の偉大な霊格によって、大師を慕う人々の篤い信仰に基づく援助によるものでありました。このような歴史の変遷が地中に秘められています。

昭和57年より弘法大師御入定1,150年御遠忌大法会の一環事業として、国及び県の補助を得て建設された高野山霊宝館新収蔵庫と駐車場の新設工事に伴い発掘調査が実施されました。出土いたしました遺物は、財団法人和歌山県文化財センターに依頼し、整理および保存修理を目的に金剛峯寺遺跡（霊宝館新収蔵庫・駐車場）出土遺物整理事業を３ヵ年計画で実施してまいりました。今度、本整理事業の完了に基づき報告を申しあげる次第です。後世の資料として役立てば幸いと存じます。

終りに、終始にわたり御高配と御指導を賜った文化庁及び県当局と、発掘全般を担当し、その整理事業の遂行にあたられた財団法人和歌山県文化財センター、その他各位に対し、深甚なる感謝の意を表します。

平成２年３月

財団法人高野山文化財保存会

理事長　徳　富　義　孝

序

高野山は弘法大師空海が新言密教の根本道場として開創した霊地で、「内外八葉」と呼ばれる峰々に囲まれた東西に長い盆地状の地形内に壇上伽藍・奥之院が配され、総本山金剛峯寺をはじめとする子院・堂塔120余りが連なる一大法域を形成するわが国有数の宗教霊場であります。

金剛峯寺をはじめ子院には数多くの文化財が保存されております。これらは1,170余年の間、幾多の火災や騒動、また明治の廃仏毀釈運動などの天災人災を免れたものでありますが、県下で最も指定文化財の多いところであります。

金剛峯寺が、弘法大師空海入定1,150年御遠忌大法会を昭和59年に営むにあたり、記念事業の一環として高野山霊宝館新収蔵庫及び駐車場を建設することとなったため、昭和57・58年度の２カ年にわたり社団法人和歌山県文化財研究会が発掘調査を実施し、多大の成果を納めました。

調査資料の整理は、昭和62年に設立された財団法人和歌山県文化財センターが昭和62年度から平成元年度までの３ヵ年をかけ実施してまいりました。

出土資料並びに検出資料には、高野山の消長を知るうえで極めて貴重な資料が数多く含まれております。ここに調査報告書を刊行するはこびとなりましたが、本書が皆様方の研究の一助となれなれば幸いに存じます。

最後に、調査並びに本書の作成にあたり、種々御指導・御協力をいただきました関係各位に厚くお礼申しあげますとともに、今後もより一層の御支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成２年３月

財団法人和歌山県文化財センター

理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1．本書は高野山霊宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う金剛峯寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会が金剛峯寺から委託を受け実施し、遺物整理は財団法人和歌山県文化財センターが財団法人高野山文化財保存会から委託を受け実施した。

3．霊宝館新収蔵庫建設用地の発掘調査は、国庫補助事業である霊宝館新収蔵庫建設事業の一環として実施した。駐車場建設用地の発掘調査については、金剛峯寺がその経費を全額負担した。整理事業については、財団法人高野山文化財保存会が全額負担した。

4．発掘調査は霊宝館新収蔵庫建設用地については昭和57年度に、駐車場建設用地については昭和58年度に実施し、遺物整理は昭和62年度から平成元年度までの３カ年の期間で実施した。

5．発掘調査は、和歌山県文化財保護審議会埋蔵文化財部会委員の指導を受け、霊宝館新収蔵庫建設用地については㈳和歌山県文化財研究会技術員渋谷高秀・調査員村田弘が主に担当した。駐車場建設用地については県文化財課主査辻林浩が担当し、同技師上田秀夫・㈳和歌山県文化財研究会技術員村田弘がこれを補佐した。

6．遺物整理に当たっては、㈶和歌山県文化財センターの辻林浩、上田秀夫、村田弘、佐伯一也が担当した。

7．本書は辻林と上田が協議のうえ編集・作成した。但し、第Ⅵ章については高野山霊宝館主任学芸員井筒信隆氏に執筆していただいた。

　なお、記述については、絵図及び文献から推定できる塔頭子院名を使用する都合上、確実に対比できる江戸時代から古い時代へと時代を遡って記述することにした。

8．遺物実測は主に上野道代、作田淳子が、一部を辻林、上田、村田が、トレースは谷口敦子、玉井朱美、村上敏子が、遺物の写真撮影には上田がそれぞれ当たった。

9．発掘調査に当って、池については森蘊氏に、報告書作成にあたって大橋康二、森村健一、渋谷高秀各氏の指導助言を得た。

10．山内全域の航空写真撮影、周辺地域及び池（ＳＧ―01）の写真測量については㈱パスコに委託した。

11．発掘調査に当っては、財団法人高野山文化財保存会、高野町教育委員会、南海建設株式会社の協力を得た。

12．本書に使用した遺構の略号は下記のとおりである。

　ＳＢ―建物跡、ＳＧ―池、ＳＥ―井戸、ＳＫ―埋桶・埋桝・土坑、ＳＤ―溝、ＳＡ―柵、Ｐ―柱穴、ＳＸ―その他

13．本書の遺物実測図と遺物写真図版に付した番号とは一致する。ただし、遺物写真図版に収録した遺物は、特に縮尺を統一していない。

14．発掘調査を実施した折の社団法人和歌山県文化財研究会、及び遺物整理を実施した財団法人和歌山県文化財センターの組織は次頁に示すとおりである。

15．本書を作成するに当っての参考文献は、巻末に一括して収録した。

調査組織

調 査 委 員　岡田　英男（和歌山県文化財保護審議会委員）
　　羯磨　正信（和歌山県文化財保護審議会委員）
　　巽　　三郎（和歌山県文化財保護審議会委員）
　　都出比呂志（和歌山県文化財保護審議会委員）
　　藤沢　一夫（和歌山県文化財保護審議会委員）

発掘調査機関（社団法人　和歌山県文化財研究会）
　事 務 局
　　局　　長　伊藤　正也
　　次　　長　土井　清司　和歌山県教育庁文化財課課長補佐（昭和57年度）
　　梅村　善行　和歌山県教育庁文化財課課長補佐（昭和57・58年度）
　　北野　全美　和歌山県教育庁文化財課主幹　　（昭和58年度）
　　幹　　事　桃野　真晃　和歌山県教育庁文化財課第２係長
　　書　　記　森本　一臣　和歌山県教育庁文化財課第２係主事
　　調査担当（霊宝館新収蔵庫建設用地発掘調査）
　　渋谷　高秀　社団法人和歌山県文化財研究会技術員
　　村田　　弘
　　（霊宝館駐車場建設用地発掘調査）
　　辻林　　浩　和歌山県教育庁文化財課第二係主査
　　上田　秀夫　和歌山県教育庁文化財課第二係技師
　　村田　　弘　社団法人和歌山県文化財研究会技術員

遺物整理機関（財団法人　和歌山県文化財センター）
　事 務 局
　　局　　長　梅村　善行　和歌山県教育庁文化財課長（昭和62・63年度）
　　鍋島伊津夫　　（平成元年度～　）
　　次　　長　菅原　正明
　　埋蔵文化財課長　辻林　　浩
　　管理課長　松田　正昭
　　整理担当　辻林　　浩
　　上田　秀夫
　　佐伯　和也
　　村田　　弘

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　位置と歴史 …… 3

第Ⅲ章　霊宝館新収蔵庫建設用地の調査 …… 11

第１節　調査概要 …… 11

第２節　遺　　構 …… 15

1　上段の遺構 …… 15

2　下段の遺構 …… 19

第３節　遺　　物 …… 27

1　上段包含層出土の遺物 …… 27

2　上段遺構出土の遺物 …… 45

3　下段包含層出土の遺物 …… 47

4　下段遺構出土の遺物 …… 62

第Ⅳ章　霊宝館駐車場建設用地の調査 …… 69

第１節　調査概要 …… 69

第２節　遺　　構 …… 75

1　第１遺構面の遺構 …… 75

2　第２遺構面の遺構 …… 79

3　第３遺構面の遺構 …… 87

4　第４遺構面の遺構 …… 93

第３節　遺物 …… 96

1　包含層出土の遺物 …… 96

2　遺構出土の遺物 …… 114

第Ⅴ章　ま と め …… 137

第Ⅵ章　付篇　高野山の歴史と子院の変遷 …… 141

挿図目次

第１図　金剛峯寺遺跡位置図……3
第２図　高野山山内図……4
第３図　金剛峯寺遺跡の位置及び周辺主要遺跡……7
第４図　慈尊院周辺航空写真……9
第５図　慈尊院Ⅱ遺跡検出竪穴住居跡……9
第６図　丹生都比売神社周辺航空写真……10
第７図　丹生都比売神社境内遺跡検出多宝塔根石検出状況……10
第８図　調査地点位置図……11
第９図　新収蔵庫調査区　土層図……15
第10図　新収蔵庫調査区　ＳＶ－01・03・04立面実測図……15
第11図　新収蔵庫調査区　ＳＫ－09実測図……16
第12図　新収蔵庫調査区　第１遺構面全体図……17
第13図　新収蔵庫調査区　ＳＢ－01実測図……19
第14図　新収蔵庫調査区　ＳＥ－01実測図……19
第15図　新収蔵庫調査区　ＳＫ－02実測図……20
第16図　新収蔵庫調査区　ＳＫ－03実測図……20
第17図　新収蔵庫調査区　第２遺構面全体図……21
第18図　新収蔵庫調査区　ＳＢ－02実測図……23
第19図　新収蔵庫調査区　ＳＢ－03実測図……24
第20図　新収蔵庫調査区　第３・第４遺構面全体図……25
第21図　駐車場調査区　土層図……71
第22図　駐車場調査区　第１遺構面全体図……73
第23図　駐車場調査区　ＳＢ－01実測図……75
第24図　駐車場調査区　ＳＢ－02実測図……76
第25図　駐車場調査区　ＳＧ－01変遷図……77
第26図　駐車場調査区　ＳＫ－04実測図……78
第27図　駐車場調査区　ＳＫ－05実測図……79
第28図　駐車場調査区　ＳＢ－03実測図……80
第29図　駐車場調査区　ＳＥ－02実測図……80
第30図　駐車場調査区　第２遺構面全体図……81
第31図　駐車場調査区　ＳＥ－03実測図……83
第32図　駐車場調査区　ＳＫ－07実測図……83
第33図　駐車場調査区　ＳＫ－08実測図……84

第34図　駐車場調査区　第３・第４遺構面全体図……85
第35図　駐車場調査区　ＳＢ－04実測図……87
第36図　駐車場調査区　ＳＧ－02実測図……88
第37図　駐車場調査区　ＳＥ－04実測図……89
第38図　駐車場調査区　ＳＥ－05実測図……90
第39図　駐車場調査区　ＳＥ－06実測図……90
第40図　駐車場調査区　ＳＥ－07実測図……91
第41図　駐車場調査区　ＳＫ－13実測図……92
第42図　駐車場調査区　ＳＢ－05実測図……93
第43図　駐車場調査区　ＳＧ－03実測図……93
第44図　駐車場調査区　ＳＥ－08実測図……94
第45図　駐車場調査区　ＳＫ－14実測図……95
第46図　駐車場調査区　ＳＤ－09木製継手実測図……95

図　目　次

図１　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……155
図２　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……156
図３　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……157
図４　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……158
図５　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……159
図６　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……160
図７　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……161
図８　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……162
図９　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……163
図10　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……164
図11　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……165
図12　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……166
図13　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……167
図14　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……168
図15　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……169
図16　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……170
図17　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……171
図18　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……172
図19　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……173
図20　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……174
図21　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……175
図22　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……176
図23　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……177
図24　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……178
図25　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……179
図26　新収蔵庫調査区出土遺物実測図……180
図27　駐車場調査区出土遺物実測図……181
図28　駐車場調査区出土遺物実測図……182
図29　駐車場調査区出土遺物実測図……183
図30　駐車場調査区出土遺物実測図……184
図31　駐車場調査区出土遺物実測図……185
図32　駐車場調査区出土遺物実測図……186
図33　駐車場調査区出土遺物実測図……187
図34　駐車場調査区出土遺物実測図……188
図35　駐車場調査区出土遺物実測図……189
図36　駐車場調査区出土遺物実測図……190
図37　駐車場調査区出土遺物実測図……191
図38　駐車場調査区出土遺物実測図……192

図39　駐車場調査区出土遺物実測図……193
図40　駐車場調査区出土遺物実測図……194
図41　駐車場調査区出土遺物実測図……195
図42　駐車場調査区出土遺物実測図……196
図43　駐車場調査区出土遺物実測図……197
図44　駐車場調査区出土遺物実測図……198
図45　駐車場調査区出土遺物実測図……199
図46　駐車場調査区出土遺物実測図……200
図47　駐車場調査区出土遺物実測図……201
図48　駐車場調査区出土遺物実測図……202
図49　駐車場調査区出土遺物実測図……203

写真図版

図版１　山内全景及び調査地点航空写真
図版２　遺構　新収蔵庫調査区第１次遺構面全景
図版３　遺構　新収蔵庫調査区第２次遺構面全景
図版４　遺構　新収蔵庫調査区第３次遺構面全景
図版５　遺構　新収蔵庫調査区遺構検出状況
図版６　遺構　新収蔵庫調査区遺構検出状況
図版７　遺構　駐車場調査区第１次遺構面全景
図版８　遺構　駐車場調査区第２次遺構面全景
図版９　遺構　駐車場調査区第３次遺構面全景
図版10　遺構　駐車場調査区遺構検出状況
図版11　遺構　駐車場調査区遺構検出状況
図版12　遺構　駐車場調査区遺構検出状況
図版13　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版14　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版15　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版16　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版17　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版18　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版19　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版20　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版21　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版22　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版23　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版24　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版25　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版26　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版27　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版28　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版29　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版30　遺物　新収蔵庫調査区出土遺物
図版31　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版32　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版33　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版34　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版35　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版36　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版37　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版38　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版39　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版40　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版41　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版42　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版43　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版44　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版45　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版46　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版47　遺物　駐車場調査区出土遺物
図版48　遺物　駐車場調査区出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

高野山は、平安時代初期弘法大師空海により開かれて以来1,170年余になるが、幾多の災害を乗り越え天下の総菩提所として今日に至る大霊場であり、中世後期には寺内町の基礎が形成されたといわれ、近世には著しい発展をとげた。

この歴史ある高野山の山内一円が、埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登載されたのは、昭和58年３月和歌山県教育委員会発行の「和歌山県遺跡地図」からである。昭和40年３月文化財保護委員会発行の「全国遺跡地図（和歌山県）」には、文殊堂、灯篭堂の２遺跡が記載されているだけである。昭和49年３月和歌山県教育委員会発行の「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」では前記２遺跡の他に真別処北遺跡が加えられるとともに、遺跡名としては扱わず、地図上に高野山文化財集中地区と朱書されている。

高野山での埋蔵文化財の調査は、過去に弘法大師開創1,150年記念法会の記念事業として昭和35年から奥之院一帯の整備工事が行われた際工事中に多種多様の遺物が出土したため、この成果を昭和50年に『高野山奥之院の地寶』として刊行したのが最初である。この時の出土品は“高野山奥之院出土品”として一括して国の指定を受け、高野山霊宝館で収蔵保管されている。続いて弘法大師入定1,150年御遠忌大法会記念事業として諸堂の整備が計画され、これに伴い昭和52年には奥之院第２灯篭堂建設予定地、昭和55年には東塔跡、昭和56年には教化研修道場建設予定地及び大門前道路拡幅予定地などの発掘調査が財団法人元興寺文化財研究所により実施され、その成果は昭和57年『高野山発掘調査報告書』として刊行されている。これらの調査による出土品も高野山霊宝館で収蔵保管されている。また、同御遠忌記念事業の一環として昭和56年３月から昭和61年12月まで実施した金剛峯寺大門修理事業に際し、素屋根及び保存小屋の基礎のための掘削範囲と大門基壇部分の発掘調査が社団法人和歌山県文化財研究会により実施され、その成果は昭和61年刊行の『重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書』に収録されている。

今次の調査の起因は、大正時代に建築された高野山霊宝館には空調設備がなく、収蔵資料の増加に伴い手狭になったため、高野山金剛峯寺が御遠忌記念事業の一環として霊宝館東側の空地東南部に展示施設をもつ新収蔵庫を、大門通りに面した新収蔵庫北側に駐車場の建設を決定したことによる。この決定後、高野山金剛峯寺から建設予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて和歌山県教育委員会に協議があった。協議を受けた和歌山県教育委員会が昭和57年８月４日から６日までの３日間試掘調査を実施したところ、焼土及び炭層と礎石が検出された。和歌山県教育委員会は、試掘調査の結果により当該建設用地に対しては全面発掘調査を実施すること、新収蔵庫建設用地は尾根筋に江戸時代の旧子院の敷地が階段状に残る山内唯一の場所の最上段に当り、この場所に新収蔵庫を建設するにあたっては広範囲な敷地造成が必要となることから、遺跡の破壊面積が最小ですむよう敷地の一部が霊宝館と同レベルである霊宝館東側に建設予定地の変更を申し入れた。金剛峯寺がこれを了承したことにより、和歌山県教育委員会は金剛峯寺と発掘調査日程の調整協議を重ねたが、建設用地内の立木の移植・伐採等の期間も含め、昭和59年の御遠忌大法会までに竣工したいという金剛峯寺の意向及び国庫補助事業としての事業期間もあ

り、昭和57年度中に新収蔵庫建設用地の発掘調査を完了することで合意に達し、社団法人和歌山県文化財研究会が高野山金剛峯寺から委託を受け、昭和57年度事業として厳寒の時期に発掘調査を実施した。

霊宝館駐車場予定地は、霊宝館の駐車場としてはもちろんのこと御遠忌大法会にはマイカー及び観光バスが多数乗り入れることを予想し建設計画が進められたもので、調査に必要な経費は金剛峯寺が負担し、社団法人和歌山県文化財研究会が金剛峯寺から委託を受け、昭和58年度事業として発掘調査を実施した。

出土遺物整理事業は、財団法人和歌山県文化財センターが財団法人高野山文化財保存会から委託を受け昭和62年度から平成元年度の３カ年間をかけ実施した。

第２節　調査の経過

１　発掘調査

昭和57年度に新収蔵庫建設予定地、昭和58年度に駐車場建設予定地の発掘調査をそれぞれ実施した。

(1)　霊宝館新収蔵庫予定地（昭和57年11月～昭和58年３月）

発掘調査は工事面積（1,600㎡）全域を対象とした。収蔵庫建設予定地には、江戸時代の塔頭寺院敷地が段状に２段残るため、上段と下段に分け調査を行った。発掘調査が冬期であり降雪と積雪のため調査区全域を同時に掘り下げることができなかった。上段の塔頭寺院敷地は、近世に敷地整地のため削平を受けていたことと、戦時中と終戦後に畑として耕作されていたといわれ、遺構の残存状態は良くなかった。下段西半部分についても霊宝館建設時の整地及び防災施設設置のため、遺構の破壊が著しかった。

(2)　霊宝館駐車場予定地（昭和58年５月～昭和58年10月）

発掘調査は工事面積（1,400㎡）全域を対象とした。調査対象地には厚さ約１ｍの盛土（霊宝館建設時の排土と考えられる）が行われていたため、この盛土は重機により掘削・排土したが、調査時の土置場を確保できなかったため調査対象地を二分しこれに充てた。このため調査区全景の写真撮影ができなかった。

２　遺物整理

出土遺物については、発掘調査時にごく一部について応急的な整理を行ったに過ぎず、そのほとんどを未整理の状態で保管していたため本格的な整理作業を行う必要があり、昭和62年度から平成元年度までの３カ年を事業期間とし、最終年度に報告書を刊行することにした。

(1)　昭和62年度（昭和62年10月～昭和63年３月）

主に出土遺物の洗浄・注記作業を行うとともに、一部について接合・復元・実測等のを作業を行った。

(2)　昭和63年度（昭和63年７月～平成元年３月）

主に出土遺物の接合・復元作業を行うとともに、一部について実測作業を併せ行った。

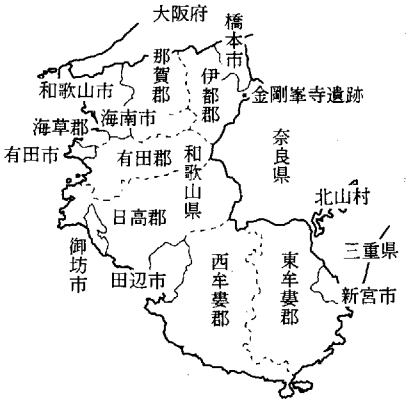
(3)　平成元年度（平成元年６月～平成２年３月）

出土遺物の実測・写真撮影・トレース等の作業を行うとともに、本文・図版のレイアウト、原稿執筆等の報告書作成作業を行い、報告書を刊行した。。

なお、出土遺物については、報告書作成後、財団法人高野山文化財保存会に移管の予定である。

第II章　位置と歴史

金剛峯寺遺跡は和歌山県伊都郡高野町高野山に所在し、高野山内全域が遺跡である。前章で触れたように、過去には高野山内でも工事等により遺物の出土が知られた場所を遺跡としてきたが、御遠忌が近づくにしたがい各種の工事が行われ、これに伴う立会調査において、当然のことながら、山内一円から遺構・遺物の出土することが判明したため、一山の総称でもある金剛峯寺の名をもって遺跡名としている。



第1図　金剛峯寺遺跡位置図

高野山は、藩籍奉還・廃藩置県にともない、明治2年8月には高野山を含め高野山寺領すべてが堺県に、明治3年4月には五条県に編入されたが、明治4年11月に和歌山県に統合された。

高野町は伊都郡の東南山間部に位置し、高野山を町の中心部とする。明治17年高野村が誕生し、昭和33年には富貴村を編入し現在の町域になる。高野町は東から東南にかけては奈良県と接し、北は和歌山県伊都郡九度山町・橋本市、西は伊都郡かつらぎ町、南は伊都郡花園村に接し、有田川・貴志川・丹生川・不動谷川の源流がここに発する。

高野山は、紀伊半島の尾根である大峰山脈の西側の南北に連なる紀和果無山脈から西に派生する長峰山脈北東部の陣ケ峰・楊柳山・摩尼山・弁天岳など“外八葉”と呼ばれる標高1,000m前後の峰々に囲まれた東西に長い盆地状平坦地の総称である。この平坦地は東西約6㎞・南北約3㎞、標高は約800mで東に行くにしたがって低くなる。

金剛峯寺の広大な境内の中心は、壇上伽藍と奥之院の両壇である。壇上伽藍を中心に、西院谷・南谷・谷上院谷・本中院谷・一心院谷・五之室谷・千手院谷・小田原谷・往生院谷・蓮華谷などの高野十谷と呼ばれる谷々があり、多くの塔頭子院が所在する。現在、山内には117ヶ寺が軒を連ねるが、江戸時代には21,300石の寺領を有する大寺院であり、正保3年に記された「高野山絵図之帳」によると学侶坊・行人坊・聖坊・客坊など1,812の子院と小坊155があげられ、「紀伊続風土記」によれば天保年間には300余戸の町屋が形成されていたとある。しかし、寛永15年の堂上滝頂に起因して貞享3年から元禄5年にかけて学侶方と行人方との間に紛争が起こり、幕府の裁断により行人坊の多くが潰寺となった。それでも明治維新時には680余の子院が存在していたが、排仏毀釈運動により明治17年には子院の数が431に減少している。また、明治21年の大火により77ヶ寺と町屋約70戸が焼失したため、子院は130ヶ寺に統廃合された。現在の山内の姿はほぼこの時に成立したものである。

高野山の歴史については第VI章で詳述されるので、ここでは山内を概観するにとどめる。

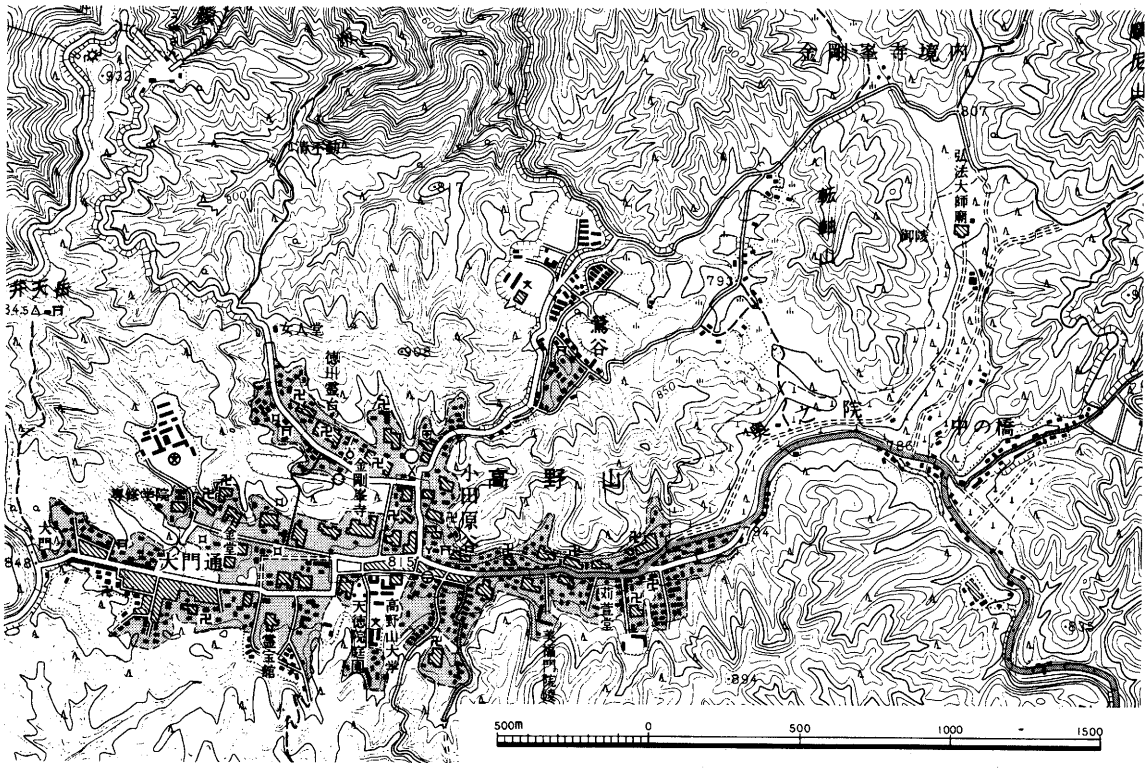
〔大門〕山内西端に位置する一山全体の総門で、現存する大門（重要文化財）は元禄期に再建されたもので、本瓦型銅板葺五間三戸二階二重門入母屋造である。大門は高野山開創の当初から存在したものと思われるが、その詳細については詳らかでない。しかし、平安時代中期の作とされる『金剛峯寺根本縁起』には、鳥居が描かれ「金剛峯寺大門」と書き入れられている。現大門が立地する地点の西側は急峻な

斜面になっているが、この崖の約65m下方にごく狭い平坦地があり「古大門」と呼ばれ、ここには町石道に設置されいる十一町石がある。この場所が、寛治２年（1088）の『白河上皇高野御幸記』に「去院十一町大鳥居一基自此之上坂始崔嵬」と記されている大鳥居が建てられていた場所であり、『金剛峰寺根本縁起』に書入れられている大門の位置ではないかと思われる。このように初期の大門は、結界としての鳥居であったようである。その後は、永治・寛喜・正平・慶長の各時代に大門造営の記録がみられ、元禄時代に造営されたのが現在の大門である。鳥居から門の形式になったのは永治の造営時であり、現在の位置に大門が建てられたのは寛喜の造営時と推定されている。この寛喜の造営時から五間二階の楼門に改められたといわれる。

昭和56年７月から昭和61年12月まで行われた大門修理工事に伴い、昭和56年に大門正面と背面部分の発掘調査が実施された。この調査で、正面部分では焼土面と溝・土坑・柱穴が、背面部分では坊を区画した石垣及びこれに付帯する側溝・溜桝・礎石建物・土壙・龕状遺構・井戸・大門への通廊などが検出されている。昭和58年には大門の基壇部が調査され、現大門建立時の地鎮遺構や鎮壇遺構が検出されている。

〔檀上伽藍〕大門を東に進むと、北側の一段高い場所に金堂をはじめとする壇上伽藍が建立されている。伽藍配置は、南北の中軸線上に中門・金堂を配し、その後方東西に胎蔵界を象徴する根本大塔と金剛界を象徴する西塔を配している。

現在は伽藍中央に南面して建つ金堂を中心に、金堂の北東に大塔、その東に愛染堂・大会堂・三昧堂・東塔跡、金堂の東南に鐘楼・納経所、この東側に不動堂が、西に御社と拝殿である山王院、西南に六角経蔵、北西に西塔・鐘楼、この東側に孔雀堂・准胝堂・御影堂が建ち並ぶ。この他、金堂の南に南面し



第２図　高野山山内図

て建っていた中門跡として礎石17個と、金堂北方の大塔と御影堂の中間に潅頂院跡地とが残る。

不動堂（国宝）は建久8年（1197）の建立といわれ、当初一心院谷にあったが明治41年解体修理の際現在地に移された。御社（重要文化財）は丹生明神・高野明神を祀る二社の総称で、北側に丹生明神、南側に高野明神がいずれも東面して建っている。

10世紀半ばまでに成立していたとされる『金剛峯寺根本縁起』によると、壇上伽藍の地に大塔を中心に、東側に北から経蔵・食堂・鐘楼、西に廟堂、廟堂の西に高野社・丹生社・西堂・僧坊が南北に並び、大塔の南西に御影堂の諸堂が描かれている。文明5年谷上院谷の多門院住持泉慶房重義によって書かれた『高野山諸院家帳』には、壇上の建物として金堂・大塔・御影堂・准胝堂・潅頂院・西塔・東塔・三昧堂・西御堂・御社三拝殿・一切経蔵・蓮華蔵院・孔雀堂・食堂・鐘楼・中門・大門・閼伽井が記されている。これら諸堂塔も度重なる火災に遭い焼失・再建を繰り返すが、そのうち壇上伽藍地域の主な火災をあげると、正暦5年（994）大塔に落雷し御影堂を除く諸堂が炎上、久安5年（1149）大塔に落雷し御影堂を除く諸堂が類焼、永正18年（1521）中門・六角経蔵を除く諸堂塔炎上、寛永7年（1630）大塔に落雷し御社拝殿・六角経蔵・中門を除く諸堂塔を焼失、天保14年（1843）金堂・大塔・御影堂・潅頂院ほかを焼失し、昭和元年（1926）には金堂・孔雀堂・六角経蔵などが焼失している。

〔奥之院〕高野山山上平坦地の東端部に位置する。奥之院は承和2年（835）に入定した空海の廟を中心とした高野全体の聖地で、一の橋から御廟に至る約2㎞の参道両側に約20万基を超えるといわれる大小様々な墓石が建ち並ぶ様は、天下の総菩提所と称されるにふさわしい光景を呈している。

奥之院は一の橋（大橋・大渡橋）・中の橋（手水橋）・御廟橋の3橋によって、一の橋から中の橋まで中の橋から御廟橋まで、御廟橋から奥の3地域に分けることができる。著名な墓石や堂舎を列挙すれば一の橋から中の橋までの間には曾我兄弟墓、佐竹義重霊屋（国指定）、上杉謙信霊屋（国指定）、井伊直弼廟墓、熊谷直実・平敦盛墓、多田満仲墓（奥院で最古の長徳3年銘をもつ）、武田信玄・勝頼墓（県指定）、薩摩島津家墓が、中の橋から御廟橋までの間には高麗陣敵味方戦死者供養碑（県指定、慶長2年の豊臣秀吉による朝鮮出兵で戦死した敵味方の将兵供養のために島津義弘・忠桓父子が建立）、徳川秀忠夫人崇源院五輪石塔、円光大師（法然）墓、越前松平秀康及び同母霊屋（国指定）、豊臣家墓所（県指定）、禅尼上智墓（県指定）、見真大師（親鸞）廟、広島浅野家墓、加賀前田家墓が、御廟橋から奥の地域には御廟橋たもとに我が国最古といわれる正和元年（1312）の銘を持つ歌碑卒塔婆、その奥に春日局墓、左手には霊元天皇をはじめとする歴代皇族の宝塔が並ぶ仙陵、その奥正面に灯篭堂、その左後方に納骨堂、右後方に経蔵（国指定重要文化財、慶長4年建立）、灯篭堂後方に御廟すなわち弘法大師廟がある。御廟は天徳元年（957）と天暦6年（952）に落雷により焼失したが再建された。現在の御廟は天正14年（1586）護摩堂十穀上人快真らによって建替えられたもので、三間四面桧皮葺宝形造である。

〔高野十谷〕高野山内の壇上伽藍周辺地域を指す。文明5年（1473）に著わされた『高野山諸院家帳』には、山内を西院谷・南谷・谷上院谷・中院谷・五之室谷・千手院谷・中別所谷・小田原谷・西谷・東谷の十谷と壇上伽藍に分け、子院堂塔が列挙されている。また、正保3年（1646）の『高野山絵図之帳』では、西院谷・谷上院谷・南谷・千手院谷・五之室谷・一心院谷・小田原谷・本中院谷・往生院谷・宝幢院谷・清浄心院谷・蓮華谷の12の谷名が記されている。しかし、宝幢院谷・清浄心院谷の各谷は蓮華谷の支谷とされ、「紀伊続風土記」では子院数などの統計等は蓮華谷に含まれている。この正保3年の

『高野山絵図之帳』にみえる谷名は、現在の各谷名と一致する。

現在呼称されている各谷の地割り範囲は、ほぼ次ぎのようである。西院谷は大門から東に延びる谷で、壇上伽藍の西及び南側の中門あたりまでである。南谷はその東に続き壇上伽藍の東南にあたる。谷上院谷は壇上伽藍の北西方にあたり大塔の北あたりまで。この東側六時鐘楼までが本中院谷である。不動坂口の女人堂から山内に入ったあたりの谷が一心院谷で、五之室谷に続き、本王院から山内のメインストリートである小田原通までの間が千手院谷である。この千手院谷から東に小田原谷往生院谷蓮華谷と続く。これら十谷のうち最も早く開かれたのは本中院谷で、次いで西院・南谷・谷上院が開かれたと言われる。この4谷は4ヵ院とも呼ばれ、10世紀以降学侶の住坊である子院が建てられ、中世から近世を通じ学侶方の集住地区であった。残る一心院谷・五之室・千手院・小田原・往生院・蓮華谷の各谷は、11世紀後半以降に開かれた谷で、浄土教の隆盛に伴い聖達が多くの別所や草庵を営んだ。これら6つの谷は室町時代後半以降も行人方・聖方の子院が数多く造立された。なお、江戸時代中期以後、小田原谷では俗人による商家が軒を並べるようになった。

高野十谷に建立された子院や堂塔は、時代とともにその数を増加させていった。藤原頼通が登山参拝した永承3年（1048）には16宇程度（「宇治関白高野山参詣記」）に過ぎなかった寺僧住坊が、鎌倉末期には子院・堂塔58（「信堅院号帳」）、文明5年（1473）には子院・堂塔255（「高野山諸院家帳」）、正保3年（1646）には学侶坊210・行人坊1,440・非事吏（聖）坊120・客坊42（「高野山絵図之帳」）を数えるまでになった。

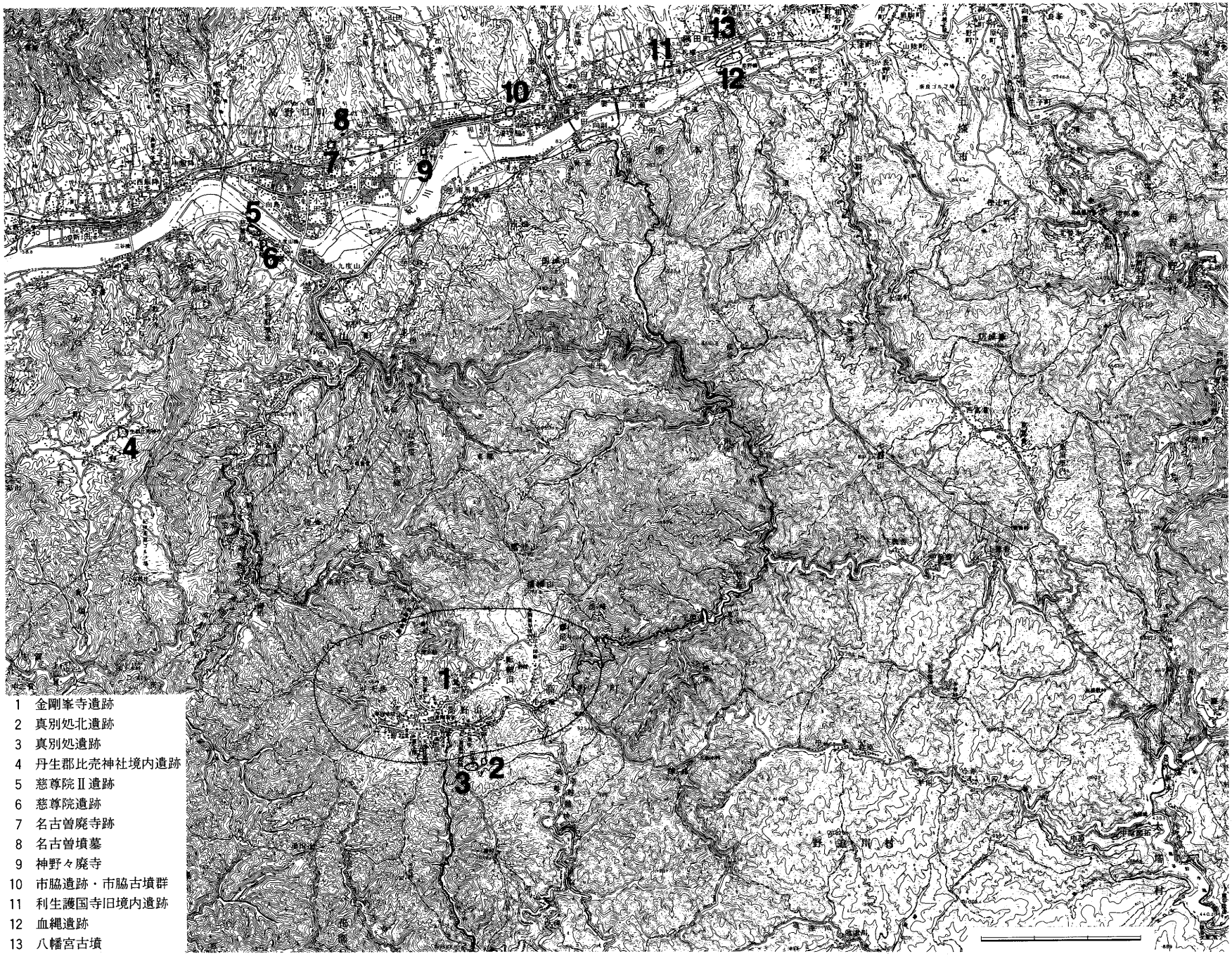
〔参拝道〕高野山への参拝道としては、九度山町に所在する慈尊院から大門に至る国指定の史跡である町石道が平安時代からの表参道であった。町石道は、壇上伽藍の金堂を起点とし、慈尊院までの180町と奥之院までの36町計216町の延べ24kmに1町ごとに石造の町卒塔婆が建てられていることに由来する。石造の町卒塔婆が建てられれたのは鎌倉時代末期であるが、それまでは町数を記した木製卒塔婆が建てられていた。江戸時代には参拝道も整備され主要7街道が成立し、高野七口とよばれる山内への入口（大門口・不動坂口・大滝口・竜神口・大峰口・黒河口・相浦口）ができ、それぞれの入口には女人禁制のため山内の参拝が認められない女性のために女人堂が設けられた。このうち京・大坂・大和から学文路（橋本市）を経て不動坂口の女人堂に至る道が最も利用され、東高野街道と称された。

明治31年に南海鉄道株式会社が汐見橋―高野下間（高野線）の営業を開始し、大正末期には高野山登山自動車会社がバスの運行を、昭和5年には南海鉄道株式会社が極楽橋―高野山駅間のケーブルカーの運行を開始した。昭和35年には高野山有料道路が開通し、参詣・観光などの人々が山上を賑わすようになった。

以下高野山と関係の深い周辺の神社仏閣及び遺跡について紹介する。

〔慈尊院〕伊都郡九度山町慈尊院に所在し、紀の川中流左岸に位置する。空海母公の廟所があるところから、「女人高野」あるいは「大師母公の寺」とも俗称される。本来は、高野山麓に設けられた高野一山の政所であるが、のちに政所内にある慈尊院が総称となった。

境内には、寛平4年の墨書銘がある平安時代前期の木造の弥勒仏坐像（国宝）を本尊として安置する宝形造の桧皮葺弥勒堂（重要文化財）・多宝塔・大師堂・鐘楼などの諸堂宇がある。また、保延2年の銘がある下乗石・応永8年11月21日の銘がある石灯篭・大永6年4月12日の銘がある五輪塔などもある。



1　金剛峯寺遺跡
2　真別処北遺跡
3　真別処遺跡
4　丹生郡比売神社境内遺跡
5　慈尊院Ⅱ遺跡
6　慈尊院遺跡
7　名古曽廃寺跡
8　名古曽墳墓
9　神野々廃寺
10　市脇遺跡・市脇古墳群
11　利生護国寺旧境内遺跡
12　血縄遺跡
13　八幡宮古墳

第3図　金剛峯寺遺跡の位置及び周辺主要遺跡

第4図　慈尊院周辺航空写真

慈尊院の背後には、創建については詳らかでないが、天文9年水害を被ったため現在地に移されたという、高野山領官省符庄の鎮守である丹生官省符神社が鎮座する。社殿は木造3棟で、3殿とも一間社春日造である。天文10年の棟札が存するところから、水害後この地に新たに造営されたものであろう。

また、当社には、口径44cm・総高60cm・釜身部高37cmを測り、鍔に「神通寺七大社大明神永正十四年丑三月十六日」の銘をもつ鼎（御湯釜）が残る。

第5図　慈尊院Ⅱ遺跡検出竪穴住居跡

慈尊院裏の台地は平安時代の瓦が出土するところから慈尊院遺跡（寺院跡）として周知の遺跡になっているが、昭和61年慈尊院前面の紀の川南岸丘陵上に県道が建設されることになり、工事を開始したところ遺物が出土したため慈尊院Ⅱ遺跡と名称を付し、昭和62年度に㈶和歌山県文化財センターが発掘調査を実施し、古墳時代の竪穴住居跡、平安時代から鎌倉時代の掘建柱建物跡・土壙墓・溝・土坑、江戸時代の池状遺構などを検出している。このうち、古墳時代の竪穴住居は4棟を検出したが、いずれも5世紀中葉に属するもので、4棟とも同時期に存在したと考えられている。このうち1棟には、南東隅に造り付けの竈が築かれており、竈内からは土師器高杯に粘土をかぶせた支脚が検出されている。なお、慈尊院Ⅱ遺跡出土の遺物は(財)和歌山県文化財センターが保管している。

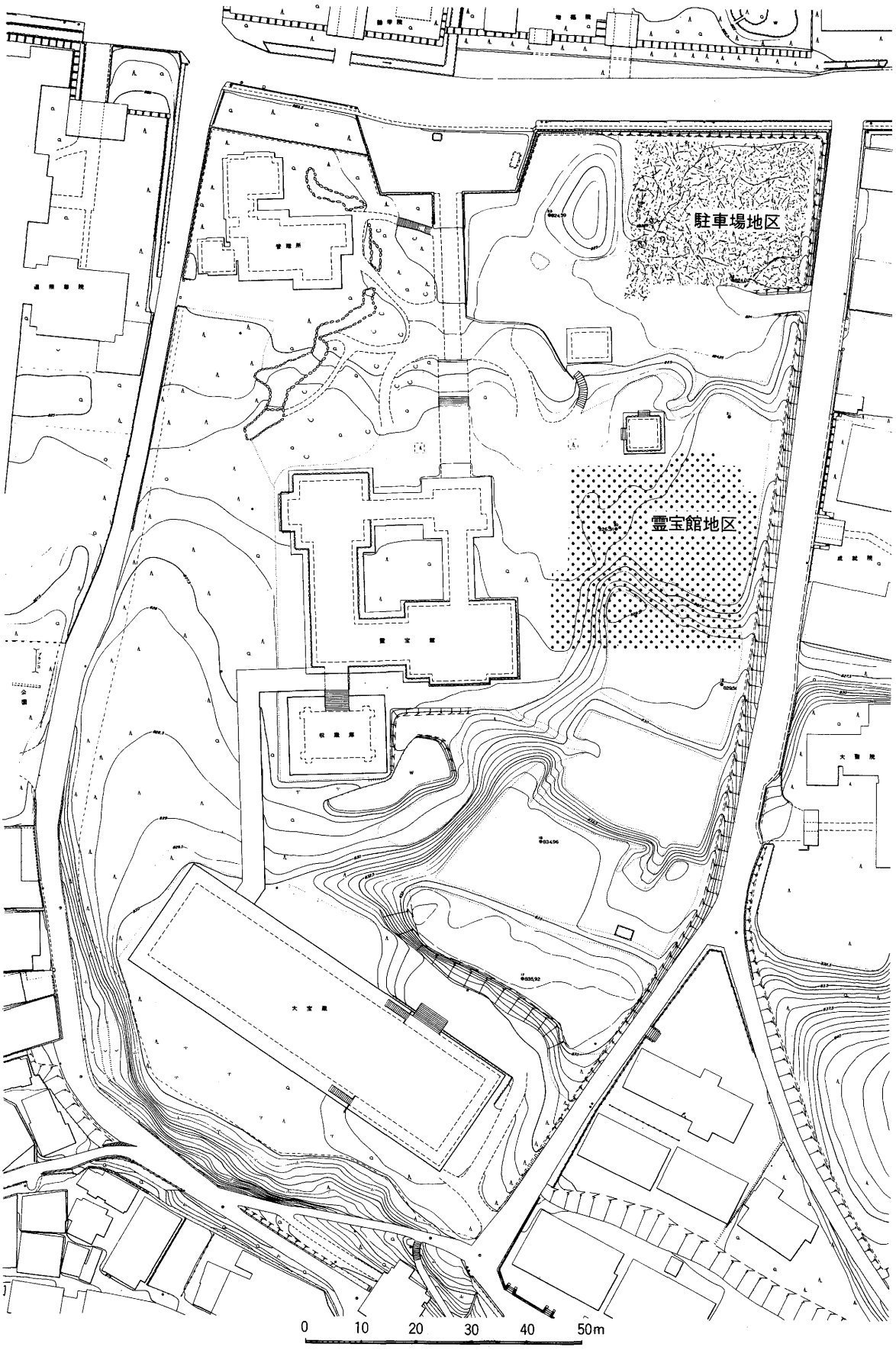
〔丹生都比売神社〕伊都郡かつらぎ町上天野の標高約450mに所在し、高野山参詣道の町石道に沿う。創建は明らかでないが、空海の高野山開山伝説や高野一山の鎮守であることから平安時代の鎮座と推定され、延喜式内社に列している。祭神は第1殿が丹生都比売大神・第2殿が高野御子大神・第3殿が大食都比売大神・第4殿が市杵島比売大神で、天野明神あるいは丹生四所明神とも呼ばれる。現本殿は4棟とも桧皮葺の一間社春日造で、蟇股や社殿内に文明元年の墨書があり、この社殿内に本瓦形板葺一間社春日見世棚造の宮殿が収められている（いずれも重要文化財）。この他、本殿と同時期の建立と考えられる入母屋造桧皮葺三間一戸楼門が重要文化財に指定されている。当社も明治時代の廃仏毀釈運動により多くの堂社が取り壊され、現在は社殿・拝殿・楼門などを残すのみであるが、鎌倉時代の『弘法大

師像・丹生高野両明神像』に描かれた「天野社図」や江戸時代の『高野山通念集』・『紀伊国名所図絵』によれば、神殿・拝殿・長床・舞台・鐘楼・中門・経蔵・山王堂・中の鳥居・二の鳥居・御影堂・多宝塔・神輿堂・不動堂・護摩所などの建物が建ち並んでいる様子が描かれており、古くは多くの堂社が建てられていたことを窺い知ることができる。また、境内には、鎌倉時代から南北朝時代にかけてのころ修験行者の結衆が行った宗教行事の模様を窺わせる石造五輪卒塔婆（県指定）がある。なお、国宝として銀銅蛭巻太刀拵、重要文化財として木造狛犬、兵庫鎖太刀、鍍金長覆輪太刀、金銅琵琶、木造鍍金装御輿、紙本墨書法華経・寄進状・後村上天皇宸翰などを所蔵している。

第6図　丹生都比売神社周辺航空写真

境内一円は丹生都比売神社境内遺跡として周知されており、昭和63年度に和歌山県教育委員会が広域遺跡群詳細分布調査の一環として、丹生都比売神社境内遺跡のうち現社殿東側空地の発掘調査を実施した結果、江戸時代の多宝塔・御影堂と考えられる根石群や礎石の抜き取り穴を検出した。多宝塔は四天柱・側柱の礎石はすべて抜き取られていたが、大きな根石が極めて良好に残存しいたためその規模を復元することができた。その規模は、四天柱間の中央間が210cm（７尺）、脇間150cm（五尺）、縁束石の出105cm（３尺５寸）である。御影堂は多宝塔の南側に位置し、基壇状に岩盤を整形し建てられていたが、調査用地の関係上その全容を確認するにいたっていない。本建物を御影堂とした理由は、『紀伊続風土記』伊都郡天野荘上天野村丹生四所明神社の項に、多宝塔は「御影堂の北にあり」という記述によるものである。なお、多宝塔四天柱の中心部付近に集中して、今回検出した多宝塔建立以前の整地土から13世紀末から14世紀初頭の土師器が一括出土しており、前代の多宝塔地鎮遺構に伴うものではないかと考えられている。また、中世の遺物に混じって６世紀代の須恵器が出土していることから、周辺地域に古墳時代の遺構の存在することが考えられている。出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

第7図　丹生都比売神社境内遺跡検出
多宝塔根石検出状況



第８図　調査地点位置図

第Ⅲ章　霊宝館新収蔵庫建設用地の調査

第１節　調査概要

金剛峯寺遺跡は、前述したように高野山内全域を指す遺跡名であり、山内一円から遺構遺物が検出される。昭和59年に弘法大師空海の入定1,150年祭を営むにあたり、高野山真言宗総本山金剛峯寺は種々の記念事業を計画してきたが、今次の発掘調査の原因となった霊宝館新収蔵庫建設もその一環である。

新収蔵庫建設用地は霊宝館の東側に当り、道路を隔て東側には成就院、その南側には大聖院が、山内のメイン通りである大門通りを隔て北側には歓学院・増福院が、東北方は蓮池を隔て壇上伽藍の金堂・大塔が聳える。また南側には霊宝館の収蔵庫である大宝蔵がある。

調査対象地の塔頭子院については詳らかではないが、寛永元年（1624）の絵図には「竜生院」が、正保３年（1646）と承応２年（1653）の絵図には「宝城院」と「竜生院」が、万治元年（1658）の絵図には「寶常院」と「竜生院」が、元禄６年（1693）の絵図には「寶常院」・「竜生院」・「尭應院」が、寛政８年（1796）と安政４年（1857）の絵図には「竜照院」・「證覚院」・「如意珠院」が描かれている。明治21年（1884）の大火後発行された『紀州高野山焼失ノ図』では、当該地域については火災から免れたためなのか、あるいはすでに塔頭子院が存在していなかったためか、塔頭子院は書き込まれておらず空白になっている。

これらの絵図を基に調査対象地と絵図に描かれた子院とを対比すれば、江戸時代前半と後半とで次のように対比することが可能であろう。まず江戸時代前半には下段の子院として、東側に「竜生院」を西側に「宝城院」、上段の子院として「阿逸多院」が、次に江戸時代後半には下段の子院として、東側に「竜照院」を西側に「證覚院」、上段の子院として「如意珠院」を当てることができる。

調査対象地は、尾根を造成した江戸時代の子院敷地が階段状に６段並ぶ標高約826mの２段目（以下「下段」と呼称する。）と標高約829mの３段目（以下「上段」と呼称する。）の北側約半分である。下段は成就院とほぼ同位の標高にあり、上段は成就院と大聖院（標高約832m）の中位の標高に当たる。なお、霊宝館敷地は下段と同位の標高である。このように調査対象地が標高にして約３mの比高差があるため、調査は上段と下段を分けて調査することにした。ただし、上段と下段の境をなす斜面は、上段の整地の際に送り出した土で構成されていることから上段に含めた。以下、上段と下段について、調査担当者の判断に従ってその概要を述べることにする。

上段の平坦部は、表土層を含め水平堆積した４層からなる。表土層からは中国製陶磁器・国産陶磁器・山茶椀・土師器・瓦器など極めて時期幅の広い多種多様の遺物が出土している。このことは当地点を畑として耕作していたことを物語るものと思われる。第１層は伊万里磁器を中心に若干の瓦器・土師器・東播系須恵質こね鉢などが出土するが、下限時期は19世紀初頭から同前半期に収まるものと思われる。第２層は国産陶磁器・土師器のほか若干の中国製陶磁器が混入し出土するが、18世紀中葉頃を下限とするものと思われる。第３層は国産陶磁器・土師質土器などが出土するが、中国製陶磁器の混入量が第２層に比べ多くなる。下限時期は18世紀初頭から同前半期と考えられる。第４層は国産陶磁器・中国

製陶磁器・土師器・瓦器などが出土し、16世紀末から17世紀初頭を下限とするものと思われる。

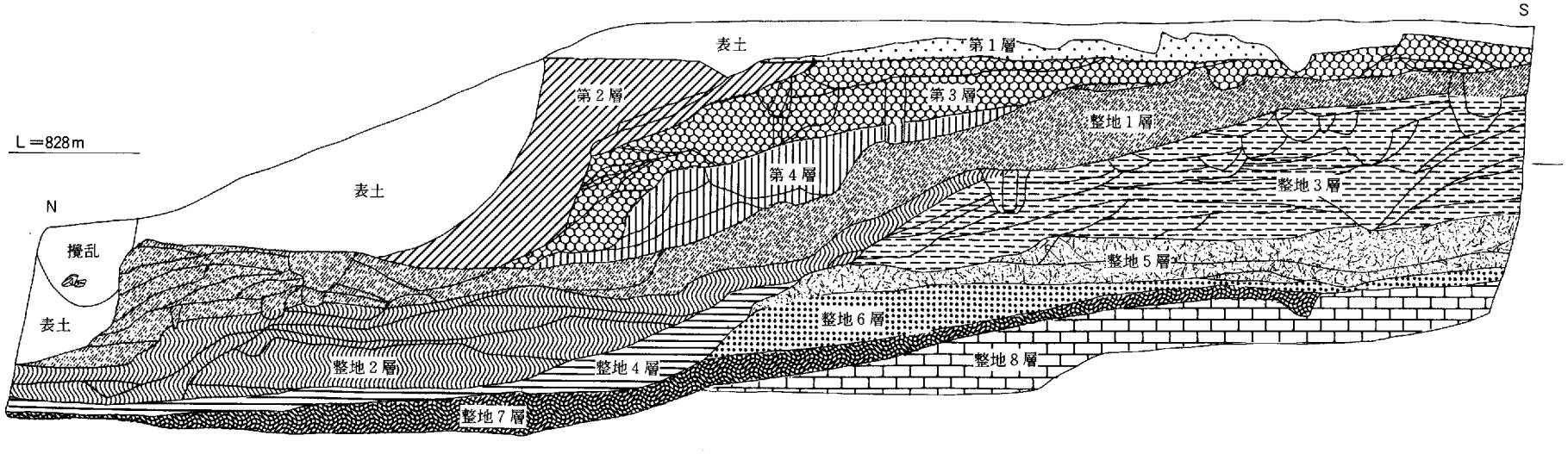
上段と下段の境をなす斜面部には、上段子院の敷地を拡張するために行われた整地が８層斜めに堆積するが、整地１・２層、整地３・４・５層、整地６・７・８層の概ね３時期の造成が行われているものと考えられる。整地１・２層は中国製陶磁器・国産陶器・東播系須恵質土器・土師器などが出土し、16世紀前半代を下限とするものと見られる。整地３・４・５層は中国製陶磁器・国産陶器・東播系須恵質土器・土師器・瓦器などが出土し、15世紀中葉前後を下限とするものと思われる。整地６・７・８層は瓦器・土師器が大半であるが、他に中国製陶磁器・国産陶器・東播系須恵質土器・石鍋などが出土し、13世紀中葉から同後半を下限とするものと思われる。

遺構面としては２面が検出されている。上面の遺構は第２層を切り込んで営まれたもので、第２層の18世紀中葉を上限とし第１層の19世紀初頭から前半を下限とする。検出遺構には平坦部では土坑や北側縁辺部の根石群、北側と西側斜面の石垣、西側斜面の埋桝などがある。下面の遺構は斜め堆積する整地層の上面で検出した遺構群であり、整地１・２層の16世紀前半を上限とし第４層の16世紀後半から17世紀初頭を下限とする。検出遺構には平坦部で検出された小さい割石の礎石群や柱穴群、西側斜面の階段状遺構などがある。

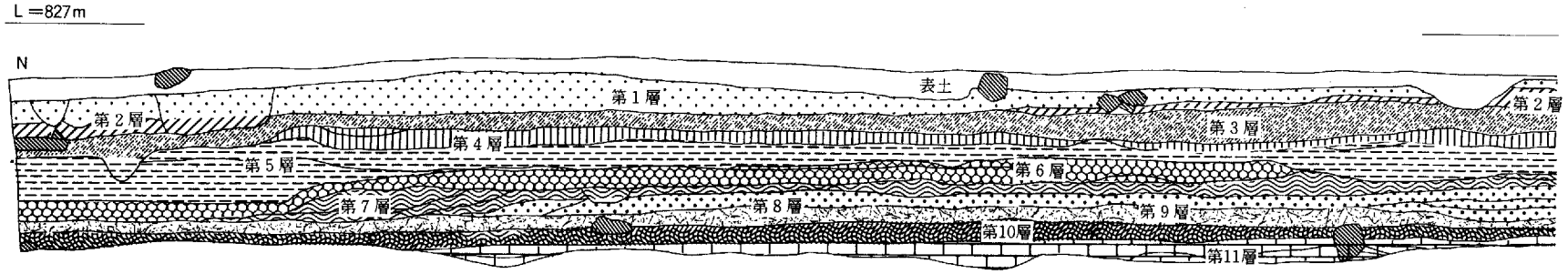
下段は調査前の状況で東半部が約0.5m高かったが、調査の結果、東半部と西半部の堆積状況が異なり、東半部には８層の整地層の堆積が、西半部には３層の整地層の堆積が認められた。しかし、西半部には本来東半部と同じ整地層が存在し、これが削平されたのちに３層の整地が行われたとされる。従って堆積土層としては、表土層を含め12層が存在することになる。遺構面が４面存在するということから、整地層は第１層～第４層、第５・６層、第７・８層、第９層、第10・11層の５層が存在することになる。第１層～第４層は中国製陶磁器・国産陶磁器のほか瓦器・土師器などが出土し、19世紀初頭頃を下限とすると考えたい。第５・６層は第５層が大永５年の火災によると考えられる炭層であり、中国製陶磁器・国産陶器の他東播系須恵質土器・土師器などが出土することから、大永５年を上限とし16世紀前半を下限としたい。第７・８層は中国製陶磁器・国産陶器・須恵質土器・土師器などが出土し、15世紀中葉を下限としたい。第９層出土の遺物は大部分が土師器であり、中国製磁器・国産陶器が少量出土し、15世紀初頭～前半を下限とすると考えられる。第10層は第９層同様土師器が出土遺物の大部分を占めるが、ここでは糸切底の皿が若干認められ、下限時期は15世紀初頭から前半と見られる。第11層は大半が瓦器と土師器であるが、土師器皿には糸切底が増え簀子痕を持つものが見られなくなる。このほか少量の中国製磁器や国産陶器などが見られ、下限時期は13世紀後半頃と思われる。

遺構面としては４面を検出していることは先に述べたが、第１面は第５層を切り込み面とする遺構群であるが、そのほとんどは近世の遺構である。検出遺構には掘建柱建物跡・井戸・埋桶・埋桝・土坑・溝などがある。第２面は16世紀前半を上限とし15世紀中葉を下限とする遺構面で、礎石建物跡・埋甕・地鎮遺構・土坑などが検出されている。第３面は時期幅を15世紀前半から中葉とすることができ、検出遺構には礎石建物跡・柱穴などがある。第４面は出土遺物からみるかぎり第３面と時期がほぼ同じである。検出遺構には池状遺構・溝・柱穴などがある。

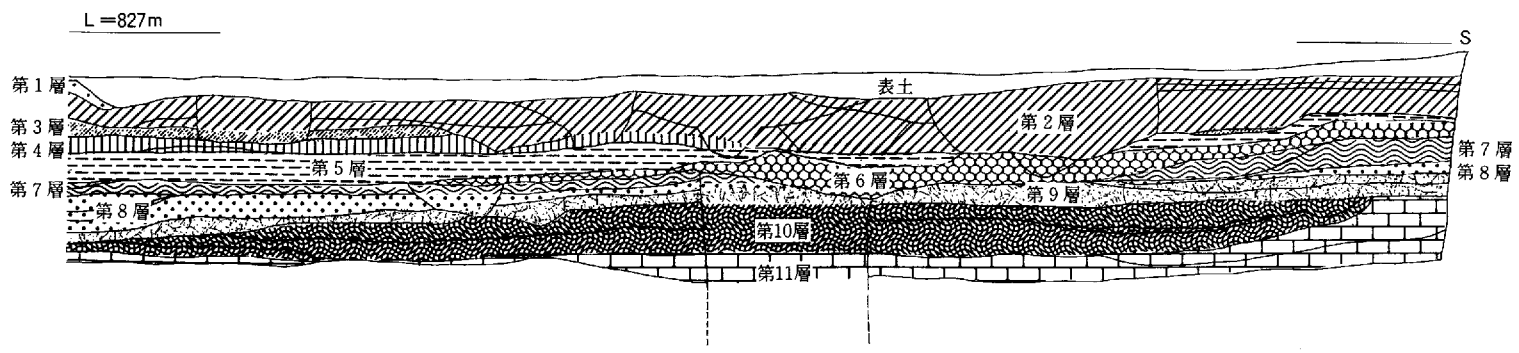
なお、当地区での各層から出土する遺物は時期幅が広く、いずれも包含層と考えるより整地層と考える方がより妥当であると思われる。



上段東壁土層図



下段東壁土層図



第9図　新収蔵庫調査区土層図

第2節　遺　　構

当調査区は子院跡が上段と下段に存在するため、上段と下段に分け記述するものとする。なお、遺構全体図は上段と下段の遺構の時期が必ずしも一致するものではない。また、下段の遺構についても第3面と第4面の遺構時期がほぼ同じであることから1面として作図した。以下、主要な遺構について記述することにする。

1　上段の遺構

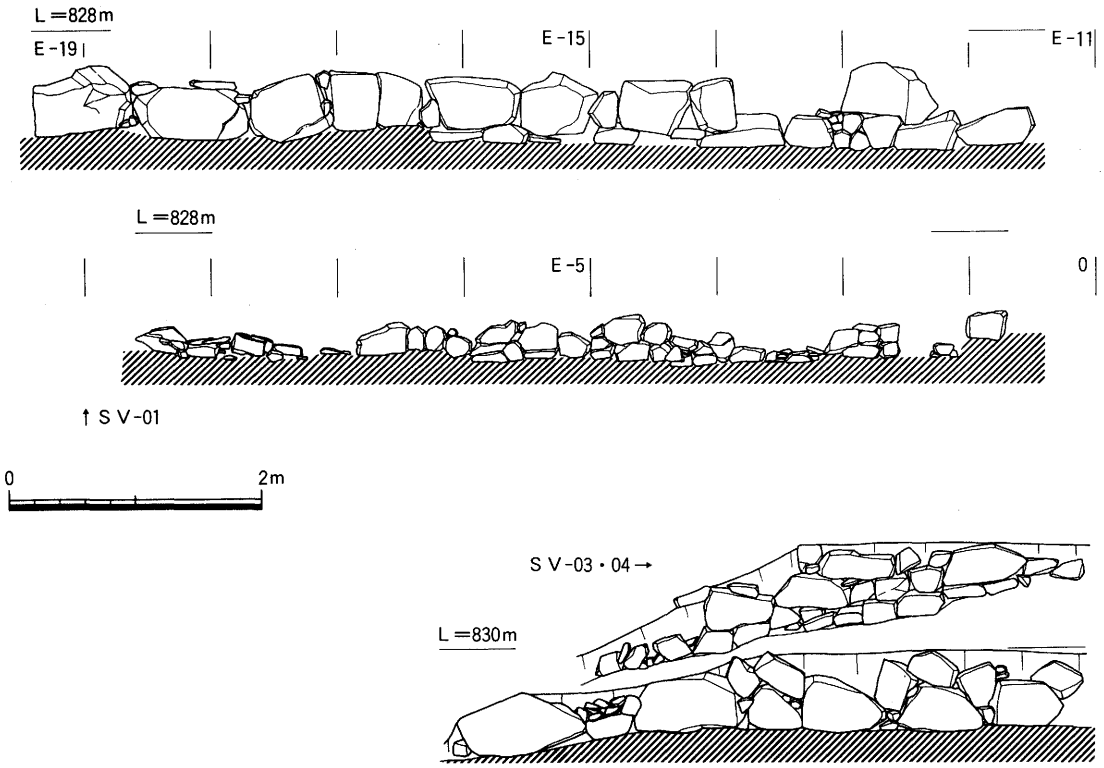
遺構面としては2面を検出しているが、第1面では1辺約1mの掘形を持つ根石の詰まった柱穴や石垣・道路・埋桝・土坑などを、第2面では建物跡としてはまとまらないが小さな礎石群や柱穴・階段状遺構などの遺構を検出した。

(1)　第1遺構面の遺構

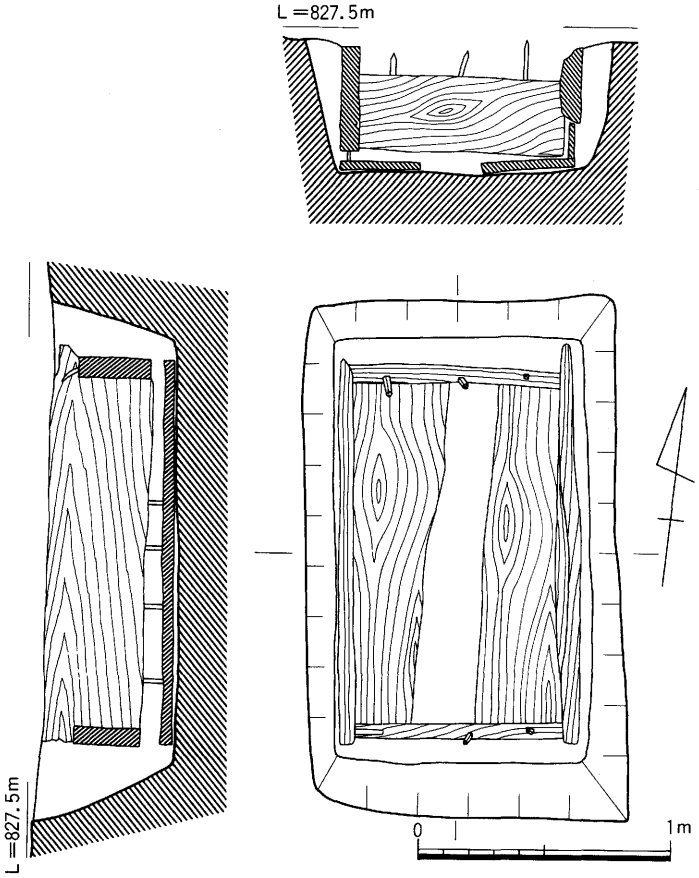
第2層を切り込んで営まれた遺構面で、18世紀中葉を上限とし19世紀初頭から前半を下限とする。

石垣（ＳＶ－01～04）

上段子院（如意珠院）敷地と下段子院（龍照院・證覚院）敷地との間に積まれた石垣で、ＳＶ－01・ＳＶ－03・ＳＶ－04は上段子院敷地の擁壁である。ＳＶ－02は、上段子院敷地と下段子院敷地との間に設けられた道路の路肩の石積みである。いずれの石垣も、後世の地形改変により、1段から3段の石積みを残すだけである。ＳＶ－01は南北セクションを境にして、東側の石積みは幅・奥行とも50cm～60cmと大振りの石が、西側のそれは20cm～30cmと小振りの石が使用されている。石垣東端近くＳＶ－03の延



第10図　SV—01・03・04立面実測図



第11図　SK—09実測図

長線あたりに、幅約0.9mの道路への昇降口が設けられている。ＳＶ－02は前述したように路肩の石積みであるが、４列の石垣のうちで最も小さな石が積まれている。ＳＶ－01とＳＶ－02の間は、江戸時代の絵図に描かれているように幅約３mの道路である。ＳＶ－03にはＳＶ－01同様大振りの石が、ＳＶ－04にはそれよりやや小振りの石が積まれ、両者の間には幅約１mの通路が設けられている。使用されている石は、いずれも和泉砂岩の割石である。

埋桝（ＳＫ－09）

ＳＶ－03とＳＶ－04が途切れる南側、上段塔頭子院と西側下段塔頭子院の境界をなす斜面で検出した。長辺約２m・短辺約1.2m・深さは現存値で約0.5mを測る掘形内に桝を埋めた遺構である。

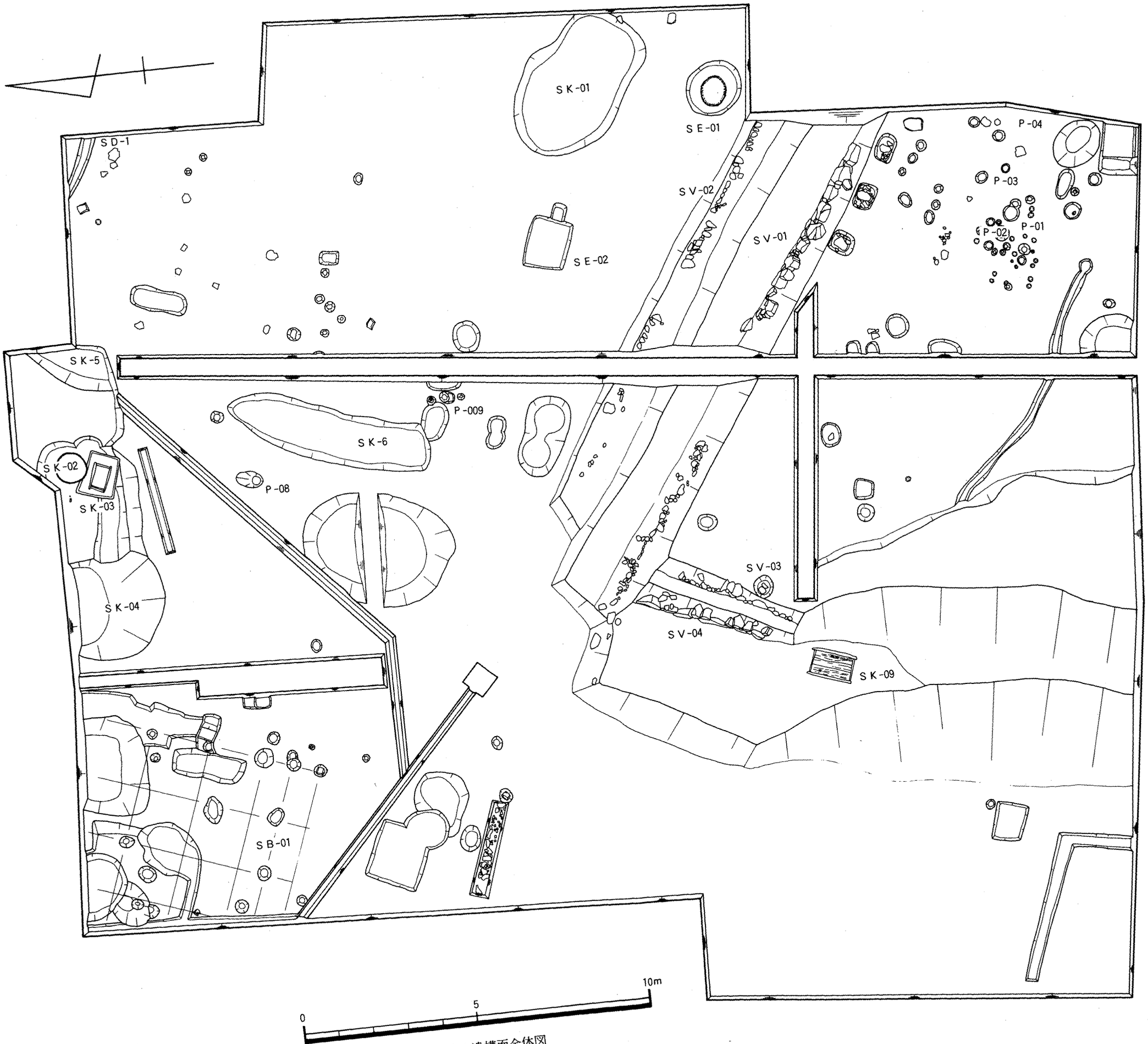
長辺には長さ約1.5m・厚さ５㎝～６㎝、短辺の南北小口に長さ0.82m・厚さ５㎝～６㎝の板が使用されている。内寸法は、長辺1.32m・短辺0.82mを測り、長辺西側は１枚板が使われているが、長辺東側及び各小口には上下２枚の板が使われていたようで、板の上端部に竹釘が残る。側板及び底板の接合にも竹釘が使用されている。

(2)　第２遺構面の遺構

斜め体積する整地層の上面に営まれた遺構面で、16世紀前半を上限とし16世紀後半から17世紀初頭を下限とする。

階段（ＳＸ－01）

上段西側斜面で検出したもので、斜面下端近くにテラス状のフラット部を設け、この部分から上に向かって階段が地山を掘り込んで造られている。階段は上方に行くにしたがい踏面が狭くなるとともに蹴上げも高くなる。踏面の規模は１段目が幅1.5m・奥行き0.55m、２段目が幅1.1m・奥行き0.6m、３段目が幅1.0m・奥行き0.36m、４段目が幅0.75m・奥行き0.48m、５段目が幅0.7m・奥行き0.52m、６段目が幅0.64m・奥行き0.44m、蹴上げは0.15m～0.32mと上方に行くに従い高くなっている。１段目の踏面左右に径約20㎝・深さ約15㎝のピットが掘られているが、どのような施設のためのものかは不明である。なお、テラス状部分の西側は霊宝館建設時に削平を受けているためその規模は不明である。本遺構からは遺物の出土が認められなかったが、ＳＶ－03・04よりも古い時期で、下面遺構に伴う敷地造成よりも新しい時期であると考えられる。



第12図　第１遺構面全体図

2　下段の遺構

遺構面としては４面検出している。第１面では掘立柱建物跡・井戸・埋桶・埋桝・土坑・溝など、第２面では礎石建物跡・埋甕・地鎮遺構・土坑など、第３面では礎石建物跡・柱穴など、第４面では池状遺構・溝・柱穴などを検出している。

(1)　第１遺構面の遺構

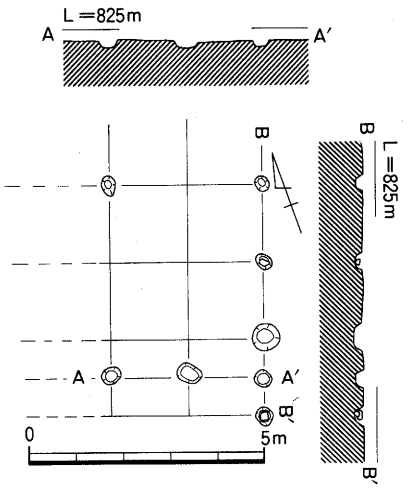
第５層を切り込んで営まれた遺構面で、第５層の下限と考えられる1521年を上限とするが、16世紀前半の上限時期に近い遺構はほとんどなく、大部分が近世の遺構である。あえてこの遺構面の下限時期を求めるとするならば、第４層の下限である19世紀初頭から前半ということになる。

掘建柱建物跡（ＳＢ－01）

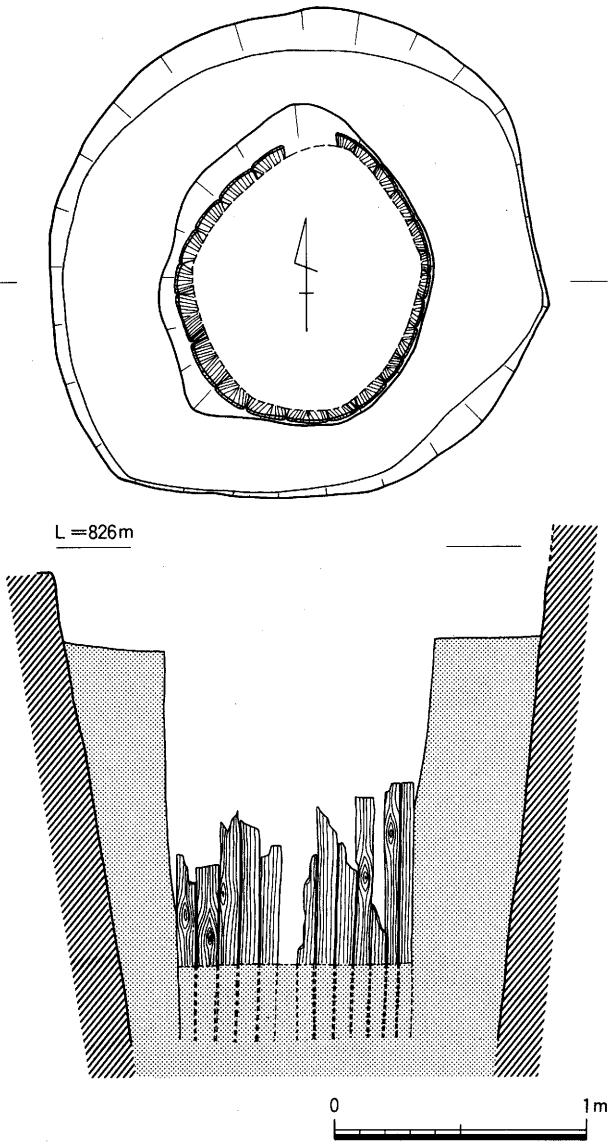
調査区北西隅で検出した掘建柱建物跡で、南北２間、東西２間分の柱穴を検出したが北側及び西側に延びる可能性がある。なお、南辺北側に半間の施設が付くか、もう１間分伸びる可能性がある。柱間寸法はいずれも2.0mで、柱穴の規模は径30cm～50cm、深さ15cm～25cmを測る。柱穴から遺物の出土は認められなかった。

井戸（ＳＥ－01）

調査区東側の中央近くで検出したもので、井側の何枚かが腐朽欠損していたため、底部までの掘下げは断念した。掘形・井側はともに円形を呈し、掘形上端部の径は２mを測るが底部はやや狭くなるものと思われる。井側は径約0.9mを測り、幅８cm～20cm、厚さ約１cmの板24枚からなり、井側の各板は竹釘でとめられ、箍で締められているものと思われる。



第13図　SB—01実測図



第14図　SE—01実測図

井戸（ＳＥ－02）

ＳＥ－01の北西８ｍで検出した木組み井戸の跡と思われる。掘形上端部は東西辺約1.8m・南北辺約1.5m、深さ0.52m、底部は東西辺約1.6m、南北辺約1.3mを測る。井戸枠はすでに腐朽したか、あるいは抜き取られたのか残っていなかった。しかし、他の検出例からみて四隅に柱を建て外側に板を立てて囲った井戸であったと考えられる。

土坑（ＳＫ－01）

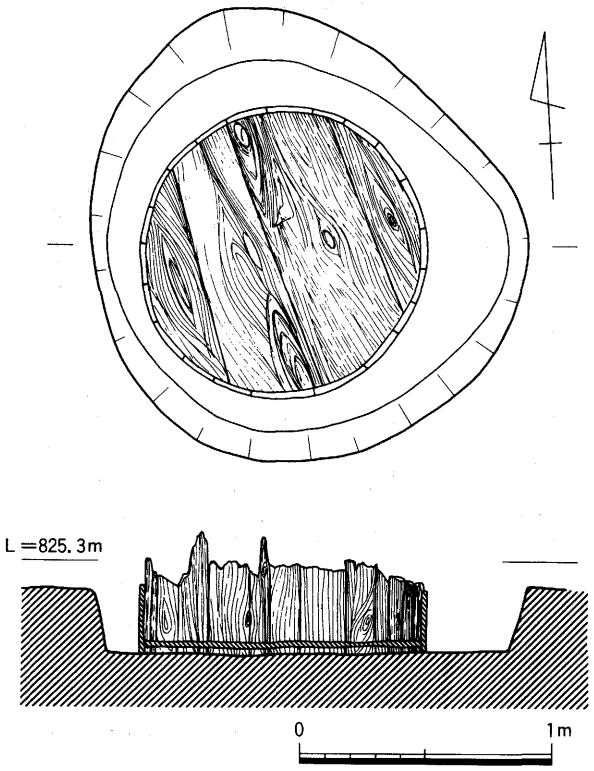
火災後の整理のために掘られた不整楕円形の土坑で、ＳＥ－01の北側で検出した。長径5.7m・短径約３ｍ、深さ約1.35mを測り、坑中からは16世紀から19世紀にかけての伊万里・美濃瀬戸系・常滑・備前・丹波・信楽などの国産陶磁器の火中したものが多量に出土している。

埋桶（ＳＫ－02）

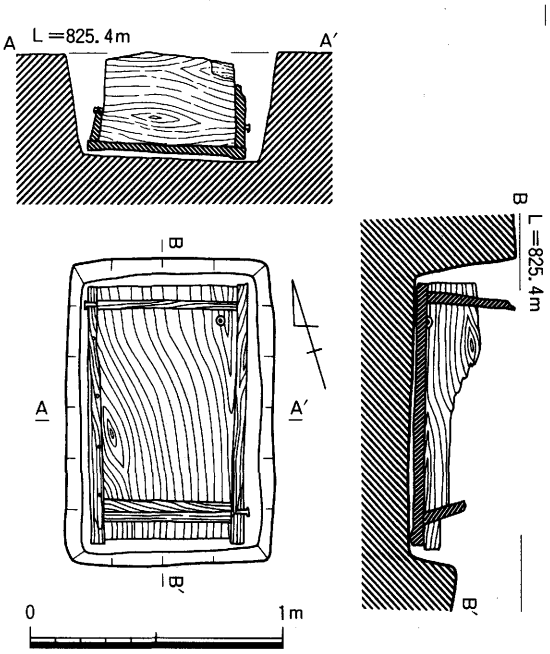
調査区北端中央で検出した桶を埋め込んだ遺構で、掘形は不整円形の平面形を呈し、径約1.8m・深さは残りの良い部分で約0.6mを測る。桶は底径1.13m・残存高0.48mを測る。側板は幅13cm～25cm・厚さ２cmの板21枚からなり、底板は幅18cm～52cm・厚さ２cmの板３枚からなる。底近くの外側には箍が１条残る。

埋桝（ＳＫ－03）

ＳＫ－02の南側で検出した長辺約1.2m・短辺約0.8m、深さ約0.4mを測る掘形内に、桝を埋め込んだ遺構である。桝は、長辺には長さ1.03m・厚さ３cm～４cm・短辺東側の小口には長さ0.55m・厚さ３cm、同西側小口には長さ0.5m・厚さ４cmの板が使用されている。内法は長辺0.82m・短辺0.53m・深さは現存値で0.35mを測り、長辺南側は１枚板が使われているが、長辺北側は上下２枚の板が使われていたよう



第15図　SK－02実測図



第16図　SK－03実測図

第17図　第２遺構面全体図

で、板の上端部に４箇所の竹釘と考えられる痕が残る。小口はいずれも１枚板である。四辺及び底板は鉄釘によってとめられている。なお、南東隅に径３㎝の穴が空けられているが、検出時には木栓が差し込まれていた。栓に伴う流出施設が見当らないところから、埋桝として転用されたもので、おそらく溜桝として使用されたものと思われる。

土坑（ＳＫ－07）

ＳＫ－03の南約10mの地点で検出した長径約５m、短径約４m、深さ約0.69mの土坑で、内部には拳大の礫と土砂が互層をなし堆積していた。遺物の出土は認められなかった。

(2)　第２遺構面の遺構

第７層を切り込んで営まれた遺構面で、16世紀前半を上限とし15世紀中葉を下限とする。

建物跡（ＳＢ－02）

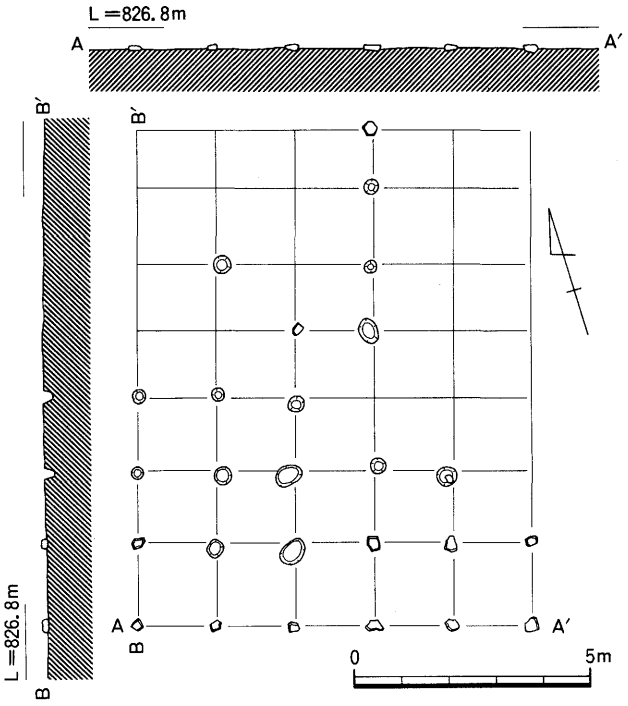
調査区北東隅で検出した南北棟の礎石建物跡で、方位はＮ－16°－Ｅである。規模は、北東隅及び北西隅が調査区域外になるため確認できなかったが、南北の柱通り列の東から３列目北端礎石より北には延びないと思われることから、東西10.40m・南北13.10mで、柱間数は東西５間・南北７間とみられる。柱間寸法は、東西方向が東から2.10mが３間、2.00mが２間で、南北方向が北から1.50m、2.10m、1.80mが２間、1.90mが２間、2.20mとなっている。礎石は30㎝～50㎝×20㎝～30㎝大であるが、南辺の１列を除き、ほとんどが抜き取られている。

埋甕（ＳＫ－08）

調査区のほぼ中央で検出した径約1.15m・深さ約0.95mの掘形を持ち、平面形が円形を呈する土坑２連で、東側の土坑内からは常滑焼大甕の体部下半が土坑底面からやや浮き上がってはいるが、据えられた状態で出土した。西側土坑からは甕の出土は認められなかったが、西側土坑にも同様に甕が据えられていたものと思われる。東側土坑から出土した大甕の体部から上方は、後の整地の際に削り取られたらしく検出できなかった。出土した常滑焼甕は15世紀前半から中葉にかけてのものである。

地鎮遺構（ＳＸ－02）

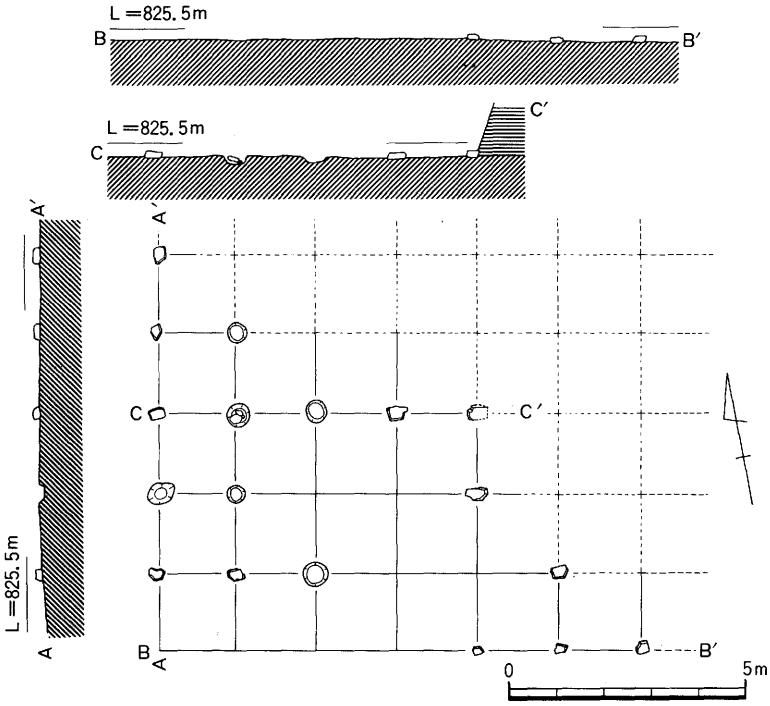
径約0.35m・深さ約0.20mを測るピット内に、最低10枚の土師器小皿が埋置されていた。小皿は底部を下にし一塊になっていたが、これは埋置後土をかけ埋め戻されたことによるものと思われれ、本来は２枚重ねで賽の目の五の目状に整然と配置されていとものと考えられる。土師器小皿の数は10枚と思われるが、個体数を最低10枚としたのは、すべての個体が割れており、接合不可能な破片が含まれているためである。



第18図　SB—02実測図

(3)　第３遺構面の遺構

第９層を切り込んだ遺構面で、15世紀前半から中葉を時期幅とする。



第19図　SB—03実測図

建物跡（ＳＢ－03）

調査区北東部で検出した南北棟の礎石建物跡で、方位はＮ－11°－Ｅである。規模は、北辺及び東辺が調査区域外になるため確認できなかった。検出規模は、東西６間・南北５間分であるが、これ以上の規模になることは確実であると思われる。検出部分の柱間寸法は、東西方向が東から2.20mが２間、2.10mが３間、2.00mであり、南北方向が南から2.00m、2.10mが４間となっている。礎石は、30cm～60cm×20cm～40cmと大きさは様々であるが、いずれの礎石もほぼ同レベルに据えられている。

(4)　第４遺構面の遺構

第10層を切り込み面とするが、出土遺物からみて第３面とほぼ同じ時期の遺構である。

池（ＳＧ－01）

ＳＢ－03の南側で検出した長径約7.10m・短径約4.50・深さ約0.35mを測る池で、平面形は楕円形を呈している。池は素掘りなのか、あるいは汀に石が敷かれていたものなのか、また、石が配されていたかについては確認できなかった。池の北西部からは流出用と思われるの溝（ＳＤ－04）が北流する。なお、導水溝については確認できなかった。

溝（ＳＤ－02）

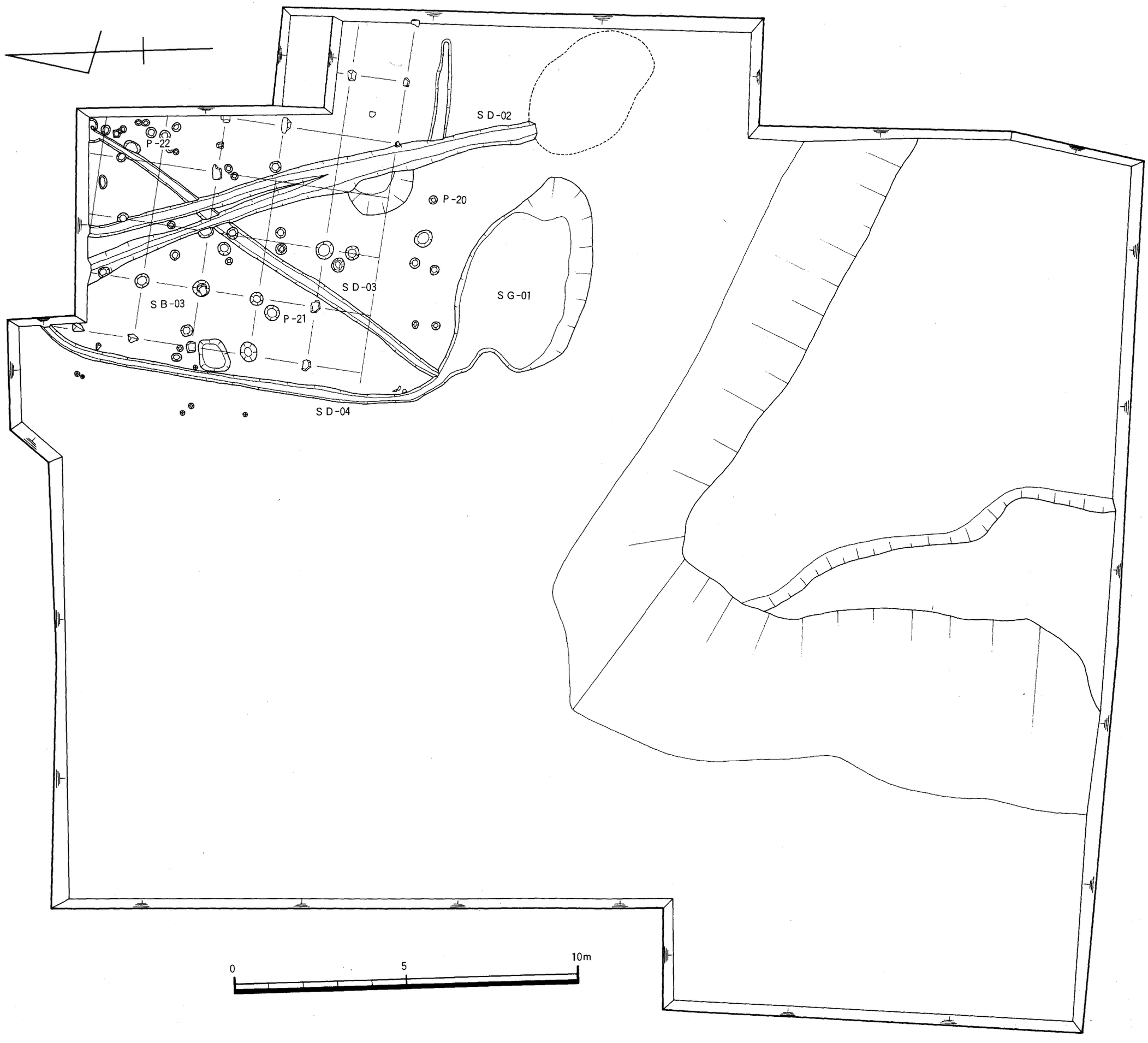
地山を切り込んで掘られた溝で、ＳＢ－03に先行する。南端は後世の土坑（ＳＫ－01）によって切られている。幅約60cm・深さ約50cmを測り、延長約20mを検出した。溝は南端から約８mのところでＹ字状に２条に分かれている。

溝（ＳＤ－03）

地山を切り込んだＳＧ－01からの流出溝と思われ、ＳＧ－01の西北端部に取り付く。ＳＤ－04に先行するものと見られ、幅約40cm・深さ約11cmを測り、流出口から北東流する。

溝（ＳＤ－04）

ＳＤ－03を付け替えた溝で、やはり地山を切り込んで設けられている。幅約45cm・深さ約14cmを測り、流出口からほぼ北流し、流出口から約12mのところで流れを北東に転じ調査区外へ延びる。



第20図　第３・第４遺構面全体図

第3節　遺　　物

1　上段包含層出土の遺物

この地区の基本層序は、上方から下方に斜めに土を押し出して敷地を拡張整地した斜め堆積の整地8層～整地1層と、その上に水平堆積する第3次～第1次整地層及び表土下に部分堆積する暗茶色土からなる。調査時の遺物の取上げ名称とは若干異なるが、整地1～8層が1時期のものではなく、また、第1次～第3次整地層という名称にも若干の問題があるため、ここでは暗茶色土を第1層、第1次整地層～3次整地層までをそれぞれ第2層～第4層とし、斜め堆積土は調査時の呼称を用い整地1層～整地8層と呼び、以下に各々の遺物について述べることにする。

なお、各層は自然堆積層ではなく下層の削平を伴う人為的な整地層であるため、出土遺物との関係はその下限が整地の上限時期を示すのみで、残念ながら、遺物相互の共伴関係や組成は単なる偶然性による結果である場合が多い。

(1)　表土（図1～3、図版13・14、1～67）

古くから相当の整地、削平を繰り返していると思われ、遺物の時期幅はきわめて広い。中国製陶磁器や伊万里、美濃瀬戸、備前、丹波、常滑などの国産陶磁器、須恵質土器、土師器、瓦器、土師質・瓦質土器などの多種多様な遺物が見られる。

a　中国製陶磁器（1～7）

1は玉縁状の口縁を持ち、やや灰みを帯びた透明釉がかかる白磁碗である。外面体部には回転ヘラケズリ痕を残す。2～4は青磁である。2は透明感のある草緑色の釉のかかる碗である。体部内外面に浅いヘラ彫りの劃花文状の文様が見られるが、いわゆる劃花文系のものではなく、高台内面の釉を輪状にケズリ取るタイプのものと思われる。3は口縁が外反する碗である。口縁は玉縁状を呈し、外面体部上位に2条の沈線が巡り、実測図ではもれているが体部下半に丸ノミ状の工具による浅い幅広の蓮弁が見られる。胎土はやや粗く黄白色で、釉色も不透明なオリーブみを帯び、全体に鈍重である。4は外面口縁部にスタンプによる雷文帯を巡らした、口縁の内弯する碗である。外面体部には浅いヘラ描きの蓮弁文が見られる。釉色は青みの強い草緑色で、透明度が低くややカセた感じである。5・6は染付である。5は合子の蓋である。型押しにより体部に6単位の蓮弁を表し、染付で縁取りする。上面にはつまみを中心に菊花文3単位が巡り、内面中央部にも菊花と思われる染付が見られる。口縁端部及び内面口縁部の釉は施釉後ケズリ取っている。6は外面体部及び内底に染色体状不明文を規則正しく並べた蓮子碗である。釉はやや灰みを帯び、呉須の発色は黒っぽい。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。7は天目茶碗である。灰白色の胎土に黒釉がかかる。火中して釉はカセているが、内外面に禾目の痕跡を残す。

b　国産陶磁器（8～23）

8は白磁である。全釉の後畳付部分の釉を丁寧にフキ取った小型の碗である。釉はわずかに黄みを帯び光沢がある。釉には非常に細かい貫入が見られ、胎土はやや軟質である。関西地方の京焼系のものと思われるが産地などは不詳である。9・10は伊万里の磁器である。9は外面体部に丸ノミによる鎬文を持つ白磁の盃である。やや青みを帯びる釉は高台外面途中までかかり、畳付及び高台内面は露胎である。10は染付端反碗の蓋で、ペンシルドローイングで染付される。11～15は美濃瀬戸系の陶器である。11～14

は褐釉の天目茶碗で、14以外は体部下半に鬼板による化粧がけが施されている。15は口縁部を外方に折り曲げた灰釉の盤である。外面体部下半を露胎で残す。火中して釉がカセている。16～19は備前焼である。16・17は摺鉢で、16の口縁部は上方にやや拡張を始めており、胎土は灰黒色で堅緻である。外面口縁部付近に重ね焼きの痕跡が見られる。17の口縁部は、すでに上下両方向への拡張を始めている。胎土はやや粗く砂粒を多く含み赤橙褐色を呈す。櫛目は８条１単位である。18・19は大甕の口縁部である。18は玉縁状であるが、玉縁下端に若干の面の付いた段階、19は波状の段が付いたものである。19は根来寺などにおいて天正の焼土層などから大量に出土している。20は東海系の山茶椀である。高台端部には籾殻圧痕を残す。紀北地方における山茶椀の出土はほぼ高野山のみに限定される。21・22は常滑焼の甕の口縁部である。21は口縁部の折り返し幅が狭くやや小形である。22は大甕で口縁の折り返し幅が広く中世の紀北地方において一般に流通する最終段階の常滑焼の甕で、この後備前焼に完全に駆逐される。23は胎土に長石粒を多く含んだ信楽焼と思われる無頸壺で、火中する。

c　瓦器（24～40）

24は内弯気味の器形で、内面口縁部に浅い沈線を巡らせた椀で、小さい断面三角形の高台が貼り付けられる。内面体部には細いが粗い暗文が巡り、内底には粗い螺旋暗文が施されている。外面には暗文は見られず、口縁部をヨコナデで調整し、体部は雑な指ナデで指頭痕を消している。灰白色の精良な胎土を持ち、器表は暗灰色に燻されている。25・26は口縁部の非常に強いヨコナデで外面体部との境に明瞭な段をなした椀である。内面体部の暗文は細く密に施されている。25の外面体部には指頭痕を残したままで、暗文は見られないが、26の外面体部には粗い暗文が施される。砂粒などをほとんど含まない精良な胎土で灰白色を呈し、器表は十分に燻されて暗黒色に焼成される。27は口縁部の強いヨコナデで端部を肥厚させた椀である。内面体部に非常に幅広の暗文を巡らし、内底には雑な並行暗文が見られる。外面体部は指頭痕を残したままで暗文は施されない。高台はゆがみ、端部がつぶれて平坦になった部分がある。胎土は微細な砂粒を含んで粗く、器表の燻しも不十分で灰黒色を呈す。28はヨコナデにより口縁部を外反させた椀である。高台は径が小さいが貼り付けは丁寧である。内底は細かい刷毛により調整されている。内面体部には細かく密な暗文が巡り、内底には雑な螺旋暗文が見られる。外面体部には指頭痕を残したまま雑な暗文が施されている。灰白色の粗い胎土で、器表は暗灰白色を呈す。29～31は口縁部内面を斜めに面取りするようにナデた椀である。概して体部の器肉は厚く、胎土は粗い。また、燻しも十分ではない。29・31の内面体部の暗文は細く密であるが、30は太く粗い。なお、29の外面体部には分割の意識を持った暗文が施されている。皿（32～39）は口縁部から体部に強いヨコナデを施したもので、体部と底部の境に明瞭な稜を持つものも見られる。38以外は口縁部が1/3以下の残存で法量的にはあまり正確でないが、口径10cm前後のもの（32～34）と８cm前後のもの（35～39）がある。内面体部から内底外縁部まで一気に暗文を巡らせるものが大部分であるが、33・34には内底に並行暗文が見られる。また、32は外面にも雑な暗文が施されている。40は29～31に近い調整の口縁端部を持つため、とりあえず瓦器としたが、用途などは不明である。体部下半のおそらく４ヶ所に径約６㎜の三ッ星形の穿孔が認められる。

d　土師皿（41～56）

口径23～24cmの大皿（41・42）や口縁を「く」の字状に屈曲させた白色系の土師皿（56）も少量見ら

れるが、量的に多いのは褐色系で外底に回転糸切痕を持つ地元産と考えられるもの（43～50）である。地元産と考えられるその他のものには、比較的小さい底部で体部が斜め上方に直線的に広がるもの(51～53)、低い器高で口縁部を小さく引き上げたもの（54・55）などがある。糸切痕を持つものには、口径15cm前後、器高2．5cm前後の大（中）皿と、口径９cm前後、器高1.5cm前後の小皿が認められる。

e　土師質・瓦質土器（57～67）

小壷（57)、羽釜（58～60)、焙烙（61)、鍋（62･63)、甕（64)、こね鉢（65)、風炉（66)、深鉢（67）などがある。57は棒状のものを巻き込んで指で成形した用途不明の土師質の小壷である。58・59は砂粒を多く含んだ粗い胎土で、暗赤褐色を呈する土師質の羽釜で、「く」の字状に外反する口縁を持つ。口縁部のみ比較的丁寧なヨコナデで、体部のナデは粗い。口縁端部をわずかに内側につまみ出す。60は比較的精良な黄橙色の胎土を持つ土師質の釜で、口縁部内外面とも丁寧にヨコナデし、口縁端部を小さく上方につまみ上げている。煤の付着は認められない。61は焙烙と思われる。胎土は暗赤褐色を呈す。土師質で胎土に少量の雲母粒を含み精良である。外面全体に煤が付着する。62・63は鉄鍋風の器形の瓦質鍋である。直線的に外方に開く体部にアールを持って内弯する口縁部を付している。口縁端部は水平にカットしている。内外面口縁部に強いヨコナデ、外面体部は横方向のヘラケズリで調整し、内面は粗いナデを施す。64は瓦質の甕である。摩耗が激しく調整などは不明。65は瓦質のこね鉢で、口縁端部を下方に拡張させている。外面の調整は口縁端部及び体部上面をヨコナデ、体部を横方向にヘラケズリし、内面は細かい刷毛で不定方向に調整したのち、浅い櫛目を施している。66の瓦質風炉は口縁部の雲形の透かし以外の装飾は見られない。内面口縁部上半から外面体部にかけて丁寧な横方向のヘラ磨きが施されている。67は深鉢もしくは甕の口縁部と思われるものである。外面のヨコナデが上半部にのみ施されていることから、鉢の可能性が強い。細かい砂粒を多く含み胎土は粗く、暗褐色を呈する。

(2)　第１層（図３、図版14、遺物番号68～75）

西側斜面への部分堆積土であり、本来表土に近い性格のものと思われるが、近代の遺物を多く含む表土と異なり、出土遺物の下限が19世紀初頭～前半で収まると思われるため、第１層として取り扱うことにした。18世紀～19世紀にかけての伊万里磁器（68～74）を中心に若干の美濃瀬戸系の陶器、瓦器、土師器、須恵質土器などが見られる。なお、伊万里と称するものには、有田産に限定されるものや、肥前産という程度に限定できるもの、さらにその周辺部を産地とするものなどが含まれている。例えば後述する染付碗69・70などは周辺部のものに相当するが、現状ではそれらを含めて伊万里磁器と呼ぶことにしたい。

68は青磁の花瓶である。釉は粘性が強く灰みを帯びた薄い草緑色で、内面は頸部付近まで施釉されている。胎土に含まれる鉄分が細かい褐色の斑点になって器表に浮き出る。青磁にはこのほか、小片であるが盤や香炉なども見られる。染付には碗（69～72)、段重（73)、仏飯器（74）などがある。碗69は外面体部に雑な３単位の桐と内底に五弁花のコンニャク判が見られる。施釉は畳付部分を避ける意識があったようであるが雑で、高台部と口縁部の一部が虫喰い状態になる。内面の釉を輪状にケズリとり、直接重ね焼きしたもので、畳付の釉は比較的丁寧にフキ取り、砂の付着は微量である。釉には灰みがあり、呉須の発色も灰青色を呈す。70も69同様の灰みの強い釉色を示す。外面体部に３単位の丸文が見られるが、灰青色に発色している。畳付の釉のフキ取りは雑で、多量の砂が付着する。内底の釉を輪状にフキ

取っている。71は外面体部に草花文が見られる。釉は若干灰みを帯び、呉須の発色も悪いが、69・70と比して釉の粘性が低くやや透明感がある。畳付の釉は丁寧にフキ取っている。72は非常に丁寧な作りで、外面体部にやはり丁寧に花文が描かれている。釉はやや青みを帯び呉須の発色も良好である。外底には「渦福」銘が見られる。高台は小さく断面三角形で、畳付の釉は丁寧にフキ取られている。73は段重と思われるもので、やはり丁寧な作りである。外面体部には横向きの花弁と唐草が太目の筆で描かれている。口縁部は斜に面取りし、露胎にしている。畳付の釉のフキ取りも丁寧である。釉はやや青みを帯び、呉須の発色も良好である。74は仏飯器で外面体部上端と中位の圏線の間に大胆に描いた菊花文と、空白を埋める氷烈文とによって文様帯を構成したものである。呉須の発色は比較的良好である。中実脚底部の幅広の畳付は釉をフキ取り露胎としている。75は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は端面の強いヨコナデにより内面をかすかに凹ませ、わずかに上方につまみ上げている。内外面体部にも丁寧なヨコナデが施されている。胎土には微細な砂粒と鉄あるいはマンガンの微細粒子を含むが堅緻で、暗灰青色を呈し、器表は暗灰色に焼成されている。口縁端面は重ね焼きにより暗青灰色に発色する。

(3)　第２層（図３、図版15、遺物番号76～83）

調査時には第１次整地層として遺物の取上げの行われた層である。若干の中国製の染付のほか、国産陶器、土師皿など相当量の中世の遺物を含むが、遺物の下限時期は18世紀中葉ごろと思われる。

a　国産陶磁器（76～79）

76は外面体部に形象化した波涛文と松と思われる樹木文を描いた小振りの伊万里染付碗である。やや青みを帯びた釉は透明感があり、呉須の発色も良好である。高台は低く断面三角形で、畳付の釉は丁寧にフキ取っている。内外面全体に細かい貫入が見られる。77は美濃瀬戸系の天目茶碗である。黄白色のやや粗い胎土に透明感のある飴釉風の褐釉がかかる。外面体部下半の露胎部への化粧がけは行われていない。78は信楽焼と思われる平底の盤である。口縁部は一度内傾させ、さらに「く」の字状に屈曲させた器形で、口縁端部を凹ませた輪花の表現が見られる。79は備前焼と思われる小形の壷である。外面体部から内面口縁部に赤茶褐色の泥漿がかけられている。胎土は赤褐色ないし黒褐色で、堅緻である。外面体部には細かい回転ヘラケズリ痕が見られ、口縁部から内面体部にかけて丁寧なヨコナデが施される。

b　土師皿（80～83）

出土する土師皿は中世の遺物の混入と思われるが、地元産と思われる表土出土51～53と同一タイプの83のほか、搬入品と思われる数個体がまとまって出土している(80～82)。80～82は基本的には外に開いた口縁部を持つ同一の器形である。体部のヨコナデを最後に抜き上げる段階で逆回転させ、外面体部は上半のみのヨコナデのため途中でわずかに段が付き、内底を不定方向にナデ、外面体部下半から底部にかけては未調整という共通の調整法を持つ。しかし、胎土の発色に明らかな相違がある。80のタイプは口径19cmを超えるもの2点、18cmのもの1点(80)、16cmのもの１点の計４点が出土し、胎土は砂粒などをほとんど含まず精良であるが、共通して体部内外面は灰白色、底部内外面は灰黒色に焼成されている。81は１点のみであるが若干底部と体部の屈曲が強い器形で、胎土は精良で黄白色を呈す。口径は16cmを測る。82も１点のみの出土である。これも口径16cmで、内面口縁付近にわずかに凹線状の凹みが付く。胎土は精良で砂粒などを含まず、肌色に近い桃橙白色を呈す。

(4)　第３層（図４、図版15、遺物番号84～96）

第２次整地層として遺物の取上げが行われた層である。出土遺物の全体量は多くないが、第２層と比して中国製陶磁器など中世の遺物の混入が目につくようになる。整地は18世紀前半以降と思われ、出土遺物は18世紀初頭～前半を下限とする。

a　中国製磁器（84～87）

白磁（84）、染付（85～87）などがある。84は一般に16世紀タイプと言われる端反のものであるが、他に外底の釉を輪状にケズリ取ったものや、畳付の釉をフキ取らず硅砂状の砂が付着したものなども見られる。染付には碁笥底で外面体部に蕉葉文の見られる皿（85）、内底に花弁文、外底に「冨貴佳器」銘の見られる鏝頭心型の底部を持つ碗(86)、内面に樹木文が見られ、外底を露胎にし、口縁の内弯する皿(87)などのほか、蓮子碗や呉須手の盤などが見られる。

b　国産陶磁器（88～94）

国産の陶磁器類にも美濃瀬戸系の陶器などを中心に中世の遺物の混入が相当数認められる。伊万里磁器（88～89）には染付や青磁などがある。88は染付の蓋である。外面体部に型紙摺りの桐と松葉と思われる文様が並ぶ。呉須の発色はやや灰みが強いが、精巧な作りである。89は青磁の鉢で内面全体にヘラ先による片切彫りの草花文が見られる。釉は内面と体部上半が黄緑色で底部と体部下半は草緑色に発色している。いわゆる蛇ノ目凹型高台で、幅広の畳付の釉を輪状にケズリ取り、露胎部は赤橙色を呈している。美濃瀬戸系陶器（90～92）には小形の花瓶、おろし皿、天目茶碗などがある。90は灰釉の花瓶で、火中して釉がとんでいる。体部に２条の細い沈線が巡る。底部は中実で回転糸切痕を残す。91の灰釉おろし皿も火中して胎土は須恵器状になっている。体部が外方に広く開く器形である。92は褐釉の天目茶碗で、第２層出土77と同一固体と思われる。火中の痕跡は認められない。93・94は産地不明である。最近この種のものは各地で窯跡が発見されており、現状では産地の限定は困難である。93は蓋の付く器形の壺である。暗緑色のうすい釉が内面全体と体部下半までかかり、口縁端部の釉はフキ取られている。胎土は堅緻であるが上半は黒灰色、下半は茶褐色を呈す。なお、内底に直径２㎜ほどの小さい目痕が認められる。別の小物を内部に入れて焼成したものと思われる。94はやや軟質な黄灰色の胎土に黄緑色の灰釉のかかる蓋である。外面体部に螺旋状の沈線が刻まれている。95は備前焼の壺と思われるが、火中して器表の自然釉が海綿状に沸騰している。

c　土師質土器（96）

96は土師質の焙烙である。胎土は暗茶褐色で細かい砂粒を含むが精良で、焼成も良好である。内面口縁部から外面鍔の下端までヨコナデが施されている。外面鍔付近から下部には煤が付着している。なお、紀北地方で一般に見かける焙烙は鍔を持たないものである。

(5)　第４層（図４、図版16、97～130）

第３次整地層として遺物は取り上げられている。16世紀末～17世紀初頭ごろを下限とする遺物群で、整地は17世紀初頭ごろを上限とする。

a　中国製陶磁器（97～105）

白磁（97～100）、青磁（101～103）、染付（104）、天目茶碗（105）などがある。97はむしろ青磁とすべきもので、外面口縁部に波状の便化した雷文帯を持つ碗である。やや青みを帯びた透明の厚い釉がか

かり、全体に粗い貫入が見られる。98・99は割高台で外面体部下半を露胎で残すタイプの坏である。99の内底には直接の重ね焼きの痕跡が残り、畳付には砂の付着が見られる。また、99の外底には、墨により細線で描かれた桜の花弁と、その上に書かれた朱漆による文字が見られるが、文字は剝落部があって判続できない。なお、他にこれらと同一タイプに属する角坏の破片も出土している。100は通常の16世紀タイプの端反の皿である。101は外面体部にヘラ描きにより幅広の蓮弁文の描かれた碗である。蓮弁は盛り上がりがなく、間弁を欠き、あまりシャープな片切彫りではない。草緑色の釉が厚くかかる。碗にはこのほかに、線描き蓮弁文を持つものも出土している。102は口縁を「く」の字状に屈曲させた蓮弁文の皿である。101同様の幅広の蓮弁文である。釉は灰草緑色で若干透明感がある。103は内底に印花文の見られる盤である。断面台形の低い高台が付く。暗灰緑色の釉は外底で輪状にケズリ取られ、露胎部は赤褐色に発色している。104は皿で、口縁部の内弯するタイプのものと思われる。文様は不明であるが、内面にペンシルドローイングで染付されている。先述の表土出土伊万里染付10はこのタイプの描法の影響を受けたものとされる。105は褐釉の碗である。口縁部を屈曲させない非常にシャープな作りで、底部はいわゆる椎茸高台である。胎土は精良で黄灰褐色を呈し、堅緻である。

b　国産陶磁器（106～109）

106は美濃瀬戸系褐釉天目茶碗で口縁部が極端に屈曲する器形である。胎土は黄白色を呈し軟質で、露胎部には鬼板による化粧がけが行われている。107は備前焼摺鉢で、口縁部が下方にわずかに拡張を始めている。口縁端部は水平にカットされているが、端部を下方につまみ出す際に端面がわずかに凹線状に凹む。櫛目は７条１単位である。胎土は暗赤褐色で砂粒を多く含みやや粗いが、焼成は良好である。内面と外面体部上半は丁寧なヨコナデで調整され、体部下半のヨコナデは粗い。108は107とは逆に口縁部の上方への拡張が見られ、端部がやや丸みを帯びる備前焼摺鉢である。胎土、焼成とも極めて良好であるが、胎土は上半部では内部が淡茶褐色、表面が灰白色のサンドイッチ状で、下半は灰白色である。器表は灰茶褐色を呈し、細かい鉄分と思われる黒斑が浮かんでいる。107同様に内外面体部上端部のヨコナデは丁寧である。体部下半のヨコナデは、粘土紐の巻き上げ痕を残す程度に粗く仕上げられている。口縁端部にはゴマ状の自然釉が見られる。櫛目は８条１単位である。109は備前焼の胎土・焼成に似るがあまり見ない器形である。近世初期のものと思われるが産地不明である。口縁を玉縁状にした鉢形の器形で、櫛目が見られるが一種の装飾の可能性があり、摺鉢かどうか不明である。櫛目は細く鋭いが浅い。胎土は暗灰褐色で器表は暗赤褐色を呈し、非常に堅緻である。

c　瓦器（110・111）

110は内面口縁部付近に１条の沈線を持つ椀である。よく水簸された灰白色の胎土は精良で、焼成も良好である。外面の暗文は粗いが、内面体部は細く密に、かつ丁寧に施され、暗文部分は銀化したように金属光沢を持つ。111は体部が丸みを持たず、直線的に外方に広がる器形と低く小さい高台に特徴がある椀である。110と比して鈍重な感じの作りで、暗文も太く、雑である。また、外面の暗文は口縁部付近に１条巡るのみである。胎土、焼成ともにあまり良好ではない。

d　土師皿（112～122）

土師皿には外底に回転糸切痕を持つもの(112～114)、小さい高台と直線的に外上方に伸びる体部を持つもの（115～118)、ヨコナデによりわずかに外反気味の口縁部を持つもの（120～122）などがある。

112～114は表土出土43～50と同一タイプで、体部から内面外周部は丁寧なヨコナデが施されている。体部は薄く作られ、やや内弯気味である。内面中心部のみ不定方向にナデられる。外面体部と外底との境は比較的明瞭である。115～118は表土出土54・55と同一タイプであり、この層で最も多く出土する。また、ここでは口径13cmを超える115、10cm前後の116～118のほか、7cmに満たない119が見られる。大形の115は体部に三段の段がつくようにヨコナデされ、体部も薄く仕上げられるが、ほかはやや厚ぼったい。胎土は精良であるがやや灰みを帯びた焼成を示すもの（117・118）も見られる。120～122のタイプは少量の出土であるが、口径12cm前後で器高約3cmの深い器形のものと、口径9cm前後の浅いものがある。共に体部が強いヨコナデによりわずかに外反し、内底との境が凹んでいる。前二者に比して胎土には少量の砂を含みややザラついた感じである。

e　土師質・瓦質土器（123～130）

鍋（123・124）、焙烙（125・126）、こね鉢（127～130）などがある。123・124は同一のタイプの土師質鍋であるが123は小破片のため、実測の際に傾きの設定を誤ったものである。口縁端部を内側につまみ出した器形である。内外面口縁部のヨコナデは丁寧であるが、体部の調整は細片のため不明である。胎土にはあまり砂粒を含まないが微細な雲母粒が少量見られる。黄灰色ないし黄橙色を呈す。125・126の焙烙は表土出土61・96などと同様のものであるが、125には鍔部の直上に直径約3mmの穿孔が認められる。外面には多量の煤が付着している。こね鉢には瓦質のもの（127・128）と土師質のもの（129・130）がある。127・128は体部が直線的に開く同様のタイプである。胎土は灰白色で器表は灰黒色を呈す。外面体部は粗くヘラケズリし、内面体部は細い刷毛で調整する。口縁部のヨコナデが強いため、内面口縁部付近で若干凹んでいる。櫛目も比較的細かい。129・130は体部がやや内弯気味の器形である。129は127・128などとよく似た調整で、口縁部と体部との境も稜を持って明確であるが、内面の刷毛調整の目が粗く、櫛目も粗い。胎土には鉄と思われる黒い粒子が多数浮かんで、橙褐色を呈す。130は一度内弯した体部を口縁部で外に引き出しており、口縁部と体部の境は丸く不明瞭である。内面体部から外面口縁部にかけてヨコナデを施すが、外面体部は未調整のままである。櫛目は極めて太く粗い。胎土は多くの砂粒を含み、暗赤褐色を呈する。

(6)　整地1・2層

下降する地形に押し出され斜め堆積する整地1層～8層は、同時期によるものではなく、大別して3時期に分かれるものと思われ、当然各時期に対応する遺構が存在したはずである。しかし、この地区の遺構面のうち最古のものは、第4層の下面、斜め堆積する整地1～8層の上面で検出された16世紀前半～後半と考えられる遺構面であり、それ以前の遺構面は既に削平されたと考えられる。整地1・2層は同一時期の整地と考えられ、およそ16世紀前半代のものである。

①　整地1層（図6、図版17、131～166）

比較的古い時期の遺物が多く混入している。なお、瓦器は見られない。

a　中国製磁器（131～134）

白磁（131・132）と青磁（33・134）が見られる。131は型作りの輪花皿である。内面体部は型に彫った沈線で6分割し、この部分の口縁部に刻みを入れて輪花状にしている。小さい平底は露胎で回転糸切痕を残している。釉はやや灰みを帯びるが、施釉は均質で丁寧である。口縁部の一部を漆継ぎしている。

132は通例割高台の見られるタイプの坏である。本個体は焼成のときに最下部に置かれたと思われる通常の輪高台であるが、内底4ヵ所の直接重ね焼きの際の割高台跡が見られる。釉は全体に細かい貫入が走り、光沢のある乳白色を呈す。外面体部下半は露胎で、外底には「十の一」の墨書が見られる。おそらく10個単位で購入されたものと思われる。133は腰折れの碗である。青緑色の釉が厚くかかっている。全釉で畳付部の釉を丁寧にフキ取り、露胎部は茶褐色に発色している。134は口縁の外反する碗である。胎土は灰色で釉も灰みの強い発色である。釉は透明感が強く、体部の回転ヘラケズリ痕が釉を透かして見られる。高台外面まで施釉し、畳付と高台内を露胎で残すタイプである。

b　国産陶器（135～145）

美濃瀬戸系（135～138）、備前焼（139・143～145）、常滑焼（140～142）などがある。135・136は灰釉のおろし皿である。共に同一タイプのもので、体部が外方に大きく広がる。平坦な口縁部には凹線を巡らし、内外面口縁部付近にのみ施釉する。外底には回転糸切痕を残し、内外面体部はヨコナデで調整している。おろし目は鋭いヘラ先で、135は比較的浅く雑に、136は深く丁寧に刻まれている。137は灰釉の小壷である。火中していると思われる。138は灰釉の盤で、おそらく三足が付せられるものであろう。口縁部をいったん「く」の字状に折り曲げ、さらに上方に引き上げている。釉は刷毛塗りの痕跡が見られ、外面体部下半は露胎である。胎土はザラついた感じで、明黄褐色を呈している。139～142は火中している。139は玉縁状口縁の中形の壷である。140～142はとりあえず常滑の甕としておくが、これらの段階の時期には、他の常滑系の古窯でも同一タイプのものを焼成しており、特に高野山という紀北地方にありながら、紀北地方における流通の束縛を受けない地域における産地の比定には十分に考慮する必要がある。141・142は同一固体の甕の可能性が強い。142は火中により自然釉が海綿状に泡立っている。143～145は摺鉢である。143は第4層出土108と同一固体である。144は小振りの器形で口縁部は上下方向に拡張しており、端部に弱い凹線が巡る。重ね焼きの痕跡を残し、内面と重ね焼き部は暗赤褐色、直接火を受けた口縁部は赤橙色を呈している。胎土は暗灰色で砂粒を多く含んでいる。145は口縁端部を極端に凹ませ、上下方向への拡張を強調している。胎土は砂粒を多く含み粗く、中心部で暗赤褐色、外側で灰褐色のサンドイッチ状を呈し、表面は赤褐色に発色している。外面体部には重ね焼きの痕跡が見られる。

c　須恵質土器（146～147）

146・147は東播系の須恵質こね鉢である。146の口縁は、団子状に丸めたような口縁である。胎土には砂粒を多く含み、器表には鉄分が浮いた黒斑があり、やや青みを帯びた灰色を呈す。147は体部と口縁部の稜が明瞭ではなく、のっぺりとした器形である。146に比して胎土には砂粒が少なく、焼成も良好である。

d　土師皿（148～157）

この層で出土する土師皿で最も多いのは、148～156の第4層出土115～119に類するタイプである。体部が外上方に直線的に伸び、比較的小さい底部に簀子痕の残るものが多いが、148・149など口径12cm前後の中皿は簀子痕を消しているようである。149には底部に墨書により人面が描かれている。157は第4層出土120と胎土・色調などよく似たものであるが、実測図は口縁部の残存率が低いため計測を誤ったもので、実際の口径はもっと小さいと思われる。器高も低く簀子痕を残している。口縁部のナデは120ほど強くなく、体部と底部の境には稜が付かない。また、口縁部が外反するという感じもやや少ない。

e　土師質・瓦質土器（158～163）

鍋（158・159）、羽釜（160・161）、こね鉢（162・163）などがある。158は口縁部を外方に「く」の字状に折り曲げ、口縁端面に1条の沈線が巡っている。胎土は細かい砂粒を多く含むが堅緻で、胎土・焼成とも良好である。胎土はサンドイッチ状で内面は暗灰色、器表は黄橙褐色である。159は紀伊型とされるものであるが、紀北地方での出土量はきわめて少量である。胎土・焼成とも良好で黄灰色を呈し、内面には煤の付着が見られる。160の実測図は口径の計測を誤っており、実際の口縁径は27cmほどである。また、鍋の可能性もあるがとりあえず釜とする。口縁端部は一般のものとやや異なり、つまみ上げるというより折り曲げる感じである。胎土の砂粒は少なく焼成は良好である。灰黄褐色を呈し、器表に煤が付着する。161は口縁部を「く」の字状に折った後、端部を内側につまみ上げている。胎土に多くの砂粒を含み暗赤褐色を呈す。162は土師質のこね鉢である。傾斜させた端面の幅は比較的小さく、外面端部との境に段を持たない。内面体部には細かい刷毛目痕が見えるが、ナデで消している。内外面口縁部は丁寧にヨコナデし、外面体部は横方向のヘラケズリで調整する。内面の櫛目はかなり細い。胎土は精良で砂粒等をほとんど含まない。163は瓦質のこね鉢である。調整は162とほとんど同様であるが、器形は口縁部の下方への拡張が著しく、端面はほとんど垂直で体部との境に段を持つ。

f　鋳型（164）

164は梵鐘の撞座の鋳型と思われるものである。文様はきわめて平面的で、中房の蓮子も盛り上がりがなく竹管文に近い。中房は輪花を表現し、中房と蓮弁文の間に三重の刺突文を巡らしている。また、外区の蓮弁文は単弁で、ラマ式蓮弁に近い形である。胎土は砂粒などをほとんど含まず非常に堅緻で、赤褐色を呈している。周縁部から外面全体に、型に押しつけた際の指頭痕が残っている。未使用品なのか器表はほとんど荒れていないが、高野山において梵鐘が実際に作成されたのかどうか、今後検討を要する資料である。

g　石製品（165・166）

滑石製鍋が出土している。165は体部が外上方に直線的に開く器形で、やや小振りである。内面体部は平滑に磨かれ、口縁部も比較的丁寧にケズられている。鍔は低く断面は三角形である。体部は5㎜前後の幅で7段～8段に分けて縦方向に削られている。石質はあまり均質ではなく、結晶の乱れている部分が多い。外面体部には多量の煤が付着している。166は大振りで体部にやや丸みのある器形である。165と同様の手法で製作されているが、外面口縁部のケズリが2段に分けられている点と、鍔が高く断面が台形である点が異なる。石質は比較的均質で、作りも全体に丁寧である。煤の付着は認められない。

②　整地2層（図7、図版17・18、167～193）

この層も整地1層同様、古い時期の遺物が多く混入しているが、新しい要素のものは整地1層より若干多い。また、整地1層同様瓦器は1片も見られない。16世紀前半代としたが、この年代観は最も年代を上げてのもので、16世紀中葉以降に下げても違和感のないものも少量含まれている。

a　中国製陶磁器（167～172）

白磁（167・168）、青磁（169～171）、染付（172）などが見られる。167は幅の広い断面三角形の玉縁を持つ碗である。胎土は黄灰白色を呈し、釉も黄灰色に発色している。外面体部下半は露胎である。168は通常16世紀タイプと言われる端反の皿である。この層からの出土遺物中最も新しい要素を持つもので

ある。169は劃花文系の碗である。内面体部に片切彫りによる劃花文が見られる。直線的に外上方に広がる体部はシャープな作りである。釉は草緑色を呈し、透明度が高い。170は内面全体に型押しによる草花文の見られる大形の碗である。口縁部は内弯し、外面口縁部にはスタンプによる雷文帯が巡っている。釉は厚く透明度は低いが濃草緑色で光沢がある。外底の釉を輪状にケズリ取るタイプと思われる。171は線描き蓮弁文の碗である。胎土は灰白色でやや粗い。釉は暗緑色を呈し、透明感がある。釉は高台から畳付を超えて高台内面まで施釉され、内底を露胎で残している。172は端反の皿で、内底に羯磨文、外面体部に牡丹唐草文が見られる。やや小振りのタイプに属するものである。

b　国産陶器（173・174）

美濃瀬戸系陶器が少量出土する。173はやや小振りで体部が薄くシャープな作りの灰釉の平碗である。口縁部をわずかに「く」の字状に屈曲させている。釉は透明度が高く灰緑色を呈し、外面体部下半を露胎で残す。釉には全体に細かい貫入が走る。胎土は灰白色で精良であるが、微細な鉄の黒斑が見られる。器表にはやや赤みがあり、施釉部との境は黄橙色を呈す。174は褐釉の天目茶碗である。口縁部の屈曲がなく、端部も尖ってシャープである。胎土は灰黒色で堅緻であるが、粗くザラついた感じである。

c　須恵質土器（175）

須恵質の鉢（175）や東播系須恵質こね鉢などが少量出土している。175は山茶椀系と思われる鉢である。体部を内弯させ、口縁端面を水平にカットしている。底部は平底で回転糸切痕を残している。外面体部上半から内面体部にヨコナデを施し、内底は不定方向にナデる。外面体部下半は巻き上げ痕を残して軽くナデられている。胎土は灰白色を呈し、若干砂粒を含む。

d　土師皿（176～192）

土師皿で最も多いのは、整地１層と同様小さい底部と直線的に開く体部に特徴があり、外底に簀子痕を持つタイプ（176～185）である。口径12cm前後のもの（176～179）、８cm～９cmのもの（180～183）、７cm前後のもの（184・185）の３種類が出土している。なお、176と185は底部中心に直径約５mmの穿孔が見られ、176の内面には煤が付着している。また、176は大（中）皿には珍しく簀子痕を残したままである。外底に回転糸切痕を持つもの（186～189）も少量見られる。表土出土43～50同様に口径15cm前後で体部に段の付くもの（185）と口径９cm前後のもの（187～189）で構成されている。190～192は搬入品と思われるものである。190は口径10.4cm、器高3.2cmと計測されるが小破片であるため正確ではない。灰茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口縁部を強いヨコナデで外反させている。外底の指頭痕はナデによって軽く消している。191は口径14.8cmを測る皿で、体部は下半で段を持ち、上半はやや外反気味に口縁部に向かって立ち上がる。胎土は黄橙色で、微細な鉄の斑点が浮くが精良である。体部全体にヨコナデが施されている。192は白色系の皿である。第２層出土82などと同様のもので、口縁部が外に広がり器高も低くなっている。口径15.3cm、器高2.4cmを測る。内面口縁に強いヨコナデによりわずかに面を持たせている。胎土は精良で灰白色に焼成されるが、部分的に黒灰色を呈す。

e　瓦質土器（193）

193は瓦質のこね鉢である。器表は黒灰色で、胎土は灰白色で砂粒を含み堅緻である。調整は整地１層出土162などと同様であるが、口縁部がやや下方に拡張して体部との境に段ができ、口縁端面をわづかに凹ませている。櫛目は細かく比較的鋭い。

(7) 整地３・４・５層

整地３～５層を同時期の整地として理解したい。例によって出土遺物の幅はきわめて広いが上限を15世紀中葉前後とする整地層と考えられる。

① 整地３層（図８、図版18、194～216）

この層の遺物の出土状況には偏りがあり、中国製陶磁器は皆無で、国産陶器の出土も小量である。

a 国産陶器（194）

備前焼（194）のほかは丹波焼の中形壷の小片や、整地１層出土135などと同一タイプの美濃瀬戸系おろし皿の体部の破片などが出土するにすぎない。194は口縁部が特に上方に大きく拡張した摺鉢である。端面は平坦ではなく下部をわずかに凹ませている。胎土は赤褐色を呈し砂粒を多く含むが堅緻である。外面体部に重ね焼きの痕跡が見られる。櫛目は８条１単位である。

b 須恵質土器（195～197）

東播系須恵質こね鉢（195･196）、東海系こね鉢（197）などが少量出土している。195は口縁部の肥厚がほとんど見られないものである。端面はわづかに丸みを帯びるが、体部との境にほとんど段を持たない。196の口縁部は上方に大きく拡張し、内側に強く屈曲している。端面は丸みを帯びている。また、端面の強いヨコナデにより、内面口縁部直下に段ができている。197はこね鉢と思われるものである。体部は直線的に外上方に伸び、口縁部は少し外に反り、端部はやや肥厚気味に丸くおさめられている。高台は断面三角形の貼り付け高台である。外面は体部上半をヨコナデし、体部下半はヘラケズリのままである。内面体部上半部にもヨコナデが認められるが、下半は使用による摩耗が激しく調整等は不明である。胎土は灰褐色を呈し、砂粒を多く含むが堅緻である。

c 瓦器（198）

上層の整地１・２層では見られなかった瓦器が少量出土している。198は口縁部内側に沈線を持つ第４層出土110などと同一のタイプのものである。内面体部の暗文は細く密で丁寧である。内底に螺旋暗文が見られる。外面は口縁部付近をやや丁寧な、体部には粗い暗文が見られる。断面三角形の低い高台が貼り付けられる。胎土はよく水簸され精良で、焼成も良好で十分に燻されている。

d 土師皿（199～209）

土師皿は整地２層同様に、外底に簀子痕を持つもの（199～202）と回転糸切痕を持つもの（203～207）が主体であるが、後者が前者を量的に凌駕するようになる。回転糸切痕を持つものの大部分は口径９cm前後の小皿で、口径15cm前後の大（中）皿はこの層では非常に少ない。208・209は白色系の皿である。208は整地２層出土192などと同一タイプの型押しによるものである。口径約19cmの大皿で、器高も４cmを越える。209は口径約８cm、器高約１cmの小皿で、口縁部を外上方につまみ上げるように強いヨコナデで調整している。内面は不定方向にナデ、外底には指頭痕を残している。胎土はやや黄みのある乳白色で、砂粒などはほとんど含まない。焼成も良好である。

e 土師質・瓦質土器（210～216）

羽釜（210～213）、鍋（214・215）、こね鉢（216）などがある。210は表土出土60などと同様の紀伊型とされるものである。口縁端部をつまむように内側に引き出し、端面には凹線が巡る。断面台形の鍔が丁寧に貼り付けられている。胎土は砂粒を多く含み黒灰色であるが、器表は黄橙灰色を呈し堅緻である。

211は「く」の字状に外反させた口縁の端部をさらに内側につまみ出した整地１層出土161などと同一タイプのものである。胎土は砂粒を多く含み、粗く暗赤褐色を呈す。内外面口縁部をヨコナデし、外面体部はナデ、内面体部はヘラケズリによって調整する。外面に煤が付着している。212は口縁部を「く」の字状に外方に屈曲させた器形である。鍔は端部を欠損しているが、比較的高い位置に付けられている。内面口縁部から外面鍔部にかけて比較的丁寧にヨコナデされ、内面体部はヘラケズリで調整されている。口縁端面には１条の浅い凹線が巡る。土師質で胎土に砂粒を多く含み、黄褐色を呈している。213は細部の処理に若干の相違はあるが、212と同じタイプの土師質羽釜である。口縁端面の凹線が明瞭になっている。214・215は同一固体の可能性が非常に高い土師質鍋で表土出土158と同一タイプである。細かい砂粒を多く含むが、胎土焼成とも良好である。216は端部を若干尖らせ、口縁部を全体に丸くおさめた土師質こね鉢である。内外口縁部付近にヨコナデを施し、外面体部は斜めに粗くヘラケズリで調整する。内面体部は太い櫛目の痕跡をわずかに残す程度まで使用により摩耗している。また、内外面口縁部付近には煤が付着し、このこね鉢と称される調理具の使用状況を暗示している。

②　整地４層（図９、図版19、217～259）

この層での陶磁器などの様相は、整地３層より新しい要素が多いが、土師皿においては外底に回転糸切痕を持つものがさらに増加している。また、瓦器も若干増量している。

a　中国製磁器（217～218）

217は青磁の盤である。断面四角形の高台を持つ。暗草緑色の釉は透明度が低く、内面において若干虫喰い状態になっている。胎土は暗灰色でやや粗い。外底の釉は輪状にケズリ取られ、露胎部は赤茶褐色を呈す。高台に沿って円形に体部を打ち欠き、２次使用したようである。小形品ではよく見かけるが、大形の盤の例は珍しい。218は比較的大形の青磁碗である。内底に印花文などがみられ、外底の釉を輪状にケズリ取るタイプと思われる。胎土は灰白色で緻密、釉は暗緑色を呈す。相当長期間使用されたと思われ、体部には細かい無数の擦痕があり、畳付部分の釉は摩耗し灰白色の胎土が露出している。

b　国産陶器（219～221）

219は美濃瀬戸系灰釉おろし皿である。整地１層出土135・136などと同様の体部の開きの大きいものである。220・221は備前焼の中形の壺である。共に玉縁状の口縁を持つ。220は典型的な備前の土で胎土・焼成とも良好である。口縁端部や肩部にゴマ状の自然釉がかかる。221は比較的多くの砂粒を含み、胎土も灰褐色を呈し粗い。２次焼成を受けたのか器表に煤状のものが付着している。

c　瓦器（222・223）

瓦器の量は整地３層に比して確実に増加している。小破片が多いが小杯や皿なども見られ、器種のバリエーションが増える。222は口縁部の内面を斜めにカットするように先端をナデて尖らせた表土出土29～31のタイプの椀である。外面のヨコナデはごく口縁部に近い部分のみであるが、端部をやや平坦にした断面三角形の高台の貼り付けは丁寧である。内面体部の暗文は太く粗で、内底には螺旋暗文が施される。外面には体部下半まで粗い暗文が見られる。胎土は濃灰色で精良で、器表は黒灰色を呈す。223は口縁部を内弯させるように内側に力をかけて、ヨコナデした椀である。相当雑な作りで、高台はゆがんで正円ではなく、端部も部分的につぶれて台形になった部分がある。内面体部の暗文は比較的細いが粗く、内底の螺旋暗文も雑である。胎土は灰白色で少量の砂粒を含む。器面の燻しは不十分で灰色を呈す。

d　土師皿（224～256）

この層では外底に回転糸切底を持つものが、簀子痕を持つものを量的に完全に凌駕している。224～230は簀子痕を残し、小さい底部と直線的に開く体部に特徴のあるタイプの皿である。これらのうち口径12cm前後の大（中）皿は体部に２段ないし３段の段が付くことは前述したが、224や226においては、底部となる粘土板に、体部となる粘土紐を輪積みして成形したような痕跡が見られる。また、これらの大部分が簀子痕をナデ消しているが、225においては外底中心部に消し残された簀子痕が観察される。231～247は外底に回転糸切痕を残すものである。口径15cm前後の大皿（231～232）と口径８cm～９cmの小皿（233～247）により構成される。小皿には口縁部を若干内弯させるようにヨコナデするもの（235～240）と口縁部をわづかに外につまみ出すようにヨコナデするもの（241～247）がある。前者においては内底外周部に力がかかり、この部分が少し凹むため見かけの器高は高く、後者は外方に引き出すようにヨコナデするため内面外周の凹みがなく、見かけの器高は低い。しかし、現状ではこの両者に際立った胎土などの差は認められない。なお、量的には前者の方が多い。248・249は口径12cm前後で比較的高い器高を持ち、体部が内弯する器形の皿である。内外面体部のヨコナデは非常に丁寧で、胎土は精良できめ細かく、焼成も非常に良好である。重ね焼きを行ったと思われ、外面体部口縁端から約１cmほどが黄橙色で他は赤橙色を呈す。内面に煤が付着している。250・251は器高などに差異はあるが、よく似た胎土と調整が見られる。250は口径9.6cm、器高2.4cmの小皿である。器高が高いのはタイプとしての属性と考えるより、むしろ個体としての特徴と思われる。口縁部は外につまみ上げるようにヨコナデし、内面は不定方向にナデている。外底に指頭痕を残し、体部と底部の境は不明瞭である。胎土は亜白色系とでも言うべき黄白色を呈し、細かい砂粒を含むが精良で、胎土・焼成とも良好である。251は口径9.8cm、器高1.0cmを計る。250と同様の調整を持つが、胎土は砂粒が若干少なくやや黄みが増す。252・253も亜白色系と言える。口径10cm前後、器高1.2cm前後で法量的に251などと類似する。また、胎土・焼成なども250・251と近い。体部から口縁部にかけての強いヨコナデで口縁部が肥厚したような感じになり、外底と体部との境に明瞭な段が付く。外底は指頭痕を残したままで、内底は不定方向にナデられる。なお、内底周縁部は体部のヨコナデによりわづかに凹んでいる。254は口径８cm弱、器高1.2cmの小皿である。252・253と同様の調整が見られるが、胎土が灰褐色である。口縁部が肥厚するという感じはないが、やはり強いヨコナデにより外面体部と底部の間に明瞭な段が付いている。白色系土師皿などに時々見られる発色であるが、とりあえず252・253と同一タイプの小皿として理解したい。255・256は白色系の皿である。共に型作りによるものである。255は口径12.8cm、器高2.6cmを測る中皿である。外面体部は２段に分けてヨコナデが施され段が付き、体部の立ち上がりが強い器形である。胎土は精良で象牙色を呈す。256は口径10.8cm、器高2.2cm前後を測る。256に比べて体部が外に開く器形である。外面体部のヨコナデは口縁部付近にのみ施され、胎土は256ほど精良でなく灰白色を呈す。

e　土師質土器（257～259）

少量の土師質の羽釜（257～258）が出土している。共に砂粒を多く含んだ粗い胎土で、暗赤褐色を呈し、表土出土58・59などと同一のものである。257は口縁端面が平坦で、わずかに端部を上方に引き上げる程度であるが、258・259では口縁端部の内側へのつまみ出しが強くなり、口縁端面には凹線が巡っている。

③　整地５層（図10、図版19、260～266）

この層からの出土遺物はごく小量である。山茶椀（260）と瓦器（261）のほかはすべて小片で、土師皿、青磁、滑石製石鍋などがある。260は東海系の山茶椀である。腰の張りがなく、体部は直線的に外上方に立ち上がり、わづかに外反する口縁を持つ。貼り付けられた端部のやや丸い断面三角形の低い高台は、完全に全周しないままである。なお、高台端部には籾殻圧痕が残っている。内外面体部全体をヨコナデし、内底のナデも回転を伴い、螺旋状に施される。外底には回転糸切痕を残し、墨により「北□」の文字が書かれている。261は瓦器椀である。口縁部の強いヨコナデにより、外面体部との間に段が付き、口縁が若干外反気味になる表土出土25～28と同一タイプである。内面体部の暗文は比較的密である。内底の螺旋状暗文はやや太く粗い。外面は口縁部にやや密な、体部には雑な暗文が見られる。高台は断面三角形であるが、摩耗して端部が丸くなっている。胎土は精良で微細な雲母粒を含んでいる。焼成はあまり良好とはいえず、器表は灰黒色を呈す。262～266は土師皿である。この層での土師皿は搬入品と思われるものが主体で、他の層と異なった様相を見せる。すべて白色系の型作りの皿である。小破片が多いため口径、器高の計測はあまり正確ではないが、器高の高いもの（262･263）と、やや低いもの（264～266）があるようである。262～265の内面口縁端部は、ゆるい凹線が巡るような感じで、わづかに上方へ引き出すようにヨコナデが施されているが、266の場合はむしろ沈線が巡るという感じで強く凹んでいる。胎土・焼成とも良好で、白灰色ないし淡茶褐色を呈す。また、262～265の内面には煤が付着している。

(8)　整地６・７・８層

整地６～８層は13世紀中葉～後半を上限とする整地層で、出土遺物の大半が瓦器、土師器である。

①　整地６層（図10・11、図版19・20、267～294）

遺物の大部分は瓦器、土師皿であるが、中国製磁器、土師質・瓦質土器、滑石製石鍋なども出土している。なお、図示できなかったものに備前焼摺鉢や東播系こね鉢などがある。

a　中国製磁器（267～269）

267・268は同一個体と思われる型押しの青白磁小壷の蓋（267）と身（268）である。釉は透明度の高い青白色を呈し、釉の溜りは青く発色して文様を浮き上がらせている。外面体部全体に細かい貫入が見られる。蓋の上面には型押しの細い蓮弁が、環状の小さいつまみを中心に放射状に巡っている。内面は返りの内側にのみ施釉される。身は外面体部に２段のやや幅広の蓮弁文が型押しされている。型押しは２段に分けられており、内面体部中位に継ぎ痕を残している。外面体部下半を露胎で残し、内外面口縁部の釉を丁寧にフキ取っている。269は劃花文系の青磁碗である。よく張った腰から直線的に外上方に伸びると思われる体部は薄く、口縁端部はシャープである。胎土は灰白色で堅緻、釉は暗緑色を呈し光沢が有り、透明度が高い。内面体部にはヘラによる片切彫りの劃花文が見られる。

b　須恵質土器（270）

少量の山茶椀（270）のほか、数点の東播系こね鉢の底部などが出土している。270は腰の張りが弱く、体部が外上方に直線的に広がり、口縁部に施したやや強いヨコナデによりわづかに口縁の外反する器形の椀である。胎土は微細な砂粒を多く含むが堅緻で、灰黄色を呈す。内面から外面口縁部にかけてのヨコナデは丁寧であるが、外面体部上半部に施されたヨコナデは成形の段を残して雑である。

c　瓦器（271～283）

271～274は内面口縁部付近に沈線を巡らす椀である。よく水簸された精良な灰白色の胎土で、器表の燻しも丁寧で、暗文部分が銀灰色を呈するものも見られる。やや小振りで、端部を鋭く突らせた断面三角形の高台の貼り付けも丁寧である。外面は口縁部を強くヨコナデしてやや外反気味に仕上げ、体部は高台付近を貼り付け時にヨコナデするが、体部中位には指頭痕を残している。内面体部の暗文は細く密で、内底には螺旋暗文が見られる。外面の暗文は口縁部付近のみ丁寧で、体部は雑である。なお、274は全体に著しく摩耗し器表が失われている。275は口縁端部の内面を斜めにカットするようにナデた表土出土29～31と同一タイプの椀である。やや腰が張った器形で、口縁はヨコナデにより若干外反気味である。断面三角形の高台は端部を面取りし、貼り付けは丁寧である。胎土は灰白色で砂粒を含みややザラついた感じがある。内面体部の暗文は密であるがやや太く、内底の螺旋暗文も271～273などに比して雑である。外面体部の暗文は体部に数条巡るのみである。焼成は燻しが不十分で灰白色を呈す。276～279はヨコナデにより口縁部をやや肥厚させ端部を丸くおさめた、腰の張りが弱く比較的浅い器形の椀である。胎土は灰みが強く精良であるが、器面の燻しは不十分で暗灰色を呈す。内外面体部の暗文は太く雑で、内底の暗文には平行（276）、螺旋（277・279）、斜格子（278）などがある。外面体部には暗文は施されていない。280・281は腰が張り、やや体部の内弯する器形を持つ椀である。外面口縁のヨコナデも口縁部をわずかに内傾させるように丸くおさめている。胎土は砂粒を多く含み粗く、ザラついた感じであるが、焼成は良好で器表は暗黒色を呈す。内外面に粗く太い暗文が雑に施される。282は口径6.6cm、器高2.4cmの小杯である。全体にヨコナデで調整され、内外口縁部の強いヨコナデにより体部と口縁部の境にわづかに段が付き、口縁部はやや内弯する。内底及び外底にも円形のナデが施される。内面体部から内底にかけて、太い数状の暗文が見られる。胎土は精良で焼成も良好である。283は強いヨコナデにより口縁部を肥厚させた皿である。内面は不定方向にナデ、外底には指頭痕を残す。口径8.0cm、器高0.9cmを測る。胎土は砂粒を多く含み粗く、器面はザラついた感じで灰白色を呈する。

d　土師皿（284～290）

土師皿では褐色系のもの（284～287）が多いが、ここでは整地4層に見られた224～230などの小さい底部と直線的に広がる体部を持ち、外底に簀子痕を残すタイプは見られない。284・285は外底に回転糸切痕を持つものである。284は口径14.8cm、器高3.6cmを測る大（中）皿である。内底を不定方向にナデた後、内外面体部と内底周縁部に一気に強いヨコナデが施されているため、内底周縁部が若干凹んでいる。胎土には微細な砂粒を含み、堅緻で灰黄褐色を呈する。285は整地2層出土233～239などと同一タイプの小皿で、口径8.8cm、器高1.2cmを測る。やはり内底周辺部が凹んでいる。なお、外底には回転糸切痕と共に幅約1cmの幅広な簀子の痕跡も残している。286・287は口径15cm前後、器高2.5cm前後の中皿である（286の実測図は口縁部の歪みが強いため口径の計測ミスと思われる）。内面体部を軽くナデた後、内外面口縁部を強くヨコナデし、外底には指頭痕を残したままである。口縁部の強いヨコナデのため内弯する体部が口縁部でやや外反気味に開く。黄灰褐色の胎土は砂粒を多く含む。288・289は白色系の皿で、外底に回転糸切痕と幅0.6cmの簀子痕を残している。体部がやや内弯気味に立ち上がる器形である。内底を不定方向にナデ、内外面体部から口縁部を一気にヨコナデし、ナデを上方に急角度で抜いている。胎土は黄白色で精良であるが、これまで見られた白色系のものに比べると微細な砂粒を含み、ややザラ

ついた感じがする。290は288・289とよく似た胎土を持ち、口径8.8cm、器高1.6cmを測る小皿である。外底に回転糸切痕を持ち、器形、調整等は褐色系で回転糸切痕を持つものとまったく同じである。なお、胎土は288・289よりさらにザラついた感じが強い。

e　土師質・瓦質土器（291・292）

291は口縁部を「く」の字状に外方に折り、やや内弯気味に引き上げたのち、端部を内側につまみ上げた整地２層出土257～259などと同タイプの土師質の羽釜である。口縁端面には浅い沈線が１条巡っている。胎土は砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈す。292は瓦質のこね鉢である。おそらく上層からの混入と思われる遺物である。外面体部から口縁部にかけて煤が付着している。

f　石製品（293・294）

滑石製鍋が２点出土している。293は表面が摩耗して調整などは不明であるが、整地１層出土165と類似した器形である。石質は結晶粒子が粗く、均質ではない。294はやや小振りの丁寧な作りのものである。外面には厚く煤が付着している。結晶粒子が細かく均質で、丁寧に磨かれた内面体部は光沢を帯びる。

②　整地７層（図11・12、図版20・21、295～355）

この層の遺物も瓦器、土師器が主体である。しかし、整地６層において見られなかった外底に簀子痕を残す小皿（316～320）が、小破片であるが数点出土している。これらの土師皿が底部糸切底の土師皿に後出するものであるのは確実と思われるが、整地６～８層の上限と考えられる13世紀中葉～後半のうちに糸切底のものに次いで現われるタイプなのか、あるいは斜堆積の整地土という遺物の取上げの困難な状態の中での混入なのか、現状では判然としない。しかし、後述する霊宝館駐車場地区における出土状況などと併せ考えると、第４層や整地３～５層あるいはそれらに伴う遺構からの混入の可能性が大きい。

a　陶磁器（295～298）・石製品（355）

瓦器、土師皿以外の遺物の出土はごく少量であるので、ここでは中国製、国産を含めて述べることにする。295は中国製の白磁の四耳壺である。口縁部の外への折り返しが大きい。胎土はやや灰みを帯びるが精良で、釉は透明度が高く黄灰色を呈す。296は中国製蓮弁文系の青磁碗である。体部は直線的に立ち上り、口縁端部はシャープである。外面体部にはヘラによる片切彫りの鎬蓮弁文が見られる。灰白色の精良な胎土で、釉は透明度が高く淡青緑色を呈す。297は信楽焼と思われる甕である。口縁部にゆがみが有り、実際は実測図よりもう少し横に寝た器形である。頸部から外反しながら「く」の字状に屈曲した口縁端部を上方につまみ上げ、端面に浅い凹線を巡らせている。胎土は堅緻であるが砂粒を多く含み、黄灰色を呈する。表面には自然釉がかかり灰緑褐色を呈し、器表に長石粒が多く浮き出している。298は東海系の山茶椀である。高台端部には籾殻状の圧痕を残している。整地６層出土260とよく似た器形で体部等の調整も同様であるが、若干高台径が大きく、内底が広い。なお、この広い内底部は使用による摩耗なのか、あるいは意識的に研磨したのか、硯のすり面のように平滑でツルツルしている。355は滑石製の鍋である。最大径44cmを越える大形品であるが、浅い器形と思われる。作りは非常に丁寧で、しっかりした断面台形の鍔が削り出されている。外面口縁部のケズリは通常のものと異なり横方向である。石質は均質で表面は平滑である。口縁部に直径５㎜ほどの穿孔が見られるが、孔の周辺には特に摩耗などした様子は認められない。なお、内面体部に釘などによると思われる細い擦痕が無数に見られる。

b　瓦器（299～315）

299～301は内面口縁端部に沈線を持つ整地６層出土271～274と同一タイプの椀である。胎土・焼成とも良好で内面体部の暗文は細く密で、内底には丁寧な螺旋暗文が見られる。301は器表が若干風化しているが、299・300の暗文は銀化したように光る。302は比較的高い断面三角形の高台を持ち、ヨコナデにより口縁部がわずかに外反する。整地６層出土275などと胎土や暗文が似るが、口縁端部の処理が異なる。灰白色の胎土は微細な砂粒を多く含みザラついた感じである。内面体部の暗文は密であるがやや太い。器表の燻しは不十分で灰黒色を呈する。303・304は整地６層出土276～279などと同一の椀である。口縁部のヨコナデにより口縁端部を若干肥厚させた感じで丸くおさめたものである。暗文は太く雑である。やはり外面には暗文が見られない。305も強いヨコナデにより口縁部をわづかに外反させた椀で、器形的には303・304などとよく似ている。また、外面に暗文が見られない点も類似するが、胎土や焼成は全く異なり、燻しも十分である。内面体部の暗文は雑である。高台は断面台形で比較的丁寧に貼り付けられている。306～313は表土出土29・30などと同様に口縁端部内面を斜めにカットするようにナデたタイプのものである。概して腰の張りが弱い器形で、口縁直下でいったん内傾した体部を口縁部のナデにより外反させている。胎土は灰白色を呈し、比較的精良で焼成も良好なものが多い。内面体部の暗文は細いが粗く、内底の螺旋暗文も雑である。外面の暗文もきわめて雑で口縁部も含めて数条が形式的に巡る程度である。314は口縁部を外反させた小杯である。内底を不定方向にナデ、内外口縁部をヨコナデで調整している。外面体部は未調整で、高台付近のみ高台の貼り付けに伴うヨコナデが施される。高台は端部を面取りした断面三角形のしっかりしたものである。内底には平行暗文が施されている。胎土は微細な砂粒を多く含むが、焼成は良好で黒灰色を呈す。315は口径8.8cm、器高2.0cmを測る小皿である。内底を円形にナデ、内外面口縁部に強いヨコナデを施し、外底はナデにより指頭痕を消している。灰白色の精良な胎土で焼成も良好である。

c　土師皿（316～350）

この層での土師皿は、外底に回転糸切痕を持つものが圧倒的に多い。316～320の外底に簀子痕を持つタイプはすべて小片で、おそらく混入と思われるものである。回転糸切痕を持つものは、口径15cm前後の大（中）皿（321～326）と口径９cm前後の小皿（327～339）によって構成されている。なお、326はやはり糸切痕を持つが、若干異質である。胎土は黄橙色を呈し、２mm前後の小石を多く含んでいる。口縁部は内弯し、体部から口縁部にかけて回転ヘラケズリ状の細かい段が見られる。外面体部のヨコナデは段を消す意識が有るのか、体部下半まで施されている。340～344は口径９cm前後の小皿で、口縁部をつまみ上げるようにヨコナデしてわづかに外反させたものである。胎土にほとんど砂粒を含まず亜白色系といえるもの（340）、若干の微細な砂粒を含み黄橙色のもの（341）、黄白色を呈するもの（342～344）などがある。内底は不定方向にナデ、外底は指頭痕を指ナデにより比較的丁寧に消している。345～349は口径15cm前後の大（中）皿である。345・348・349はど明らかに搬入品と考えられるものも含まれている。345～348は褐色系で、口縁部が外反するもの（345・346）と直行するもの（347・348）がある。345は口径14.5cm、器高3.2cmを測る。口縁部が外反し、外面体部に２段のヨコナデによる段を持つ。内底を不定方向にナデ、外面体部上半にヨコナデが施される。外面体部下半は指頭痕を残し、外底の指頭痕は指ナデにより丁寧に消している。胎土は砂粒が少なくきめ細かで、赤褐色を呈す。346も口縁部が外反し

体部に２段の段が見られるが、345に比して外底の処理などが雑である。器表が摩耗し調整などは不明であるが、345に類するものと思われる。赤橙色を呈し、砂粒は少ないが軟質で焼成はあまり良好ではない。347は口径14.8cm、器高4.0cmの深い器形の皿である。器表は摩耗し、調整などは不明であるが、体部と底部の境は丸く不明瞭で、体部上半は直線的に外上方に開く。胎土は精良であるが微細な雲母粒を含んでいる。348は口径15.2cm、器高2.8cmを測る。体部を轆轤引きにより直線的に外上方に引き上げている。胎土は微細な砂粒を多く含むが堅緻で黄白色を呈す。349は口径14.4cm、器高2.6cmを測る白色系の型押しによる大（中）皿である。底部は大きく平らで、体部はやや内弯する。口縁部は端部をヨコナデにより内側に巻き込むため、外面口縁部に軽い折り線が入る。外面体部下半から底部周縁に指頭痕を残すが、底部の指頭痕はナデ消している。胎土はよく水簸され精良できめ細かく、淡黄褐色を呈す。350は高台付きの皿もしくは蓋と思われるものである。内面は不定方向にナデ、内外面口縁部にヨコナデを施す。外面体部は未調整で指頭痕を残している。高台もしくはつまみの剝がれた痕跡が見られる。微細な砂粒を含み、よく焼成された胎土は非常に堅緻で明橙褐色を呈している。

d　土師質・瓦質土器（351～354）

351～354はすべて同一タイプの羽釜である。胎土に非常に多くの砂粒を含み、暗赤褐色を呈す。口縁端部を軽く上方につまみ出したものや、若干内側に巻き込んだようになっているものなどがある。口縁部内外面及び鍔の周辺にはヨコナデを施している。内面体部はヘラケズリで調整している。

③　整地８層（図13、図版21・22、356～361）

この層の遺物は少量である。瓦器、土師皿のほかに、図化できないが整地７層出土295に見られるような白磁四耳壺の体部や、青白磁の渦文梅瓶の体部などの小破片も出土している。

a　瓦器（356・357）

この層で出土する瓦器の大部分は内面口縁端部付近に沈線を持つものである。356はよく腰が張った器形である。また、高台は端部を面取りし、断面は台形に近い。貼り付けた高台内外面と外底周縁部にかけては、轆轤回転を伴いながらヘラ先（暗文の施文具か）を当てることにより、貼り付けをより強固なものにしている。口縁部の強いヨコナデにより口縁部と体部の境は明瞭に段をなす。内面体部の暗文は細く密で、内底には平行暗文が施される。外面口縁部の暗文も密である。外面体部の暗文は雑であるが、体部５分割の意識を示している。器表は暗黒色を呈し、焼成は良好で十分に燻されている。357も356とほとんど同様のものである。若干の相違点は、外面口縁部のヨコナデが356ほど強くないこと、高台端部に面取りがなされないこと、内底の暗文が螺旋暗文であることなどである。

b　土師皿（358～361）

358・359は外底に回転糸切痕を持つ小皿である。358は口縁部が若干内弯し、ヨコナデにより内底外周部が凹む整地４層出土233～240と同一のタイプである。359は口縁部をやや外反気味に引き出した整地４層出土241～247のタイプのものである。共に微細な砂粒を多く含むが、胎土、焼成とも良好で黄褐色を呈す。なお、358の外底には回転糸切痕の上に、部分的にではあるが細い簀子痕も残している。360・361は整地７層出土340～344などと器形的には類似するが、胎土は褐色系である。口径は９cm前後であるが、器高には340～344と同様に高いものと低いものが見られる。360は器高2.4cm、361は器高1.4cmを測る。共に胎土は微細な砂粒を多く含み、赤橙褐色を呈する。

2　上段遺構出土の遺物

(1)　ＳＶ—01裏込め（図13、図版22・23、362～374）

362・363は中国製の染付である。362は口縁の内弯する器形の皿で、内底には矢車と思われる文様が描かれている。高台外面には２条の圏線が巡り、畳付の釉はフキ取られている。外底の釉は虫喰いの状態になっており、内面や外面体部と異なる灰みの強い釉がかけられている。363は内底に梅花文の描かれる皿である。残存部には見られないが、通常は葉脈を墨弾きの手法で描くものである。363は口縁部の内弯する器形と思われるが、口縁が外反する器形のものや、幅広の蛇ノ目状高台を持つものなどもある。なお、端反のものは一般の16世紀前半の端反皿と異なり器高の高いものが多い。364～369は伊万里の染付である。364は外面体部に雲堂文の描かれた碗である。腰が張った器形で高台も外に張っている。全釉で畳付の釉は端面のみをフキ取っている。胎土は精良で呉須の発色も良好である。365は外面体部に草花文の見られる碗である。胎土は灰白色を呈し、呉須は暗灰褐色に発色する。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部は淡赤褐色を呈す。366は内底を空白で残し、内底外周から体部にかけては精緻な筆で松鶴文を描いた端反の皿である。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。外面体部には輪郭を細線で描き、中を濃でつぶした唐草文が巡り、外底には「渦福」銘が見られる。胎土・呉須の発色とも非常に良好で、有田産と考えられるものである。367は口縁部の内弯する器形の鉢である。内面体部を太い筆で４分割し、交互に葡萄と思われる文様と笹とを描いたもので、空白になっている内底には五弁花のコンニャク判が見られる。外面体部には濃筆による雑な唐草文が巡り、外底には「渦福」銘が見られる。畳付は釉のフキ取りが雑で砂が付着している。胎土は精良であるが、釉はやや灰みを帯びる。呉須の発色は良好である。368は段重である。途中段のもので口縁部及び外底の重ね合わせ部を露胎としている。共に全釉後のフキ取りである。内面は無文で外面体部に白く染め残した大根と鼠が描かれている。胎土は精良で露胎部は部分的に赤橙色を呈す。呉須は色鮮やかで、良好に発色している。369は体部が外方に開く器形のソバ猪口である。底部が厚く非常に安定が良い。外面体部には軽妙な調子で松と思われる文様が描かれるが、木と葉の部分に異なる呉須を意識的に使用しているようで、木部は暗灰色に、葉部は青灰色にそれぞれ染め分けている。胎土はやや灰みが強く、釉も全体に灰みを帯びる。畳付は釉のフキ取りが丁寧ではなく部分的に砂が付着している。370は瀬戸の染付碗である。腰が張り口縁部で外反する器形で、高台はバチ状に外に広がる。外面体部には濃筆で島影や帆掛船が描かれている。胎土は純白に近く、呉須は青みの強い発色である。371は紀州藩の御用窯である男山焼の白磁で、外底には染付けによる「南紀男山」の銘がある。型作りで左右を貼り合わせた、角形で小形の袋物である。胎土は精良で釉は青白磁のように若干青みを帯び光沢がある。全釉で畳付の釉のみフキ取っている。372・373は唐津の碗である。372は腰が張らず、体部はわずかに内弯気味であるが、直線的に外上方に立ち上がる。胎土はやや赤みのある灰褐色で堅緻である。釉はオリーブ色で光沢があり、全体に細かい貫入が見られる。全釉で畳付の釉をフキ取っている。373は京焼写しの碗である。腰が張り、器高が低い。内面には鉄により島影と帆掛船が描かれ、外底には「新」のスタンプが見られる。胎土は象牙色でややザックリした感じである。光沢のある透明釉が体部下半を露胎で残してかけられている。釉には全体に細かい貫入が走っている。374は二分金（一両＝四分）である。裏面に元文（1736～1741）の年号が見られる。

(2)　第４層下面遺構（図13、375～391）

第４層下、すなわち斜め堆積する整地１～８層上面で検出された遺構で、残存する最終遺構面とされている。従って、整地１・２層の時期16世紀前半を上限とし、第４層の時期16世紀後半～17世紀初頭を下限とする。しかし、この範囲にあてはまる遺物は非常に少なく、大部分がそれ以前の遺物である。前述したように古い段階の遺構を相当削平しているはずなので、それらの遺物が混入したものと考えられる。遺物はすべて柱穴の出土である。

Ｐ―01（375・376）

375は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は斜めに切り落されるが、上下への拡張は少ない。胎土は灰白色で鉄やマンガン粒をほとんど含まない。重ね焼きのため口縁端面は黒灰色で、内面及び体部は灰白色を呈す。376は瓦質のこね鉢である。口縁部の内側をわづかに斜めにカットするようにヨコナデし、端部を丸くおさめている。内面体部はナデで調整し、浅く櫛目を入れる。外面口縁部にはヨコナデを施し、口縁部からわづかに下がったところに粗い刷毛を横方向に巡らせる。外面体部は指頭痕を残したまま縦方向に刷毛調整を施している。胎土は若干の砂粒を含みやや赤みのある灰褐色を呈し、器表は黒褐色に焼成されている。このほか、常滑焼の甕の肩部、外底に回転糸切痕を持つ土師皿などが出土している。

Ｐ―02（377・378）

377は土師質の羽釜である。紀伊型と言われるものに近い器形であるが胎土は全く異なり、大和のものとされる羽釜などに類似している。広く平坦な口縁端面を持ち、断面台形の鍔が体部の高い位置に貼り付けられている。内面口縁部から外面鍔の下部まで丁寧にヨコナデされている。内面体部の調整は炭化物の付着により観察できないが、外面体部はヘラケズリによるものと思われる。外面にも全体に煤が付着している。胎土は砂粒を多く含み赤褐色を呈する。378は瓦器である。摩耗が激しいが内面口縁部付近に沈線を持つタイプの椀である。

Ｐ―03（379～383）

379は浅い器形で雑な作りの瓦器椀である。口縁部をヨコナデにより内側に屈曲させ、輪状の低い高台が形式的に付けられている。内面体部には幅広の暗文が粗く付せられ、外面には暗文は見られない。胎土は砂粒を含み粗い。器表は銀灰色を呈している。380・381は外底に回転糸切痕を残す土師皿である。381は従来の口径９cm前後の小皿と同じものであるが、380は他の層のものに比して体部の立ち上がりが強い器形である。調整などは同様であるが、胎土はややきめ細かく灰褐色を呈す。部分的であるが外面体部から口縁部内側にかけて煤の付着が見られる。382は整地７層出土347と類似し、体部と底部の境が不明瞭で、深い器形の土師皿である。口径13.2cm、器高3.8cmを測る。胎土には347と同様に細かい雲母粒を少量含んでいる。383は整地２層出土80～82などと同タイプの型押しの土師皿、口径14.8cm、器高約２cmを測る。外底と体部は型押しのままで、内底を不定方向にナデ、内面体部と内外面口縁部にヨコナデを施している。胎土は微細な砂粒を含み堅緻で、灰黄白色を呈す。

Ｐ―04（384）

この柱穴から出土した遺物は384の土師皿が唯一のものであるが、完形品である。口径8.8cm、器高1.2cmを測る。整地７層出土341などと同じタイプである。口縁部を外につまみ出すように強いヨコナデを施し、端部はわづかに肥厚する。内底は不定方向にナデ、外底は指頭痕を残したままである。胎土は暗黄

橙色を呈し精良である。内面に多量の煤が付着している。

P—05（385）

385は常滑焼の小形の甕の口縁部である。外に折り返した口縁の幅はまだ狭く、「N」字状にはなっていない。胎土は多くの砂粒を含み、暗灰色で非常に堅緻である。器表は暗赤茶褐色を呈し、部分的にゴマ状の自然釉がかかっている。

P—06（386）

386は口縁の外反する中国製の青磁碗である。非常に浅い器形で、体部に比して底部が非常に厚い。内面の体部と底部の境付近に巡る1条の弱い沈線以外は無文である。灰白色の胎土は微細な鉄あるいはマンガン粒を含み粗い。釉は灰みのある草緑色で、透明度が高いため体部の回転ヘラケズリ痕が透けて見える。口縁端部は鉄分の発色により口紅状に灰茶褐色を呈す。

P—07（387～391）

この柱穴の遺物は2次焼成を受けているようである。387は美濃瀬戸系の灰釉天目茶碗である。体部下半を露胎で残した灰釉は火中により泡立ち、胎土は須恵器のように堅く焼き締まって灰白色を呈している。口縁部を強く屈曲させる器形で、高台は断面四角形の輪高台である。388～390は土師皿である。388・389は外底に簀子痕を持つタイプ、390は型押しのP—03出土383などに類するタイプのものである。2次焼成により非常に堅く焼けている。391は通例の土師質のこね鉢であるが、これも器表は焼きの甘い陶器のように堅く変質している。

3　下段包含層出土の遺物

この地区の西半は大きく削平を受け、東半と西半とで土の堆積状況が異なるため、調査時での遺物の取り上げはセクションベルトを挟んで区別し、西第1層～第3層、東第1層～第8層とされる。西側は第3層直下が地山である。本来は東側同様に1～8層の堆積があり、それが削平された後に西第1～3層が堆積したという調査担当者の判断に従い、東第1～8層を西第3層の下に置き、それぞれ第4～11層として記述することにする。しかし、上段同様にこれらの層はほとんどが整地層であるため、その層から出土する遺物の最も新しい要素が整地の上限時期を示すのみで、通常の場合各層とも層単独では時期幅の設定が不可能で、各遺構面の時期幅を上下層から絞り込むことは非常に困難である。

なお、この地区において検出された遺構面は第5層（東第2層）上面、第7層（東第4層）上面、第9層（東第6層）上面、第10層（東7層上面）上面の4面であり、その結果から層位を大別すると第1～4層、第5・6層、第7・8層、第9層、第10～11層の5層にまとまることになる。若干の問題もあるがここではこれに従って記述を進めることとしたい。

(1)　表土（図14～16、図版23・24、392～455）

表土からの出土遺物は例によってきわめて多種かつ多量である。また、時期幅もきわめて広い。

a　中国製磁器（392～409）

白磁（392～399）、青磁（400）、染付（401～409）などが見られる。392は口縁端反の碗である。高い断面長方形の高台が付き、体部は外上方に直線的に広がり、体部下半を露胎で残すものである。口縁端部を外方に折り曲げ端面を水平にカットしている。胎土は灰白色で鉄と思われる微細な粒子を含むが密

で堅緻である。釉は灰黄色を呈し、口縁内面で若干の溜りを作っている。393は割高台の皿である。口縁の内弯するタイプのもので、高台は4分割され、内底には4ヵ所の直接重ね焼きの痕跡を残している。胎土は黄白色でやや粗く陶質に近い。釉は乳白色で体部下半を露胎で残す。露胎部の高台外周部には高台削り出しの際のカンナ痕を残している。394は393と同じタイプの角坏である。おそらく八角坏と思われる。高台は輪高台で、やはり高台外周部にカンナ痕が見られる。胎土は393よりさらに陶質でサクい。釉は黄ばみ全体に細かい貫入が見られる。体部下半を露胎で残す。395も同様のタイプの坏である。外面体部の面取りのないもので、端反の器形と思われる。高台は抉りのない輪高台である。また、直接の重ね焼きの痕跡は見られない。胎土は乳白色で393・394と比して精良であるがやはり陶質である。釉は乳白色を呈し光沢があり、全体に細かい貫入が走る。396～398は通常16世紀タイプとされる白磁の端反皿である。397の胎土は灰みが強く、器表に黒灰色の小さい斑点が浮かんでいる。全釉で畳付の釉をフキ取っている。399は内底に菊花状の文様を型押しした皿である。とりあえず白磁としたが、釉は白磁のそれではなく染付の釉で、文様の凹んだ部分は青白色を呈す。高い高台の畳付の釉をフキ取るが硅砂状のものが付着している。2次焼成を受けていると思われる。400は口縁の外反する器形の青磁の鉢である。胎土は精良で釉は深い草緑色を呈し、光沢がある。釉は厚く体部では1㎜を越す。青磁には他に袋物や盤、内底に「顧氏」銘のある碗、稜花皿なども出土している。染付は白磁や青磁に比べて多量である。全体に皿の方が多いが、図示できなかったものに雲堂手の端反碗や16世紀の最終末ごろにあらわれるタイプの端反碗なども含まれている。401は饅頭心型の底部を持つ碗である。外面体部に人物文が描かれている。402は鮮やかな呉須で内面に花文が描かれている。体部の器肉が厚く、口縁が内弯する碗である。畳付には多量の砂が付着している。403も402と同様の碗である。高台はやや外に開き、畳付には砂が付着している。404～406は内底に羯磨文、外面体部に牡丹唐草文の描かれる端反の皿である。404は火中している。外底には体部と異なる釉が薄く掛けられていた痕跡があるが、2次焼成によりとんでいる。405は鉄と思われる黒斑を多く含む胎土で、釉は灰みが強いが光沢がある。呉須は灰緑色に発色している。全釉で畳付の釉を粗くフキとっている。406は小振りの皿である。胎土は精良で呉須の発色も良好である。外面体部の牡丹唐草文は比較的丁寧に描かれている。内底を欠くため見込の文様は不明であるが、通常の羯磨文を圏線が取り巻くものと異なり、内面体部と内底の境に別の文様帯が巡っている。407は口縁の内弯する皿である。外面体部の文様は不明であるが、碗401に類するような文様と思われる。408・409は口縁部が強く外方に屈曲する器形の皿で、同じ端反であるが405～406などとは異なるタイプの一群である。408は内面体部に虫文を描いたもので、外面は無文である。火中している。409は内面口縁部にペンシルドローイングの手法で渦文帯が描かれている。

b　国産陶磁器（410～427）

伊万里磁器（410～415）、美濃瀬戸系陶磁器（416～421）、信楽焼と思われるもの（422）、唐津焼（423）、備前焼（424～427）などが見られる。410は青磁染付の菊皿である。型押しにより口縁部を菊花状にしたもので、内面体部には丸ノミによる蓮弁状の彫り込みが見られる。灰白色の精良な胎土に灰緑色の釉がかかる。全釉で畳付の釉をケズリ取っている。なお、410は体部を欠いているが内面体部の一部を丸く釉抜きし、ここに染付により菊花などが描かれている。411は青磁の小形の瓶である。口縁部を外側に折り曲げ端面を水平にしている。火中して器表の釉が泡立つ。412は青磁のラッパ口の花瓶である。

胎土はきめ細かく精良で、釉は空色に近い薄緑色に発色している。畳付の釉をケズリ取り、ここに鉄を塗り、南宋の青磁の雰囲気を出している。漆継ぎの痕跡を残している。413は染付の稜花皿である。型押しによるものと思われる。内底から体部にかけて山水文が描かれ、口縁端部には鉄による口紅が見られる。外面体部は無文で、型押しの際に生じた亀裂が見られる。414は口縁を外反させ、端部を輪花状にした染付の皿である。内面体部には細かい唐草文と牡丹文を描き、外面には太い濃筆で唐草を巡らせている。胎土は細かい鉄の黒斑が浮くが精良である。釉はやや灰みを帯びるが、呉須の発色は良好である。畳付の釉はフキ取っている。415は染付の大皿である。内面には太い濃筆で帆船が描かれている。胎土はやや赤みのさした灰白色で精良である。畳付の釉をフキ取り、露胎部は淡赤灰色を呈す。416・417は瀬戸の製品と思われる白磁の四角坏である。高台も四角形である。内面全体に細かい型押しの浮文が見られる。胎土はきめ細かいが、鉄と思われる細かい黒斑が多く見られる。釉は青白色で光沢がある。畳付の釉のフキ取りは雑である。418は褐釉の天目茶碗である。口縁部が屈曲しない器形である。胎土は灰褐色で堅緻である。外面体部下半を露胎で残し、露胎部は黒灰色を呈す。火中して釉はカセている。419は外底の抉りが浅い褐釉天目茶碗の底部である。胎土は黄褐色で堅緻である。420は褐釉の水鳥形水滴である。鳥の頭部と片方の尾羽根を欠く。胎土は黄灰褐色で精良であるがややサクい。体部上半には焦げ茶色の単一色の釉がかかり体部下半を露胎にしている。外底には糸切痕が見られる。421は褐釉の茶入である。火中により釉がとんでいる。胎土はやや粗く黄白色を呈す。外底には回転糸切痕を残している。422は信楽焼などに見られるタイプの灰釉の蓋であるが、最近各地からこの種の生産窯が発見されている。胎土は灰黄色で堅緻である。上面のみ淡灰緑色の透明釉がかけられている。釉は透明度が高く、全体に細かい貫入が見られる。423は絵唐津の折縁碗である。黄茶褐色の粗いが堅緻な胎土に光沢のある赤灰褐色の釉がかかる。内面には鉄による折枝状の文様がサラサラと描かれている。体部下半を露胎で残し、露胎部は赤褐色に発色している。目跡は明確に観察されないが、胎土目の時期のもと思われる。424は備前焼の盤である。口縁端部を上方に巻き上げた器形のものである。内外口縁部付近にのみヨコナデを施し、内面は同心円状の刷毛、外面はナデにより調整されている。胎土は中心部が赤色、外面が灰黒色のサンドイッチ状を呈し、砂粒を含み粗いが非常に堅緻である。器表は漆黒色を呈し、一見漆を塗ったと見誤るようにテラテラした艶がある。425は摺鉢である。口縁部はわづかに下方に引き出されるが、口縁端面は平らにカットされている。胎土は暗赤褐色で砂粒を多く含むが堅緻である。内外面はヨコナデにより調整されている。口縁端面にはゴマ状の自然釉が見られる。櫛目は８状１単位と思われる。426も摺鉢である。口縁部端面に段を付け、口縁部外面には２条の太い沈線が巡っている。胎土は暗赤褐色を呈し精良で堅く、器表はテラテラと艶がある。口縁部内外面にはヨコナデを施し、内面体部をナデ、外面体部を横方向のヘラケズリにより調整している。内面の櫛目は11条１単位で細く深い。全体に櫛目を巡らした後、口縁部に沿ってヨコナデを全周させ、櫛目の上端を揃えている。427は壺である。胎土は紫色に近い暗赤色を呈す。砂粒などをほとんど含まず精良である。外面体部には回転ヘラケズリ痕を残して軽くヨコナデされているが、下半の２段にはヨコナデが及んでいない。また、最下段のヘラケズリは轆轤から切り離したのち手持ちにより施したもの、２㎝～３㎝単位で全周している。この手持ちによるヘラケズリには、底部と体部の境を少し外につまみ出したような器形にする意識が働いているようである。なお、外底にはヘラ先による松葉状の文様が刻まれている。

c　土師皿（428～437）

428～435は底径が小さく、体部が直線的に開き、外底に簀子痕の見られる皿である。口径のバリエーションは12cm前後のもの（428･429）、10cm前後のもの（430～433）、８cmのもの（434）などがあり、器高の低いもの（435）も見られる。436は外底に回転糸切痕を持つもののうち口縁部を外方に引き上げた整地４層出土241～247のタイプの小皿である。437は口縁部をヨコナデによりつまみ出すように外反させた整地７層出土340～344などのタイプに属する亜白色系の小皿である。胎土はほとんど砂粒を含まず黄白色を呈す。内底は不定方向にナデ、外底は指ナデにより丁寧に指頭痕を消している。

d　土師質・瓦質土器（438～448）

羽釜（438･439）、鍋（440～441）、こね鉢（442～447）、風炉（448）などがある。438は口縁部を「く」の字状に外反させ、口縁端面に１条の凹線を巡らせている。鍔は断面三角形の形骸化した小さいものである。内面口縁部から外面鍔の下端までヨコナデが見られ、内面体部にはヘラケズリが施されている。胎土は多くの砂粒を含んで粗く、暗赤褐色を呈す。439も438同様に「く」の字状に口縁部を外反させたものであるが、端部を内側につまみ上げており端面の凹線は見られない。胎土には多くの砂粒を含みやや軟質で灰黄褐色を呈す。440・441は表土出土62・63と同様の鉄鍋の器形をそのまま模したような器形である440は口縁端面を水平に切り落しているが、441は少し外につまみ出すようにしている。内外面口縁部をヨコナデし、内面体部は丁寧にナデている。外面体部は横方向のヘラケズリで調整されている。胎土は細かい砂粒を多く含むが堅緻で黄茶褐色を、器表は黒灰色を呈す。442～447のこね鉢には、胎土・器表ともに瓦質のもの（447）、器表が黒く焼成されていても胎土は暗褐色を呈するもの（443・444）、土師質のもの（442・445・446）などがある。これらのうち、炭化物あるいは煤の付着するものは442～444・446で、さらに加えて443・444にはこね鉢としての使用による内面体部の著しい摩耗も見られる。おそらくこれはこね鉢として使用し、内容物をそのまま（あるいは水を加えて）加熱調理するという用途、すなわち、こね鉢としての機能と鍋としての機能を併せ持った調理具として使用されていたことを示している。448は土師質の風炉である。外面口縁部には菊花の印花文が巡り、体部には雲形の透かしが見られる。風化して器表は荒れているが、胎土は微細な砂粒を含み堅緻で赤橙褐色を呈す。また、胎土には少量の雲母粒を含んでいる。

e　石製品（449～453）、金属製品（454・455）

449・450は共に非常に丁寧な作りの滑石製鍋である。447は外面口縁部を２段に分けて縦方向にナイフで削り、断面台形の鍔を丁寧に削り出し、わずかにナイフの痕跡を残しながらナイフの腹で磨いている。口縁端面は一度丸ノミにより粗く水平にしたうえで磨く。内面体部もナイフを斜め上方に引き上げるようにやはり腹を使って磨いたものと思われる。450はさらに丁寧に作られ、ナイフの痕跡等をまったく残していない。石材は共に均質な結晶を持つ良材で、449はやや青みがかり、450は赤みがさしている。451は長方形の細長い形の硯である。石材は粘板岩系のものであろうか、部分的に板状に剝離している。452はやや幅広の硯である。石材は451よりやや堅そうであるが、これもやはり粘板岩系のものと思われる。453は長方形の薄い黄灰色の石製品で、用途は不明である。長方形の３辺には鋸などで切った痕跡がある。上下面はきれいに磨かれ、オイルストーンのように平滑である。あるいは特殊な砥石であろうか。454は煙管の雁首で455は吸口である。おそらくセットになるものと思われる。銅製で鍍金などは見られ

ない。454の内部には竹と思われる繊維質のものが残存している。

(2)　第１層～第４層

調査区西側に堆積した第１～３層は出土遺物の傾向がほとんど同じで、一部の例外を除くと18世紀ごろから19世紀前半ごろの遺物が満遍無く見られる。調査区東側に整地堆積した第４層（東第１層）の遺物は下限を19世紀初頭～前半とするが、古い時期の遺物も大量に含んでいる。

①　第１層（図16、図版24、456～463）

456～460は伊万里磁器である。456は筒形の器形の青磁碗である。高台は幅の広い蛇ノ目高台である。外面体部下半を露胎で残すが、火中して釉は泡立つ。内面体部中位には鉄で描かれた黒灰色の圏線が１条巡っている。457は染付碗である。外面体部には太い濃筆により草花文が描かれている。胎土は精良であるが灰みが強く、釉は灰青色に発色している。呉須の発色は不良で黒灰色を呈す。458は染付のソバ猪口である。蛇ノ目凹型高台で、蛇ノ目部の釉はフキ取っている。外面体部には算木文、体部下半には波涛文が描かれている。胎土、焼成、呉須の発色は良好である。459は染付の瓶子と思われる。胎土は灰白色できめ細かくテリがある。高台外面には呉須による２条の圏線が巡っている。畳付は端部を尖らすように丁寧にケズリ取られている。内底は無釉である。460は染付の型押しの菊皿である。胎土は黒斑が多く粗い。釉は粘度の高い白釉で、一部に虫喰い状態をおこしている。内底には染付による流水草花文が見られる。畳付の釉は雑にフキ取られ、砂が付着している。461は美濃瀬戸系もしくは関西系と思われる型押しの染付皿である。内底には型によって飛馬、鳥、波涛、岩陰などの文様が陰刻され、ここに濃筆で雑に呉須を流している。胎土、焼成、釉は極めて精良で、純白に近く焼き上がっている。全釉で畳付の釉はフキ取っている。あるいは明治以降のものの混入であろうか。462は備前焼の摺鉢である。口縁端面に１条の沈線を巡らせ、外面口縁部にも２条の沈線が見られる。内外口縁部付近をヨコナデし、内面体部上半及び外面体部にはナデ調整が見られる。外底にも軽いナデが回っている。胎土は砂粒を多く含み、粗いが堅緻で赤褐色を呈す。器表は内底及び外底部が重ね焼きのため胎土と同じ赤褐色で、その他は暗赤褐色に焼成されている。内面体部には12条１単位の細く深い櫛目を、上端部で各単位５㎜～６㎜間隔で、中心部に向かって左回りに刻んでいる。なお、内底中心部には櫛目は刻まれていない。463は丹波焼の褐釉の徳利である。胎土は砂粒をほとんど含まず堅緻で赤褐色を呈す。器表の褐釉は焦げ茶色で光沢がある。露胎で残された外底には輪陶沈の痕跡が残る。外面体部中央にはやや細身の丸ノミで「高野山」の文字を刻み、裏面には同様に「㊅」の陰刻が見られる。464は朱泥の急須の蓋である。外面体部にはカンナ痕状に廉状文が巡っている。465は煙管の雁首である。銅製であるが鍍金などは見られない。明らかに竹と思われる胴部が一部残存している。

②　第２層（図16・17、図版24・25、466～487）

466は中国製の染付である。腰が張り口縁部の外反するものであるが、15世紀代のものではなく体部外面にコンニャク判と筆描きを併用した草花文を描いたものである。内面の文様は底部の外縁近くと体部の下端に圏線が見られるのみで、この２本の圏線間の釉を輪状にケズリ取っている。火中して一部の器表は泡立っている。467～483は伊万里の染付である。467～469はほとんど同類のものであるが、文様や施文方法に若干の差違がある。467・468は外面体部に草花文の描かれた碗である。釉はやや灰みを帯びるが、この種のものとしては呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉をフキ取っているが砂の付着が

認められる。なお、共に外底には便化した大明年造銘が見られる。469は外面体部に３段の二重網目文が巡っている。器表は淡灰茶色を呈し、呉須は黒茶色に発色している。470は体部外面に紅葉の文様をコンニャク判により施文したもので、466～469とよく似る器形の碗である。全体に薄作りでシャープな印象があり、胎土及び呉須の発色もよい。471は小形の蓋物の身である。外面体部には細い筆で緻密な草花文が描かれている。非常に薄い作りで、胎土・呉須の発色は良好である。全釉で口縁端部と口縁部内側、畳付の釉を丁寧にフキ取っている。472～474は口縁端部を外側に折り返した玉縁状の口縁を持つ皿である。高台は蛇ノ目凹型高台である。外面体部と内面にペンシルドローイングにより斜格子・花・宝珠などの文様が描かれている。胎土は若干の灰みがかかるが精良で、呉須も良好に発色している。全釉で高台蛇ノ目部の釉を丁寧にフキ取っている。473の蛇ノ目部には直径約５㎝の輪状の陶枕の痕跡が見られる。このペンシルドローイングは17世紀初頭ごろの中国製染付の技法を模倣したもので、日本では19世紀ごろに多用された手法である。475は徳利形の瓶である。火中して釉が海綿状に泡立ち、頸部の唐草文らしい文様がかすかに窺われるのみである。胎土も赤灰色に焼け陶質化している。あるいは中国製かもしれない。476・477は稜花皿である。高台は蛇ノ目凹型高台で蛇ノ目の幅が広い。内底には岩石樹木文を描き、稜花に沿って４分割した内面体部にはそれぞれ異なった種類の花文が細線と濃筆を巧みに使って描かれている。外面体部は口縁部からの垂線により８分割され、それぞれに５点の丸で表現した小さい花文が見られる。胎土は純白で精良、呉須の発色も良好である。釉はわずかに青みを帯びる。全釉で高台蛇ノ目部の釉を丁寧にフキ取っている。478・479は第１層出土458と同じタイプのソバ猪口である。458は内底中央部と口縁部を欠いていたが、内底にはコンニャク判による五弁花文、内面口縁部には四方襷文が巡っている。480は筒形の香炉である。器肉の厚いがっしりした作りで、高台は蛇ノ目凹型高台である。外面体部には下部に波涛文が描かれ、上部に獅子・宝珠・雲堂などの文様が描かれ、内面口縁部にも波濤文帯が巡っている。胎土は精良で呉須の発色は濃く鮮やかである。内面体部下半を露胎で残し、高台蛇ノ目部の釉はケズリ取っている。火中している。481は鉢である。外上方に直線的に広がる体部の器肉は薄く、非常にシャープな作りである。内面口縁部に染付の細線で稜花を描き、この稜花に沿って２本の垂線で内面体部を８分割し、それぞれに異なった花文、あるいは４種類２単位の花文が細い筆と濃筆の併用で軽妙に描かれている。胎土には若干の微細な砂粒を含み、釉はわずかに青みを帯びる。呉須の発色は良好である。482は型作りにより体部から口縁部を緩やかなカーブで面取り（おそらく12面）した鉢である。口縁部は外反し、高台は高く径が大きい器形である。内底には岩石樹木文が見られ、内面体部上半に小さな窓を作って草花や人物などの文様が描かれる。外面体部を８分割し、それぞれに草花・動物（獅子？）・人物（布袋？）文などが描かれている。胎土は灰白色でやや粗く、器表はカセて光沢がない。呉須の発色は良好であるが、やはりカセた感じがあり染付はやや不明瞭である。全釉で畳付の釉をフキ取っている。なお、体部下半から口縁部に向かって斜めにガラス焼き継ぎによる補修がなされている。また、底には補修の際にガラスによる文字らしきものが２字書かれているが判読できない。483は端反碗の蓋である。上面には文様化した寿文字が巡り、高台（つまみ）中央に「乾」字銘が見られる。内面中央部にも同様の寿字文が染付されている。484は備前焼と思われる竹形の花生である。轆轤により体部を引き上げたのち、外面体部を縦方向にヘラで削って整形し、ヘラの痕跡を消すように縦にナデている。また、節から下部にはヨコナデを施している。ベタ底の底部の切り離しはヘラによっている。胎土は灰

褐色で若干の鉄と思われる細粒が認められるが堅緻である。器表は橙褐色ないし灰褐色を呈す。485・486は灰釉の灯明皿である。信楽などで大量に作られたタイプで、485は内面体部に型押しの菊花が貼り付けられ、486の体部には細いヘラ先により斜格子文が刻まれている。胎土は精良で灰褐色ないし灰白色を呈し、内面と外面口縁部付近のみ灰緑色の釉がかけられている。487は産地不明の小皿である。無釉であるが胎土及び器表は墨を流したように黒い。内面は底部を丸く残して体部から口縁部に向かって3条1単位の細い沈線が、中心線を深く長く、左右を浅く短く陽光状に刻み、内底にも3条を1単位とした烈点が三星状に打たれている。

③　第3層（図17、図版25、488～497）

488は中国製の青磁である。袋物と思われるが詳しい器形は不明である。火中して釉はケロイド状になっている。489は玉縁状の口縁とやや内傾する頸部を持つ信楽もしくは丹波の壺である。火中して表面にかかった自然釉が泡立っている。胎土は長石粒を多く含み暗灰褐色を呈する。490は白磁の端反碗である。産地は不明であるが、美濃瀬戸系もしくは関西系と思われる。胎土・釉ともに精良で器表は光沢がある。高台はやや外開きで畳付の釉は丁寧にフキ取られている。491～496は伊万里磁器である。491は白磁の紅皿である。外面体部に型押しによる菊花が見られる。器形はフラットで口縁端面の平坦部が広い。やや青みを帯びた釉が口縁端面から内面にかけられ、外面は露胎である。492は端反の染付碗である。外面体部には3単位の松葉文が巡り、内底にはコンニャク判による五弁花文が見られる。内底は輪状に釉をケズリ取っている。釉は透明度が低く白濁釉に近く、呉須は灰黒色に発色している。全釉で畳付の釉は雑にフキ取り、砂が付着している。493は472～474と同一タイプのペンシルドローイングの皿である。494・495は第2層出土478・479と同一のものである。496はペンシルドローイングにより染付けされた小碗の蓋である。外面には花文が巡り、つまみ（高台）内には「角福」銘が見られる。また、内面中央に「太明成化年製」銘が染付されている。497は産地不明の陶質無釉の小皿である。内底には型押しによる笹と思われる文様が見られる。胎土は暗紫色を呈し極めて精良である。

④　第4層（図18、図版26、498～538）

a　中国製陶磁器（498～505）

少量の白磁・染付が見られるが大部分は青磁（499～504）である。498は通常の16世紀タイプといわれる白磁の端反皿である。499は蓮弁文の碗である。外面体部に片切彫りによる鎬蓮弁文が見られる。胎土は精良で灰白色、釉は透明度が高く灰緑色を呈す。500は口縁端反の碗である。胎土は灰色でやや粗いが堅緻で、釉は灰緑色を呈し光沢がある。釉の透明度は高く、外面体部のヘラケズリ痕が透けて見える。501も端反碗で、口縁部をつまみ出すように屈曲させている。胎土は鉄と思われる微細な黒斑が多く含まれる。釉は透明度が低く暗灰緑色である。502は玉縁状の口縁部を持つ碗である。胎土は砂粒を多く含み粗い。釉は濃い草緑色で透明度が高く、体部のヘラケズリによる砂粒の動きが透けて見える。503は雷文帯を持つ碗である。外面口縁部にヘラ描きによる雷文帯が巡り、体部には便化した蓮弁文、内面体部には草花文が見られるが、釉の透明度が低いため文様はあまり明瞭ではない。灰白色の精良な胎土に草緑色の釉がかかる。504は型作りの「福寿」字の瓶である。型による前後を貼り合わせたもので、内面には指押え痕を明瞭に残している。体部は扁平で、波涛文や唐草文に飾られ、表裏に「福」・「寿」字が見られ、肩部には不遊環が付せられる。有名な紀淡海峡出土の福寿字双耳瓶と細かい装飾を除くとほとんど

同形であるが、文様はより丁寧である。口縁部は六角作りと思われる。胎土には鉄と思われる黒い微粒子が含まれるがきめ細かく精良である。釉は透明度が高く濃草緑色を呈し、光沢がある。青磁には他に体部下半にラマ式蓮弁文を持つ水注などの大形品も見られる。505は染付の小坏である。おそらく表土出土408などとセットになるものと思われる。口縁部を外方に屈曲させた器形で内底に蝶文が描かれている。外面は無文である。やや青みのある釉が全体にかけられ、畳付の釉は雑にフキ取っている。

b　国産陶磁器（506～520）

506は伊万里の青磁盤である。有田産と思われる数少ないものの一つで、内面には雷文と思われる文様がヘラ描きされている。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は暗緑色に発色している。全釉で断面四角の畳付の釉を2巡してケズリ取っている。露胎部との境は茶褐色を呈し、高台内面には砂が付着している。507～510は伊万里の染付である。507は外面体部に3単位の丸文の描かれた碗である。内底の釉は輪状にフキ取り、重ね焼きの痕跡を残している。釉は灰色にくすみ、呉須も灰青色を呈す。全釉で、畳付の釉のフキ取りを行わないため畳付部全体に砂が付着している。508は網目文の碗である。外面体部に4段に分けた一重網目文が密に描かれている。外底には「渦福」銘が見られる。釉は灰みを帯び呉須も灰青色に発色している。509は蓋である。扁平なつまみが付き、曲線により4分割された外面体部には草花文と氷烈文が見られる。内面の受け部のみが露胎で、胎土には微細な鉄と思われる細粒が多く含まれている。呉須の発色は良好であるが、器表にも多くの微細な黒斑が浮いている。510はインク瓶形の小瓶、もしくは水滴である。外面の肩から体部にはやや太めの筆によりタコ唐草文が描かれている。呉須は色が濃いが不鮮明で、やや灰みを帯びている。511～514は美濃瀬戸系の陶磁器である。511は褐釉の天目茶碗である。胎土は黄褐色で粗いが堅緻である。高台はいわゆる椎茸高台で、外底中央部に「天野」の墨書銘が見られる。「天野」とは高野山町石道に沿う標高約450mの山地内の小盆地、天野の里のことと思われる。この天野には高野山の地主神丹生都比売神社が鎮座し、高野参詣には立ち寄り詣でるべきところとされ、古くから高野山と密接な繋がりがあるとされている。512は呉須手の染付碗である。外面体部に太い濃筆により草花文が描かれている。胎土は灰黄色で粗く、陶質でサクい。釉は灰釉に近い感じの透明釉で、やはり灰黄色を呈す。全釉で畳付の釉を雑にフキ取っている。513は灰釉の香炉である。筒形で外面口縁部と体部下端に凹線が巡っている。胎土は黄白色でサクく、鉄と思われる微細粒子を含んでいる。釉は灰黄色で器表に黒赤褐色の小さい斑点が浮かんでいる。内面は口縁部内側まで施釉され、体部以下は露胎である。514は長石釉のかかった皿である。削り出し高台で、内底の抉りは浅い。胎土は軟質で黄白色を呈す。釉は黄灰色で粘度が高く、外面体部下半に溜りを作っている。畳付を越えて外底周縁部まで施釉されるが、口縁部や体部の一部が虫喰い状態になっている。また、器表には茶褐色の鉄と思われる細粒が浮かび、全体に細かい貫入が走っている。515～517は灰釉の灯明皿である。第2層出土485・486などと同様に、現状では産地を比定できないが、信楽焼などに見られるものである。515・516は内面に返り状の受け部を持つもので釉は灰緑色を呈す。517は受け部を持たず、黄灰色の釉がかかっている。518は黄褐釉のかかる異形皿である。型押しで内底に龍の浮文が見られる。胎土は軟質で黄白色を呈し、釉は非常に透明度が高く光沢があり、飴色ないし黄緑色に発色している。また、外底には直径2㎜ほどの目跡が見られる。関西地方のものであろうか、産地は不明である。519は常滑焼の甕である。口縁部を上方につまみ上げ端面を平坦にしている。内面口縁部から外面頸部にかけてヨコナデで調整し、内面頸部

にはヘラケズリ痕を残したままである。胎土は暗灰色で砂粒を多く含み、器表は灰茶褐色を呈す。520は唐津の褐釉の壺である。玉縁状の口縁を持ち、ややなで肩状の器形である。胎土は灰赤褐色を呈し、精良で堅緻である。火中しているが朝鮮唐津と俗称されるたぐいの釉がかけられている。内面の頸部下端から体部は露胎で、体部に青海波の叩き目を残す。

c　瓦器（521・522）・土師皿（523～536）・石製品（537・538）

土師皿に比して瓦器は非常に少量である。521は上段整地７層出土306～313などと同一タイプのものと思われる。522は非常に浅い器形の椀である。体部の器肉は厚く、口縁部をヨコナデによりシャープに尖がらせている。胎土は須恵器に近い灰白色を呈し、堅緻である。内面体部には太く粗い暗文が数条巡り、下半に刷毛状器具による整形痕が見られる。外面体部は指頭痕を残し、暗文は施されない。523～531は底径が小さく外底に簀子痕を残すタイプの土師皿である。口径12cm前後の皿（523～527）はここではすべて簀子痕を指ナデで消しており、10cm前後の小皿（528～531）は簀子痕を残したままである。胎土・調成・焼成等は従来のものと差異はない。なお531の内面口縁部付近にはタールが付着している。532は外底に回転糸切痕を持つもののうち、口縁部がわずかに外反する上段整地４層出土241～247のタイプのものである。533・534は口径７cm前後、器高１cm前後の小皿である。小さい粘土円板から手捻りで体部を引き起こしたものである。内面は底部・体部・口縁部を区別せずに横方向にナデて指頭痕を消し、外面は体部に指頭痕を残したまま口縁部付近のみをナデている。胎土は砂粒を含まず精良で黄橙色を呈す。533は内面全体にタールが付着している。535はいわゆるヘソ皿のたぐいである。胎土は砂粒を多く含んで黄白色を呈し、ややザラついた感じである。底部の径および突出が小さく、突出部内側に爪痕をのこしている。536は口径22.8cmを測る大皿である。胎土は精良で亜白色とでもいうべき黄白色を呈し、少量の微細な雲母粒が認められる。内面体部から外面口縁部にかけてヨコナデが見られ、外面体部は型押しのまま未調整である。537・538は石製の硯である。共に粘板岩系のものである。537はやや茶色みのある暗黒褐色の石材で、石質はきめ細かい。短辺5.5cm、長辺約10cmほどの小形品である。底面はやや内側に凹み、外周部は摩耗している。538はやや大形と思われる。石材はやや青みがあり、水平に節理が走る。裏面は欠損している。石質は537に比してやや粗い。

(3)　第５・６層

第５層は炭層で、調査時点で大永元年（1521）の火災によるものとして理解されており、遺物の年代観からも1521年を下限として矛盾は生じない。しかし、この層の下には遺構は検出されされていない。遺構面は第６層除去後に検出されている。この第６層には古い時期のものが多いが、混入と考えた方が適当と思える程度に16世紀前半の遺物が存在している。

①　第５層（図19、図版27、539～558）

a　中国製磁器（539～550）

白磁（539～544）、青磁（546～548）、染付（549・550）などがある。539は坏である。上段表土出土393などと同じように高台を割高台にし、外面体部下半を露胎で残すものであるが、このたぐいには393などの陶質の胎土をもつものと磁質の胎土のものがあり、539は後者である。火中して釉は泡立っているが、393などと比して青みが強い。540～544は16世紀タイプといわれる端反の皿の古手の一群である。釉は光沢があり、畳付の釉のフキ取りも丁寧である。540の外底には染付けによる「角福」銘が見られる。545は

小碗である。火中して釉は海綿状になり、胎土も変質している。546・547は口縁部を「く」の字状に外反させる器形の皿である。共に火中し、器表の釉は泡立っている。胎土は灰みが強く、鉄と思われる微細粒子が含まれている。全釉ののち畳付の釉をケズリ取っている。548も火中している。口縁部の下端を外に水平に引き出し、これを約2㎝間隔で指で上方に折り曲げることにより波状にしている。胎土は灰白色を呈し、微細な鉄の粒子を含むが精良できめ細かい。549・550は内底に羯磨文を持つ端反の皿で、同種のものが少なくとも6個体分出土している。外面体部の牡丹唐草文には差異はないが、羯磨文には線描きのみのもの（549）と線描きと濃筆を併用するもの（550）があり、後者はむしろ十字花文と呼ぶ方が適当である。畳付の釉のフキ取りは雑で、砂の付着するものが多い。

b　国産陶器（551～555）

551は瀬戸の灰釉おろし皿である。これまで見てきたものに比して体部の立ち上がりの強い器形で、口縁端部の処理も異なっている。火中して口縁部から内面体部にかけられた釉はほとんどとんでいる。内底のおろし目は深く鋭い。胎土は2次焼成により須恵器のように変質している。552～554は備前焼である。552は玉縁状の口縁を持つ壺である。胎土は砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈している。口縁端部や肩部にゴマ状の自然釉が見られる。553は火中して器表がカセているが、おそらく備前焼の大形の壺と思われるものである。554は水屋甕である。無頸化する前の器形で、体部に断面三角形の貼り付けの凸帯が巡り、縄目を表現した双耳が付けられるものと思われる。胎土は少量の砂粒を含むが堅緻で、赤褐色を呈している。口縁上面および肩部に自然釉がかかっている。555は火中している。胎土に多くの長石粒を含み粗く、黄灰褐色を呈している。信楽焼の壷と思われる。

c　土師質・瓦質土器（556～558）

556は土師質の蓋である。粘土円板に口縁部を雑に貼り付けたものである。経筒などの蓋であろうか。胎土は比較的多くの砂粒を含み黄橙褐色を呈す。557は瓦質のこね鉢である。口縁部はわずかに下方に拡張するが、端面は平坦である。内外面口縁部付近はヨコナデされ、外面体部には横方向のヘラケズリが施されている。胎土は灰茶褐色でやや粗く、器表は黒灰色を呈している。558は土師質のこね鉢である。口縁部はやや大きく下方に拡張し、端面は丸みを帯びている。内面体部を細かい刷毛により調整し、口縁部内外面にはヨコナデを施し、後に内面に1単位が7㎝近い幅広の櫛により櫛目が付けられる。外面体部は斜め方向のヘラケズリにより調整されている。胎土は砂粒が少なく黄褐色を呈し、器表には外面体部下半に黒斑が認められるが、ほかは胎土と同じ黄褐色に焼成されている。

②　第6層（図19、図版27、559～576）

この層からの出土遺物は第5層と異なり中国製陶磁器が非常に少なく、539と同様の割高台の白磁坏が1点見られるのみである。

a　国産陶器（559～563）・須恵質土器（563）

559は瀬戸の灰釉の盤である。体部が直線的に広がり、口縁端部を内外に引き出し、端面に凹線を巡らせている。胎土は灰白色で、鉄の微細粒子を含み堅緻である。釉は透明度が高く、艶のある黄緑色である。口縁端部には一部虫喰い状態が残る。露胎部は茶褐色に発色している。外面体部下半は露胎と思われる。560は美濃の灰釉皿で、口縁部の外反する器形と思われる。内底中央にはスタンプによる菊花文の陰刻がある。胎土はややサクい感じで黄白色を呈し、釉はガラス質で透明度が高く黄緑色である。全釉

で外底には輪陶枕痕が認められる。561・562は備前焼の甕である。共に口縁部を外に折り返した玉縁が扁平になっている。561の胎土は砂粒を多く含み灰赤褐色を呈している。外面口縁部から頸部にかけて自然釉がごく薄くかかり、金属様の光沢がある。562も胎土に多くの砂粒を含む。砂粒の大粒のものは直径5㎜ほどもあり、器表に突き出ている。胎土・器表共に暗赤褐色を呈している。 563は東海系の山茶椀である。外底には回転糸切痕を残したまま断面三角形の高台が貼り付けられている。胎土は砂粒を含まず精良で、濃灰青色を呈している。器表は内面が灰青色で外面はやや赤みがかる灰青褐色である。

b　土師皿（564～572）

564は外底に簀子痕を残すタイプのもので、口径7.2㎝、器高1.5㎝を測る小皿である。565は亜白色系といえる精良な胎土をもつ小皿で、上段整地7層出土 340などと同様に口縁部をつまみ上げるようにヨコナデしたものである。内底は不定方向にナデ、外底の指頭痕は比較的丁寧にナデて消している。口径8.0㎝、器高1.3㎝を測る。 566は浅い器形の小皿で、体部と口縁部の境が不明瞭である。口縁部のヨコナデにより内面体部との境が凹んでわずかに段がついている。内面体部から底部にかけては不定方向にナデ、外面体部から底部にかけてもナデで指頭痕を消している。胎土は砂粒を含み粗く、赤褐色を呈している。567・568は口径に差があるが、胎土・調整などはほとんど同一の器形の皿である。胎土は黄灰褐色の亜白色系といえるもので、砂粒を含まず精良である。内底は不定方向にナデ、内面体部から外面口縁部にヨコナデを施している。外面体部から底部にかけては型押しのまま無調整である。 569は口径13.6㎝を測る中皿である。底部から体部への立ち上がり部は強いつまみ上げにより器肉が薄くなり、口縁部で肥厚している。内面体部から外面口縁端部付近までヨコナデが施され、外面体部は指頭痕を残して無調整である。胎土は黄褐色でやや砂っぽい。570～572は口径8㎝前後、器高 1.5㎝前後の小皿である。胎土は 569などと似て砂気が多く、器形はむしろ567・568などと似る。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面口縁部下端までヨコナデを施す。外面体部および底部は指頭痕を残して無調整である。572 はヘソ皿風に底部を凹ませている。570・571は口縁部にタールが付着している。

c　土師質・瓦質土器（573～575）・金属製品（576）

573・574は土師質こね鉢である。口縁部の拡張度はよく似ているが、 573の外面体部のヘラケズリは斜め方向であるのに対し、574は横方向にヘラケズリされている。また、573は胎土に含む砂粒は小さいが、574には4㎜～5㎜大の砂粒を多く含んでいる。573は黄褐色を呈し、574は黄灰色を呈している。575は上段P―01出土376と同様のタイプの瓦質のこね鉢である。576は青銅製品である。鐸などの舌とも思われるが、片面の端部を約45度の角度で面取りをし、表裏があるようで、用途不明である。上部中央に穿たれた孔は逆向きの鍵穴形である。

（4）第7・8層

7層上面と9層上面において検出された遺構面の間層で、時期的に大差なく、遺物の組成も類似している。15世紀中葉を上限とする整地層と思われる。

①　第7層（図20、図版27、577～586）

この層の出土遺物はあまり多くはないが、少量の中国製磁器（577）、須恵質土器（578）、土師皿（579～582）、土師質・瓦質土器（583～586）などが見られる。また、ごく少量の瓦器片が出土し、土師皿には回転糸切痕を持つものは出土していない。577は白磁の坏である。輪高台で内底には重ね焼きの痕

跡は認められない。通例は割高台をもち、内底に直接重ね焼きの痕跡の見られるタイプである。外面体部下半を露胎で残す。胎土は磁質で精良で、釉は透明度が高く青白色を呈し光沢がある。全体に粗い貫入が認められる。578は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は三角形に近い形に下方に拡張している。胎土は精良であるが微細な鉄の粒子を含み暗灰色を呈している。口縁部上端から下端にかけては漆黒色に発色し、重ね焼きの痕跡を残している。579は亜白色系の精良な胎土を持つもので、第6層出土565と同一タイプの小皿である。口縁部内外にタールが付着している。580・581も亜白色系の胎土を持つが、579に比して砂気の多いザラザラした感じのものである。581のヘソ皿は外底突出部に爪痕が見られる。582は薄くのばした円形の粘土板を、肘あるいは膝頭などを使って浅い皿形にしたものである。口縁端部付近のみをヨコナデし、内面は不定方向にナデ、外面は指頭痕を軽くナデ消している。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、灰白色を呈している。口縁端部にタールが付着している。583は表土出土440などと同種の瓦質の鍋である。器形の細かい特徴は上段表土出土62と近似する。こね鉢（583～586）のうち583は瓦質で、他は土師質である。口縁の拡張の程度は586が最も高い。584・585は内面体部に刷毛による調整が見られるが、586はナデによっている。外面体部のヘラケズリは584・585が横方向で、586は縦方向である。胎土はいずれも砂粒を多く含む。

②　第8層（図20、図版27、587～597）

中国製磁器（587・588）、国産陶器（587～590）、須恵質土器（591～592）、土師皿（593～595）、瓦質土器（596）、石製品（597）などが出土している。また、中国製磁器には外面体部に丸ノミによる粗い蓮弁文を持つものもあり、須恵質土器には東播系の甕などの小片も出土している。瓦器および回転糸切痕を持つ土師皿は出土しない。なお、第7・8層を押しなべての整地の上限時期は前述したように15世紀中葉であるが、第8層を単独で考えれば上限は15世紀初頭から前半に上がる。

587は白磁の皿である。おそらく横に開いた底部が、体部で上方に折れ曲がる器形を持つと思われる。第7層出土577などのタイプの白磁に先行するものと考えられ、高台ケズリのカンナの角度などに古い様相が見られる。胎土は磁質で乳白色を呈している。透明度が高く艶のある釉が体部下半を露胎で残してかけられるが、釉は部分的に高台外面にまわっている。588は玉縁状の口縁を持つ端反の青磁碗である。外面体部下半には幅広の丸ノミを使った蓮弁文が見られる。胎土はやや粗く黄灰色を呈し、釉は黄灰緑色を呈している。全体に細かい貫入が認められる。589・590は常滑焼の甕である。589は「N」字状に折り返した口縁部を持ち、折り返し部と頸部は密着している。胎土は砂粒を多く含むが堅緻で灰褐色を呈し、器表は灰赤褐色に発色している。590は口縁部の折り返し幅が広く、頸部との間に空隔がある。胎土は粗く、1㎜～2㎜大の砂粒を非常に多く含み、暗灰色を呈している。器表は外面が暗灰褐色で、内面は暗灰茶褐色である。591は須恵質の甕である。口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を上方につまみ上げている。内面口縁部から外面頸部にかけて丁寧なヨコナデが施され、内面頸部もナデられている。胎土は砂粒などをあまり含まず、精良で暗灰色を呈している。なお、漆による補修痕が見られる。592は東海系の山茶椀である。高台は断面三角形で、比較的丁寧に貼り付けられている。内底には重ね焼きの痕跡が残る。火中していると思われ、内面の自然釉がわずかに泡立っている。593は土師皿で、外底に簀子痕を持つものである。口径12.0㎝、器高2.0㎝の中皿であるが、簀子痕をナデ消していない。594は口縁部を急角度で上方に引き上げた小皿で、口径9.2㎝、器高1.2㎝を測る。外底には円板状の底部に体部を

貼り付けたような痕跡が見られる。内底は不定方向にナデ、内外口縁部にヨコナデを施す。外底は指ナデであろうか。胎土は灰黄褐色で非常に軟質である。595は上段整地7層出土344などと同タイプの小皿である。口縁部をつまみ上げるようにヨコナデし、わずかに外反させる。内底は不定方向にナデ、外底は指ナデにより指頭痕を消している。胎土は黄白色を呈し精良で、焼成も良好である。596は瓦質の風炉である。肩の張った器形で、外面口縁部には割菱と唐草のスタンプ文が巡り、体部下端に凸帯が貼り付けられ、三足の獣足が付く。内面の体部上半は粗くナデられ、内面口縁部はヘラケズリの後ヨコナデを雑に施している。口縁部の端面と外面をヨコナデののち、端面をヘラ磨きする。外面の肩部は横方向にヘラで磨き、外面体部下端に貼り付けられた凸帯から外底の外周部にヨコナデを施し、外底を無調整で残す。獣足の付された周辺部のみは凸帯下も横方向にヘラ磨きされるようである。砂粒をあまり含まず灰白色の精良な胎土である。ヘラ磨きも丁寧で、器表は部分的に金属光沢を発している。なお、この個体は破片の半分以上が次の第9層からの出土である。597は細長い棒状の砥石である。底面は自然石を割ったままであるが、上端（実測図右）と左右の面は鋸で切った痕跡が見られる。上面は非常に滑らかで仕上砥と思われる。石材は不明であるが、黄灰色できめ細かい。

(5)　第9層（図21、図版28、598～628）

第8層とはまったく異なる出土遺物の組成で、大部分の遺物が土師皿である。また、次の第10層とはよく似た組成で、時期差もほとんどなさそうである。しかし、第9層と第10層の間に遺構面が検出されているため、とりあえずそれぞれを独立した層として取り扱うこととする。また、第8層とは同一個体の遺物が出土しており、第8層と第9層との間に遺構面が存在し遺物の組成が異なるにもかかわらず、両者には時期差はほとんど認められない。15世紀初頭から前半ごろを下限とする遺物群と思われる。

598は中国製の白磁の皿である。平底でヘラ切り状の痕跡を残し、内底と体部の境に沈線が巡っている。胎土はやや灰みを帯びるが精良で、釉は透明度が高く光沢がある。外底を露胎で残している。599は備前焼の摺鉢である。口縁部は下方にわずかに拡張するが端面は水平で、体部と直角に近い角度で切られている。胎土は砂粒を多く含み粗いが、堅緻で暗赤褐色を呈し、器表は赤茶褐色に発色している。土師皿（600～628）は簀子痕を残すものが最も多く、回転糸切痕を持つものは出土していない。600～618は外底に簀子痕を持つタイプである。口径10cm～12cmの中皿（600～609）と口径6cm～8cmの小皿（610～618）がある。前者は605を除くすべてが指ナデにより簀子痕を消しており、通常簀子痕を残したままの小皿においてもここでは逆に614に例外的に残るにすぎない。胎土・焼成・外面体部を除く調整は従来のものと変わりない。619・620は第8層出土594と同様のタイプである（594の実測図は底部と体部との境に稜がつくが、これは体部との接合痕の残る部分を実測したためである）。620には594と同様に底部と体部の境に接合痕が見られる。体部下半から外底は丁寧な指ナデにより指頭痕や接合痕を消している。胎土は灰黄褐色で、619は594同様に軟質である。620はやや砂けが多く、特に軟質ということはない。なお、620は内外面口縁部にタールが付着している。621は口縁部をつまみ上げるようにヨコナデし、わずかに外反気味にしたものである。上段整地7層出土340と同様のタイプで、胎土に砂粒をほとんど含まない亜白色系の小皿である。内底は不定方向にナデ、外底の指頭痕は指ナデで消している。622は第4層出土533と同様に、粘土円板から手捻りで体部を軽く引き起こしたと思われる小皿である。623は口径10.4cm、器高3.2cmを測る深い器形の中皿である。内底から内面体部にかけて不定方向にナデ、内外面口

縁部に強いヨコナデを施し、口縁端部をシャープに尖らせている。外面体部は無調整で、外底は雑な指ナデで指頭痕を消している。胎土はあまり砂粒を含まず精良で、黄灰色を呈している。624は底部を欠くが、体部がやや内弯し内面体部を２段に分けてヨコナデするところなど607などと類似しており、外底に簀子痕を残すタイプに属する可能性がある。胎土はきめ細かく精良で、灰赤褐色を呈している。625は第７層出土580などと同様の白色系の大皿であるが、胎土は完全に褐色化している。型作りによるもので、体部が広い角度で開き、内面口縁端部付近に浅い凹線が巡っている。胎土は砂粒を含み粗く、赤褐色である。内面口縁部から体部にかけてタール状のものが付着している。626は褐色系の中皿で口径12cmを測る。底部から体部へ強く屈曲して立ち上がり、体部中位でもう一度外方に屈曲させて体部を開く。胎土は砂けが多く灰褐色を呈している。627は第７層出土581などと同様のヘソ皿である。突出部が小さく鋭い。胎土は砂けが多く黄灰色を呈している。628は第７層出土582とよく似た胎土と器形を持つ器高の低い皿である。薄い粘土円板から口縁部を引き出しただけの皿で、内面の調整には刷毛状の器具を使用しているようである。

(6)　第10層（図21、図版28、629～656）

第10層は第９層と遺物組成がきわめて類似しているが、ここでは外底に回転糸切痕を持つ土師皿がごく少量出土している。両者の間に遺構面が検出されているが、時期的にもほとんど差異を認めることができず、第９層同様に出土遺物は15世紀初頭～前半を下限とせざるをえない。

629・630は常滑焼のこね鉢である。断面三角形の高い高台が貼り付けられ、体部は直線的に外上方に開く。内面体部から外面体部中位まではヨコナデで調整され、体部下半は回転ヘラケズリ痕を残したままである。内外面口縁部には、特に丁寧にヨコナデが施されている。内底は使用による摩耗のため、調整は不明である。外底は高台の貼り付けに伴って外周部のみヨコナデされるが、他は無調整である。胎土は比較的多くの砂粒を含むが堅緻で、灰白色を呈している。器表は暗灰色ないし灰茶褐色に発色し、口縁部など部分的に灰緑色の自然釉がかかっている。631～656は土師皿で、第９層同様に簀子痕を持つタイプ（631～648）が大多数を占める。なお、ここでも大部分が簀子痕を消しており、640・643などの小皿に例外的に見られるにすぎない。649・650は外底に回転糸切痕を持つ小皿で、口縁部をわずかに外方に引き出す上段整地４層出土241～247などのタイプである。この層での回転糸切痕を持つ土師皿は、２点のみの出土である。651は底部の器肉が非常に厚く、厚い体部を強いヨコナデで口縁に向かって鋭く尖らせた器形の小皿である。体部の強いヨコナデにより、内底と体部の境に段が付いている。外底は丁寧に指ナデし、外面体部との境の稜を消している。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、黄白褐色を呈している。口径8.4cm、器形2.0cmを測る。652は第９層出土620と同じタイプの小皿で、同様の胎土・調整が見られる。653は外面体部に２段のヨコナデの見られる皿である。口縁部は特に強いヨコナデによりシャープに尖る。口縁の残存が少なく、口径は正確ではないが、12cm前後の中皿と思われる。胎土は微細な砂粒を含み堅く、灰茶褐色を呈している。内面体部には厚くタールが付着している。654は器形・調整が653ときわめて類似している。胎土は堅緻で砂けが多いが、654は白土器というべき乳白色を呈している。655は白色系の皿で、口縁の残存率が低く口径は不正確であるが、15cm前後のものと思われる。体部は直線的に広がるが、底部との境はさほど明確ではない。胎土は砂をあまり含まず精良で、明黄白色を呈している。656は根来寺などで特徴的に出土する白土器である。よく水簸された精良な胎土は軽く、

堅緻で、乳白色を呈す。型押しにより、胎土は非常に薄く作られている。外面体部上半は段を持って外方に広がり、口縁部付近では内側に丸めるように押しナデされる。内底は不定方向にナデられ、体部の強いヨコナデにより、内面体部と内底の境に明瞭な段ができる。外底は丁寧に指ナデされている。

(7) 第11層（図22、図版28、657～667）

この層は地山直上層である。地山面で遺構は検出されていないようであるが、第９層や第10層などとは遺物の組成も相当異なり、時期的に隔絶があるようである。すなわち、瓦器が出土すること、外底に回転糸切痕を持つ土師皿が増え、簀子痕の残るタイプが見られないことなどで、その差異は上段の整地３層～５層と整地６層～８層の差異に対応していると思われる。出土遺物の大半は瓦器、土師器などである。その他に小片ばかりではあるが、常滑焼の甕口縁部や中国製の劃花文青磁碗なども出土している。この層から出土する遺物の下限時期は13世紀後半ごろと考えられる。

657は瓦器椀である。上段整地７層出土303・304などとよく似た器形で、口縁部のヨコナデにより端部をわずかに肥厚させるものである。内面体部の暗文は太く粗い。内底には雑に平行暗文が施されている。外面体部に暗文は見られない。高台は断面三角形で端部を面取りしている。胎土は微細な砂粒を多く含み、暗灰白色を呈している。器面の燻しは不十分で、灰白色ないし暗灰白色に焼成されている。658は瓦器の小椀である。強いヨコナデにより口縁部をわずかに外反させている。断面三角形でやや外開きの高台が丁寧に貼り付けられている。内面体部には比較的丁寧に暗文が施されているが、内面口縁部付近と外面には暗文は見られない。胎土は灰白色で砂粒をほとんど含まない。なお、器面の燻しは内底と口縁部の一部に見られるのみで、他は灰黄白色を呈している。659～662は通例の回転糸切痕を外底に残す土師皿である。小皿には、口縁部を内弯気味にする上段整地４層出土233～240のタイプ（660・661）と、外反気味の上段整地４層出土241・247のタイプ（662）が見られる。663は底部の器肉の厚さを除くと第10層出土651に類似する土師皿である。体部の強いヨコナデにより口縁部をシャープに引き上げわずかに外反させ、内底と体部の境にはヨコナデによる段が付いている。外底の指ナデも丁寧で、体部下半以下に施されている。胎土は精良で黄褐色を呈している。口径7.6cm、器高1.9cmを測る。664は内面口縁部のナデ残しと外面口縁部の押しナデにより、縁をつまみ上げるようにした小皿である。外面のヨコナデは口縁端部近くのみに施され、体部から外底にかけて指ナデで調整されている。浅い器形で口径9.0cm、器高1.1cmを測る。微細な砂粒を含むが精良な胎土で、黄橙色を呈している。665は白色系の土師中皿で654と同一の胎土・調整が見られる。口径10.4cm、器高2.4cmを測る。666は土師器の盤である。口縁部は強いヨコナデにより内面体部との境を凹ませ、内弯気味に引き上げられている。口縁端面には浅い凹線が巡っている。内底は不定方向にナデ、外底は雑な指ナデで調整されている。胎土は砂粒を多く含み粗く、灰黄色を呈している。667は不明瓦質土器である。小片であるため不正確であるが、口径は20cmを超えるものと思われる。口縁部を外方に屈曲させた器形である。内面体部は細かい刷毛により調整し、口縁部をヨコナデし、口縁外面端部の押しナデにより内面端部を尖らせている。外面体部は横方向のヘラケズリである。胎土は砂粒を含むが堅く、黄灰色である。器表は内面口縁部から外面にかけて灰黒色に燻され、内面体部は灰黄色を呈している。

4　下段遺構出土の遺物

(1)　第１遺構面（図22～25、図版29・30、668～714）

第５層を切り込み面とする遺構で、第５層の下限と考えられる1521年を上限とする。しかし、この16世紀前半の上限時期に近い遺構はほとんどなく、大部分が近世の遺物である。あえてこの遺構面の下限時期を求めると、第４層の上限19世紀初頭から前半ということになる。

ＳＫ－０１（668～694）

668は伊万里の白磁碗である。口縁部をわずかに外反させるようにシャープに引き上げている。胎土は鉄と思われる微細粒子を多く含み、灰白色を呈している。釉は透明度が低く灰みが強い。火中して器表に小さい気泡が浮いている。669は蛇ノ目凹型高台を持つ伊万里の青磁盤である。内底には太いヘラによる片切彫りの草花文が描かれている。胎土は灰白色できめ細かく精良である。釉は草緑色に発色している。全釉で内底の釉を輪状にケズリ取り、露胎部は黄橙色を呈している。畳付と内底は使用により摩耗している。なお、体部の割れ口には漆継ぎの痕跡が見られる。670は第３層出土492と同様の伊万里染付碗である。内底には五弁花のコンニャク判が見られ、周囲の釉を輪状にフキ取り、重ね焼きの痕跡を残している。全体に淡い灰みを帯びるが、492と比して呉須の発色は良好である。671は伊万里の三足香炉である。非常に精緻な作りで、有田産と限定できる数少ないものの一つである。口縁部を内側に水平に折り返した筒形の器形で、幅広の蛇ノ目状の高台が付き、精巧な獣面（あるいは鬼面）を模した三足が付される。外面体部には余白を十分に取った軽妙なタッチの梅花文が描かれ、口縁端面は濃く描かれた３単位の梅花唐草文が巡り、その上に端面全体に薄く発色する呉須を流している。釉は内面体部上半から高台外面付近までと外底にかけられ、高台蛇ノ目部と獣足下面を露胎にしている。また、やはり露胎の内面体部には轆轤による引き上げ痕が残る。外面体部全体に縦方向を主体とする細い貫入が走っている。火中して一部の釉は泡立っている。672はおそらく関西系のものと思われるが、産地不詳の青磁浅鉢である。火中して全体に細かい気泡が浮いているが、内底から体部には上絵付けによると思われる笹状の文様が見られる。上絵付けは２次焼成により緑から紫赤に変色している。高台周辺部を露胎で残している。673は美濃瀬戸系の褐釉天目茶碗である。胎土は微細な砂粒を含んでやや粗く、暗灰褐色を呈している。外面体部下半の露胎部への化粧がけは行われていない。674は美濃御深井の水甕である。口縁付近で体部をやや外反させ、口縁を水平に折り返している。高台は断面四角で低い。口縁端面は中央部がやや凹んでいる。外面体部にはヘラによる大きい波状の文様が彫られ、刺突文で装飾されている。釉は灰釉と褐釉をかけ分けている。内面全体に施釉し、外面は腰の屈曲部以下を露胎で残している。胎土は若干の砂粒を含むが精良で堅緻であり、灰黄白色を呈している。内面には目跡らしきものが見られる。675は常滑焼と思われる四耳壺である。口縁は断面の角張った玉縁で、頸部は外反している。肩は比較的よく張り、肩部上面に浅く細い沈線が２条巡っている。すべての耳を欠失しているが、扁平な横耳と思われる。胎土は多くの砂粒を含み、暗灰褐色で堅緻である。外面器表は暗赤褐色を呈し、肩部上面及び口縁部には自然釉がかかっている。676は備前焼の小壺で坩に近い器形である。外面胴部にヘラによる沈線が巡っている。内面体部以下は轆轤による引き上げ痕を残したままで、内面肩部付近から外面肩部に丁寧なヨコナデが施され、外面体部はナデによりヘラケズリ痕を消している。胎土は砂粒を含むが堅緻で暗灰色を呈し、外面器表は暗灰褐色を呈している。口縁部と肩部には自然釉がかかる。砂粒を含まず

精良で暗灰色を呈し、器表は暗赤褐色に発色している。678は蓋の付く器形の壺で、産地は不明である。内外面に泥漿状の漆黒の釉を塗り、外面に暗緑色の灰釉を部分がけしている。口縁端面の釉はフキ取っているが、露胎に墨を塗ったような状態になっている。胎土は暗灰黒色で微細な砂粒を含み堅緻である。あるいは九州系のものであろうか。679は朱泥の角瓶である。四角い粘土板を貼り合わせて体部を構成し、やはり四方を面取りした肩部を乗せ、細い頸部を貼り付けている。一度ラッパ状に外反させた口縁部は、押しナデにより内側に折り曲げている。体部の四面はそれぞれ外周を二重の細い丸ノミによる沈線で囲み、肩部の面取り部にもそれぞれ同様の工具による雷文を刻んでいる。体部の各面の貼り付けは内面接合部に細かい刻み目をいれることによってなされ、肩部上端の平坦面への頸部の貼り付けは、内面はヘラでナデつけ、外面はヘラにより蓮座状の文様を付けるように押しつけて接合されている。680は備前焼の非常に大形の徳利である。外面体部下半には粘土紐による巻き上げ痕を残している。平底で輪陶枕の痕跡が見られる。器面は暗黄褐色ないし茶褐色に発色している。681～684は備前焼甕の口縁部である。いずれも２石～３石入の大甕で、口縁部が玉縁状のもの（681)、外面に３条の凹線が巡って扁平になったもの（682～684)、あるいはその中間の形態のものなどが出土している。685は備前焼の摺鉢である。口縁部は上下に大きく拡張し、外面には２条の凹線が巡っている。内外面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残し、内外面口縁部付近にはヨコナデが施されている。内面体部の櫛目は９条１単位で、体部上半から中心に向うものと体部を斜めに走るものが交差している。内面体部および内底は器面が摩耗し、長期間使用されたことを物語っている。胎土は若干の砂粒を含み堅緻で灰褐色を呈し、器表は茶褐色に発色している。外面口縁部直下に直接の重ね焼きの痕跡が見られる。686はやはり備前焼の摺鉢である。非常に大形で口径は60cmを越す。口縁はもはや箍と呼ぶ方がふさわしいほどに厚く肥大している。外底は外周部を幅約１cmを残して幅約1.2cm、深さ約0.5cmの凹線を巡らし、外縁を高台状にしているが、もちろん高台として機能しているわけではない。外面体部は非常に丁寧なヘラケズリで調整され、内外面口縁部付近にヨコナデが施されている。内面体部の櫛目は細く深い。７条１単位として中心に向かって左に回り、体部下半で前の単位と交差し、底部に至ってさらに前の単位と交差して内底の中心から３cm～４cmのところまで付される。中央部に残った直径６cm～７cmの空白部には三方から「米」状に櫛をあてている。櫛目は口縁直下のヨコナデにより上端が揃えられている。胎土は大粒の砂粒を含んでレンガのような赤褐色を呈し、器表は暗赤褐色に焼き上がっている。なお、内面口縁部の一部をわずかに凹ませただけの形骸化した注口が付けられている。687は丹波焼と思われる壺である。体部は中位から角度を変えて球形に膨らみ、平坦な口縁端面には３条の沈線が巡る。内面から口縁端面には灰緑色の灰釉がかかり、外面体部には泥漿状の光沢のない赤紫色の釉がかかる。また、装飾として外面口縁部付近から黒褐色の褐釉を垂れ流している。胎土は砂粒を含み、灰褐色ないし灰茶褐色を呈す。木製の蓋などが付けられるものと思われる。688も丹波焼の壺と思われるものである。口縁端面に沈線が見られないことと体部の器形を除くと、687とほとんど同様のものである。689・690は口縁部が蓋受け状に作られた小形の壺で687・688と同様のもである。梅干壷といったところであろう。691は信楽焼と思われる褐釉の四耳壺である。小さい玉縁状の口縁をもち、頸部と肩部の境に浅く幅広の凹線が巡る。耳は粘土紐の両端を扁平に押しつぶして「へ」の字状に貼り付けたものである。内面口縁部下端から体部下半まで黒褐色の釉がかけられている。露胎部は表面に胎土の鉄が浮かび、ガラス質が滲み出たようにヌメヌメとしている。なお、

火中して釉は一部とんでいる。692は信楽焼の大形の壺で、やはり火中している。玉縁状の口縁を持ち均整のとれた器形である。肩部には２条の沈線が巡る。胎土は長石粒などを含むが非常に堅緻で、灰白色を呈している。器表には鉄と思われる黒い粒子や長石の白い粒子が浮き上がっている。一般にこの時期の壺は、紀北地方は信楽焼の流通圏外にあり、ごく稀にしか出土しない。根来寺などにおけるその稀な出土例はおそらく壺という製品として搬入されるのではなく、購入した葉茶の容器としてたまたま使用されていたという副次的なものであると思われる。高野山が一般的な紀北地方の流通の規制をほとんど受けていないと考えられることは既に述べたが、そういう点もふまえて高野山における特異な流通形態の問題を総合的に検討していく必要があると思われる。693は土師質の鍋と思われるものである。特殊な器形で、しかも外面体部には直径６㎝～７㎝の正円に近いメダリオンのような貼花の痕跡が見られる。外面体部中央はこの貼花に飾られた菱形に十字を入れた文様と剣頭文とが巡り、その下を直径３㎜～４㎜の刺突文で埋めつくしている。口縁部内外面は丁寧にヨコナデされ、内面体部に残る粘土の輪積み痕はナデにより丁寧に消されている。胎土は砂粒を含むが精良で、赤褐色ないし黄灰褐色を呈し、微細な雲母粒を少量含んでいる。なお、貼花としたが把手の可能性もある。694は不明青銅製品である。鋳造で断面三角の縁が付き正円であれば直径１m近い大きさのものである。厚さ約２㎜の薄い平坦面は平滑に磨かれているようであるが、文様などは認められない。

ＳＫ－０４（695～699）

695～698は伊万里の染付である。695は外面体部に寿字文の描かれた小振りの碗である。胎土は灰白色で呉須は不鮮明である。696は皿である。内面には斜格子や青く染付けした短冊状の文様が見られ、外面体部には線描きの唐草文が巡っている。呉須は何種類かを使いわけているようである。釉は光沢があり、呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉をフキ取っている。697は非常に丁寧な作りの皿である。内面には細線で葉文と細かい牡丹唐草文を描き、丁寧に濃筆を使っている。外面体部の唐草文も細線と濃筆を巧妙に使ったものである。胎土は純白に近く、釉はわずかに青みを帯び、呉須の発色は非常に良い。口縁端部には鉄による口紅を塗っている。畳付の釉は丁寧にフキ取り、露胎部との境は淡い黄橙色を呈している。698は輪花皿である。口縁部を稜花状にし、さらに体部を輪花にしている。内外面体部にやや太めの筆によりタコ唐草文が密に描かれている。呉須は比較的濃く発色している。火中して器表に小さい気泡が浮いている。699は第４層出土515・516などと同様の信楽焼などに見られるタイプの灰釉の灯明皿である。内面の受け部に半円形の抉りが見られ、受け端部の釉をフキ取っている。

ＳＫ－０５（700～704）

700は中国製の端反の青磁碗である。内面体部にヘラ先を当てた沈線が巡るが、意識的なものではないと思われる。胎土は灰白色で精良である。釉は透明度が高く体部の砂粒の動きが透けて見えるが、光沢があり灰緑色を呈す。701は中国南部産のものと思われる褐釉の壺である。耳の付される可能性が高い。口縁端部を外に引き出し上面を平坦にしている。胎土は微細な砂粒を含み堅緻で黒灰色を呈す。釉は内面に及び、外面は銀化したように鈍い金属光沢を放つ。702は伊万里の染付碗である。外面体部に草花文を持つ第２層出土467・468と同様のもので外底には便化した「太明年造」銘が見られる。703・704は常滑焼の壺である。703は肩部には扁平な耳が付される四耳壺で、口縁部は外に広がり、端部はわずかに上下に拡張している。三耳壷の可能性もある。胎土は砂粒を多く含み堅緻で、灰黒色を呈している。口縁

部及び肩部には自然釉が厚くかかり、火中して海綿状をなす。704も703とほぼ同程度に口縁部が拡張している。胎土はやや軟質で砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈している。

ＳＫ－０６（705）

705は美濃瀬戸系の褐釉天目茶碗である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、比較的端正な器形である。火中して胎土は暗灰黄色に、釉は黄灰褐色に変質している。外面体部下半の露胎部は鬼板により化粧がけされている。この遺構には他に体部の四面を大きく縦方向に凹ませて角瓶風の器形にし、体部に布袋などの人物像を貼付する備前焼の徳利なども出土している。

ＳＫ－０７（706～708）

706は美濃瀬戸系の灰釉平碗である。体部が外方に直線的に開き、外面体部下半を露胎で残すものである。外面体部には轆轤による引き上げ痕を残し、口縁端部をシャープに突らせている。胎土は微細な砂粒を含みやや砂っぽいが、堅緻で灰黄白色を呈す。釉は透明度が高く黄灰色に発色している。707は型押しの伊万里染付の合子の蓋である。外面体部は菊花と思われる細い沈線が放射状に巡り、上面にはやはり型押しの牡丹と思われる浮文が見られる。この浮文は貼り付けではなく、体部と同時の型押しである。さらにこの浮文のある上面に円形に呉須を置くことにより、呉須の濃淡で牡丹を浮き上がらせている。口縁端部は水平にカットされ、内面口縁部付近から端部を露胎にしている。胎土は純白に近く精良であるが、露胎部には若干の鉄と思われる黒い微細粒子が浮かんでいる。釉はわずかに青みを帯び、呉須の発色は良好である。708は瓦質のこね鉢である。内外器表は摩耗しているが外面体部には横方向のヘラケズリが見られる。また、内面口縁部付近には炭化物が付着している。胎土は黄灰褐色で、砂粒をあまり含まず比較的精良である。このほかに外底に輪状の釉のフキ取りのある、中国製青磁盤なども出土する。

ＳＤ－０１（709・710）

709は外面体部に３単位の円文をもつ碗で、上段第１層出土70などと同一タイプのものである。内底には形のぼやけた五弁花のコンニャク判が見られる。雑な作りで内底の一部や高台際などの釉が虫喰い状態になっている。また、畳付の釉のフキ取りも雑で、砂が大量に付着している。露胎部は茶褐色に発色し、釉は灰みが強く、呉須は暗青色を呈している。710は唐津の碗である。体部の器肉が厚く、口縁部が内弯する浅い器形である。高台径が小さく外底の抉りが深い。内底には鉄で島影らしい絵が描かれている。胎土は黄灰色を呈し、堅緻である。釉は体部下半ないし高台外面までかけられ、ややカセた感じの黄灰色を呈し、全体に細かく浅い貫入が走る。露胎部との境は灰橙色に発色している。その他の遺物には、備前焼の壺や明初様式の玉壺春型の瓶の小片なども見られる。

ＳＥ－０２（711）

711は不明瓦質製品である。樽型の器形で上下が不明確であるが、とりあえず切り放しで未調整の端部を底部とする。外面体部は下方からの鋭い約３cm間隔の２条の沈線により６分割し、それぞれの区画を方形の窓や複雑な透かし、あるいは雲形の透かし、直径約１cmの円形の三ツ星形の透しなどで飾っている。また、方形の窓部の左右、上端から約2/3弱の位置には長辺約５mm、短辺約３mmの菱形に近い形の穿孔も見られる。下面端部はヘラ切りのままであるが、上端面にはナデが施される。外面は体部下端に部分的にナデを残すが、全体的によく磨かれ、銀灰色を呈す。内面体部は無調整で部分的に指頭痕などを残している。胎土は灰白色を呈し、緻密で砂粒などをほとんど含まない。711はＳＥ－02上層として取り

上げられており、他に銹化が進んだ不明鉄製品なども出土している。なお、下層には遺物が見られない。

Ｐ－０８（712・713）

この柱穴からは近世の遺物は出土していない。おそらく永正18年（1521）の大火直後の時期の建物に伴うものと思われる。図示したものの他に、外底に簀子痕をもつ土師皿や信楽焼の壺などの小片も見られる。712は中国製染付の端反皿である。内底に羯磨文、外面体部に牡丹唐草文の見られるもので、羯磨文は線描きと濃筆を併用した第５層出土550と同一タイプである。713は内面全体をヨコ方向にナデる第４層出土533などと同一タイプの土師皿である。

Ｐ－０９（714）

714は中国製の青磁碗である。かなりの大形で口縁部の内弯する器形と思われる。内外面体部にはヘラ描きによる片切彫りの草花文が見られ、内底には桔梗の花に似た花弁の印花文が見られる。胎土は精良できめ細かく灰白色を呈し、釉は透明度が高く澄んだ草緑色に発色している。全釉で外面体部の釉は中心部を残し、高台際まで丁寧に輪状にケズリ取っている。

(2)　第２遺構面（図26、図版30、715～724）

16世紀前半を上限とする第６層と、15世紀中葉ごろを上限とする第７層の間で検出された遺構面である。

Ｐ－１０　地鎮遺構（715～724）

地鎮に伴う遺構と考えられ、同一タイプの土師皿が最低10個体出土している。粘土円板からの手捻りで、器形的にはＰ－08出土713などとも似ているが、一応口縁部内外面にはヨコナデが施され、端部はやや内弯気味である。内底は不定方向にナデられ、外底は丁寧な指ナデにより指頭痕を消している。胎土は砂粒などをほとんど含まず精良でやや赤みがかった淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。口径は７cm～８cm弱で、器高は1.6cm～2.0cmを測る。

(3)　第３遺構面（図26、725～739）

第８層は第７層と時期差が認められず15世紀中葉ごろを上限とし、第９層は15世紀初頭～前半ごろを上限としている。従ってこの遺構面は、時期幅を15世紀前半～中葉に限定することができる。しかし、瓦器や中国製青磁など時期のさかのぼる遺物も少量混入している。

Ｐ－１１（725～727）

少量の瓦器片と土師皿が出土している。土師皿はすべて外底に簀子痕の見られるタイプのものである。725は通常のものであるが、726～727は体部の強いヨコナデにより口縁部がやや内弯気味になり、内面体部と内底の境にヨコナデによる段がついている。

Ｐ－１２（728～731）

中国製青磁、瓦質風炉、こね鉢、土師皿などが出土している。土師皿はほとんどが小片で、大部分が外底に簀子痕の見られるタイプ（728）である。729は外底に回転糸切痕の見られる大（中）皿で、通例のものと異なり搬入品と考えられる。口縁部がやや内弯する器形で、体部の強いヨコナデにより内底と体部の境が凹んでいる。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、黄灰褐色を呈している。内面体部にはタールが付着している。口径14.4cm、器高2.6cmを測る。730も搬入品と考えられる土師皿である。体部が直線的に外上方に開き、口縁部をヨコナデによりわずかに外反させている。胎土は729に似るがさらにきめ細かく、やや赤みのある黄灰褐色を呈している。口径12.0cm、器高2.6cmを測る。731は白色系の型押し

による皿である。前述した第10層出土656などと同様の調整が見られるが、体部の器肉が厚く全体に鈍重である。胎土も砂気が多くザラつき、黄灰色を呈している。口径10.0cm、器高2.8cmを測る。

P－１３（732）

この遺構の遺物はすべて土師皿の小片である。ごく少量の、褐色化し口縁部が外方に広く開く型作りの大皿などが見られるが、他はすべて外底に簀子痕の見られるタイプの大（中）皿、小皿である。732は外底の簀子痕を指ナデにより消した大（中）皿である。

P－１４（733）

土師皿、土師質土器などが出土している。土師皿はすべて小片であるが、外底に簀子痕が見られる。733は土師質のこね鉢である。内面口縁部付近と口縁部端面を同時にヨコナデすることにより、内面体部上端と口縁端面を凹ませ、口縁上端部を上方につまみ上げている。外面体部を横方向にヘラケズリし、内面体部はナデののち、粗く浅い櫛目を入れている。胎土は微細な砂粒を多く含み堅緻で、赤褐色を呈す。

P－１５（734）

外底に簀子痕の見られる土師皿や、摩耗して器表を失った瓦器椀などが見られる。734は型押しによる白色系の小皿である。広く平らな底部から体部が急角度で立ち上がり、外反しながら外上方に開く。内底を不定方向にナデ、体部から口縁部に強いヨコナデを施す。外底は無調整と思われる。731などと極めて類似し、砂けの多いザラついた胎土で、黄灰白色を呈す。口径8.8cm、器高1.6cmを測る。

P－１６（735）

735は地元版のヘソ皿である。基本的には外底に簀子痕をもつタイプの小皿と同様の胎土、調整を持つものである。外底の簀子痕を大（中）皿のように指ナデで消したのち、指により底部を突出させたものでる。ヘソ皿を模倣したものと思われ興味深い。口径8.8cm、器高1.6cmを測る。なお、この柱穴からは、第10層出土656などの根来寺に特有の白土器の小片も出土している。

P－１７（736）

736は外底に簀子痕を持つタイプの中皿で、唯一の出土遺物である。口径10.4cm、器高2.6cmを測り、外底の簀子痕はわずかに痕跡を残して指ナデにより消されている。

P－１８（737・738）

比較的多くの土師皿が出土している。すべてが外底に簀子痕をもつタイプである。また、中皿と小皿の比率もほとんど同数である。737は口径10.8cm、器高2.2cm、738は口径11.6cm、器高2.3cmを測る。

P－１９（739）

739は瓦質こね鉢で、唯一の遺物である。口縁上端部をつまみ上げるようにヨコナデして上端部を尖らせ、口縁端面上半を凹ませている。外面口縁端部はわずかに下方に引き落すように押しナデている。外面体部のヘラケズリは横方向と思われる。内面体部は摩耗して調整などは不明である。胎土は微細な砂粒を含みザラつき、灰白色を呈している。器表は黒灰色に焼成されている。

(4)　第４遺構面（図26、図版30、740～746）

第９層と第10層とに出土遺物から時期差を求めるのは困難である。すでに述べたが、遺物の組成も極めて類似している。現状では共に15世紀初頭から前半ごろを上限とする整地層と言わざるをえない。

Ｐ－２０（740）

非常に小さい瓦器や土師皿の破片とともに、土師質の火鉢が出土している。740は口径40cmを越える大形の火鉢で、口縁に向かって肥厚し内弯する体部に三足の付せられるものである。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面口縁部下端までヨコナデが施されている。外面体部はヘラケズリ痕を残したまま横方向に粗くナデ、外底には粗い指ナデが見られる。三足には獣足などの表現は見られず、指による雑な貼り付け跡を残したままである。胎土は微細な砂粒と少量の雲母粒を含み堅緻で、黄灰白色を呈す。

Ｐ－２１（741）

遺物は少量であるが、瓦質風炉や外底に簀子痕を持つ土師皿などが出土している。741は砥石である。小形の携帯用と思われる。粘板岩系の黄橙色を呈するきめ細かい石材で、裏面は板状の自然剥離面である。剥離面をそのまま再使用したものと思われ、裏面に鑿などを研磨した痕跡が筋状に残っている。また、上端面には鋸による切断面が表面に対して垂直方向に残っている。

Ｐ－２２（742～744）

この柱穴からは瓦器、土師皿の小片が多数出土しているが、土師皿の様相は他の遺構、あるいはこの遺構が切り込み面としている第10層などとまったく異なる。すなわち、外底に簀子痕をもつものは全く見られず、外底に回転糸切痕を持つもの（743）と上段整地７層で回転糸切痕を持つ土師皿と共伴する343などのタイプの黄白色のザラついた胎土をもつもの（742）が３対２程度の割合で出土している。744は東播系の須恵質こね鉢である。非常に雑な作りで、口縁部外面には部分的に粘土を貼り付けて補塡した痕跡が見られる。内外面体部は凸凹で、口縁部のナデも極めて雑である。胎土は微細な鉄と思われる黒い粒子を少量含むが堅緻で、器表は暗灰色を呈している。

ＳＤ－０２（745・746）

この遺構にも簀子痕を持つ土師皿は見られず、回転糸切痕を持つ土師皿や瓦器椀の小片が出土している。745は中国製の白磁である。口縁の外反する器形で、体部の器肉は薄くシャープな作りである。胎土は暗灰色で堅緻、灰緑色で光沢のある釉がかかる。釉は透明度が高く、外面体部のヘラケズリ痕が透けて見える。746は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は上方に大きく拡張し、広い口縁端面を持っている。口縁端面はわずかに丸みを帯びる。胎土は堅緻であるがやや多くの砂粒を含み、暗灰色を呈している。器表は青灰色で、重ね焼きにより口縁端面は暗青灰色に焼成されている。

第Ⅳ章　霊宝館駐車場建設用地の調査

第１節　調査概要

昭和59年に弘法大師空海の入定1,150年祭を営むにあたり、高野山真言宗総本山金剛峰寺は種々の記念事業を計画してきたが、今次の発掘調査の原因となった霊宝館駐車場建設も、霊宝館新収蔵庫建設と同様に空海の入定1,150年祭記念事業の一環である。

霊宝館駐車場建設用地は霊宝館新収蔵庫建設用地の北側に当り、大門通りに面している。道路を隔て北側には歓学院・増福院が位置する。西側は現在霊宝館敷地になっているが、江戸時代には明治維新後五之室谷に移転した南院が位置していた。東側には釈迦文院が位置し、西北方には蓮池を隔て金堂・大塔などの壇上伽藍が位置する。

増福院の東側には現在教化研修道場が建てられているが、かって「宝性院」が位置していた場所であり、教化研修道場の建設に先立ち昭和56年に財団法人元興寺文化財研究所が発掘調査を実施し、室町時代と江戸時代の礎石建物・池・溝・根堅め杭などとともに、折敷に５枚の皿を載せ建物敷地の四方と中央に埋置した江戸時代の屋敷地取法が検出されている。出土遺物には土師器、瓦器、東播系須恵質土器や、備前焼・丹波焼・信楽焼・常滑焼・伊賀焼・美濃瀬戸系・唐津焼・伊万里などの国産陶磁器、白磁・青磁・染付・三彩（元・交趾）などの中国製陶磁器の他、漆器、箸・手桶・曲物・木栓・横櫛・下駄などの木製品、鋏・引手金具・包丁・銅鋺・捍秤の竿と考えられる計量器具・五鈷・煙管などの金属製品、石鍋・硯・砥石・五輪塔・石臼などの石製品、泥仏、蓮台状土製品、瓦など中世から近世にわたる多種多様の遺物が報告されている。

今次の調査対象地の中世塔頭子院については詳らかではないが、作製年代の判明している『高野山壇上寺家絵図』寛永元年（1624）、『御公儀上一山図』正保３年（1646）、『高野山絵図』承応２年（1653）、『高野山総図』万治元年（1658）、『高野山之図』延宝９年（1680）、『高野山壇上并寺中絵図』元禄６年（1693）、『高野山絵図』寛政元年（1789）改版、『高野山古図』寛政８年（1796）、『高野山絵図』寛政12年（1800）改版、『高野山絵図』文化７年（1810）再刊、『高野山絵図』文化10年（1813）改版、『高野山細見絵図』文化10年（1813）、『新増高野山全図』安政８年（1857）、『高野山一覧全図』明治17年（1880）、『高野山真景大全図』明治33年（1900）などの絵図や木版絵図では「大楽院」が描かれている。しかし、『高野山名所図絵』大正11年（1922）には「大楽院」は描かれれていない。なお、『高野山古絵図集成』（日野西真定・昭和58年）によれば、鎌倉時代の『信堅院号帳』及び室町時代の『文明院号帳』には「大楽院」の寺名を南谷に見ることができるそうである。このことから今次の調査で検出した遺構は、すべて「大楽院」に伴う遺構とみられる。

霊宝館駐車場建設用地である調査対象地点は、尾根を造成した江戸時代の子院敷地が階段状に６段に並ぶ１段目（標高約826m）であり、霊宝館敷地（標高約824m）に比べ調査着手前で約２m低く、大略において中世から近現代の間に５回の整地が認められる。５回目の整地層は厚さが約1.2mあり、整地土中に霊宝館に使用されている塼の破片が出土することや、この整地層を切り込んで造られ現存していた井

戸（ＳＥ—01）から第２次大戦で使用されていたとみられる手榴弾が出土したことなどから、大正10年に建設された霊宝館建設時の排土での整地、あるいはそれ以後大戦までの間に整地されたものと思われる。この５回目の整地が行われる以前の当地点の地形は、霊宝館新収蔵庫地区で見られた上段と下段の比高差に等しく、すくなくとも江戸時代にはこのような雛段状に造成された子院敷地が６段存在していたものと思われる。

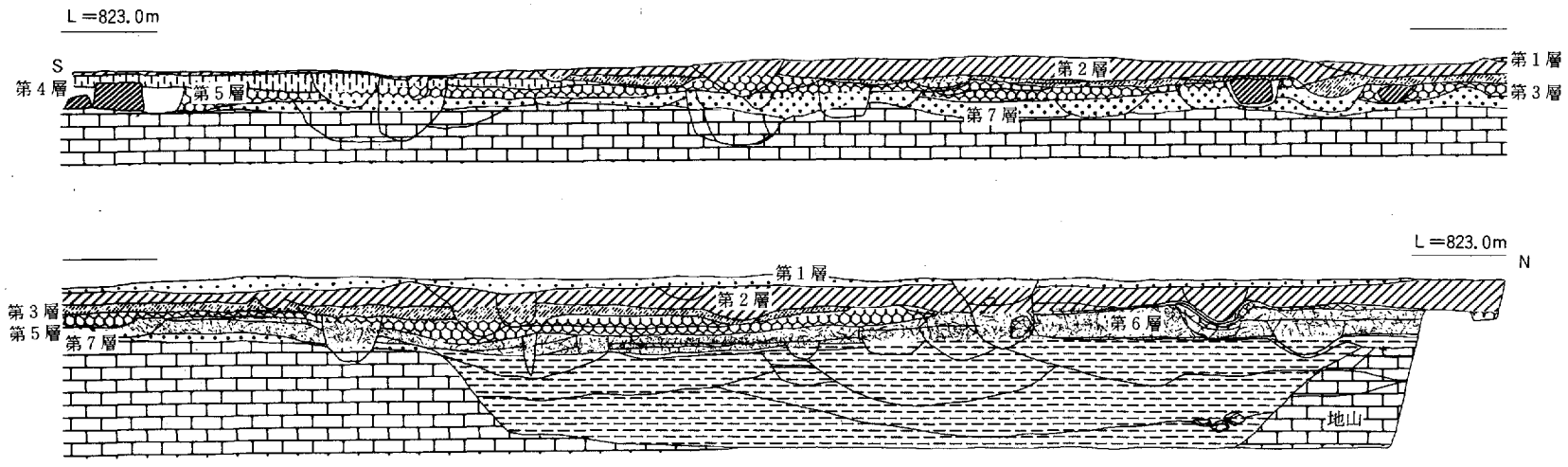
調査の結果、当調査区においても霊宝館新収蔵庫建設用地地区同様、各層から出土する遺物の時期幅が相当広いため純粋な包含層とはいえず、各層とも整地層と考えた方が妥当であると思われ、遺構面も４面存在することが判明した。大正時代あるいはそれ以降の整地層である５回目の整地を除いても４回の整地層が存在することになり、これを遺構面と対比すれば第１層・第２層、第３層、第４層・第５層、第６層・第７層を整地層とすることができる。

整地層と考えられる各層の時期幅は、遺物および火災層から以下のようになるものと思われる。

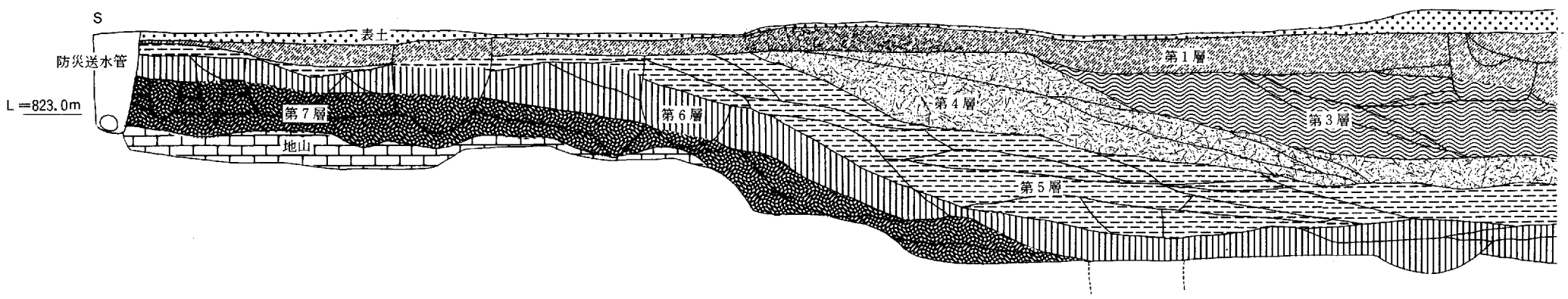
整地第１層・第２層は中国製陶磁器・国産陶磁器・土師質土器などが出土し、19世紀中葉から後半を下限とすると考えられる。整地第３層は文化６年（1809）の火災に伴うと見られる炭層を含む整地層で、中国製陶磁器や国産陶磁器などが出土し、下限を1809年とし上限が18世紀末ごろになるものと考えられる。第４・５層は中国製陶磁器、国産陶磁器、土師器、土師質土器などが出土し、18世紀末ごろを下限とするものと考えられる。第６層は中国製陶磁器、国産陶磁器、東播系須恵質土器、土師皿、瓦器、土師質・瓦質土器などが出土し、遺物から見た下限は17世紀前半代と考えられる。しかしこの層の直上には部分的にではあるが（特に東北部分）元禄４年（1691）の火災によると思われる炭層が存在するところから、第６層の下限は17世紀末に求めたい。第７層は中国製陶磁器、朝鮮陶器、国産陶器、土師皿、土師質土器などが出土するが、第６層との違いは伊万里磁器の出土が認められないことが最大の相違点であり、下限は17世紀前半であろうと考えられる。

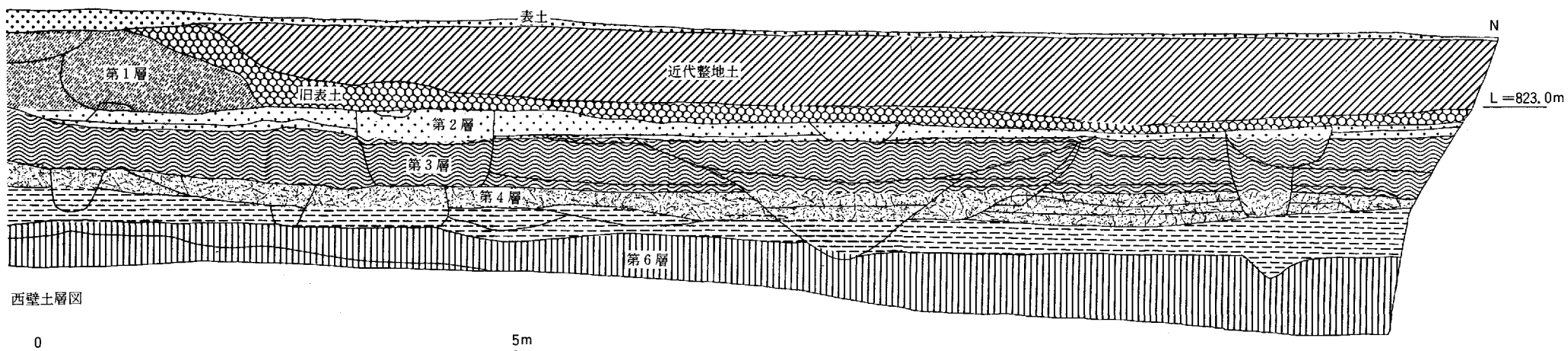
検出した遺構面は17世紀前半から19世紀中葉までの４面であるが、個別の遺構としては12世紀から19世紀にわたる遺構を検出した。第１面の遺構は文化６年（1809）の火災層を切り込み面とする遺構群で、1809年を上限とし、第２層の上限時期である19世紀中葉から後半を下限とする。検出した遺構には礎石建物跡・井戸・便槽と見られる埋桶、遺物は一時期古い様相を示すが石垣・土坑・溝・柵などがある。第２面は文化６年（1809）の火災層に覆われていることから1809年を下限とし、18世紀末ごろを上限とする。検出遺構遺構には礎石建物跡・池・井戸・埋桝・土坑・溝などがある。第３面は第６層を切り込み面とし、元禄４年（1691）の火災層と考えられる炭層が直上に堆積している。第６層の最も新しい要素が17世紀前半40年代～50年代にあるところから、17世紀前半を上限とし1691年を下限とする。検出遺構には礎石建物跡・池・井戸・埋木箱・土坑・溝などがある。第４面は17世紀第１四半期を下限とし、検出遺構には掘建柱建物跡・池・井戸・土坑・溝などがある。

なお、５回目の整地層は調査期間の都合上、重機により掘削排土した。また、調査期間中の排土置場が確保できなかったため、調査対象地区を２分して調査を行った。このため、建物跡（ＳＢ—02・ＳＢ—03・ＳＢ—04）を含め、両者にまたがる遺構については全景を撮影することができなかった。



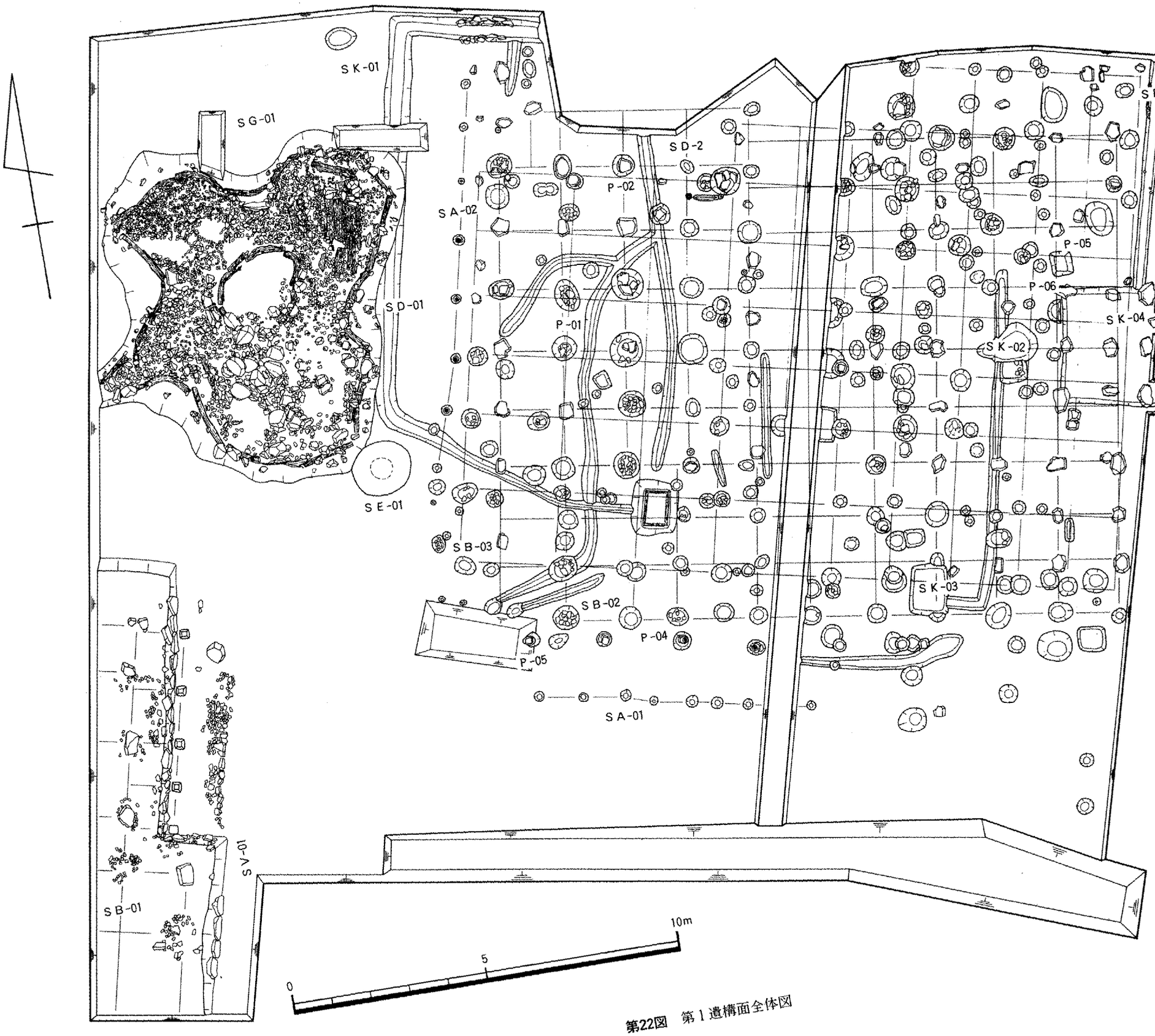
中央セクション東壁土層図





西壁土層図

第21図　駐車場調査区土層図



第22図　第１遺構面全体図

第2節　遺　　構

当調査区からは4面の遺構面が検出されているが、火災層を切り込んだ遺構面が2面あり、遺構面の上限および下限時期を限定することができる。また、子院敷地の全域を発掘したわけではないが、霊宝館新収蔵庫地区に比べまとまった子院遺構を検出することができた。なお、遺構面は4面検出しているが、遺構の重複関係上遺構全体図は3面に作図している。

1　第1遺構面の遺構

文化6年（1809）の火災層を切り込んで営まれた遺構面で、1809年を上限とし19世紀中葉から後半を下限とする。検出遺構には礎石建物跡・井戸・池・柵・溝・土坑などがある。

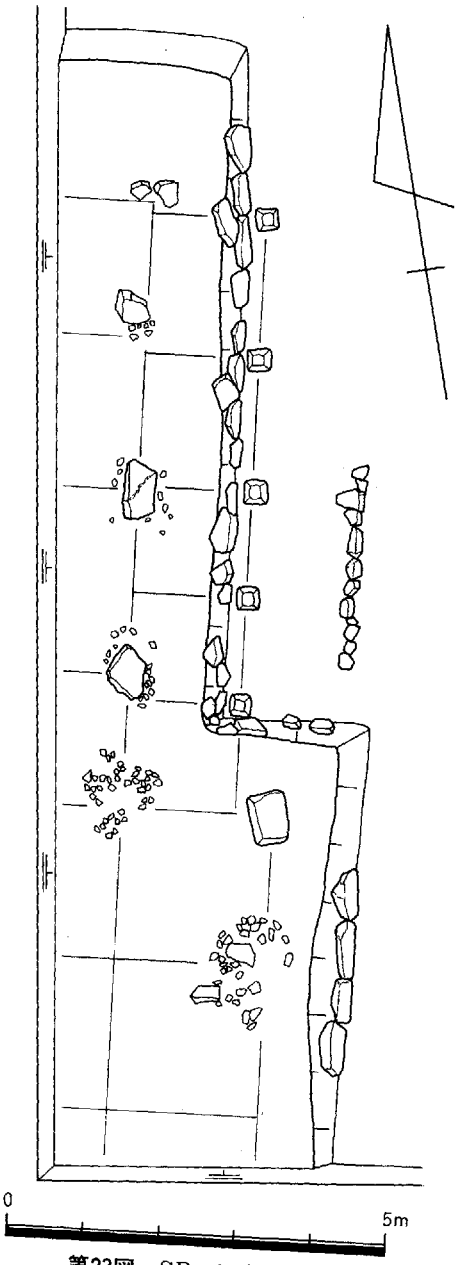
建物跡（ＳＢ―01）

調査区南西隅で検出した。建物は2段～3段に積まれた┐形の石垣内側に建てられた礎石建物で、東辺北側に縁を持つ。本遺構に使用されている石材は、石垣・礎石を含めすべて和泉砂岩である。

建物跡は東北隅部分の南北柱列の東側2列の礎石及び根石を検出したにとどまり、その全貌は不明であるがかなり大規模な建物になりそうである。礎石及び根石から復元できる建物の検出部分柱間寸法は、南北列の北側から1.80m・2.00m・2.40m・1.80m・2.00m・2.00mとなっており、以南は調査区外になるため不明である。東西列は、東端の1間が2.00mであることが判明している以外は、南北列同様その大部分が調査区外になるため不明である。

縁は、南北柱列の2列目北側3間に取り付くもので、柱通りから1.50m張り出す。縁束石の間隔は北から1.85m・1.85m・1.40m・1.40mである。縁束石は検出できなかったが、北辺にも縁が巡る可能性がある。

建物礎石は、新収蔵庫用地及び駐車場用地の調査を通じ最も大きく、40cm～50cm×cm70cm～80cm大の上面が平らな石が使用されている。礎石を据えるための掘形は径1.0m強で深さ約30cmを測り、この中に拳大から人頭大の根石が敷かれていた。検出した礎石は3個であるが、その上面のレベルは誤差が少ないことから水平であったものと思われる。縁束石は一辺20cm～25cm・高さ25cm～30cmの方柱状であったと思われるが、検出時には上端部分の四隅が剥離し円形に近い形状を呈していた。

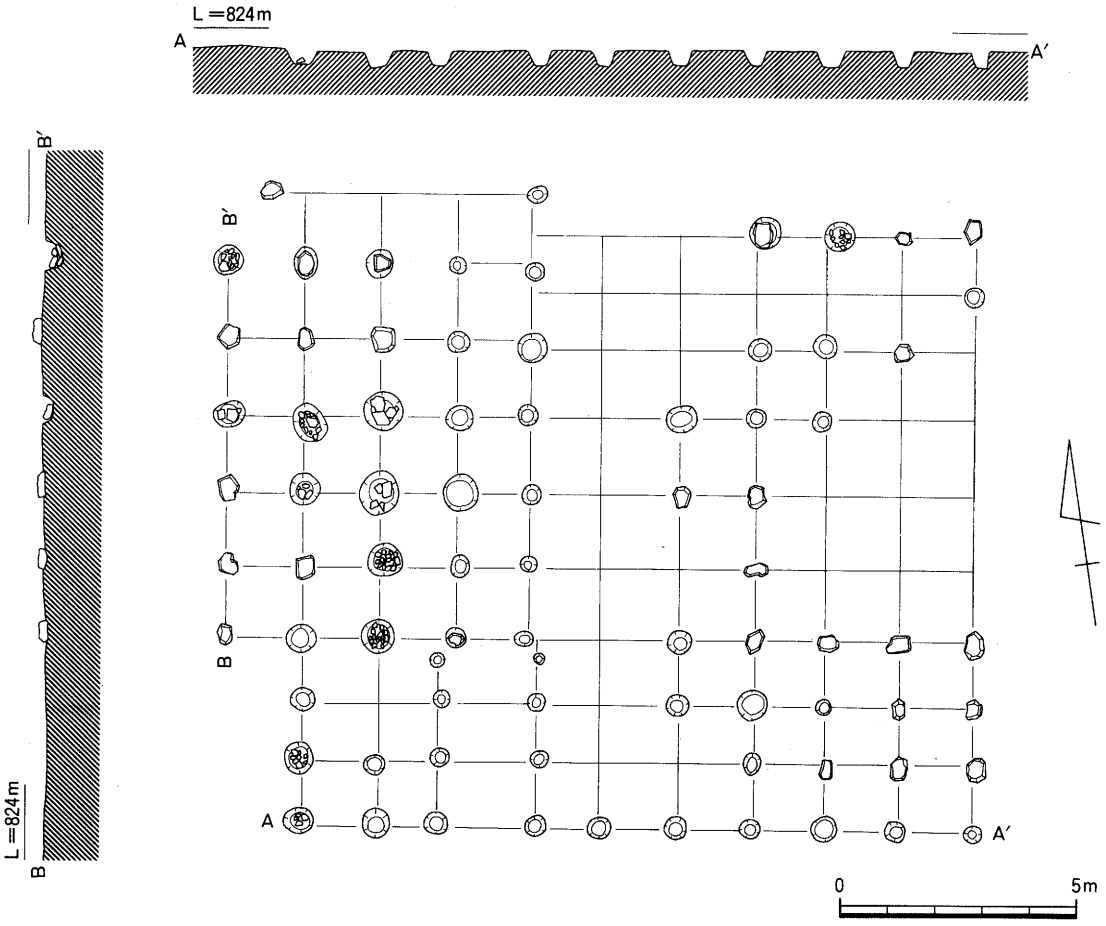


第23図　SB―01実測図

石垣は30㎝～70㎝大の石を積んだもので、その積みは２～３段であったと考えられ、建物基檀に近い性格であろう。ㄣ形に積まれた石垣の北辺には石積みは認められなかったが、池の周縁と約40㎝の高低差があることから、当初は石積みがあったものとおもわれる。なお、縁束石の東側外方で南北に延びる長さ2.5mの石列を検出したが、本来は北辺の石垣の位置まで延びるものと思われる。

建物跡（ＳＢ―02）

調査区のほぼ中央で検出した東西棟の礎石建物跡で、方位はＮ―10°―Ｅである。規模は、東西19.7m、南北のうち東側６間が15.7m・西側４間が16.56mで、柱間数は東西10間・南北９間となっている。南北列の中央柱通り礎石は、セクションベルトの下であったため確認できなかった。柱間寸法は、東西方向のうち南側３間が、東から1.90m・1.90m・1.90m・2.00m・2.10m・1.65m・2.60m・1.65m・2.00m・2.00mとなっているが、残りの６間は東から1.90m・1.90m・1.90m・2.00m・2.10m・1.90m・1.90m・2.00m・2.00m・2.00mになっている。南北方向のうち東側６間は、北から1.50m・1.50mが２間・1.90m・2.00m・1.95m・1.85m・1.70m・1.50m・1.80mであり、残りの西側４間が北から1.85m・2.00m・2.00m・2.00m・1.95m・1.85m・1.70m・1.50m・1.80mとなっている。東西柱列のうち南３列の西から４間目と５間目の柱間が2.60mと広いところから、この部分に玄関が想定できる。礎石は大部分が抜き取られていたが、残存しているものは30㎝×40㎝～60㎝×60㎝大であり、残存する礎石のレベルはほぼ水平である。



第24図　SB―02実測図

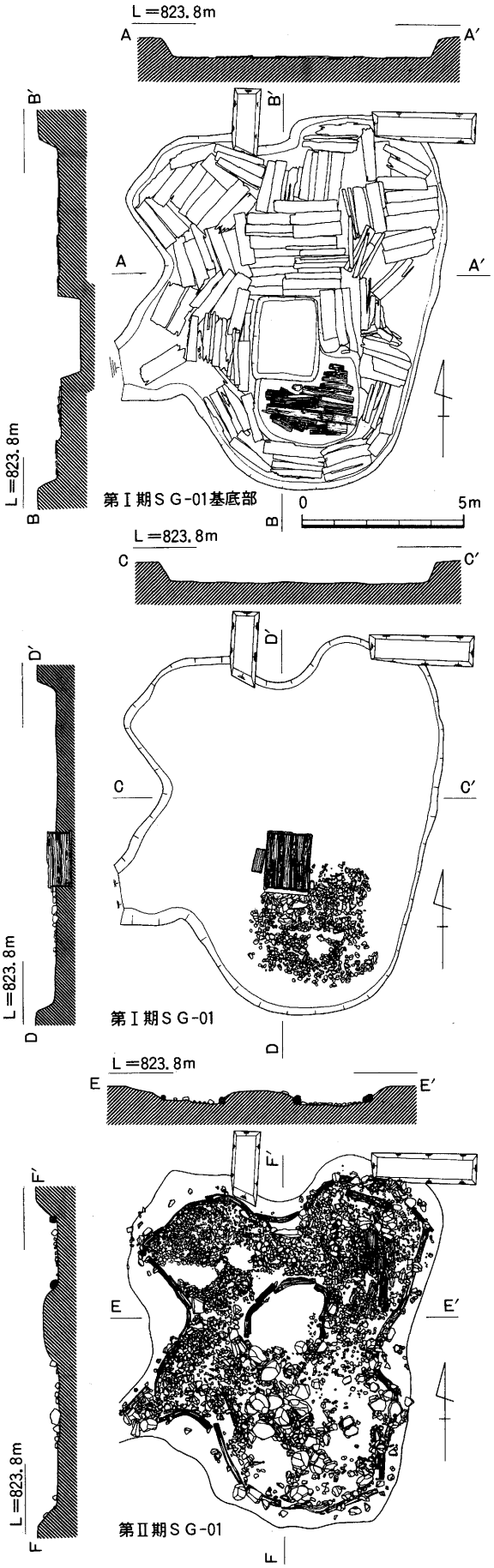
池（ＳＧ—01）

調査着手以前から東西で約５ｍ・南北で約10mの範囲にわたり周囲に比べ約30cm低く、この範囲の中に大きな石が数個認められることなどから、池の存在が想定されていた。調査の結果、平面形は滝を含み四葉形を呈し、中央に径約２ｍの中島を配し、池への水の流入部には滝が造られていることが判明した。当初に造られた池底には埋桝が設けられおり、次いで桝が埋めら池底全体に石を敷き詰めていることから造り変えが認められる。しかし、規模・輪郭及び流入口という基本的なものには手を加えない変更である。各期の池は、次ぎのとおりである。

第Ｉ期（第２遺構面に対応）　西辺やや南よりに流入部である滝を設け、北辺中央部の岸を池内に張りださせたハート形を呈する四葉形を呈する。規模は、南北の最大長約11.5m・東西の最大長約10m、北辺の張り出し約1.09m・東辺の張り出し約0.6mを測る。平面形は滝を含み四葉形状を呈している。池底中央南よりには長辺85cm・短辺67cmの後述する埋桝（ＳＫ—07）が設置され、この南側に石敷きが認められる。石敷き部分は、池底を掘り凹め杉板を敷き並べた上に石を敷き詰めたものである。埋桝とこの南側の石敷き部分を除く池底の全面には杉皮が敷き詰められるとともに、底面から立ち上がる岸には粘土が貼り付られ防水の役をさせている。池底はほぼ水平であるが、埋桝及びこれに伴う石敷き以外の施設はなかった。

導水路部分は調査区外であるため不明であるが、池への流入部である滝を検出した。滝は50cm～60cmの比較的大きな石が組み合わされており、滝奥には幅40cm・高さ約50cmの石が立てられている。なお、調査区西壁土層からみて滝の落差は１ｍ前後と考えられ、２段～３段の立石があったと思われる。

第II期（第１遺構面に対応）　平面形や滝などには改変は無いが、中央に径約２ｍの中島が造られている。また、岸には石積みで護岸されていたらしく、



第25図　SG—01変遷図

池底から岸への立上り及び中島への立上り部に胴木が計30本並べられていた。桝が埋め立てられ、池底全面に拳大から人頭大の扁平な角礫が敷き詰められている。中島の南側には70cm～80cm大の石が集中して検出されたが、原位置をとどめたものは少なく、中島への飛び石ではないかと思われる。

井戸（ＳＥ―01）

ＳＢ―01の北東約９ｍで検出したもので、ＳＧ―01の東南護岸の一部を切って造られている。新収蔵庫用地調査区のＳＢ―01と同様の構造である。井側の何枚かが腐朽欠損していたため、底面までの掘り下げは断念した。掘形・井側は円形を呈し、掘形上端の径は1.75mを測るが底部はやや狭くなるものと思われる。井側は径約0.7mを測り、幅10cm～20cm、厚さ約１cmの板21枚からなる。井側外側は、おそらく箍で締められているものと思われる。出土遺物には霊宝館で使用されている塼や手榴弾があり、少なくとも第２次大戦の終戦時前後までは機能していたものと考えられる。

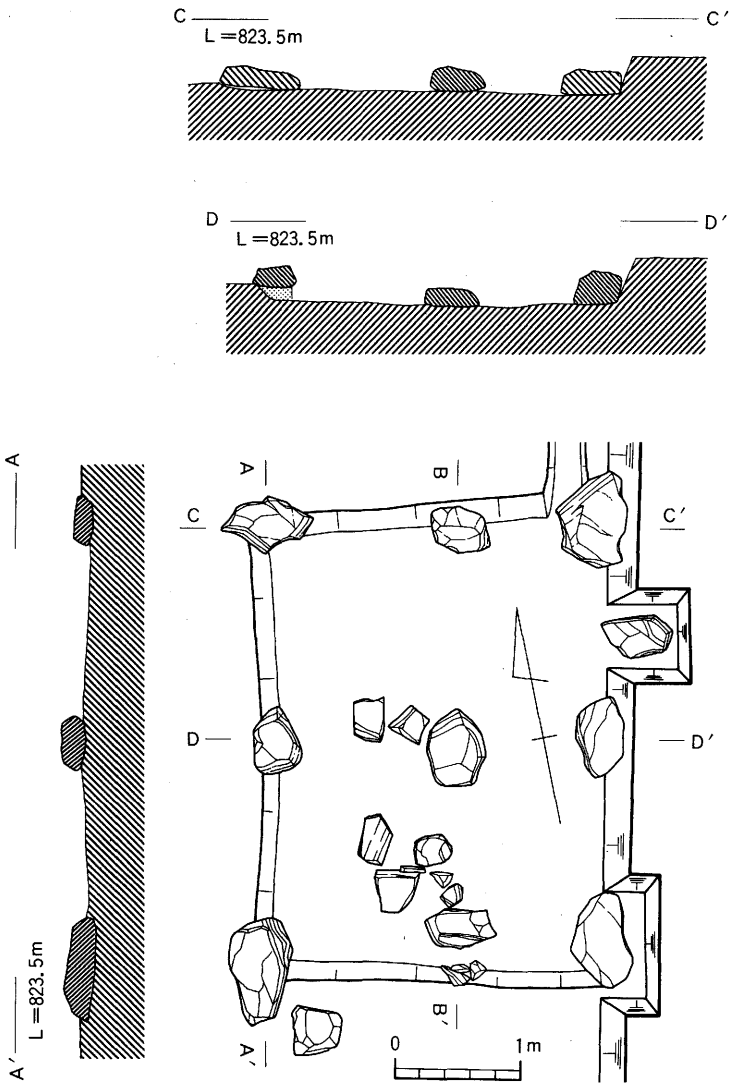
土坑（ＳＫ―03）

ＳＥ―02の東南東約９ｍで検出した平面形が長方形の土坑で、掘形上端部は東西辺約1.2m・南北辺約1.5m・深さ約0.30mを、底面は東西辺約0.95m・南北辺約1.35mを測る。土坑内からはなんらの施設も検出されなかった。

土坑（ＳＫ―04）

調査区の東端中央部で検出した平面形が長方形の土坑で、四辺の隅とその中間及び中央に礎石を配していることから上屋を伴うものと思われる。規模は、東西3.6m・南北2.7mを測り、四辺の礎石内側は約30cm掘り凹められている。

上屋と考えられる建物の柱間数は東西２間・南北２間である。柱間寸法は東西方向が東から1.10m・1.60mとなっており、南北方向が北から1.80m・1.80mとなっている。礎石は四隅のものが50cm×70cmと他の礎石に比べ大きい。北辺及び南辺中央の礎石は掘形内に傾斜あるいは転落していたが、他の礎石は原位置を保ち、ほぼ水平に据えられていた。柱通りがＳＢ―02と同じ方位であるため、ＳＢ―02の一部であることも考えられる。

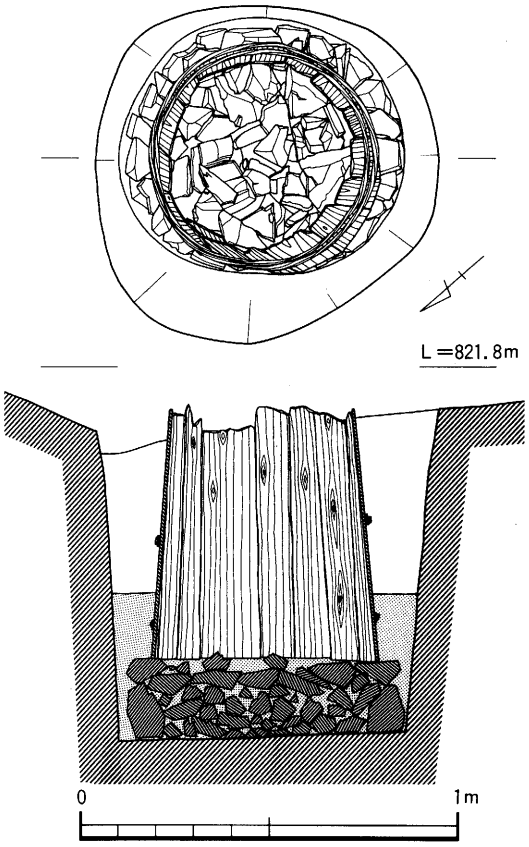


第26図　SK―04実測図

埋桶（ＳＫ―05）

調査区の中央やや北よりで検出した、桶側だけを埋設した遺構である。径約0.9m・深さ約0.85mを測る掘形底面にに５㎝～15㎝大の砂岩割石を約20㎝の厚さに敷き詰め、その上に桶の底板を抜き、逆さに据え付けている。

桶は幅６㎝～15㎝・現存最長値で67.2㎝・厚さ1.5㎝を測る板16枚からなり、外周には割竹３本を撚った箍２条が巡るが、本来は３本の箍が巡っていたものと思われる。桶内から出土した遺物の中に竹箆があることから、便槽と考えている。



第27図　SK―05実測図

柵（ＳＡ―01）

ＳＢ―02・ＳＢ―03の南側で検出した東西に設けられたの柵で、杭穴８個を検出した。ＳＢ―02南辺柱通りから約３mの位置にある。杭穴間の寸法は東から2.00m・1.00m・0.85m・0.70m・0.85m・1.35m・1.40mである。杭列方向は、ＳＢ―03の東西柱列にほぼ並行する。

柵（ＳＡ―02）

ＳＢ―02・ＳＢ―03の西側で検出した南北に設けられたの柵で、ＳＢ―02西辺柱通りから約1.3mの位置にある。杭穴９個を検出したが、杭穴間寸法は北から1.50m・1.85m・2.00m・2.00m・2.00m・1.70m・1.95m・1.25mとなっており、北から４・５・６・７の４本については径約10㎝の杭の根本が残存していた。杭列方向は、ＳＢ―03の南北柱列にほぼ並行し、ＳＡ―01と直交する一連の柵の可能性がある。

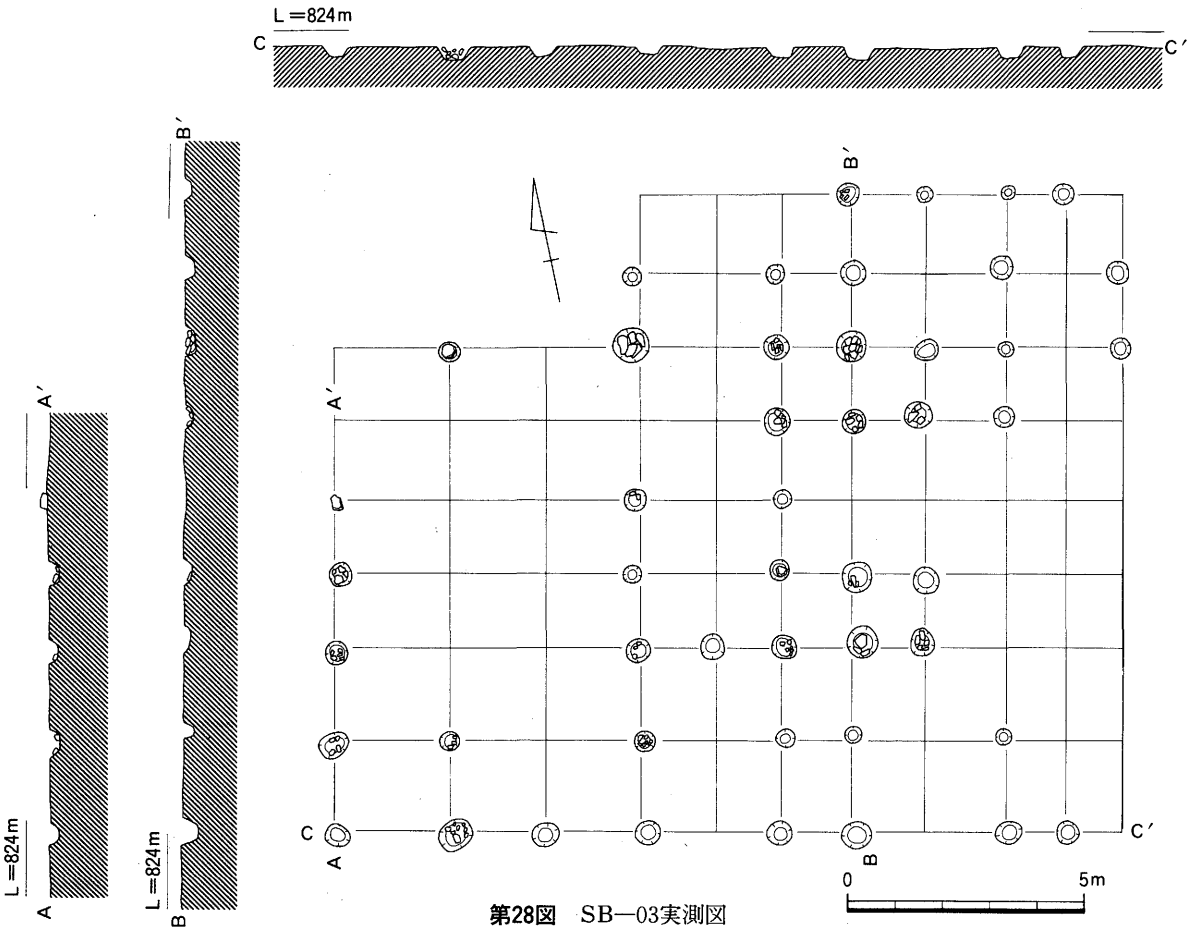
2　第２遺構面の遺構

第４層を切り込んで営まれた遺構面で、文化６年（1809）の火災層に覆われていることから1810年を上限とし、18世紀末ごろを下限とする。検出遺構には建物跡・池（ＳＧ―01の第１期）・井戸・埋桝・土坑などがある。

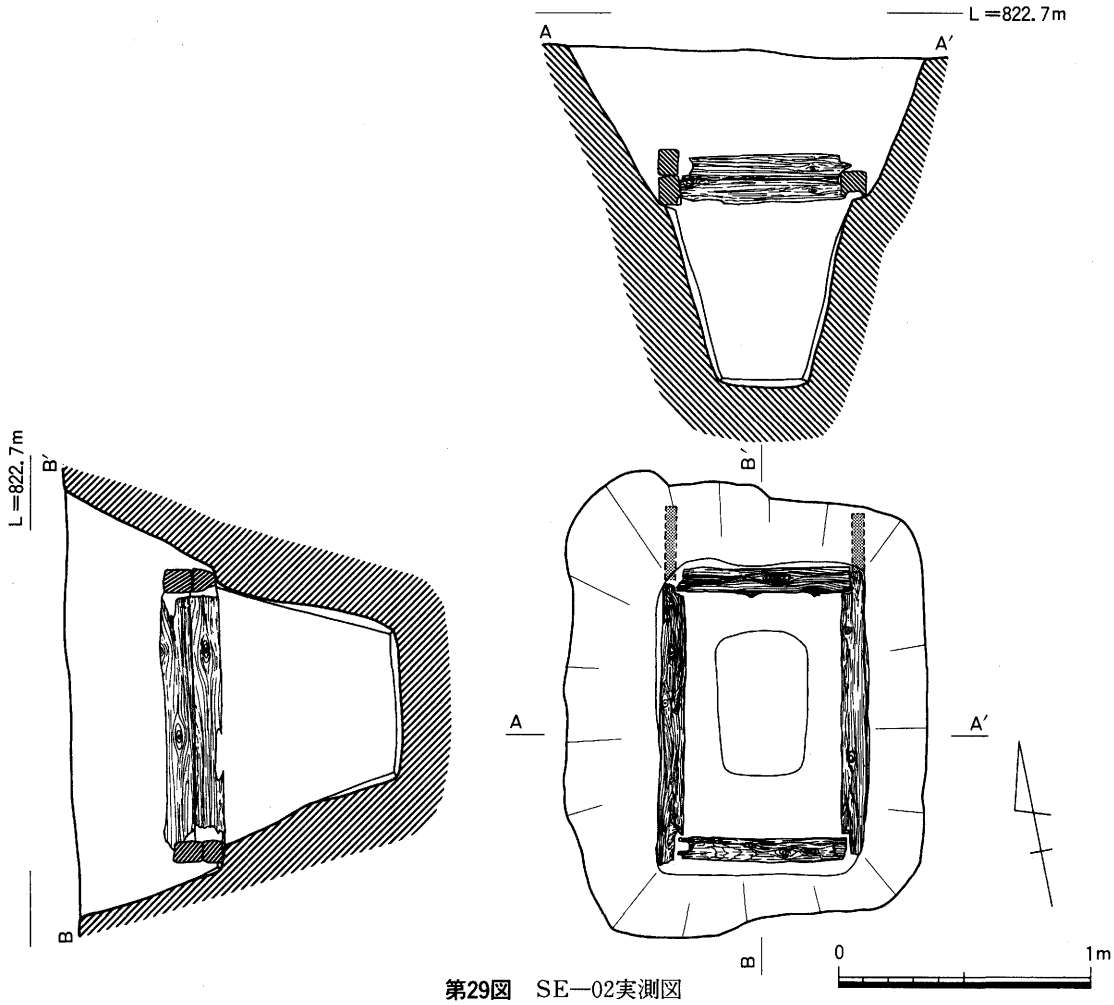
建物跡（ＳＢ―03）

ＳＢ―02と同一位置で検出した東西棟の礎石建物跡で、方位はＮ―12°―Ｅである。規模は、東西20.8m・南北16.8mで、柱間数は東西10間・南北８間となっている。ＳＢ―02同様南北柱通りの４列目は、セクションベルトの下であったため確認できなかった。柱間寸法は、東西方向が東から1.50m・1.55m・2.15m・1.95m・1.85m・1.70m・2.00m・2.50m・2.55m・3.05mとなっており、南北方向が北から2.05m・1.95mが２間・2.10m・1.95mが２間・2.50m・2.35mとなっている。

礎石はすべて抜取られていたためその大きさは不明であるが、根石の規模及び抜取り穴の大きさからみてＳＢ―02よりも小振りの礎石であったと思われる。



第28図　SB—03実測図



第29図　SE—02実測図

第30図　第２遺構面全体図

井戸（ＳＥ—02）

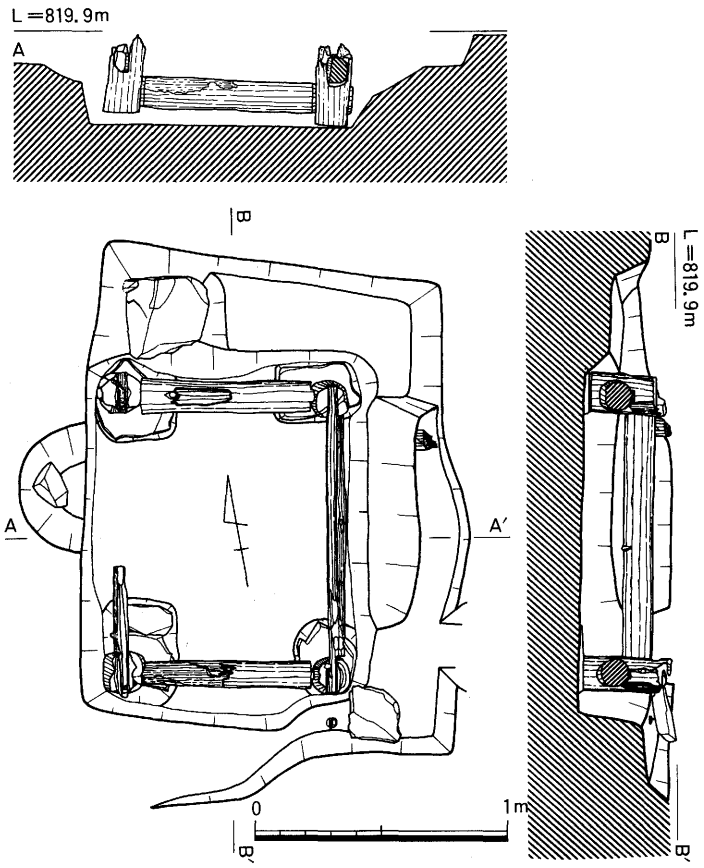
ＳＥ—01の東方約９ｍで検出した。掘形上端部は東西辺約1.4m・南北辺約1.7m・深さ約1.3mを、底面は東西辺約0.35m・南北辺約0.6mを測る。土坑底面から約0.7m上方に幅５cm～10cmのフラット面があり、この部分から角材が２段に組み上げられた状態で検出された。おそらくフラット部分から上方は角材を組んだ井戸枠であり、下方は素掘りであったと思われる。

井戸（ＳＥ—03）

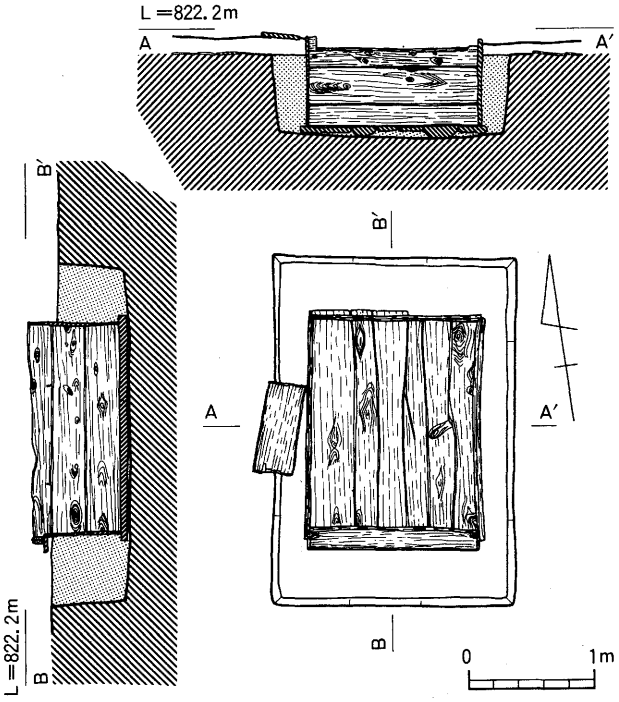
ＳＫ—04の下層で検出された遺構で、長辺約1.4m・短辺約1.15mの掘形内の四隅に穴を掘り礎石を据えた上に枘穴を穿った円柱を立て、これに両端に枘を持つ丸太材を組合せた構造である。本来はこの枠の外側に板材が立て並べられ、井側としていたものと思われる。溜め置きの井戸と考えたが、遺構面からの掘り込みが浅いことから溜桝様の施設とも考えられる。

埋桝（ＳＫ—07）

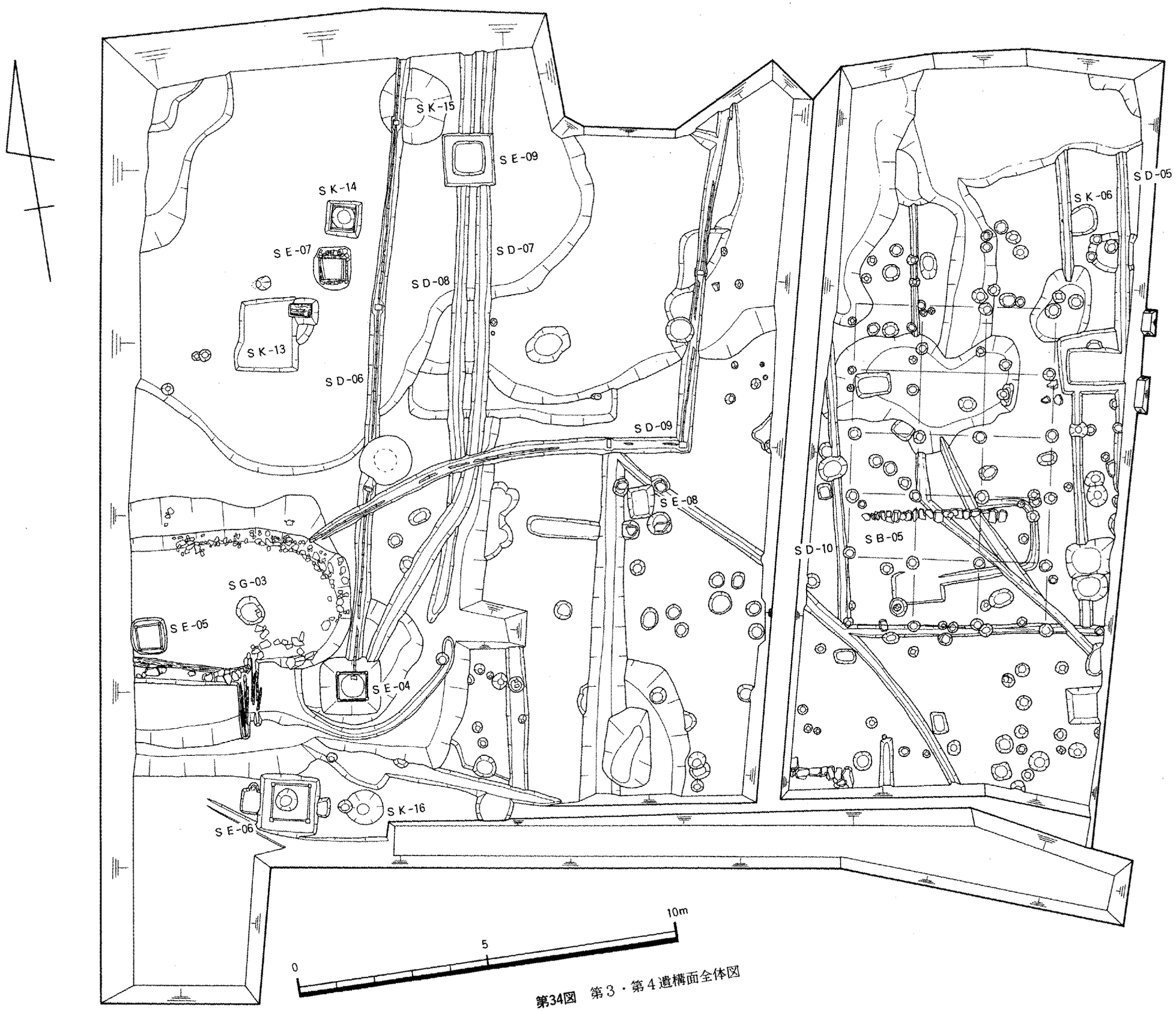
前述したように、ＳＧ—01の第１期に伴うものである。長辺約2.7m・短辺約1.4m・深さ約0.7mを測る掘形内に、内法で長辺0.85m・短辺0.67m・深さ0.71mの桝が設置されている。桝は、四面とも厚さ２cm～４cmの板が３枚ずつ使用されている。南辺にのみ側板上端を12cm削り込み、この部分に幅15cmの板１枚が組み合わされ水平に置かれている。底板は６枚からなるが、側板に比べ雑な作りで厚く、うち３枚は丸太材を縦割りにしたものが使用されている。側板及び側板と底板の接合は鉄釘留めである。魚類の越冬用の施設ではないかと考えられる。



第31図　SE—03実測図



第32図　SK—07実測図



第34図　第３・第４遺構面全体図

桶は、木枠の底面を掘り込んだ１辺約1.2m・深さ0.78mの掘形内に底板を抜いたものを埋め込んだもので、幅５cm～12cm・長さ72cm・厚さ２cmの板28枚からなり、上端径75cm・下端径59cmを測る。桶の側板は長さ５cm、一辺0.4cmの角竹釘２本でそれぞれが接合されており、外側は桶上端から12cm・45cm・57cm・63cmのところに割竹３本を撚った箍で締められている。箍は、下方になるほど細い割竹が使用されているためその幅は細くなる。なお、桶下端から４cmのところに径３cmの孔が穿たれており、本来は液体を入れていたものを転用したことが知られる。

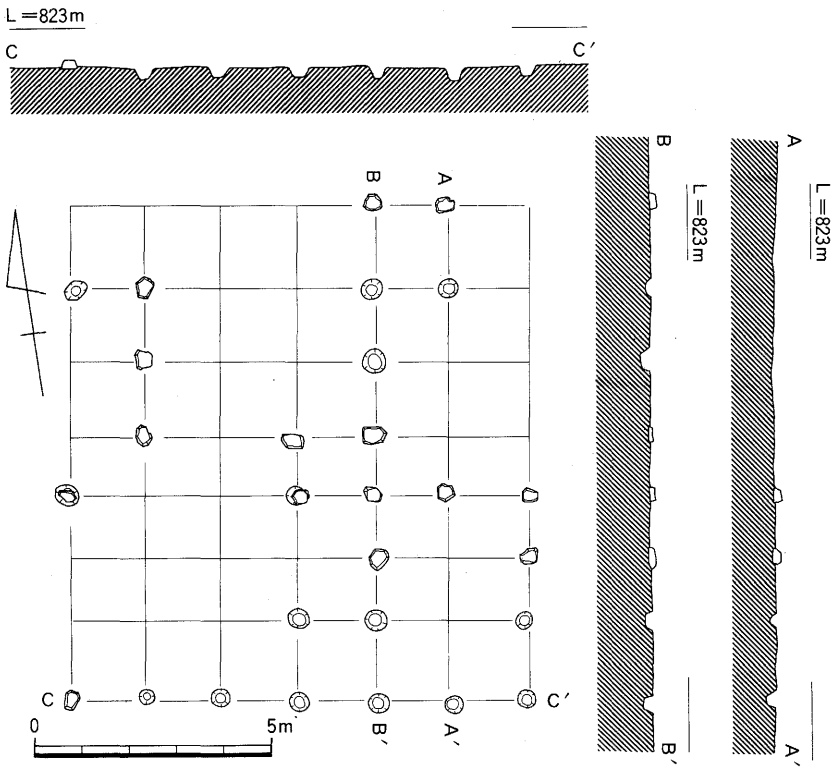
本遺構が前述したように仮に池であるとするならば、桶はＳＧ―01にみられるＳＫ―07と同様の性格を持つものとみられる。

3　第３遺構面の遺構

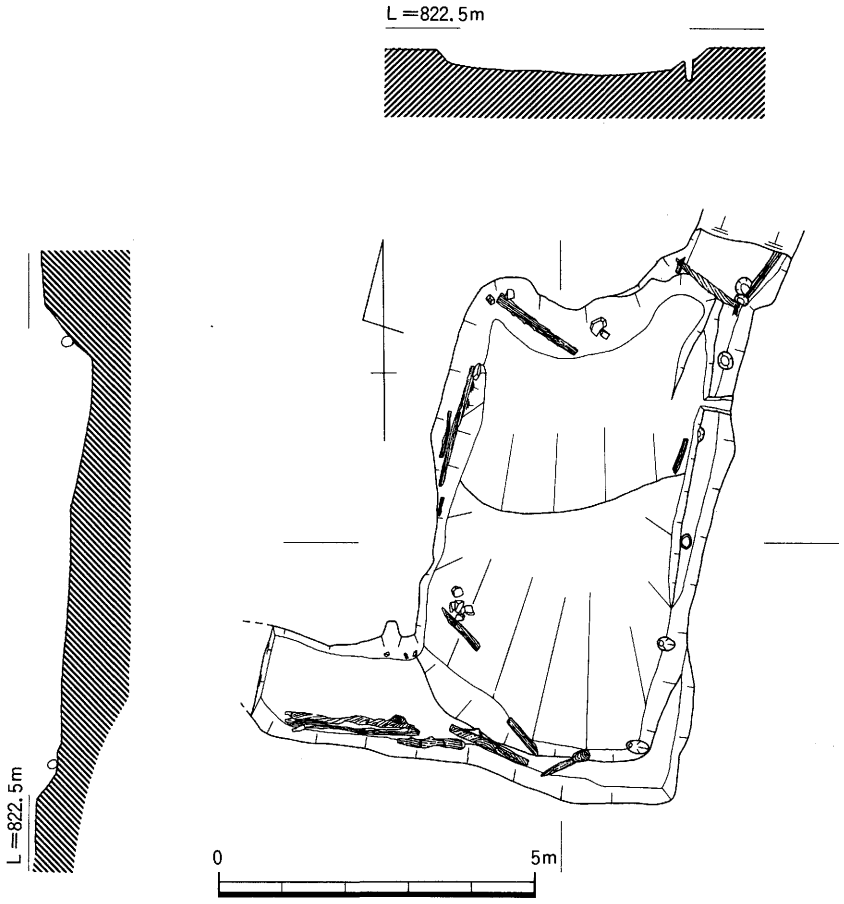
第６層を切り込んで営まれた遺構面で、17世紀前半を上限とし17世紀末を下限とする。検出遺構には礎石建物跡・池・井戸・埋木箱・土坑・溝などがある。

建物跡（ＳＢ―04）

調査区の東半で検出した南北棟の礎石建物跡で、方位はＮ－８°－Ｅである。規模は東西12.0m・南北13.1mで、柱間数は東西が６間・南北が７間である。柱間寸法は、東西方向が東から2.10m・1.90m・2.10m・2.00m・1.95m・1.95mで、南北方向が北から2.20m・1.95m・2.00m・1.55m・1.65m・1.65m・2.10mとなっている。礎石は30cm×40cm～50cm×60cm大のものが使用されているが、柱位置を知る手掛かりは礎石と抜き取り穴を合わせ全体の約1/2が残っていたにすぎない。



第35図　SB―04実測図



第36図　SG—02実測図

池（ＳＧ—02）

ＳＢ—04の西側で検出した。東辺及び南辺が２段に掘られ、平面形は長辺約８ｍ・短辺約５ｍの長方形を呈する。各辺に胴木とみられる角材や丸太材が出土しているところから、当初には護岸の石組みがなされていたものと思われる。２段に掘られた東岸中位の平坦面縁端には、胴木を止めたとみられる６個の杭穴が認められる。池底は北に向かうほど深くなっており、最も浅い南端部での深さは約30cmを、最も深い北端での深さは約88cmを測り、その差は58cmある。

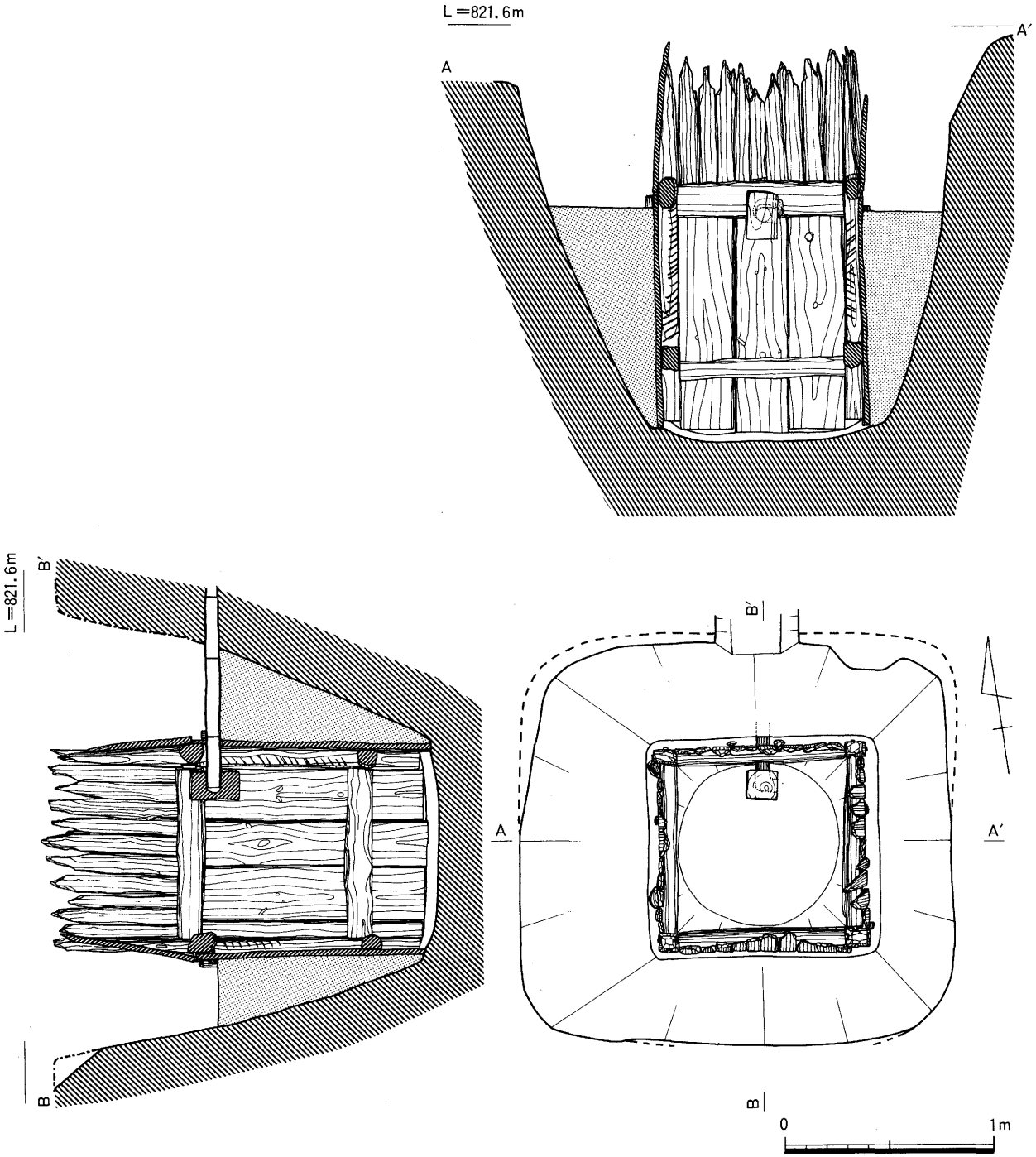
導水溝は南辺の西側延長に認められ南辺には胴木が認められることから石組みであったことが窺えるが、ＳＧ—01によって切られておりその全容は不明である。排水溝は東辺延長にあり、流出口には杭２本を打ち込み板を横に置いた堰が設けられている。

井戸（ＳＥ—04）

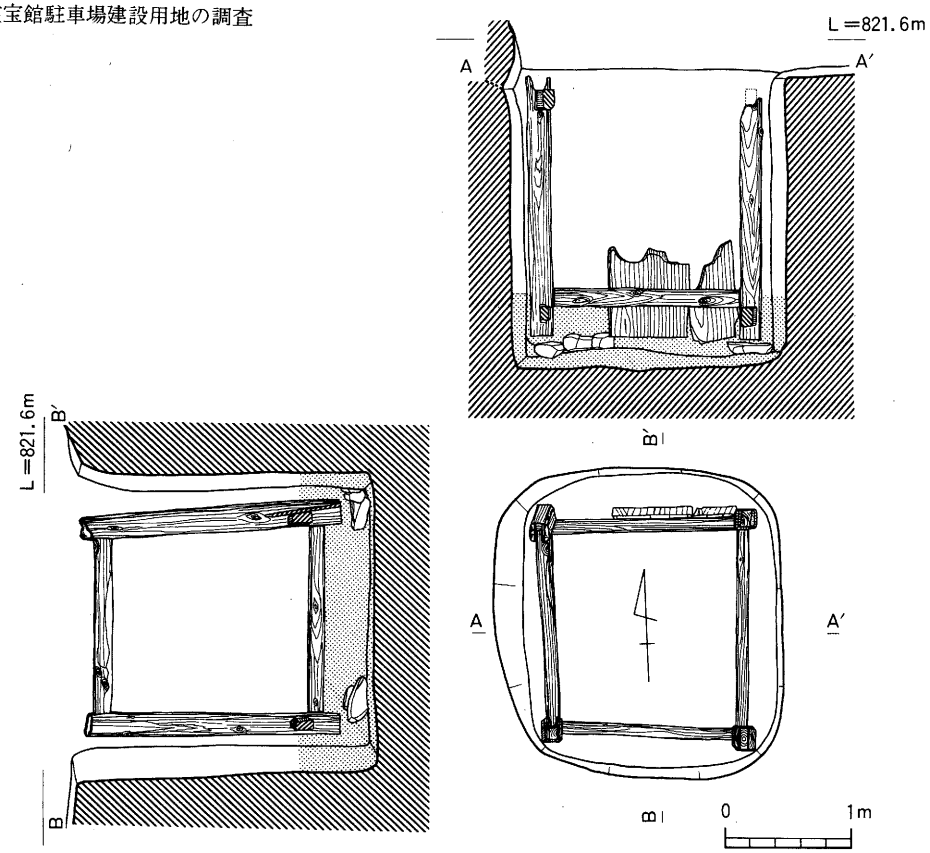
ＳＧ—03の東南方1.5mに位置する木組みの井戸で、掘形は上端の長辺約2.1m・短辺1.9m、底面の長辺約1.1m・短辺1.0m・深さ約2.0mを測る。井戸の枠組みは、上下各２箇所に枘穴を持つ角柱を四隅に立てこれに両端に枘を持つ角柱を桟としたもので、この枠の外側四辺に長さ1.1m前後・幅８cm～28cm・厚さ２cmの板を立て、さらにこの上方に幅７cm前後・厚さ約２cmの板計39枚を立てたものである。木枠と井側板とはなんら接合されておらず、単に裏込めの土砂で押さえているだけである。

井戸枠北辺上部桟直下の井側中央には径８cmの孔が穿たれ、井戸から北に延びる溝内（ＳＤ—06）

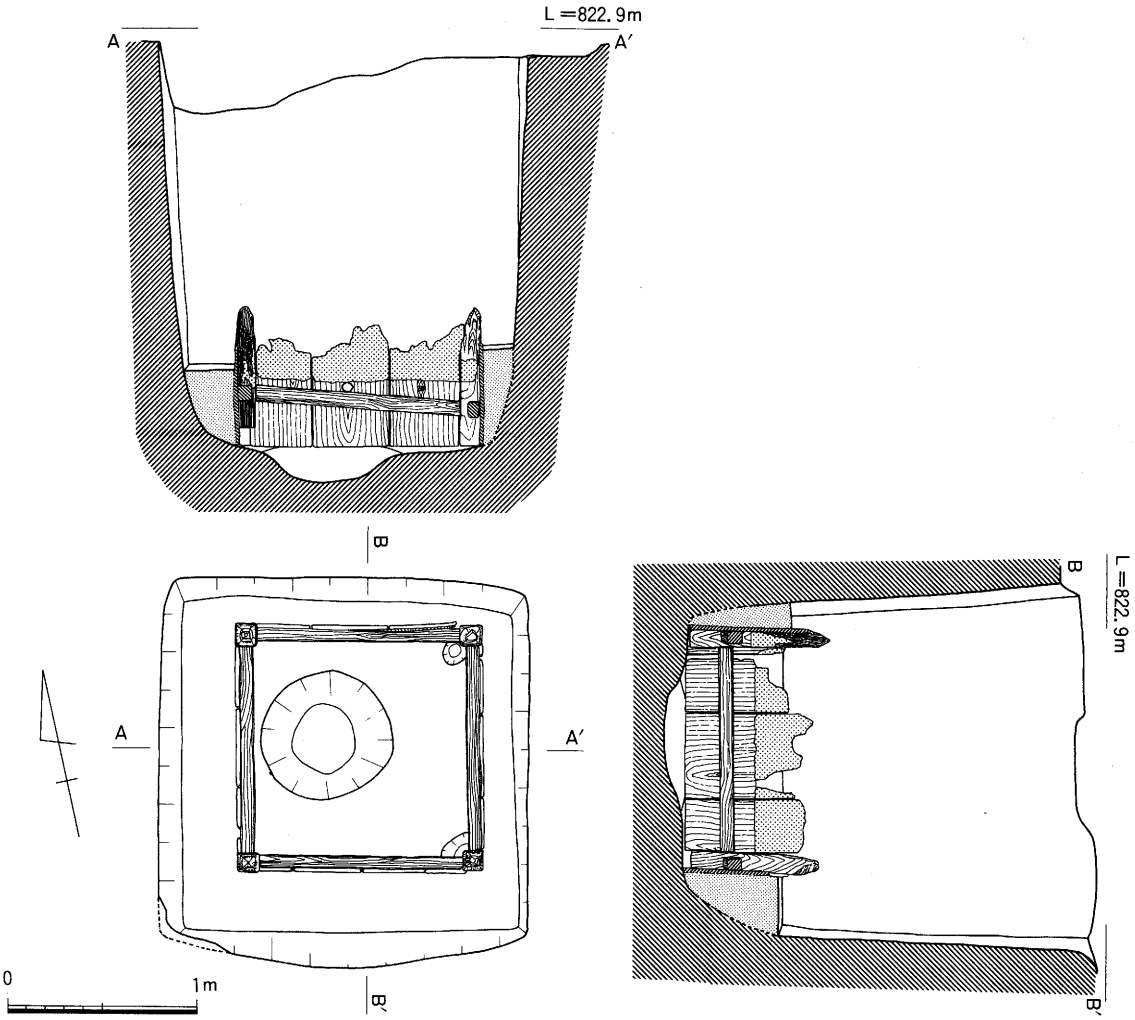
に節が抜かれ埋置された竹製導水管の先端がこの穴から井戸内に突き出でている。井戸内に突き出でた導水管先端部には、水の流出方向を変えるため「L」字形に孔を穿った導水管の木製継手が付けられている。



第37図　SE—04実測図



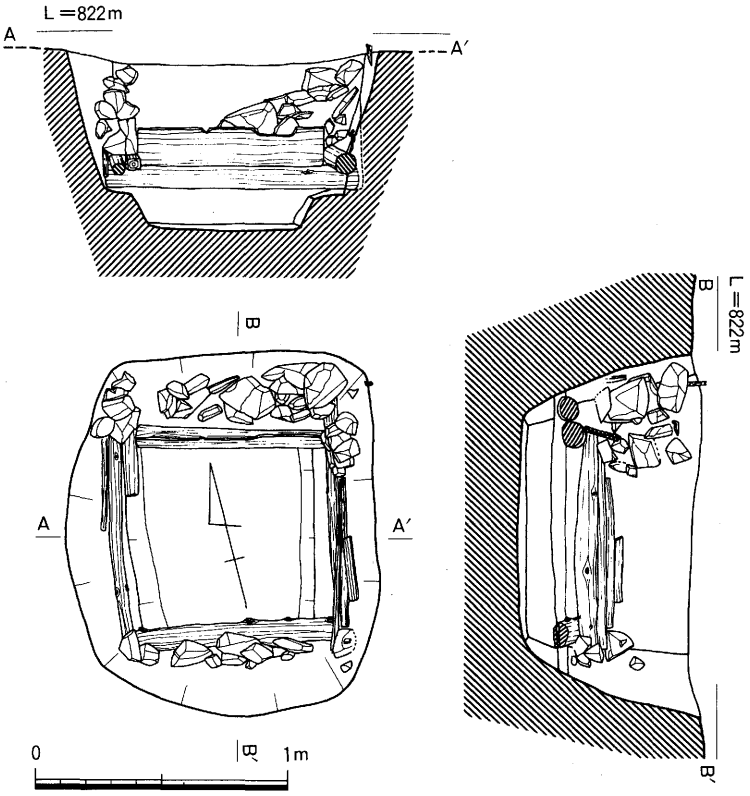
第38図　SE—05実測図



第39図　SE—06実測図

井戸（ＳＥ—05）

ＳＥ—04の西方６ｍで検出した木組み井戸である。一辺約2.6m・深さ約2.4mを測る掘形内に、ＳＥ—04と同様の構造を持つ井戸枠が設けられている。井戸枠の枠組みは、上下両端の２箇所に枘穴を持つ一辺18cmの角柱４本を四隅に立て、この角柱に両端に枘を持つ桟をわたしている。四隅に立てられえた角柱の下には、30cm～40cm大の礎石が据えられている。井戸枠の外方には、井側として四辺に板が立てられていたようであるが、北辺底部近くに幅が19cmと30cmで厚さが2.5cmの板２枚が残存していただけである。



第40図　SE—07実測図

井戸（ＳＥ—06）

ＳＥ—04南西方３ｍで検出した木組み井戸である。一辺約1.9m・深さ約2.1mを測る掘形内に、枘穴を持つ一辺約10cmの角材４本を四隅に立て、これに両端に枘を持つ桟をわたしている。井戸枠の外方には、井側として幅17cm～42cm・厚さ２cmの板が北辺及び西辺に各３枚・東辺及び南辺に各４枚の計14枚を立てている。井戸枠及び井側の残存状態は悪く、底部から上方75cmまでが残存していたにすぎない。これら井戸枠・井側は共に底面から38cm上方の表面が炭化していることから、火災に遭い焼失廃棄されたものとみられる。なお、井戸底面の北西寄りが径約0.7m・深さ約0.22mのすり鉢状に掘り凹められている。

井戸（ＳＥ—07）

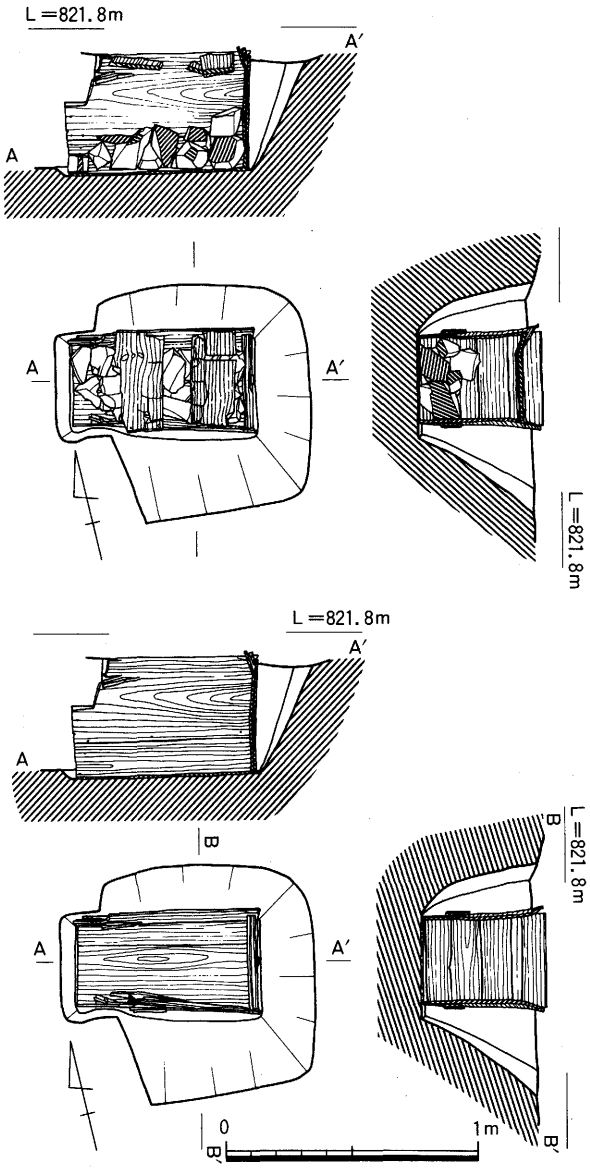
ＳＥ—04の北約14mで検出した木組み井戸と考えられる遺構である。掘形の平面形は長方形を呈し、上端で長辺約1.4m短辺約1.1m、底面で長辺約0.9m・短辺約0.6mを測る。底面から12cm上方部分の東辺と西辺には平坦面が設けられている。井側は、丸太材及び半截した丸太材を井桁に組んだ上に板を横組みしていたようであるが、北辺に１枚残存していただけであったためその組み方は不明である。なお、北辺と南辺の掘形と井側の間には拳大から人頭大の石が詰められていたが、井戸内から同大の石がかなりの数が出土しており、本来は掘形と井側の間すべてに石が詰められていたものと思われる。

土坑（ＳＫ—12）

ＳＫ—05の東北約３ｍのところで検出した。長辺約７ｍ・短辺３ｍ以内の長方形を呈し、深さ約0.03mを測り、北辺にのみ石積みがみられる。

埋木箱（ＳＫ—13）

ＳＥ—08の南西１ｍで検出したが、遺構の西側約1/3はＳＧ—01に伴うＳＫ—08によって切られている。掘形上端は、東辺0.85m・北辺の現存値約0.8m・南辺の現存値約0.65m、底面の長辺0.73m・短辺



第41図　SK—13実測図

0.39mを測り、深さは0.5mを測る。この土坑内に長辺70cm・短辺の上端が39cmで下端が35cm・深さ49cmを測る長方体の木箱が埋められていた。

木箱は、底面は幅10cmと25cm・長さ70cm・厚さ1cmの板2枚、北面は幅13cmと35cm・長さ70cm・厚さ1cmの板2枚、南面は幅11cmと37cm・長さ70cm・厚さ1cmの板2枚、東面は上から幅9cm・4cm・12cm・13cm・11cm、長さ70cm・厚さ1cmの板5枚からなっているが、蓋は幅18cmと20cm・長さ40cmの板2枚が残っていただけである。木箱の組み方は、底板と長辺側板及び小口側板は各々9本の鉄釘で、長辺側板と小口側板は8本の鉄釘で、小口側板のうち上から2枚目と3枚目の板は竹釘3本で留められていた。長辺側板の接合部は3本の竹釘で留めるとともに、両辺とも外方から板を当て鉄釘6本で留めている。残存している蓋板2枚には、各短辺に釘穴が残る。木箱の中には、底から20cmの高さまで8cm～13cm大の角礫が詰められていた。桶と箱の違いはあるが、便槽とみられるＳＫ—05同様の遺構と思われる。

溝（ＳＤ—04）

調査区東端を南北に走る幅50cm・深さ約40cmの溝で、延長約21mを検出した。ＳＫ—04によって切られており、ＳＫ—04以北には掘形内に板をＶ字状に横置きし、上端部には桟がわたされている。蓋のある溝と思われるが暗渠の可能性もある。

溝（ＳＤ—06）

ＳＥ—04から北に延びる溝で、延長20.4mを検出した。溝の幅は40cm～50cm・深さ約80cmを測る。溝底には、径6.5cm～8cm・長さ6m前後の節を抜いた竹製の導水管が、木製の継手で接続された状態で計4本が出土した。溝内の木製継手は長方体のもの3個が出土したが、いずれも長辺に直交する形で直線に貫通する穴をあけたもので、この穴に2本の竹樋の端部が差し込まれている。端部はいずれも節の部分を残し切断したもので、この部分を継手に差し込んで漏水を防ぐよう工夫されている。溝の底面及び竹樋のレベルは、検出部分北端に比べ井戸際の方がやや低い。竹樋は、井戸水を流出させるためのものではなく、井戸へ水を引くための導水管であり、溝は竹樋を埋設するための溝である。

溝（ＳＤ—07）

ＳＤ—06の東側2.5mの地点をＳＤ—06に並行して南北に走る溝で、延長21.2mを検出した。溝の幅は

50cm～60cm・深さ約62cmを測り、検出部分北端から15mの地点で南西に屈曲し、ＳＥ―04に取り付くものとみられる。溝内からは、ＳＤ―06にみられるような竹製の導水管は検出できなかったが、ＳＤ―06同様ＳＥ―04への導水管を埋設するための溝とみられ、ＳＤ―06に先行するものである。

溝（ＳＤ―08）

ＳＤ―07の西側0.4mを並行して南北に走る溝で、延長19mを検出した。溝の幅は40cm～50cm、深さ約66cmを測る。検出部分南端近くから西方に屈曲する様子を見せ、ＳＤ―06・ＳＤ―07同様ＳＥ―04に取り付くものとみられる。ＳＤ―07に先行すると考えられる溝で、ＳＤ―06・ＳＤ―07と同じく導水管を埋設するための溝と考えられる。

4　第４遺構面の遺構

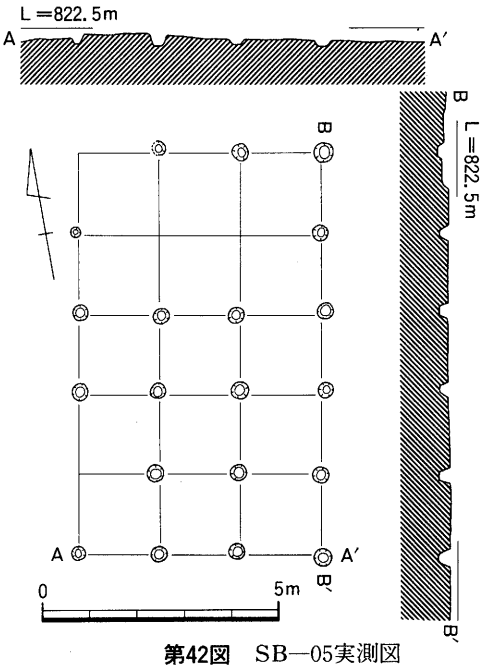
地山面を切り込んだ遺構群で、遺構面としては17世紀第１四半期を下限とする。大半は遺構面と対応するが、ＳＫ―14・ＳＫ―15・ＳＥ―09・ＳＧ―03・ＳＤ―10など12世紀代から15世紀代の遺構が、整地による削平を受けながらも部分的に残存していたものもある。

建物跡（ＳＢ―05）

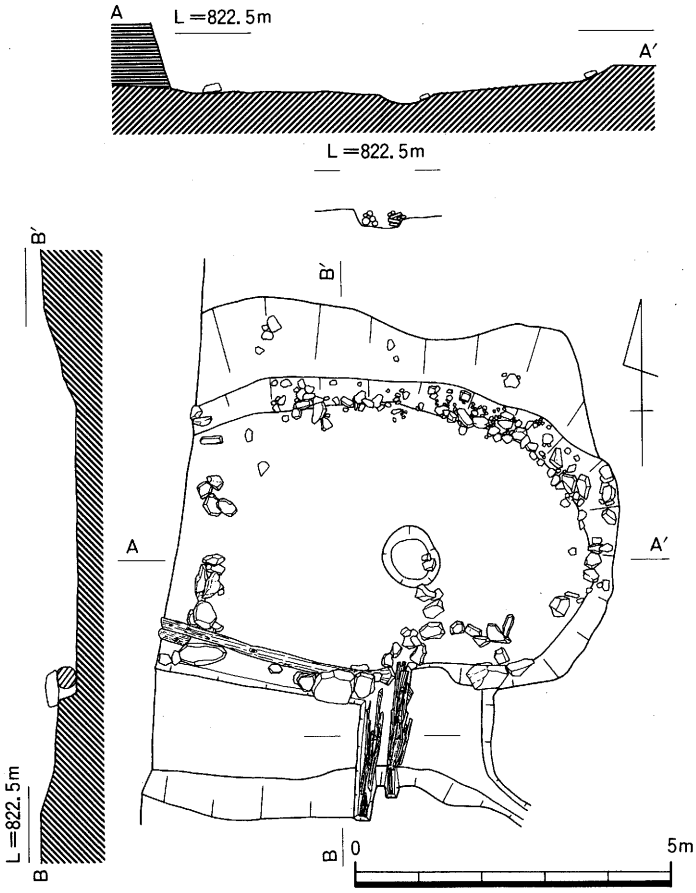
調査区の東半中央部で検出した南北棟の掘建柱建物跡で、方位はＮ―10°―Ｅである。規模は、東西が6.40m・南北が10.60mで、柱間数は東西３間・南北５間となっている。柱間寸法は、東西方向が東から2.10m・2.10m・2.20mとなっており、南北方向が北から2.15m・2.10mが３間・2.15mとなっている。柱穴は径約45cm・深さ約25cmを測るが、柱径は確認できなかった。

池（ＳＧ―03）

調査区西端で検出したが、一部が調査区外になるため全容は不明である。平面形は、長径７m以上・短径６m・深



第42図　SB―05実測図

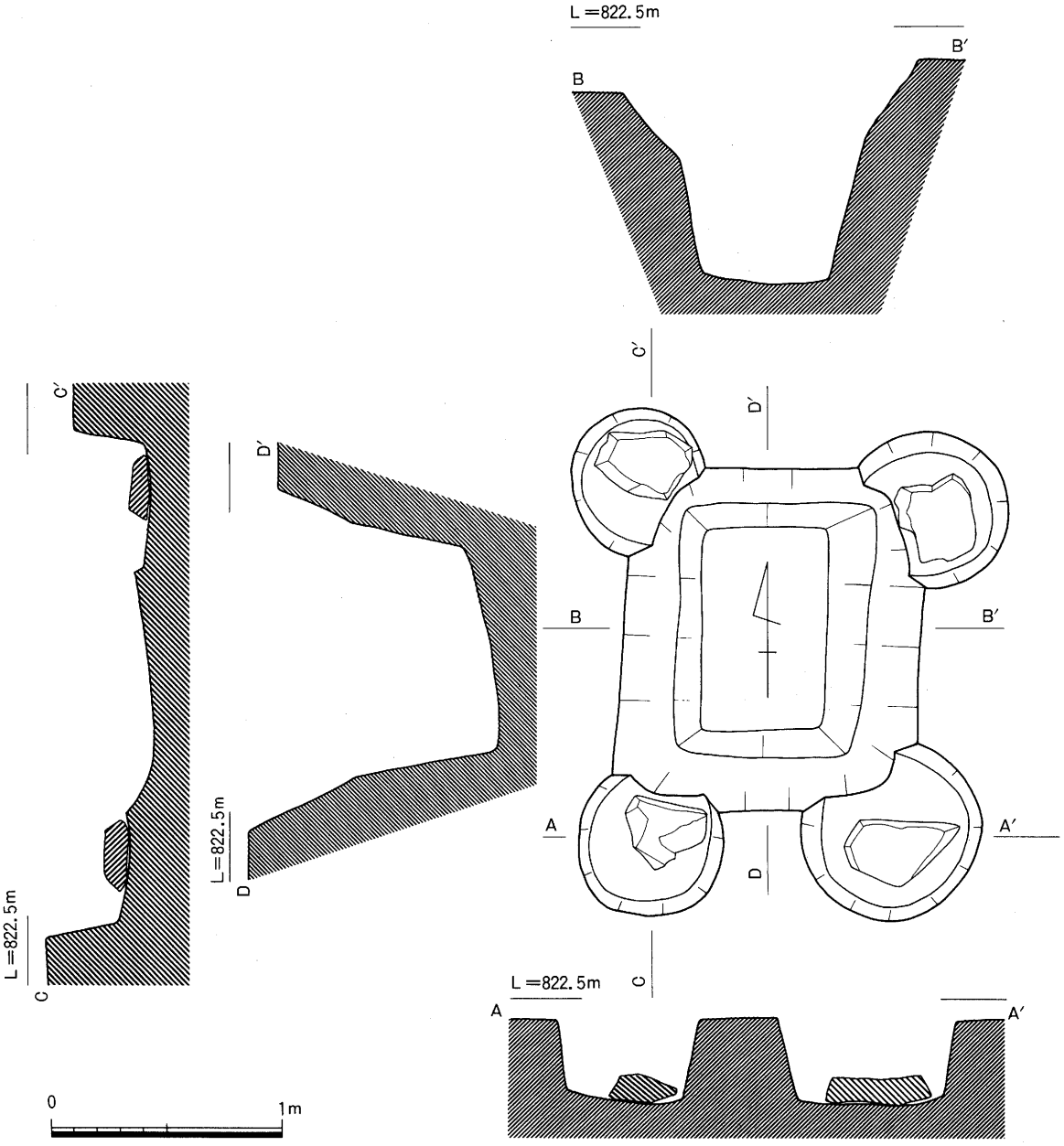


第43図　SG―03実測図

さ約0.5mを測る不整楕円形であろうと思われる。護岸として南辺には胴木を１本置き石積みが行われ、北半は10cm～50cm大の角礫が敷き詰められている。南辺に置かれた胴木の東端部分東側に、幅約60cm・深さ約20cm・長さ2.65mで傾斜角13°の池に流れ込む流入溝が設けられている。流入溝の中には径４cm～８cmの自然木や建築用板材が整然と並べられていた。流入溝池側端部から北へ1.5mの池底には径約0.95m・深さ約0.2mの穴が掘られている。ＳＧ―01内のＳＫ―07と同じ性格のものと見られる。

井戸（ＳＥ―08）

調査区中央で検出した井戸で、井戸枠及び井側は検出できなかったが、本来は木組みの井戸と考えられる。掘形は、上端で長辺約1.5m・短辺約1.2m、底面で長辺約0.9m・短辺約0.5mを測る。上屋が伴うらしく四隅には柱穴が掘られ、柱穴底には上面が平らな砂岩の割石を置き礎盤としている。



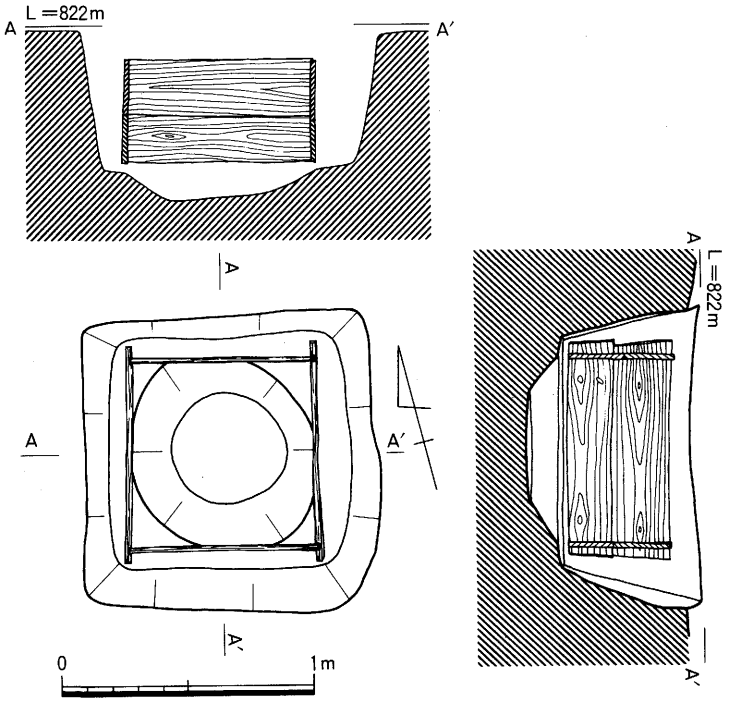
第44図　SE―08実測図

井戸（ＳＥ—09）

ＳＥ—08の北東約３ｍで掘形だけを検出したもので、本来は木組みの井戸と考えられる。掘形は東辺1.72m・西辺1.65m・北辺1.65m・南辺1.66mを測る方形を呈する。底辺は東辺1.63m・西辺1.41m・北辺1.56m・南辺1.59m、深さは1.24mを測る。底面中央には、さらに一辺1.14m・深さ0.22mの隅丸方形に掘り凹められている。

木枠遺構（ＳＫ—14）

ＳＫ—13の北１ｍで検出した遺構で、一辺の内法が0.73m・深さが0.40mの木枠を埋めたものである。掘形は、上端の一辺1.15m・深さ0.68mを測る方形を呈し、底面の一辺は約0.9mを測る。掘形である土坑の底面中央には、径約74cm・深さ約12cmの穴が掘り凹められている。木枠東西辺に長さ84cm・幅17cm～23cm・厚さ２cmの板２枚が、南北辺には長さ73cm～76cm・幅18cm～22cm・厚さ２cmの板２枚が使用されている。木枠の組み方は、東西辺の板に幅１cm・深さ１cmの溝を掘りこの溝に南北両辺の板を差し込んだもので、このような構造は他の遺構にはみられないものであるが、井戸とみられる。



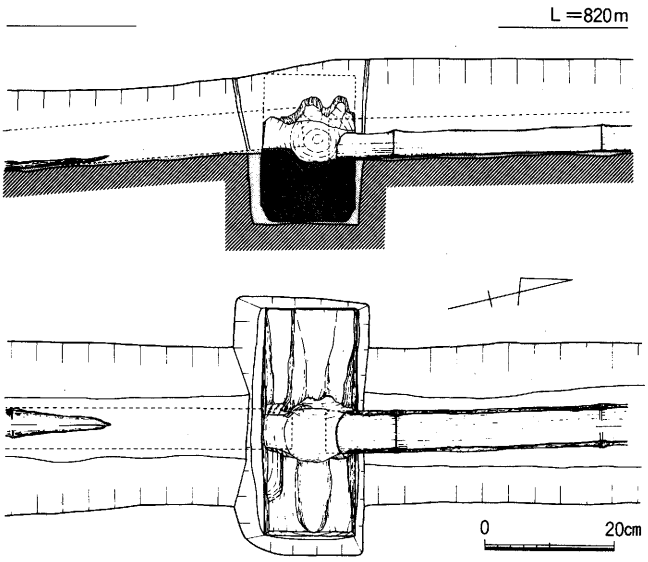
第45図　SK—14実測図

土坑（ＳＫ—16）

調査区の南西にあり、ＳＥ—06の東1.5mで検出した。長径1.35cm・短径1.12cm・深さ0.18cmを測り、平面形は楕円形で摺鉢状を呈した掘形である。土坑内から土師器が多量に出土した。

溝（ＳＤ—09）

ＳＤ—07の東７ｍを南北に走る溝で、延長24.5ｍを検出した。幅約50cm・深さ約57cmを測り、検出北端から南へ11mの地点で直角に西に屈曲し、その後は弧状を呈しながら南方へ曲がる。溝底からは径５cm～７cmの節を抜いた竹製導水管と、３個の木製継手が出土している。屈曲部の木製継手は、「Ｌ」字形に穴を貫通させたもので、他の２個はＳＤ—06で出土したものと同じ作りである。



第46図　SD—09木製継手実測図

第3節　遺　　物

1　包含層出土の遺物

この地区では、遺物は第1層から第7層に分けて取り上げられている。しかし、霊宝館新収蔵庫用地地区同様にこの地区においても純粋な包含層はなく、すべて整地層と思われ、各層の遺物の時期幅は相当広く、すでに霊宝館新収蔵庫用地地区の出土遺物の項で述べたように、出土遺物は単にその下限時期が各整地層の上限時期を示すにすぎない。

この地区における遺構面は、地山面を含め4面検出され、おのおの第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面、第4遺構面と名付けられている。また、各遺構面の上には火災によると思われる焼土層や炭層が確認されているので、その火災層に実年代を当てながら各遺構面に挟まれた間層を単位として、以下にこの地区出土の遺物の概況を述べることにする。

(1)　第1・2層

第1層は表土に近い性格のものと考えられ、近世から近代の遺物が出土している。第2層は幕末から明治ごろまでの遺物を含んでいる。第2層の直下では上層遺構面が検出されている。

①　第1層（図27・28、図版31・32　747～794）

中国製磁器、国産陶磁器、石製品、金属製品などが出土している。

a　中国製磁器（747～750）

747は通例の16世紀タイプとされる端反の白磁の皿で、やや小振りのものに類する。胎土は灰みを帯び、釉は粘性が高く透明度が低い。全釉で、畳付の釉はフキ取っている。748は劃花文系の青磁碗である。体部は直線的に外上方に開き、口縁部を心持ち外反させている。内面体部は非常に幅の広いヘラ先による片切彫りで区画されている。胎土は灰白色を呈し、精良で堅緻である。釉は透明度が非常に高く光沢があり、灰緑色に発色している。749は青磁の稜花皿である。体部下位を腰折れにし、外反させる。口縁端部に7㎜～8㎜の間隔で浅い抉りを入れて稜花にしている。内面口縁部付近に2条巡る圏線を除き無文である。胎土は暗灰色を呈しやや粗く、深緑色に発色している。火中して器表は細かく泡立っている。750は染付の皿である。口縁の内弯する器形で、外底には放射状のカンナ痕を残している。内底には鹿と思われる動物文を描き、体部には昆虫文が見られる。外面体部には牡丹唐草文を描いている。胎土は精良で呉須は鮮やかに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取るが、部分的に砂が付着している。

b　国産磁器（751～777）

751～753は伊万里の磁器である。 751はわずかに腰を折り、口縁部を外反させる皿である。胎土は純白に近く精良で、釉はやや青みを帯び、光沢は鈍い。752は蛇ノ目凹型高台を持つ型押しの輪花皿である。胎土は純白で、釉はわずかに青みを帯びた光沢がある。外底蛇ノ目部の釉のフキ取りも丁寧である。753 は盃である。腰が張り、体部が直線的に立ち上がる器形である。外底の削りが深く、底部は非常に薄い。火中しているため器表の釉が変色している。754は型押しの木瓜形の皿である。内面体部に不明瞭であるが、木葉と思われる浮文が見られる。胎土は精良で、釉は粘性が強くやや灰みを帯び、光沢は鈍い。755～762は伊万里の染付である。755は外面体部に二重網目文の見られる碗である。体部は丸みを呈し、器肉は薄い。高台は低く、外面体部に便化した「大明年造」銘が見られる。釉はやや青みを帯び、

呉須の発色は良好である。756～759はほぼ同形の碗である。底部や体部の器肉が厚く、雑な作りである。756はやや丁寧に作った桐のコンニャク判を、外面体部に無造作に押した碗である。外底には「太明年造」銘が見られる。胎土は灰みが強く、釉も灰白色を呈している。呉須も灰みが強く発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っているが、少量の砂が付着している。757は外面体部に草花文を描き、外底には非常に簡略化した「太明年造」銘が見られる。胎土は灰白色で、釉は透明度が低くやや赤みを帯び濁った灰褐色を呈し、呉須は黒灰色に発色している。釉は畳付を避けて施釉され、高台内外面を部分的に露胎で残している。758も757同様に、外面体部に草花文が描かれるが、体部の器肉は際立って厚く、全体に鈍重である。胎土は灰白色で、釉は灰みを帯びるが透明度は高い。呉須は灰青色から黒褐色に発色している。施釉方法は757と同様で高台内外に露胎部分を残し、畳付には砂が大量に付着している。759は外面体部に筆による草文と紅葉文の見られるものである。紅葉は２葉を１単位としたコンニャク判である。高台径が小さく、比較的丁寧な作りである。胎土は純白に近く、釉はやや青みを帯び透明度が高い。呉須は淡い青灰色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っているが、少量の砂が付着している。760は755に似た器肉の薄い碗である。外面体部上半に矢羽根文を、体部下半に氷烈文を線描きにより巡らせている。755同様、呉須は良好に発色している。761は口縁部を外反させ、端部に面を持たせた鉢である。口縁端面には左下からの斜めの刻み目が施されている。外面体部上半にはペンシルドローイングによる雷文帯が巡る。内面体部は２～３分割され、やはりペンシルドローイングによる樹木文や円窓内に細線と濃筆を使った瑞果文などが見られる。胎土は純白に近く、呉須は彩度の高い発色である。762は草花文の一升徳利である。やや下膨れの体部から長い鶴首状の頸部が立ち、口縁部を外反させて端部を丸めている。内面体部と頸部の境には、轆轤による絞り込みの皺が残っている。胎土はやや灰みを帯び、呉須は灰青色に発色している。外面は全釉の後、畳付の釉をフキ取っている。畳付には少量の砂が付着する。763は断面台形のしっかりした高台を持つ大形の皿である。内底に布袋と思われる人物文が慣れたタッチで描かれている。胎土は少量の微細な砂粒を含みやや粗い。釉は高台外面までかけられ、一部内面底部に流れ込んだ釉は畳付でフキ取られている。764は稜花の手塩皿である。内面体部には夫婦岩と島影から昇る朝日が描かれ、外面体部には３単位の島影が見られる。稜花にした口縁端部には、口紅風に呉須を塗っている。呉須の発色は良好で、彩度が高い。全釉で畳付の釉は丁寧にフキ取っている。765はいわゆる陶胎染付の稜花の皿である。やや内弯気味の体部を口縁付近で外方に水平近くまで折り曲げ、さらに端部を上方につまみ上げている。口縁端部を内側に凹ませて、口縁を稜花状にしている。胎土は暗灰色で、微細な砂粒を多く含み陶質である。火中して器表が泡立ち、内面の文様は不明である。外面体部には雲文と思われるものが見られる。全釉で畳付の釉をケズリ取っている。766は青磁の異形鉢である。関西周辺のものと思われるが産地は不明である。純白で精良な胎土で、釉はやや失透するが深味のある翡翠色で、南宋官窯の青磁の発色に近い。全体に粗い貫入が走る。外底は平高台で露胎である。767・768は美濃瀬戸系のものと思われる型押しの白磁である。767は四角坏で、新収蔵庫地区下段表土出土417などと同様のもである。内底から体部には精巧な花や葉の浮文が見られる。高台も四角形である。やや失透した淡青灰白色の釉が全体にかけられ、畳付の釉はフキ取られている。768も同様の角坏であるが、767に比べて深い器形で、内面には浮文が見られない。外面体部にはすでに剥離しているが、上絵付けで文字が書かれていた痕跡が見られる。769～772は関西系のものと思われる染付の盃である。769・770は口

縁部の直行するもので、外面体部にマンガチックな龍が細線と濃筆により描かれている。共に火中するが、呉須の発色は良好である。771・772は口縁部の外反するものである。外面体部を２分割し、「赤壁賦」の漢詩と園遊図であろうか、船に乗った人物像が細かい文様で描かれている。呉須は鮮やかに発色している。771は火中している。773は産地不明の染付の急須である。外面体部にはプリントによる線描きの鳳凰文などを描き、線内を濃筆で潰している。染付には化学顔料を使用している。体部下半は露胎で、露胎部には墨のようなものが塗られている。774～777は美濃瀬戸系のものと思われる型押しの白磁皿である。腰折れで、口縁部の外反する器形である。内底には細い線状のスタンプによる吉祥文の陰刻が見られ、皿を半分に割るように内外面を問わずズブずけにより褐釉がかけられている。畳付の釉は丁寧にフキ取られている。胎土に若干の鉄と思われる黒い細粒が含まれ、露胎部は淡褐色を呈している。釉は失透して純白に近い。774・775・777は火中している。

c　国産陶器（778～788）

778は口縁部を上方に小さくつまみ上げた、唐津の灰釉の皿である。内底に砂目跡を残している。胎土は精良で灰褐色を呈し、釉は灰緑褐色で光沢がある。外面体部下半を露胎で残す。779は備前焼の兎形水滴である。型作りによる左右を貼り合わせたもので、内面には無数の指頭痕が残っている。頸部を欠くが背中の部分に注水のための直径約６㎜の穿孔がある。胎土は微細な砂粒を含み堅緻で黒灰色を呈し、器表は暗赤褐色である。780は玉縁状の口縁を持つ信楽焼の壺である。胎土には多くの砂粒を含むが、堅緻で黄灰色を呈している。器表は黄橙色に発色し、表面には胎土の長石が白い粒になって浮き出ている。781・782は美濃瀬戸のものと思われるおろし皿である。781は金おろしに近い形の把手の付く器形である。左右の側縁は直方体の紐を貼り付けたもので、重ね焼きの際の陶枕を兼ねている。おろし目はやや太めの三角刀のようなものを使って、交互に逆向きに目を立てている。おろし目部分には灰緑色の灰釉がかけられている。胎土は鉄と思われる黒い微細粒子を含み灰白色で、器表は茶褐色を呈している。782は角皿風の器形で、外面全体に型押しの際の細かい布目痕が残っている。茶褐色の褐釉を内面全体と外面口縁周縁部までかけ、口縁端部をヘラで面取りし露胎にしている。おろし目はやはり交互に逆向きに目を立てている。おろし目は781より若干細かい。783～785は信楽などでも焼成されているが、現状では産地不明と言わざるをえないものである。783は新収蔵庫地区下段ＳＫ―04出土699などと同様の灯明皿である。784も783と同様の胎土・釉の蓋で、上面のみの施釉である。785・786は同一個体ではないが、同じタイプの土瓶（786）と蓋（785）である。黄白色のややザラついた胎土に、艶のある透明釉がかかっている。786は外面体部から内面口縁部に施釉し、口縁上端面の釉は丁寧にフキ取られている。おそらく体部下半を露胎で残すものと思われる。外面体部には鉄による線描きの大きい花弁文が描かれている。787・788は丹波焼の徳利である。新収蔵庫地区下段第１層出土463と同様のものであるが、763の高台が平高台であるのに対して788は輪状の高台をもち、砂が大量に付着している。また、463は「高野山」の文字がノミによる彫り込みであるのに対し、787･788の文字は白釉によって書かれている。788の体部裏面には「辻酒店」の文字が見られる。

d　石製品（789・790）・金属製品（791～794）

789は小形の滑石製鍋である。非常に丁寧な作りで、内面や口縁部は綺麗に磨かれている。口縁部外面や鍔上面のケズリは、ナイフの痕跡を残さないほど丹念である。鍔端部から体部には煤が厚く付着する

が、体部の削りは縦方向にナイフの痕跡を残している。790は硯と思われる。ごく一部に陸の部分を残すが、上下面とも板状に剝離している。粘板岩と思われる。791・792は金銅製の飾り金具である。薄い布状のものの隅飾りとみられ、毛彫りによる唐草文と空間を埋める小さい泡状の円文の刻印が見られる。793・794は銅製の火箸である。上端部に丸い頭部をつけている。上部の抉りは、おそらく双方を鎖などで繋ぐためのものと思われる。

② 第2層（図28・29、図版32・33、795～817）

中国製磁器、国産陶磁器、土師質土器などが出土している。

a　中国製磁器（795～797）

この層での中国製磁器の出土は非常に少ない。795は割高台の白磁の坏で、陶質に近くザラついた黄灰色の胎土を持つタイプである。高台は4分割され、内面底部にも4ヶ所の目跡（高台跡）を残している。釉は光沢はあるが全体に細かい貫入が走り、貫入部は茶褐色に発色している。796・797は同一タイプの白磁の端反皿である。やや大振りで、丁寧な作りである。胎土には微細な鉄の黒斑を含むが、釉は乳白色を呈し艶がある。全釉で畳付の釉をフキ取るが、フキ取り幅は広く丁寧である。

b　国産磁器（798～809）

大部分が伊万里磁器（798～808）であるが、少量の美濃瀬戸系の磁器（809）が見られる。798は端反の坏である。胎土はやや軟質で粗く乳白色を呈し、釉はわずかに黄みを帯びる乳白色に発色している。全体に貫入が走り、貫入部は部分的に赤褐色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。799は型押しの稜花皿である。高台は蛇ノ目凹型高台である。胎土は純白に近く精良である。釉は青みが強く透明度が高いため、内面体部の太い丸彫りによる稜花を浮き上がらせている。全釉で高台蛇ノ目部から畳付にかけての釉は丁寧にフキ取っている。800～802は青磁である。800はいわゆる青磁染付の菊皿である。内面体部には丸ノミによる蓮弁が巡り、部分的に青磁釉を円あるいは扇形にかけ残し、かけ残し部分の外周を染付けで区画し、その内部に染付けにより文様を描くものである。胎土は精良であるがやや灰みを帯び、釉は黄緑色を呈している。畳付の釉は3巡してケズり取っている。801は盤である。内底には牡丹と思われる肉厚の印花文がスタンプされ、内面体部には浅い片切彫りの草花文が見られる。外面は無文で、高台は蛇ノ目凹型高台である。胎土は精良で淡灰白色を呈し、釉は草緑色で良好に発色している。蛇ノ目部は釉をフキ取った後、鉄を塗り赤褐色に着色させている。蛇ノ目部には輪陶枕の痕跡が残る。802は香炉である。内弯する体部を上半でさらに内側に折り込み、口縁部を水平に折り曲げて外に引き出している。三足が付されるが、脚部を失っている。胎土は灰白色で、鉄の微細な黒斑が認められる。火中して釉はカセている。内面口縁部付近から外面全体に施釉されるが、畳付の釉はフキ取られている。畳付の露胎部分は鉄が浮き、暗灰色を呈している。803～808は染付である。803は稜花皿である。内底の文様は山影と雲であろうか。口縁端部には鉄による口紅を塗る。釉はわずかに青みを帯び、呉須の発色も良好である。全釉で畳付の釉を雑にフキ取り、砂が付着している。804は仏飯器である。外面体部には、濃筆による崩れたタコ唐草文が巡っている。胎土は鉄を多く含み、微細な黒斑が多く見られる。釉は青みを帯び、呉須の発色も良好である。斜めに切られた高台外端面以下を露胎で残し、露胎部との境は黄橙色を呈している。805は蓋物の小壷である。外面体部には、細筆による慣れた手付きの雲堂文が巧みに描かれている。胎土は若干の砂粒を含み、ややカセた感じである。呉須の発色はあまり良好では

なく、黒青色を呈している。全釉で口縁端部から外面肩上部までと畳付の釉をフキ取っている。806は蓋物の坏である。外面体部には、細かいタッチの牡丹唐草文を巡らせている。胎土は精良であるが、釉はやや黄ばみ、呉須の発色は良好である。全釉で口縁端部と畳付の釉をフキ取っている。807は端反の碗で、高台はやや外方に開いている。外面体部と内面口縁部には、線描きによる格子文を巡らせている。内底の釉は蛇ノ目状に雑にフキ取るが、径約4㎝の輪状に砂が付着し、直接の重ね焼きによる高台の痕跡を残している。釉は灰みが強く、呉須は灰青色に発色している。畳付の釉は雑にフキ取られ、砂が付着している。808は761などと同一タイプのものであるが、761に見られた口縁端面の刻み目はなく、代わりに口縁上端部に浅く抉りを入れて波状にしている。外面体部にはペンシルドローイングによる独特のタッチの牡丹唐草文が描かれ、体部下半には波濤文が、高台外面には変形雷文がやや太い筆で描かれる。内面口縁部にはやはりペンシルドローイングによる四方襷文が巡り、内底には花文が描かれている。高台は蛇ノ目凹型高台で、中央部に「乾」字銘が見られる。胎土は純白に近く、釉はやや青みを帯び、呉須は彩度が高く鮮やかに発色している。全釉で高台内面と蛇ノ目部の釉を丁寧にフキ取っている。809は美濃瀬戸の染付碗である。口縁部は外反し、高台はやや外開きである。外面体部には笹と思われる文様が2段に描かれている。内面口縁部には墨弾きによる雲文を染め残した文様帯が巡っている。胎土は純白に近く精良で、呉須は色鮮やかに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。

c　国産陶器（810～815）

810は産地不明の灰釉の碗である。胎土は黄灰色でザラつき、美濃のものに似るが限定できない。外面体部下半を露胎で残し、釉は透明度が高く灰緑色で、溜り部分はガラス質で黄灰緑色を呈している。全体に粗い貫入が見られる。811・812は同一個体の蓋（811）と急須（812）である。783～786のグループ同様に産地の同定は難しい。微細な黒斑を含み灰みが強いが、堅緻な胎土である。蓋上面や身の外面体部に鉄による線描きとクロームによると思われる緑色の釉で色付けされ、蓋は上面に、身は下半を残した外面に透明釉がかけられている。釉には全体に細かい貫入が走っている。なお、蓋の底部には回転糸切痕を残している。813は玉縁状の口縁を持つ備前焼の壺である。内面頸部から外面頸部にかけてヨコナデが見られる。内面頸部下半から下部は火中によるためか、ハゼて器表が剝落している。口縁上面及び肩部には自然釉がかかる。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈している。814は常滑系のものであろうか。外面頸部に綾杉状の櫛描文と、肩部に波状文らしきものが見られるが、火中しているため自然釉が泡立ち、詳細は不明である。胎土は砂粒を多く含むが堅緻で、暗灰褐色を呈している。815は丹波焼の摺鉢である。内面体部を中心部から斜め上方にナデ上げ、内外口縁部付近に丁寧なヨコナデを施している。また、内面口縁部下端には浅い凹線をナデにより巡らせている。外面体部は指頭痕を残したまま粗くナデている。内面体部の摺目は1本単位に粗く付せられている。胎土は砂粒を含むが非常に堅緻で灰白色を呈し、器面は灰茶褐色に発色している。

d　土師質土器（816・817）

816・817は五徳状の土師質土器である。内面下端部に煤が付着していることから、火にかけて上に鍋などを置くためのものと思われるが、五徳という呼称が適しているかどうかは疑問である。817の外面には吹きこぼれれの痕跡が見られる。内面3ヶ所に受け状の突起があり、実測図の上下が正しければこの突起は受けとしての機能を果たさず、天地を逆にする必要がある。胎土は雲母粒や微細な砂粒を含むが

精良で、黄橙褐色を呈している。

(2)　第３層（図29・30、図版33・34、818～851）

この層は、第１遺構面と第２遺構面に挟まれた火災層（炭層）である。文化６年（1809）あるいは文政３年（1820）の火災が考えられるが、さらに下層の第５層、第６層間に見られる火災層などとの関連から文化６年のものを当てるべきであろう。ただし、純粋な焼土層ではなく、むしろ火災に伴う整地層と考えるべき性質のもので、古い時代の遺物が相当量出土している。

a　中国製磁器（818～824）

818は白磁の木瓜形皿である。根来寺などにおいて出土する、注文品と考えられる「天文年造」銘の見られるものと同種である。火中して釉は失透するが、胎土は非常に精良である。全釉で畳付の釉を面取りするように三方からケズリ取っている。819は青磁の蓮弁文碗である。外面体部には片切彫りであるが剣頭部を丸くし、体部に膨らみのないタイプの幅広の蓮弁文が見られる。内底部には不明瞭な印花文がスタンプされている。胎土はやや粗いが堅緻で灰白色を呈し、釉は草緑色に発色している。総釉で外底の釉を輪状にケズリ取っている。露胎部は茶褐色を呈している。820～823は染付である。820・821は同タイプの皿で、口縁部の内弯するものと思われる。内底部には岩石樹木文が見られ、外面体部は細線により何分割かされている。ともに外底に放射状のカンナ痕が見られる。胎土は鉄の黒斑を多く含み、呉須はやや不鮮明である。全釉で外底の釉を粗くケズリ取り、砂が多く付着する。822も内底部に樹木文の見られる皿であるが、器形は端反である。16世紀前半を中心に見られる端反皿と異なり、新収蔵庫地区下段表土出土408などと同類の端反の皿である。外底に放射状のカンナ痕が見られる。胎土は灰みが強く、呉須は灰青色で不鮮明である。823はいわゆる砂高台の皿である。16世紀の第４四半世紀頃から見られるようになる一群である。従来のものとは産地を異にすると考えられるものであるが、従来群の器形に対応する口縁端反のものや、口縁が内弯するものなどがある。なお、根来寺においてはこの群に属する碗が天正13年（1585）直後の層から出土している。823は口縁の内弯する器形のもので、削り出しによる幅広の高台が付く。内底には便化した獅子文であろうか、雑な文様が染付けされている。胎土は砂粒を多く含みやや粗く、灰黄色を呈している。釉は粘性が高く、透明度の低いもので灰みを帯び、呉須は灰青色に発色している。全釉で畳付には大量の硅砂状のものが付着している。824は赤絵で、口縁部の内弯する器形の皿と思われる。内底には染付けによる網代文が見られ、赤と緑による上絵付けの花弁文を加えている。また、外底には染付としての焼成の際に釉が虫喰い状態の場所があり、この虫喰いを隠すように緑の点を落している。なお、外底には染付けによる「天敬年製」の染付銘が見られ、この皿が17世紀の20年代のものであることが知られる。

b　国産磁器（825～835）

825～832は伊万里磁器である。825は754などと同類の白磁の型押し木瓜皿である。内面には木葉の細い浮文が見られる。高台も器形と同形に貼り付けられている。胎土は黄白色で陶質に近くザラついた感じで、釉も黄白色を呈している。全釉で畳付は２方向から面取りするようにケズリ取られている。826は白磁の瓶で、鶴首状の長い頸部を持つものと思われる。口縁部は外に折り返して玉縁状にしている。胎土は鉄の黒斑を多く含み、灰白色を呈している。火中して釉はカセている。827は第２層出土802と同形の青磁香炉である。釉は光沢のある草緑色で、内面体部下半を露胎にしている。畳付の釉は丁寧にフキ

取られているが、802同様に暗灰色を呈している。828～832は染付である。828は体部の器肉の薄い、体部の内弯する器形の碗である。内底には米粒大の目跡が現状で３ヵ所見られる。外面体部には彩度の高い呉須で草花文が描かれ、外底には「大明年製」の銘が見られる。胎土は純白に近く精良であるが、釉はややカセた感じに焼成され、内外面に細かい黄白色の斑点が無数に浮かんでいる。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。829は蛇ノ目凹型高台のソバ猪口である。外面体部下端には便化した蓮弁文帯を巡らせ、体部を垂線で８分割し、交互にタコ唐草文と草花文を描いている。内面口縁部には四方襷文が巡り、内底にはコンニャク判をまねた筆描きによる五弁花文が見られる。胎土には微細な黒斑を含むが精良で、呉須の発色も良好である。全釉で高台蛇ノ目部の釉を雑にフキ取っている。830は小形のソバ猪口である。通常の輪高台で、体部はわずかに内弯気味に外に開く器形である。外面体部には樹木や灯篭と思われる文様が雑に描かれ、外底には「渦福」銘が見られる。胎土は精良で、呉須は薄くやや不鮮明であるが発色は良好である。全釉で畳付の釉は面取りするようにケズリ取っている。831は型押しによる左右を貼り合わせた鳥籠形の水滴である。上部を欠くが、鳥形の注水部が付くものと思われる。外面体部全体に斜格子状の籠目が刻まれ、肩部には花弁と思われる貼花が見られる。外面肩部から体部上端にかけて、濃筆により薄い水色の呉須が流されている。胎土は純白に近く精良で、釉はわずかに青みを帯びている。外底は露胎で残している。832は芙蓉手の盤である。内面体部の８分割された窓内に宝尽文や草花文が見られる。外面体部は縦線により４分割され、筆描きによる丸点文などが見られる。火中して器表は小さく泡立っているが、呉須の発色は良好である。833～855は関西周辺のものと思われるが、産地不詳の染付である。833・834は「赤壁賦」の書かれた第１層出土769・770と同種の坏で、共に火中している。835は型で透しを打ち抜いた四面を貼り合わせた筆立状の染付である。胎土は純白に近く精良であるが、火中して全体に器表が泡立っている。上端面を濃で塗りつぶし、各面に細線による単純な染付の文様帯を巡らせたものであるが、透しは相当に複雑そうである。

c　国産陶器（836～844）

836～840は唐津の製品である。836は灰釉の皿である。口縁部を欠くが、体部上半で内傾し、口縁部を外に折る器形と思われる。高台は抉りの浅い輪高台である。胎土は砂粒を含むが灰黄色で堅緻である。釉はやや失透した感じであるが、光沢があり、灰褐色を呈している。外面体部下半を露胎で残し、露胎部は黄灰褐色に発色している。目跡は見られないが、胎土目の時期のものと思われる。837は灰釉の小壺である。胎土はやや砂っぽくザラつき、灰赤褐色を呈している。外面体部下半は露胎で残し、内外面にかけられた釉は失透してわずかに白濁した粘性の強いもので、暗灰褐色に発色している。838は灰釉の碗である。胎土・釉共に新収蔵庫地区上段ＳＶ―01出土372などと同じものである。内底に現状で３ヵ所の米粒大の砂目跡を残している。839・840は新収蔵庫地区下段ＳＤ―01出土710と同じタイプの献上唐津の碗である。内底に鉄による簡単な絵が描かれている。共に高台径が大きく、作りも丁寧である。なお、外底のスタンプは見られない。841～843は信楽焼などにも見られるタイプの鍋であるが、とりあえず産地不明とする。841・842には褐釉が843には灰釉がかかり三足が付せられている。内弯して立ち上がった体部を上端近くで外に折り曲げて蓋の受けとし、端部を上方につまみ上げている。口縁部には紐作りの双耳の把手が取り付けられている。841～842は暗灰色の堅緻な胎土で、金属光沢を持つ茶褐色の釉が底部の三足付近から下部を露胎にして内外にかけられている。842の外面露胎部には煤が付着している。843

はやや大形で、口縁部や底部の器形が少々異なっている。胎土はやや軟質で黄白色を呈し、光沢のある灰黄色の透明釉が内面と外面体部中位までかけられている。なお、内面受け端部の釉がフキ取られているのは直接重ね焼きをするためと思われる。外面露胎部には煤が付着している。844は丹波焼の小形甕である。口縁を「く」の字状に内側に折り曲げ、口縁部端面を平坦にしたものである。口縁部内外面及び外面体部上半は丁寧にヨコナデされ、内面体部には粗いナデが施されている。胎土は砂粒を多く含むが堅緻で灰赤褐色を呈し、器表は灰茶褐色に発色している。

d　石製品（845・846）・金属製品（847～851）

845・846は砥石である。845は非常にきめの細かい良質の仕上砥である。4端面には細かい鋸による切断痕を残している。石材は粘板岩系のものと思われ、灰褐色を呈している。846は灰白色で軟質のものと、暗灰色でやや硬質のものが互層になった石材で、表面はまだら文様をみせおり、あまり良質とは思えない。欠損する面を除く3端面には、やや粗い鋸痕がみられる。表面には斜め方向に無数の擦痕が走っている。847～851は銅製品である。847は環状の製品である。錫杖などに付けられるものであろう。848は蝶番である。厨子の扉などに用いられる装飾を兼ねたものと思われ、釘穴が穿たれている。849金銅製品である。浅いしゃもじ形の仏具であろうか。850・851は茶托あるいは天目台と思われるものである。850は低い高台で、高台径は内面の受け部より小さい。全体に薄く華奢な作りである。851は外方に開いた高い高台を持ち、高台径は内面の受け部より大きい。全体に厚くどっしりした作りである。

(3)　第4・5層

第4層の上で検出された第2遺構面と第6層の上で検出された第3遺構面とに挟まれた間層で、両層には遺物から時期差を見出すことは困難である。例によって中世の遺物が相当量含まれるが、遺物から見た下限は18世紀末ごろと思われ、第3層を文化（1809）の火災層とする根拠になっている。

①　第4層（図31・32、図版34～36、852～890）

中国製磁器、国産陶磁器、土師皿、土師質土器、石製品などが出土している。

a　中国製磁器（852～868）

852～855は白磁である。852はいわゆる口禿げの皿である。平底で体部はやや内弯する。内底と体部の境に沈線が1条巡り、外面は体部下半を露胎で残している。口縁部は端部と内面の釉を鋭くケズリ取っている。なお、外面体部下半の露胎部には放射状のカキ痕が見られる。胎土は鉄の黒斑を少量含み、釉の表面にも茶褐色の小さい斑点が浮かんでいる。露胎部は明茶褐色に発色する。853は皿である。新収蔵庫地区下段第8層出土587同様に、枢府磁と割高台のあるタイプの中間に当たる型式のものである。高台はやや外開きであるが、畳付部には外側から斜めの面取りが行われている。体部は横に水平に近い角度で開き、途中で屈曲して口縁がやや外反する器形と思われる。胎土は精良で、釉はわずかに青みを帯びる。高台外面途中まで施釉され、畳付と内底を露胎で残す。854・855は16世紀タイプといわれる端反の皿である。比較的大形であるが胎土に微細な黒斑を含み、器表に浮いている。釉は灰白色を呈し、失透してあまり光沢がない。854の畳付の釉のフキ取りも雑である。なお、854の外底には、所有印と思われる擦痕による「△」印が見られる。856～860は青磁である。856は鎬蓮弁文の碗である。蓮弁は片切彫りで一応鎬を持っているが、あまり明瞭ではない。また、間弁を欠いているようである。胎土は灰白色を呈し、精良で堅緻である。釉は透明度が高く、灰緑色に発色している。内外面の器表には無数の擦痕が

付き、使用年数の長さを物語っている。857は外面口縁部にヘラ描きの雷文帯を持つ碗である。外面体部にはやはりヘラ描きによる便化した蓮弁文が、内面体部には草花文が見られる。胎土は灰白色を呈し精良できめ細かく、釉は深い草緑色に発色している。856同様に細かい擦痕状の傷が、特に外面に多く付いている。858は口縁が外反し、玉縁状を呈する碗である。胎土は灰黒色を呈し、セメント質である。火中しているため、釉はカセている。859は厚い底部から薄く体部を引き出し、口縁部を外反させた小振りの碗である。胎土は灰白色を呈し、精良である。釉の透明度が高いため体部の回転ヘラケズリ痕が透けて見え、光沢のある淡灰緑色に発色する。860は腰折れで、口縁部を外反させた皿である。通常は稜花になるものである。胎土は鉄の黒斑を含んで灰白色を呈し、やや粗い。釉は透明度が低く、ややカセた感じの草緑色に発色している。全釉で内底の釉を輪状にケズリ取っている。露胎部は暗茶褐色を呈している。861～866は染付である。861は陶質の胎土を持つ碗である。この種の染付は、高野山での出土は極めて稀である。通例の染付とも、また、第３層出土823などの砂高台の一群とも生産地を異にすると考えられるものである。胎土は軟質で黄灰色を呈し、サクい。高台は削り出し高台で、染付は濃筆による呉須手のタッチで花文が雑に描かれている。釉は黄灰白色で粘性が高く高台外面までかかるが、一部が内面にまわり、畳付には砂が付着している。862は外面口縁部に波涛文の巡る蓮子碗である。外面体部には蕉葉文などが、また、内底には法螺貝文などが描かれるタイプのものである。863は皿で、口縁の外反する器形と思われる。外底に「□明嘉□□製」の染付銘が見られ、年号はおそらく「嘉靖」と思われるが、後世の擬款と考えられる。器形は腰部が張り、むしろ新収蔵庫地区下段表土出土408などのように深い器形の端反の皿と類似する。内底には、非常に細い線と濃筆を巧みに使った精緻な雲雀や笹が描かれている。胎土は純白に近く精良で、呉須の発色も極めて良好である。864は862同様の深い器形で、口縁部を強く屈曲させた端反の皿である。内面体部には二重の圏線と草花文が、外面体部には空中を飛ぶ昆虫文が描かれている。釉はやや青みを帯び、呉須は灰青色に発色し周囲には滲みが出ている。865は盃である。口縁部を外に折り曲げて端反の器形にしている。外面体部には細い線描きと薄い濃を使って花鳥文を描き、内底には草花文が見られる。外底には「福」字銘が見られるが、異なる手と呉須によると思われ、呉須の発色が極度に濃い。胎土は精良で、釉は青みを帯び、呉須は色鮮やかに発色している。866・867は芙蓉手の鉢である。口縁部を外方に折り曲げた器形で、端部を稜花にしている。内面体部を４分割し、口縁部にモンスターマスクが見られ、丸窓内に花弁文や宝尽文を描いている。外面は、口縁部に花弁唐草文が巡り、４分割した体部丸窓内には簡略化した花弁文が描かれている。また、866の内底には宝尽文と思われる文様を大きく描き、外底には放射状のカンナ痕が見られる。全釉で畳付の釉をフキ取るが、砂が付着している。釉はわずかに青みを帯び、呉須は鮮やかに発色している。868は瑠璃釉の皿で、口縁部が内弯する浅い器形である。釉は白釉と瑠璃釉の二重がけである。通常は餅花手と俗称されるものであるが、残存部には餅花は見られない。胎土は暗灰色から赤褐色を呈し、やや粗い。釉は、白釉は透明度が低く、瑠璃釉は透明度が高く光沢があり深い瑠璃色に発色している。なお、釉は高台を越えて外底周縁部までかけられ、露胎部は暗赤褐色を呈している。畳付の釉のフキ取りは行われず、砂が多量に付着している。

b　国産磁器（869～881）

大部分は伊万里磁器（869～880）であるが、少量の美濃瀬戸系磁器（881）が出土している。伊万里磁

器はすべて染付である。869は青磁染付の碗である。外面には青磁釉がかかり、内面には染付が見られる。内面は、口縁部に四方襷文が巡り、内底部には丸松竹梅文が描かれている。胎土は精良で、青磁釉は透明度が高く光沢があり、淡草緑色を呈している。畳付の釉は丁寧にフキ取られている。内面の呉須は鮮やかなコバルト色に発色している。870・871は外面体部に草花文の描かれた雑な作りの碗である。外底には便化した「大明年造」銘が見られる。釉は灰みを強く帯び、呉須は灰青色に発色している。畳付の釉のフキ取りも雑で、砂が多く付着する。なお、870の畳付露胎部は赤橙色を呈している。872は外面体部に梅鉢と波涛に浮かぶ帆船を描いた碗である。体部の器肉が比較的薄く、腰の張った器形で、小さく低い高台が付けられている。釉はわずかに青みを帯び、呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉をフキ取るが、高台外面の一部に虫喰いがある。873も872同様の器形の碗である。外面体部にそれぞれが重複するように扇形の窓を残し、ほかを氷烈文で埋め、窓内に松樹文を描いている。呉須の発色はあまり良好ではなく、灰青色に発色している。全釉で畳付は釉をフキ取っている。874・875は腰の張りの弱い器形の碗である。874は外面体部を4本線で3分割し、それぞれを「寿」字文で埋め、内底には線描きによる宝尽文が見られる。釉はやや黄ばみ、全体に細かい貫入が走っている。呉須は灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。875は外面体部に太めの筆で口縁部からの垂飾線を巡らせたものである。器表はカセて全体に無数の細かい黄白色の斑点が浮かび上がり、染付を非常に不鮮明にしている。作りや施文は本来比較的しっかりしており、畳付の釉のフキ取りも丁寧である。876はソバ猪口である。体部がわずかに外に開いて直線的に立ち上がる器形で、高台は蛇ノ目凹型高台である。体部外面の文様は海沿いに建つ民家と湾内の島影、空に浮かぶ雲であろうか、線描きと濃筆によって風景画風に描かれている。内面口縁部には四方襷文が巡り、内底には波に洗われる小さい島影が描かれている。胎土は純白に近く精良であるが、釉は体部のここそこに虫喰いがある。呉須は良好に発色している。全釉で蛇ノ目部の釉はフキ取っている。877はやや大形の湯呑である。厚くどっしりした作りの筒形で、体部は心持ち内傾する。外面体部にはうずくまる2匹2単位の兎と山水文が描かれる。兎は細線によるが、他は濃筆で描かれる。腰部には花弁文と割菱文が巡り、外底には「渦福」銘が見られる。内底には四方襷文が巡り、内底には瑞果文が描かれている。釉は粘度が高く、全体に細かい気泡を含み文様を不鮮明にしているが、呉須自身の発色は良好である。878は芙蓉手の盤である。第3層出土832などと同様のものであるが、外面は無文である。内面体部の窓は輪部をラマ式蓮弁風にし、窓内には草花文や宝尽文を描いている。胎土には微細な鉄の黒斑を多く含み、釉は灰みを帯び、呉須も灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。879は香合であろうか。小さい蓋物の身である。外面体部には875同様の垂飾文が巡っている。呉須はやや灰みを帯びて発色している。口縁端部から内面口縁部の釉をフキ取っている。880は陶胎染付の平皿である。浅い器形で口縁部を直角に上方に折り曲げている。胎土はセメント質で粗く、暗灰色を呈し、灰青色の釉には全体に細かい貫入が走っている。内面には四阿風の建物や柳などが描かれ、外面口縁部には細線による繊細な唐草文が巡っている。呉須も灰みの強い発色である。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部は茶褐色を呈している。なお、高台内面には部分的に砂が付着している。881は美濃瀬戸系の染付碗である。口縁部が外反し、高い高台がバチ状に外に開く器形である。外面体部は太めの筆による垂線で埋め、その上に笹を散らしている。胎土は純白に近く精良で、呉須は空色に発色している。全釉で高い畳付の釉を丁寧にフキ取っている。

c　国産陶器（882～888）

882は刷毛唐津の鉢である。口縁部に直径約８㎜の孔が穿たれ、外面に小さい注口が貼り付けられている。高台は断面四角で非常に高い。褐釉が内面から外面高台際までかかり、刷毛は内底では同心円状に、外面体部では波状に使われている。口縁端面の釉はフキ取られている。胎土は鉄の黒斑を含み暗灰色を呈し、堅緻である。外面体部下半には回転ヘラケズリ痕を残し、高台外面および内底にはヨコナデが見られる。883は第３層出土844と同様の胎土を持つ丹波焼の壷である。蓋の付く器形と思われるもので、口縁部が内傾し、胴部は丸い。内外面口縁部付近にはヨコナデが施され、外面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残している。胎土は砂粒を多く含み粗く、暗灰色を呈している。器表は外面が明橙褐色で、内面は灰茶褐色である。肩の一部に灰緑色の自然釉がかかっている。884は丹波焼の摺鉢である。火中して表面や割れ口に煤が付着している。断面三角の口縁を持ち、体部は斜めに直線的に立ち上がる。内面体部から外面体部上端までヨコナデが施され、外面体部は指頭痕を残して粗くナデられている。内面体部上端に浅い凹線が巡り、凹線下端から６条１単位の櫛目が比較的密に施されている。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗灰褐色を呈している。885は常滑焼の甕である。口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部をわずかにつまむようにヨコナデすることにより、口縁部内側を浅く凹ませ端部に面を持たせている。胎土は少量の砂粒を含むが精良で、明黄灰色を呈している。内外面器表には厚く灰緑色の自然釉がかかっている。886は備前焼の小壷で、肩の張った芋徳利風の器形である。外面頸部から肩部にかけてはヨコナデが施され、体部は不定方向に擦痕をつけたように粗くナデられている。内面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残し、頸部には絞り痕が見られる。胎土は砂粒を含むが堅緻で暗赤褐色を呈し、器表は火表がテリのある暗茶褐色に、火裏部分が灰色に発色している。887・888は灰釉の灯明皿で、新収蔵庫地区下段ＳＫ―04出土699などと同様のものである。887は内面に灯芯受けと灯芯置きの抉りを持つものである。外面は無釉で、口縁部にヨコナデが施されるが、体部以下はヘラケズリのままである。胎土は微細な砂粒を含むが精緻で、黄白色を呈している。釉は艶のある透明釉で、全体に細かい貫入が走り、貫入部は黒褐色を呈している。888は皿型で、内面に３カ所の４㎜～５㎜大の目跡が見られる。外面は露胎で、口縁部から体部全体にヨコナデが施されている。底部は平底で回転を伴うヘラ切り痕が見られる。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、暗灰黄色を呈している。釉の調子は887と同様であるが、若干カセた感じである。なお、灯明皿にはこのほかに柿釉などと称される透明緻をかけた施釉軟質陶も出土している。

d　土師皿（889）・土師質土器（890）・石製品（891）

土師皿の出土は極めて少ないが、889は完形品に近いものである。器高が低い中皿で、口径12.0㎝、器高2.0㎝を測る。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、明黄白色を呈している。内底を不定方向にナデ、体部から口縁部に強いヨコナデを施し、口縁部をやや内弯させている。外底には回転糸切痕を残すが、体部と底部の境はナデにより段を消し、丸く仕上げている。890は土師質の火鉢である。口径50㎝近い大形の盥状の器形で、体部から直接大きい三足が付けられる。内底は不定方向にナデられ、内面体部から口縁部を経て外面体部上半までヨコナデが施されている。体部下半は回転ヘラケズリのままで外底は一定方向にヘラケズリされ、外底周縁は面取りするように斜めにヘラでケズリ取られる。また、口縁周辺は横方向のヘラ磨きで調整されている。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、明黄褐色ないし黄橙褐色を呈している。なお、内面体部の一部に煤が付着している。891は砂岩製の一石五輪塔である。四寸角

で長さ一尺の長方体の石材から彫り出したものである。梵字も含めて銘文は全く認められない。

② 第5層（図33・34、図版36、892～924）

中国製磁器、国産陶磁器、土師皿、土師質土器などが出土している。第4層とほとんど時期差は無いが、19世紀に下る可能性のある遺物がほとんど無くなっているのは事実で、あえて言えば18世紀後半を下限とする遺物群と言える。

a 中国製磁器（892～898）

892・893は白磁である。892は口禿げの皿の底部である。胎土は灰みが強く、釉も灰白色を呈している。平底の外底を露胎で残している。893は盃である。体部がラッパ状に開く器形と思われる。釉は灰みを帯び、内底が虫喰い状態になっている。全釉で畳付の釉をケズリ取っている。894は青磁の蓮弁文碗である。蓮弁は線描きで非常に角度の広い三角刀状の工具による施文のため、結果的に線間の両端を面取りして蓮弁にふくらみを持たせたものである。胎土は堅緻で灰褐色を呈し、釉は褐色みを帯びた暗緑色に発色している。895～898は染付である。895は大形の饅頭心型の碗で、大きく高い高台が付いている。内底には木葉らしい文様がみられる。胎土は精良で、釉は青みが強く、呉須は良好に発色している。全釉で、畳付から高台内面途中までの釉をフキ取っている。なお、漆による補修痕が残っている。896・897は口縁の内弯する皿である。896は内底に樹木文を描き、外底には便化した「冨貴佳器」銘が見られる。また、外底周縁には放射状のカンナ痕を残している。呉須は濃く良好に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。897は内底に鳳凰と思われる動物文を描き、外面体部には牡丹唐草文を巡らせている。胎土は精良で、呉須も極めて良好に色鮮やかに発色している。全釉で外底の釉をフキとっているが、少量の砂が付着している。898は呉須手の盤である。内面体部には魚鱗状の文様が巡るが、外面は無文である。胎土は鉄の微細な黒斑を多く含み、灰白色を呈している。呉須は灰みを帯び淡く発色している。釉は高台内面までかけられ、高台畳付の釉のフキ取りを行わない砂高台である。

b 国産磁器（899～910）

すべて伊万里磁器である。899～906は青磁である。899は第2層出土800などと同様の菊皿である。内面体部には円形に青磁釉を塗り残して白釉を塗り、その上に染付で菊花文を描いている。900はラッパ状に外反する口縁の瓶である。胎土は精良でわずかに灰みを帯び、濃い暗緑色で光沢のある釉が厚くかかっている。釉の薄い口縁端部は黄緑褐色に発色している。901～905は香炉であるがすべて火中している。筒形の器形で口縁端面を水平にして内側に引き出している。高台は周縁部を面取りした幅広の蛇ノ目状のもで、三足は付けられない。内面体部下半を露胎で残して外面を全釉にし、蛇ノ目状の高台部の釉をケズリ取ったものである。胎土は灰白色を呈し精良で、釉は灰緑色に発色している。906はやや大振りの香炉である。やはり筒形で、口縁部を直角に内側に折り込み、端部に面を持たせている。外面体部上端には数条の沈線が巡っている。沈線は幅広のものと線状のものを交互に使っている。やはり足の付かない器形と思われる。胎土は灰みが弱く精良である。釉は空色に近い発色で、内面も含めて全釉である。高台は901～905などと同様の蛇ノ目状の幅の広いものと思われる。907～910は染付である。907は外面体部に小さい花弁文や松葉文を、内底にも小さい花弁文をあしらった、体部の器肉の薄い作りの碗である。外底には「宣明年製」の銘が見られる。胎土は純白に近く精良であるが、釉はやや黄みを帯び、全体に細かい貫入が走っている。呉須は鮮やかな青色に発色している。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取ってい

る。908も体部の器肉が薄く、腰が張って全体に丸みを帯びた器形の碗である。外面体部には淡い発色の呉須と濃い発色の呉須を使い分けて草花文が描かれ、外底には「大明年製」銘が見られる。胎土は精良で、釉はわずかに青みを帯び、呉須は色鮮やかに発色するがやや滲みが出ている。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取るが、高台内面に少量の砂が付着している。909はやや大振りで比較的浅い器形の碗である。外面体部に花弁状の窓を4単位作り、中に花弁文を描き、外の空間には大きい丸文を配している。内面口縁部には四方襷文が巡る。胎土は精良で、釉は青みを帯び、呉須は色濃く鮮やかに発色している。910は青磁染付の湯呑である。外面体部には草緑色で光沢のある青磁釉がかかり、内面口縁部には四方襷文が巡っている。内底を欠くが五弁花のコンニャク判が押されているものと思われる。外面高台内には内面と異なる白みの強い透明釉がかけられ、畳付の釉は内外から丁寧にフキ取っている。また、露胎部は淡茶褐色に発色し、青磁釉との境は茶褐色を呈している。なお、割れ口には漆継ぎの痕跡が見られる。

c　国産陶器（911～921）

911は瀬戸のおろし皿である。体部の立ち上がりの弱い器形で、内面のおろし目は粗い。外底には回転糸切痕を残している。火中して釉は飛んでいるが、上端部にわずかに灰釉の痕跡を残している。胎土は砂粒を含み、黄白色でサクい。912は唐津の灰釉の小皿である。高台は内面を浅く抉った低い輪高台である。胎土は砂けが多く粗いが、堅緻で暗灰褐色を呈している。釉は火中してカセ、白濁している。913は京焼写しの唐津の浅鉢である。高台径が小さく畳付の外端を斜めに面取りしている。内面には赤と緑の上絵付けによる梅花文が描かれるが、緑の部分は飛んでいる。胎土は精良で淡褐色を呈し、光沢のある透明釉が高台周辺を露胎で残してかけられている。914は唐津の鉢である。「く」の字状に折り曲げて水平にした口縁部には、剣頭文を彫り込んで白象嵌し、口縁端面には白濁釉を、外面体部に貼り付けた三角凸帯には褐釉を塗った上で透明釉をかけている。胎土は微細な砂粒を含み、堅緻で灰茶褐色を呈している。915は産地不明の小さい合子の身である。胎土は明灰褐色を呈し、外面体部のみにかけられた灰釉は灰緑色を呈し、細かい貫入が走っている。916は白磁の戸車と思われるものである。精良で純白に近い胎土に灰みを帯びた釉を全釉し、両端面の釉を丁寧にフキ取ったものである。産地は不明である。917は美濃瀬戸系の灰釉の皿である。口縁が内弯する器形で、内底に菊花や酢橘草などの印花文の見られるタイプのものである。黄灰色のやや軟質の胎土で、灰緑色の透明度の高い釉がかけられている。釉には全体に細かい貫入が走り、内底にはガラス質の釉の溜りが見られる。918は備前焼の甕である。外方に折り返した玉縁状の口縁は相当扁平になっているが、いまだ外面の波状の凹線は見られない。球形に近い胴部を持つ器形と思われる。胎土は砂粒を多く含むが、堅緻で暗赤褐色を呈している。肩部にはゴマ状の自然釉がかかっている。919は丹波焼の大形の壷である。口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は砂粒や鉄、マンガンなどの黒い粒子を多く含むが非常に堅緻で、暗灰色を呈している。肩部には暗緑色でガラス質の自然釉が厚くかかっている。920は美濃瀬戸系褐釉の摺鉢である。大きく平らな平高台で、体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部を内外に引き出して端面を平らにしている。15条1単位と思われる摺り目が内面体部全面に密に施され、内底には同心円状の摺り目が刻まれている。内面口縁下のヨコナデにより、摺り目の上端が揃えられている。釉は鈍い光沢を持つ焦げ茶色の褐釉で、内面摺り目上端部から外面体部下端まで施釉されている。露胎で残された外底は同心円状にナデ調整され、中心部に径約5cmの輪陶枕の痕跡を残している。胎土は砂粒を多く含むが非常に堅緻で暗赤褐色を呈し、露胎部

は赤茶褐色に発色している。

d　須恵質土器（921・922）

921・922は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部を上下に拡張させ、端面に丸みをもたせている。口縁部には丁寧なヨコナデを施し、内外面体部上位のナデは粘土紐の巻き上げ痕を残して雑である。胎土には砂粒を含み暗灰色を呈するが、鉄やマンガンの黒い粒子は見られない。口縁端面は自然釉により黒灰色を呈し、鈍い光沢があり、下端に直接の重ね焼きの痕跡を残している。922はむしろ瓦質に近い胎土の甕である。口縁部が「く」の字状に外反し、端面の押しナデにより上端部をわずかに尖らせている。内面端部はヘラケズリ痕を残しままヨコナデし、口縁部および外面頸部は比較的丁寧なヨコナデで調整している。また、ごく一部残存する外面肩部には格子の叩き目が見られる。胎土は砂粒を多く含み、やや軟質で灰黄色を呈し、内外面器表は暗灰色に焼成されている。

e　土師皿（923）・土師質土器（924）

923は亜白色系の土師小皿である。内底を不定方向にナデ、内底周縁から口縁部は「の」の字状に斜めにナデ抜かれている。外底には比較的丁寧な指ナデにより指頭痕を消している。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、黄白色を呈している。口径9.3cm、器高1.8cmを測る。924は口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を上方につまみ出した土師質の羽釜である。内面体部にヘラケズリを施し、内外面口縁部には丁寧なヨコナデが見られる。口縁端面の凹線状の凹みはあまり顕著ではない。胎土は多くの砂粒を含んで赤褐色を呈し、器表は内面が赤橙色に、外面は灰橙色に焼き上がっている。

(4)　第6層（図34・35、図版37、925～965）

この層は第3遺構面の遺構切り込み面であるり、また、直上には遺構面を覆う炭層の存在が確認されている。この炭層は元禄4年（1691）の火災によるものと考えられている。従ってこの層の下限は17世紀末になるが、出土遺物の下限は17世紀前半代に納まるものと考えられる。なお、この層も例によって整地層であり、古い時期の遺物が多く出土する。

a　中国製陶磁器（925～932）

925・926は白磁である。925は口縁部の直行する碗で、内面体部には浅く細いヘラ描きによる劃花文が見られる。胎土はごく少量の鉄の黒斑が見られるが非常に精良である。釉は青みが強く、光沢があり透明度が高い。内面体部上半には鱗状の細かい貫入が見られる。926は16世紀タイプといわれる通常の端反の皿である。比較的大形であるが胎土には鉄の微細粒子を多く含み、器表にも小さい黒斑が浮いている。全釉で畳付の釉をフキ取っているが、高台外面には多くの砂が付着している。927～930は青磁である。927は体部の直行する碗である。外面口縁下に浅い沈線が巡るが文様ではなさそうである。胎土は微細な鉄の粒子を多く含み、暗灰色を呈している。釉は透明度が高く、黒斑が浮き、暗緑色に発色している。国産の可能性もある。928は浅い器形で、断面台形の高台が付く鉢である。灰白色の精良な胎土に、透明度が低く粘性の高い緑色の釉が厚くかかっている。全釉で畳付の釉を丁寧にケズリ取り、露胎部は暗灰色に発色している。内外面とも無文である。929は口縁部を外方に水平に折り曲げ、端部を上方につまみ上げた鉢である。928と同類のもので、厚い釉がかかっているが胎土の灰みが強く、釉は草緑色に発色している。930は香炉である。三足の獣足を持つタイプのもので、外面体部中位に算木文を、その上下に擂座を巡らせている。胎土は砂粒を多く含み、堅緻であるがやや粗い。釉は透明度が高く、小さい気泡を

多く含み濃い緑色に発色している。釉には全体に粗い貫入が走るが、貫入部は黒褐色を呈している。なお、底部を欠くが、内底および外底を露胎で残すものと思われる。931は瑠璃釉の皿である。白釉と瑠璃釉の二重がけであるが、外面体部に虫喰いが見られる。いわゆる餅花手であるが、残存部には餅花は見られない。胎土は鉄の微細粒子を含んで暗灰色を呈し、器表には黒斑が浮かび、釉はくすんだ灰青色に発色している。932は黒釉の花入である。胎土は薄く精良で暗灰色を呈している。釉は金属光沢を持つ灰黒色で、外面体部下半を露胎で残す。

b　国産磁器（933～936）

すべて有田磁器である。933は体部が内弯する器形の青磁小碗である。胎土は灰白色を呈し、きめ細かく精良である。釉は失透して艶がなく、灰緑色に発色している。934は青磁の香炉である。体部は上半が内側に屈曲し頸部が垂直に立ち上がり、口縁部を外に折り端部を上方に引き上げている。外面肩部に2条の凹線が巡っている。胎土は暗灰色でやや粗く、釉は透明度が比較的高く光沢があり、暗草緑色を呈している。内外面に施釉している。935は染付の盤で、高台は輪高台である。内面には太めの線描きと濃筆により草花文や帆掛船などが描かれている。胎土は部分的に赤みを帯びる灰黄色でやや粗い。釉は灰みがあるが、呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉は雑にフキ取っている。露胎部は灰赤色を呈し、砂が付着している。936は色絵の皿である。内外面に染付けによる圏線を巡らし、内底や外面体部には緑・青・褐色などの上絵付けによる樹木文などが描かれているが、カセて欠落し、痕跡を残すのみである。胎土は935などと似てやや粗い。

c　国産陶器（937～941）

937は鼠志野の向付である。外面体部上位に擂座を付し、鉄による太い縦線や格子文を巡らせている。白濁した厚い長石釉を全釉するが、口縁端部や体部の一部が虫喰い状態になっている。底部には四足が無造作に付せられ、足の内面に4カ所の目跡が見られる。この目跡は、一回り小さい同種のものを、底部と底部を合わせて焼成したことによると思われる。938は備前焼の鉄鉢である。内底から体部にかけて轆轤による引き上げ痕を残し、内外面口縁部付近に丁寧なヨコナデが施されている。外面体部は回転ヘラケズリで調整し、外面底部はヘラケズリで平底にしている。胎土は砂粒を含むが堅緻で、暗紫褐色を呈している。外面体部上位に直接の重ね焼きの痕跡が見られる。939は備前焼の甕である。口縁部の玉縁は扁平になり、外面の2条の幅の広い凹線により段状になっている。胎土は砂粒を含んで粗く、赤褐色を呈している。940は信楽焼の壺である。小さい玉縁状の口縁は、端部を外方に折り曲げて端部を丸くしたものである。頸部から口縁部内外面にかけて、丁寧にヨコナデが施されている。胎土には微細な長石粒を含むが精良で灰白色を呈している。器表には長石の粒子が浮くが、緑褐色の自然釉が薄くかかり光沢がある。941は産地不明の摺鉢である。小さく下方に拡張した断面三角形の口縁部を持ち、内面口縁下に1条の凹線が巡る。口縁端面はわずかに凹んでいる。胎土は砂粒を含んで粗く、灰黒褐色を呈している。

d　須恵質土器（942）・土師質・瓦質土器（943・944）

942は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は下方に大きく拡張され、端面は丸みを帯びている。胎土は鉄あるいはマンガンの黒い粒子を含みセメント質で粗く、暗灰色を呈す。口縁端面には自然釉がかかり暗黒色に発色し、下端には重ね焼きの痕跡を残す。943は瓦質のこね鉢である。内面体部は斜め方向の

刷毛で調整し、内面口縁部付近と口縁端面には非常に丁寧なヨコナデがほどこされている。外面体部には縦方向のヘラケズリが見られる。内面体部の櫛目は細く浅く、刷毛目とあまり変らない。胎土は灰白色を呈し、ほとんど砂粒を含まず精良である。器表は灰黒色に焼成されている。944は土師質の胎土を持つこね鉢である。943と基本的に同じ調整であるが、やや雑である。内面口縁部付近は雑にヨコナデされ、一部に刷毛痕を残したままである。また、外面体部の縦方向のヘラケズリは943に比して雑である。内面体部に残る刷毛目は、浅く粗い。胎土は砂粒を含んで粗く、灰褐色を呈し、器表は黒褐色に焼成されている。

e　土師器（945～964）・瓦器（965）

945～949は外底に回転糸切痕を持つ褐色系の皿である。従来見てきた中皿（946・947）、小皿（948・949）のほかに、少し様相を異にする大皿（945）が出土している。口縁部がやや内弯し、外面体部に細かい段の付くもので、胎土も一般的な黄橙色ないし茶褐色のものと異なり、微細な砂粒を多く含み黄灰褐色を呈している。950～955は外底に簀子痕を残すタイプの皿である。中皿950は簀子痕を消している。口径17.6cm、器高2.7cmを測る。956・957は口縁部を外につまみ出すように強くヨコナデした、褐色系の小皿である。内底を不定方向のナデで調整し、外底は指ナデで指頭痕を消している。胎土は灰黄褐色を呈し精良である。957は口径8.7cm、器高1.7cmを測る。956は小破片のため計測が困難である。958は亜白色系というべき胎土の大皿である。内底を不定方向にナデ、体部から口縁部にかけて２回に分けた丁寧なヨコナデを施し、底部との境に明瞭な段を持っている。外底中心部には指頭痕を残し、周縁部は指ナデによる調整で指頭痕を消している。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、黄白色を呈している。口径13.9cm、器高2.8cmを測る。959・960も亜白色系の口径12cm前後の中皿である。体部は丸みを持ってやや内弯し、器肉が厚い。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面体部上半にヨコナデを施し、外面体部下半は指ナデで丁寧に調整している。胎土は砂けが多く、ザラついた感じで灰黄白色を呈している。961・962は白色系の型押しの皿である。961は口径15cm近い大皿である。内面口縁際に浅い凹線を巡らせている。胎土は砂粒をほとんど含まず、精緻で灰白色ないし灰黄色を呈している。962は口径11.2cm、器高2.0cmを測る中皿である。内面体部や内底には細かい刷毛目が見られる。胎土は精良であるが灰白色を呈し、ごく少量の雲母粒を含んでいる。963は褐色系の小皿である。胎土は灰黄白色で白色系のものに近く精良であるが、成形は型押しによらない。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面口縁部をヨコナデで調整し、外面体部および外底には指頭痕を残して凸凹である。口径7.6cm、器高1.6cmを測る。964は平らな粘土円板から口縁部を浅く引き起こした土師皿である。内面に不定方向のナデを施し、内外面口縁部付近のみをヨコナデで調整する。外底には粗い指ナデが見られる。胎土は灰白色を呈して粗く、瓦器の胎土に近い。器表は灰白色ないし灰褐色に焼成されている。口径12.4cmを測る。965は瓦器の小椀である。内外面とも摩耗して器表を失い、内面体部下半にわずかに細い暗文の痕跡が見られる。胎土は赤みを帯びた暗灰色で、砂粒などをほとんど含まず精良である。

(5)　第７層（図35・36、図版37・38、966～993）

この層は第６層との間に遺構面を挟むわけではないが、遺物の組成に第６層とは差異が認められるため単独で取り扱うことにした。第６層との組成上の最大の相違点は、伊万里磁器が見られない点にある。相変らず中世の遺物も多く含まれているが、最も新しい要素として中国製の染付や白磁、唐津焼などが

挙げられる。遺物の下限時期は17世紀の前半の25年～30年代ごろに求めることができる。

a　中国製陶磁器（966～983）・朝鮮製陶器（983）

966～970は白磁である。966はいわゆる口禿げの皿で、口縁端部の釉を内外から面取りするようにケズリ取っている。胎土は微細な鉄の黒斑を含みやや粗く、釉は灰みの強い発色である。露胎部は黄褐色を呈している。967は割高台の坏である。胎土は灰白色を呈する磁質で、釉は透明感のある灰白色に発色している。高台外面途中まで施釉され、外底を露胎にしている。968・969は木瓜形の皿である。外底には染付銘は見られない。胎土は淡灰白色で精良である。釉は、968はカセて黄白色の微細な斑点が無数に浮き、969は青みの強い発色である。全釉で畳付の釉を三方から面取りするようにケズリ取っている。970は盃である。純白に近い精良な胎土で、釉は溜り部でやや青みがあるが、16世紀代の一般のものと比して白みが強い。全釉で畳付の釉をフキ取っている。971～975は青磁である。971は稜花の盤である。やや内弯気味の体部を口縁部で水平に折り曲げ、端部の面取りにより稜花を表現し、上端面にヘラ描きによる稜花を巡らせている。また、内外面体部には幅広の平ノミによる蓮弁文が巡っている。胎土は灰白色を呈し精良で、釉はややくすんだ黄緑色に発色している。釉の透明度は低いが、光沢がある。972は内底に龍の浮文のうねる盤である。浮文の貼り付けは施釉前に行われている。外面体部には太い蓮弁が巡るものと思われる。胎土は灰白色を呈し精良で、釉は透明度が低く青緑色に発色し、全体に粗い貫入が走っている。全釉で断面台形の高台は畳付と内外端部の釉をケズリ取り、露胎部は暗赤褐色に発色している。973は双魚文の鉢である。口縁部を外方に水平に折り曲げる器形で、外面体部には型押しの蓮弁文が巡り、内底には双魚文が貼り付けされている。双魚は施釉前の貼り付けで、鰭などが細かく表現されている。胎土は灰白色を呈し精良で、釉は透明度が高く、深みのある草緑色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部との境は暗茶褐色を呈している。一部に火中した破片を含んでいる。974・975はヘラ先による線描き蓮弁文の碗である。内底にはやはりヘラ描きによる花文が巡っている。共に灰白色のやや粗い胎土で、釉は974が草緑色に、975は暗草緑色に発色している。975は茶筅によるものであろうか、内面体部に細かい横方向の擦痕が無数に見られる。976～980は染付である。976・977は口縁の内弯する皿である。976は内底につがいの鹿を描き、外面体部には牡丹唐草文が巡る。また、外底には「冨貴佳器」銘が見られる。977は内底と外面体部に花弁文を描き、外底に「冨貴佳器」銘がある。共に輪部を細線で描き、中を濃でつぶす手法を取っている。呉須は色濃く鮮やかに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。なお、977の外底には放射状のカンナ痕が見られる。978は口縁部の外反する器形と思われる皿である。内底には鹿と思われる動物文が、ペンシルドローイングの手法によって描かれている。胎土は砂粒を含んでやや粗く、釉は青みを帯びる。呉須は色が薄く、発色はあまり良好ではない。釉は畳付までかかり、外底を露胎で残し、畳付の釉は雑にフキ取られている。外面高台際に砂が付着している。979は口縁端反の皿で、腰の張りの強い器形である。内底には樹木文を描き、内面体部には型押しの蓮華文の印花が巡っている。胎土はやや灰みを帯びるが非常に精良で、呉須の発色も良好である。釉はわずかに青みを帯び、内面の蓮華文を浮き上がらせている。全釉で畳付の釉をフキ取っているが、畳付には砂が付着している。なお、外底には放射状にカンナ痕を残している。980は芙蓉手の鉢で、第4層出土866・867と同種のものである。胎土や呉須の発色及び文様構成などもほとんど同じである。981は呉須赤絵の盤である。口縁部の外反する器形で、高台は削り出し高台である。呉須による染付は見られ

ず、赤、緑などを使った上絵付けが内面に見られる。胎土は細かい黒い粒子を多く含み灰色を呈し、釉も灰みが強い。全釉で高台周辺に多量の砂が付着し、いわゆる砂高台である。外面は無文と思われる。982は瑠璃釉の皿である。胎土は灰みを帯びやや粗いが、白釉と瑠璃釉の二重がけにより、瑠璃は明るい空色に発色し光沢がある。残存部には餅花は見られない。外面体部下端の高台際には多量の砂が付着している。983は黒釉の四耳壷である。ほとんど頸部がなく、肩に直接玉縁状の口縁部の付く器形である。肩がよく張り、腰の引き締まったプロポーションを持つものと思われる。肩部上端に両端をつぶした粘土紐による横耳が付せられている。火中して釉はカセているが、外面と内面肩部付近まで施釉され、口縁上端部の釉は同じ器形の壷の底部を口縁部の上に直接乗せる重ね焼きのためフキ取られている。胎土は微細な砂粒を含むが、堅緻で灰白色を呈している。984は朝鮮製の粉青沙器の壷である。外面体部に粘土紐の巻き上げ痕を残し、口縁部を外に引き出し端面を平らにしている。暗灰褐色の胎土に灰緑色の釉が薄くかかる。外面体部下半は露胎で残すものと思われる。

b　国産陶器（985～988）

985・986は美濃瀬戸系の天目茶碗である。985は厚い底部と浅い輪高台を持ち、内面に黒褐色の釉がかかってる。胎土は黄白色を呈し、砂けが多くややサクい。露胎部への鬼板による化粧がけは行われていない。986は口縁部の屈曲の弱い器形である。胎土は砂粒を含みやや粗いが、灰褐色を呈し堅緻である。釉は茶褐色で艶があるが、内外面に虫喰い状態が見られる。外面体部下半を露胎で残し、露胎部は灰茶褐色に発色している。露胎部への化粧がけは行われていない。987は唐津の向付である。内面体部には鉄による簡略化された線描きの文様が見られる。胎土は暗灰色を呈し、微細な砂粒を含んでやや粗いが堅緻である。外面体部下半を残して内外面にわずかに白濁した光沢のある灰釉がかかり、器表は暗灰褐色を呈している。露胎部は暗灰色に発色している。988は産地不明の摺鉢である。口縁部の形態は近世の備前焼に似ている。内外面の口縁部付近にはヨコナデが見られ、口縁部外面には浅い凹線が２条巡っている。内面体部上端から７条１単位と思われる浅く細い櫛による摺り目が施されている。胎土は砂粒を多く含んで粗く、灰白色を呈し、内面器表は暗灰色に、外面器表は灰白色に発色している。

c　土師皿（989・990）・土師質土器（991）・石製品（992）

989は粘土円板から手捻りで口縁部を引き起こした土師小皿である。内面は底部から体部を含めて一定方向にナデられ、内外口縁部のみヨコナデが施されている。外面体部から底部にかけては指ナデにより指頭痕を消し、丸く形を整えている。砂粒をあまり含まず精良な胎土で、灰褐色を呈している。口径8.5cm、器高1.7cmを測る。990は第６層出土963などと同様の褐色系の小皿である。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面体部上半にヨコナデを施すが、外面体部下半から外底には指頭痕を残したままで凸凹である。胎土は灰黄色を呈し、砂粒などを含まず精良で焼成も良好であるが、器形のゆがみが大きい。口径9.3cm、器高1.6cmを測る。991は土師質の鍋である。口縁部を「く」の字状に外に折り曲げ、端部を上方につまみ出している。口縁部の強いヨコナデにより、外面体部との境は凹線が巡るように凹んでいる。胎土は小さい砂粒を多く含んで灰褐色を呈し、器表は灰黄橙色に発色している。992は粘板岩系と思われる黒灰色の石材を使った硯である。表面は周縁を欠いているが、陸部はほとんど平坦で使用した痕跡は見られない。裏面は海部を欠くが、使用による隅丸方形の凹みが見られる。

2　遺構出土の遺物

(1)　第１遺構面（図37～41、図版38～42、993～1124）

この遺構面は、文化６年（1809）と考えられる火災層である第３層を切り込み面とするものである。従って1809年を上限とし、第２層の上限時期19世紀中葉から後半を下限とする。

ＳＫ－０１（993～1012）

この遺構からは比較的多くの遺物が出土しているが、遺構面の上限時期19世紀初頭以前のものの方がむしろ多い。993は中国製の芙蓉手の碗である。この地区の出土遺物の中では芙蓉手としては唯一の碗で、大部分は866・867などのような鉢である。口縁部を外に折るように外反させ、腰の張りの弱い、深い器形と思われる。内外面体部を芙蓉手風に分割して窓を設け、それぞれに細線と濃筆を使って花弁文を巧みに描いている。呉須はわずかに灰みを帯びるが良好に発色している。なお、割れ口には漆による補修痕が見られる。994～1002は伊万里磁器である。994・995は腰の張りの弱い器形の染付碗である。994は外面体部に太めの筆による草花文の描かれたものである。釉は灰みの強い発色を見せ、呉須は灰青色を呈している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。995は外面体部に染付けによる細線の蓮華文と４単位の蝶文を描き、内底には「誉」字銘が見られる。内面の釉はやや黄みを帯び呉須は灰黒色に発色するが、外面の呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉は丁寧にフキ取られている。996は外面体部に草花文の描かれた染付の碗である。外底には便化した「大明年造」銘が見られる。底部から体部にかけての器肉は厚く、鈍重な作りである。胎土は灰褐色を呈して粗く、器表は灰赤褐色で、呉須は黒褐色に発色している。997は広東型の染付碗である。高台は大きく高く、体部は直線的に外上方に立ち上がる。器肉は非常に薄い。外面体部には空間を大きく取った柳と思われる樹木文が描かれ、内底にはペンシルドローイングによる花弁文が描かれている。釉は青みを帯び、呉須の発色は良好である。畳付の釉は丁寧にフキ取られている。998・999は染付碗の蓋である。998は997などの広東碗の蓋と思われるもので、口縁は内弯する。外面体部には「富貴佳器」銘が見られ、内底には非常に慣れたタッチの白鷺が線描きによって描かれている。呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉を雑にフキ取り、砂が付着している。999は端反の碗の蓋である。口縁部がわずかに外反する器形で、外面には体部から外底に連続する細線と濃筆による草花文を写実的に描き、内底にはペンシルドローイングによる花弁文が見られる。胎土には少量の鉄の黒斑が認められるが、釉および呉須の発色は良好である。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部は胎土の黒斑が浮いて暗灰色を呈している。1000は有田産と限定できる数少ない染付の一つである。口縁部を四方から深く抉って異形にした向付で、非常に精緻な作りである。全体に空間を広く取り、内底は四弁花を白抜きし、中央に瑞果文を描き、外面体部には丁寧に唐草文が描かれている。外底には「宣嘉年製」の銘が見られる。釉はわずかに青みを帯び、呉須は色鮮やかに、極めて良好に発色している。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。1001は陶体染付の皿で、胎土・釉調・文様など第４層出土880と全く同じものである。内底には四阿風の建物や帆掛船、雲などが太めの筆で描かれ、外底には「大明年製」銘が見られる。1002は色絵皿である。口縁の内弯する器形で、高台は蛇ノ目凹型高台である。全釉で高台蛇ノ目部と内底の釉を輪状にケズリ取った後、内底の露胎部と体部の一部に上絵付けにより文様を描いている。上絵付は黒褐色の線描きと緑・黄・赤・紫などの顔料を使用した円文である。胎土には鉄を比較的多く含むようで、釉は灰みが強く、外底露胎部は淡赤褐色を呈している。1003は美濃瀬

戸系の染付端反碗である。内外面体部には清朝の染付の影響と思われる蔦唐草文が濃筆により描かれている。胎土は純白に近く精良である。釉は部分的に灰みの強い発色をして呉須に灰みを与えているが、全体的には呉須の発色は良好である。釉は厚く、小さい気泡を含んで呉須をやや不鮮明にしている。全釉で畳付の釉をフキ取っている。1004は唐津の灰釉碗である。浅い器形で体部はわずかに内弯する。胎土は灰白色を呈し、非常に堅緻である。釉は透明度の高い黄灰色で、外面体部の回転ヘラケズリ痕が透けてみえる。釉は外面高台付近を露胎で残してかけられ、内底の釉を輪状にケズリ取っている。1005は信楽焼などでも見られるタイプの産地不明の灰釉灯明皿である。内面体部に５条１単位の浅く細い櫛目が横に走る。内面から口縁端部まで施釉され、釉は灰黄白色を呈し、全体に細かい貫入が認められる。露胎で残る外面体部は黄褐色に発色し、体部に回転ヘラケズリ痕が見られる。底部の切り離しはヘラ切りによると思われる。1006は型押しの異形鉢である。灰白色の粗くやや軟質の胎土に厚く粘度の高い白釉をかけ、内底や体部に褐色・赤・黄などの上絵付けによる梅花文が描かれている。全体に細かい貫入が走り、貫入部は灰黒色を呈している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。産地は不明である。1007は関西系のものと思われる白磁の盃である。黄白色の胎土に厚い白釉がかかり、釉の厚さは体部の器肉を凌駕する。釉はやや灰みを帯び、高台外面途中までかけられてる。火中して釉は泡立っている。1008は型押しの交趾写しの三彩盤である。口縁を稜花にし、内面口縁部に唐草文を巡らせ、内面体部を籠目にする。内面見込には、遠くに三重塔を望む風景を型で浮き上がらせている。釉は、内底には褐釉・緑釉・黄釉を使い、内面口縁部から外面畳付までは緑釉を施釉している。高台内面から外底を無釉で残し、外底の中央部を凹ませて蛇ノ目凹型高台にしている。胎土は黄白色を呈し軟質でやや粗く、いわゆる施釉軟質陶の範疇に入るが産地は不明である。火中して一部の釉が赤紫色に変色している。1009は丹波焼と思われる壷である。頸部を「く」の字状に外反させ口縁を丸くおさめている。内外面頸部から口縁部にかけて強いヨコナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み粗いが堅緻で灰黒色を呈している。外面肩部の自然釉は火中してとんでいる。1010は外面体部に黒褐色の泥奬を塗った壷である。頸部がやや内傾し、玉縁状の口縁を持ち、肩部に１条の凹線が巡っている。胎土は砂粒を含んで粗く、灰褐色を呈している。泥奬は内面口縁部付近から外面へ雑にかけられ、頸部には一部かけ残しがある。産地は不明である。1011は小さい玉縁状口縁を持つ信楽焼の壷である。胎土は微細な長石と思われる粒子を含むが精良で、灰白色を呈している。第６層出土940と同じタイプのものである。1012は備前焼の摺鉢である。外面口縁部に２条、内面口縁部には１条の沈線が巡っている。内面体部には、全面に８条１単位の深く細い櫛目を施す。櫛目は口縁部下端から入れられるが、体部と口縁部の境を強くナデることにより上端を揃えている。

ＳＫ－０３（1013）

1013は美濃瀬戸系の端反の染付碗である。外面体部を垂線により３分割し、それぞれに比較的細かい草花文を描き、内底には小さい花弁文が見られる。胎土は純白に近く精良で、呉須の発色は淡い。全釉で畳付の釉を雑にフキ取っている。

ＳＫ－０４上層（1014～1033）

遺物は非常に大量で、上層と下層に分けて取り上げられている。特に時期差は認められないが、とりあえずこれに従って述べることにする。1014～1021は伊万里磁器である。1014は型押しの白磁の木瓜皿

で第３層出土825などと同類である。825などでは観察されなかったが外底に斜めの弓痕が残っている。また、内底および高台内面にかかる釉は、他の部分より青みが強く、染付などに使われる釉を使用した可能性がある。1015～1019は染付である。1015・1016は端反の碗である。高台はわずかに外反気味で、腰の張りが強い器形である。1015は外面体部に３単位の正面向きの兎を描いている。兎は線描きで、周囲を濃でつぶして白抜きする。内底には遠い山並みと雲と思える文様を描いている。胎土はわずかに灰みを帯びるが精良で、呉須の発色も良好である。1016は外面体部に細目の細描きの縦線を上下に巡らせ、中位を中に「十」字を入れた亀甲文で埋めたものである。また、内面口縁部には縦線と「×」印を組み合わせた文様が巡り、見込には３個の亀甲を繋いでいる。胎土は鉄の細粒を含み、釉にも若干の黒い粒子が浮かぶが、呉須の発色は良好である。1015・1016は共に全釉で、畳付の釉を比較的丁寧にフキとっている。1017は腰の張りが弱く、低い高台を持つ碗である。外面体部を３本の縦線で８分割し、草花文と「⊗」２つを串刺しした文様を交互に描いている。内外器表はカセて、黄白色の微細な斑点が全体に浮かび、染付を不鮮明にしている。口縁端部や高台際に見えている虫喰い部の胎土は黄褐色を呈している。全釉で畳付の釉はフキ取っている。1018は新収藏庫地区下段表土出土413と同様の形押しによる稜花の手塩皿である。1019は口縁部を稜花にし、体部を輪花にした大形の皿である。内面体部は太めの筆によるタコ唐草文で埋め、外面体部には輪部を細線で描き、濃を使った唐草文が巡っている。全釉で畳付の釉をフキ取るが、少量の砂が付着している。胎土は微細な黒斑を含み、畳付の露胎部は灰白色を呈している。1020は1002と同種の色絵皿である。1021は赤絵の小瓶である。上絵付けで肩部には白抜きした３単位の梅鉢を描き、体部には赤で２単位の梅樹文、緑で松樹文を描いている。胎土は灰白色で釉も灰みを帯びている。外底まで全釉されている。1022は関西周辺のものと思われるクローム青磁の菊型の鉢である。内底には型押しによる菊花をスタンプし、体部には蓮弁状の細い幅の菊花を刻んでいる。胎土には少量の鉄の細粒を含んでいる。釉はクローム釉特有の鮮やかな緑色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部との境は黄褐色を呈している。畳付には少量の砂が付着している。1023は産地不明の小碗である。外面体部全体に型押しによる陽刻の花弁唐草文を密に巡らせ、凹部に白釉を流し陽刻を浮かび上がらせている。胎土は暗灰色を呈し唐津焼などに似ているが、信楽焼の可能性もある。火中して表面の釉はとんでいるが、灰釉と白釉の二重がけである。灰釉は全釉され、畳付の釉をフキ取り、露胎部は黒褐色に発色している。1024～1028は信楽焼系で、随所で焼成するという意味で産地不明の一群である。1024は胎土や釉が第１層出土785などに類する蓋である。外面には鉄で丁寧に細い枝を描き、白釉を小さい点で飛ばせた花樹を描いている。1025は灯明皿によく見られる焼き締め陶器のような灰白色の胎土を持つ蓋である。外面には灰緑色の釉をかけ、白釉の絞り出しで不明文を描いている。露胎の内面は赤褐色に発色している。1026は第３層出土841～843などと同種の双耳の鍋であるが、釉は透明度の高い灰緑色の灰釉である。外面体部下半を露胎で残し、平底の底部と接して体部下半には小さい形骸化した三足が付けられている。露胎部には煤が付着している。なお、内底には米粒大の目跡が３ヵ所見られる。1027・1028は褐釉の鍋と蓋で、同一個体の可能性が強い。鍋（1028）はわずかに内弯する体部を外方に直角に折り曲げて蓋受けとし、すぐさま上方に折り曲げている。また、底部は凹ませ、その外周を彫り凹めることにより輪高台風の疑似高台を作り、小さい三足を付している。灰褐色の堅緻な胎土に、外面体部下半と蓋受け部を露胎で残して茶褐色の褐釉をかけている。外面露胎部には大量の煤が付

着している。蓋（1027）も1028と同様の胎土、釉を持つ。外面口縁付近と体部の中位および上端に、それぞれ２条の浅い沈線を巡らせている。外底は1028同様に中央を浅く抉り、周縁を沈線により凹ませ疑似口縁風にし、中央に細い粘度紐を「Ｚ」字状に曲げたつまみを付している。内面端部から内面口縁部の釉はフキとっている。なお、釉は粘度の高いものと思われ、特に内面においてまだらに凝縮し、一部に胎土を見せている。1029は丹波焼の褐釉の瓶である。第１層出土787・788などと同じ胎土・釉である。内面体部は轆轤による引き上げ痕を残し、外面体部下半には回転ヘラケズリ痕が見られる。外面体部中位に浅い１条の凹線を巡らせ、凹線より上位には浅い沈線が螺旋状に巻いている。胎土は赤褐色を呈し、非常に堅緻で精良である。釉は光沢のある暗茶褐色を呈し、外面体部下端から平底の底部を露胎で残してかけられている。1030は砥石である。灰黒色の中砥程度の石材である。非常に長く使われたようで４面とも著しく摩耗している。1031・1032は釘である。1031は銅製で通常の角釘であるが、1032は銅製の非常に扁平なもので厚さは１㎜に満たない。1033は扁平な断面の銅製品で、錫杖などの環と思われるものである。

ＳＫ－０４下層（1034～1042）

1034～1042は伊万里の染付である。1034は芙蓉手の盤で、第３層出土832・878などと同種のものである。内面体部には草花文と鳥文を描き、８分割した内面体部の窓には花弁文と宝尽文を交互に描いている。外面体部は３本線で５分割し、丸点文を線描きしている。釉はやや青みを帯び、呉須は輪部が不鮮明ではあるが良好に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取るが、露胎部には砂が付着している。1035は第４層出土876と同じ器形・文様の蛇ノ目凹型高台のソバ猪口である。1036～1040は美濃瀬戸系の染付碗である。すべて口縁がわずかに外反する器形で、法量も同一で規格性が極めて高い。文様は何種類か見られるが、すべて細線と濃筆を併用したものである。胎土は純白に近く精良で、呉須は一様にやや淡く、文様は不鮮明であるが良好に発色している。また、呉須部分がごくわずかに盛り上がるのもこのタイプの特徴である。1041は関西周辺のものと思われる染付盃である。769～772などと同類で、外面体部には細線による写実的な樹木、四阿風の建物、川を渡る棹船、島影などが描かれている。胎土は純白に近く精良で、呉須の発色は鮮やかである。1042は朱泥の筆立であろうか。細長い長方体で、四面には二重の沈線で囲んだ「幽兼芳□」、「可山書」などのヘラ描きの文字を書き、上端面にはやはりヘラ描きによる雷文帯を巡らせている。胎土は須恵質の暗灰色と暗赤褐色のサンドイッチで、非常に堅緻で精良である。器面は朱泥により赤茶褐色を呈している。

ＳＤ－０１（1043～1046）

1043は中国製の白磁坏である。通常割高台を持つものである。外面体部下半を露胎で残し、失透した黄白色の釉がかけられている。胎土は軟質で黄白色を呈しややサクい。1044は備前焼瓶の口縁部である。頸部を直角に外方に折り広げ、さらに真上に引き上げ端部を丸くおさめている。砂粒を含んでやや粗い灰褐色の胎土で、器表は暗赤褐色に発色し、外面に自然釉がゴマ状に付着している。1045は褐色系の土師皿である。風化して内面の調整は不明であるが、口縁部の内外からつまむようなヨコナデにより端部を鋭く尖らせている。外底は指ナデにより指頭痕を消すが、外面体部は指頭痕を残したままである。胎土は灰茶褐色を呈し、砂粒などを含まず精良である。口径10.4㎝、器高2.0㎝を測る。1046は土師質の焙烙である。新収藏庫地区上段第４層出土125・126などと同類であるが、これらに比して鍔が大きい。

底部を欠くが、内面体部から鍔の上面まで丁寧なヨコナデが見られる。胎土は暗茶褐色を呈し、少量の砂粒を含むが精良である。

ＳＤ－０３（1047～1058）

1047は中国製の染付の鉢である。いわゆる芙蓉手で、第４層出土867・868と同様のものである。1048～1052は伊万里の染付である。1048は外面体部に簡略な笹と思われる文様だけを描いた小碗である。胎土には鉄の黒斑を含み、灰白色を呈している。釉は灰みが強く、呉須も灰みを帯びた発色である。全釉で畳付の釉を雑にフキ取り、砂が付着している。1049は外面体部には近景に樹木、遠景に島影とマストを持つ帆船を描き、内底には「誉」字銘が見られる碗である。胎土は純白に近く、呉須も比較的良好に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取るが、微量の砂が付着している。1050はＳＫ－04下層出土1035と同じ文様のソバ猪口である。やはり蛇ノ目凹型高台であるが、蛇ノ目部の釉のフキ取りは雑で、凹型の内底の釉も一部がフキ取られている。蛇ノ目部には直径約4.5cmの輪陶枕の痕跡を残している。1051はＳＫ－04下層出土1034と同じ芙蓉手の盤である。文様などもまったく同一である。最低６片に割れていたものをガラス焼継ぎにより補修している。1052は染付端反碗の蓋である。外面体部には３ヵ所の雲形の窓の中に蝶を描き、空間を濃と細線を使った花弁文で埋め、内面には口縁部に雷文帯を巡らせ、内底には線描きで宝尽文を描いている。釉は青みを帯び、呉須は良好に色濃く鮮やかに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。露胎部は黄褐色を呈している。1053は第１層出土774～777と同種の白磁皿である。1054は第４層出土887などと同種の灰釉の灯明皿である。内面に受け部を設け、受けには灯芯置きの抉りがある。灰白色の精良な胎土を持ち、釉は艶のある透明釉で灰黄色を呈し、全体に細かい貫入が走る。外面は露胎で、体部全体に轆轤によるヨコナデを施している。外底は平高台でヘラにより切り離されている。なお、外面体部中位には、わずかであるが内面受け部と同一径の直接重ね焼きの痕跡が見られる。1055は土師質の鍋である。第７層出土991などと同種のもので、やはり外面口縁部と体部の境は口縁部の強いヨコナデにより凹線を巡らせたように凹んでいる。1056～1058は鉄釘である。すべて通例の鋼製の角釘である。

第Ⅱ期ＳＧ－０１（1059～1122）

非常に多量の遺物が出土している。1059～1063は中国製の白磁である。1059は内面にヘラ描きの劃花文を持つ碗である。断面台形で高い高台を持っている。灰白色で非常に堅く精緻な胎土である。釉は光沢があり透明度が高く、灰黄色を呈している。外面体部下半を露胎にするものと思われる。1060は内面にヘラ描きの劃花文の見られる碗で、第６層出土925などと同種のものである。胎土には少量の鉄の黒斑が見られるが精良で、釉は青みが強く透明度が高い。外面体部下半を露胎で残す。高台は断面四角で低く、外面端部は面取りされている。1061は小さい平高台の皿である。胎土は鉄を多く含み、灰白色を呈しやや粗く、釉は灰緑色に発色している。外面体部下半を露胎で残す。体部下半の露胎部には轆轤による水挽きの痕跡が見られる。1062は口禿げの皿である。内底と体部の境には１条の沈線を巡らせている。胎土は鉄の細粒を含むが堅緻で、釉は灰みを帯び失透する。いったん底部を露胎で残して施釉し、後に刷毛により底部に釉を塗っている。1063は割高台の坏である。火中したのか釉はカセ、露胎の外底には黒い煤状のものが付着している。1064～1071は中国製の青磁である。1064～1067は線描き蓮弁文の碗で、腰の張りが弱く、比較的高い器形で、他は腰が丸く低い器形のものである。1064は外面体部にヘラによ

る片切彫り風の線描き蓮弁文が巡り、剣頭は蓮弁文の単位に従っている。内底には弱く不鮮明な印花文がスタンプされている。釉は透明度が高く、濃い草緑色を呈している。全釉で外底の釉を輪状にケズリ取り、露胎部が茶褐色に発色している。1065・1066は外面体部に細いヘラ先による蓮弁文を巡らせている。ともに剣頭は蓮弁の単位を無視して刻まれている。内底には片切彫り風の陰刻の花弁文が見られる。胎土は灰白色を呈し、セメント質で粗い。釉は透明度が高く暗緑色に発色し、全体に細かい貫入が見られる。1067は細めの丸ノミによる蓮弁文が外面体部に見られるもので、剣頭は蓮弁の単位を比較的よく守っている。灰色の精良な胎土で、釉は透明度の高い灰緑褐色を呈している。1068は口縁の内弯する無文の碗である。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は光沢があり暗緑色に発色している。1069は大形の鉢である。内面には片切彫りの草花文が見られる。胎土は淡灰色で、釉は淡草緑色を呈している。国産の可能性もあるが小片のため不明である。1070は鎬蓮弁文の碗である。内面体部と内底の境に1条の沈線が巡り、外面体部にはヘラによる削り出しの鎬蓮弁文が見られる。高台は断面四角で外底の抉りは浅い。胎土は灰白色を呈し、きめ細かく精良である。透明度が高い草緑色の釉が高台外面までかけられ、一部畳付にまわった釉は粗くフキ取られている。露胎部は暗灰色に発色し、釉境は黄茶褐色に発色している。1071は盤で、内外面体部には幅広の浅い丸ノミによる蓮弁文が巡っている。灰白色の胎土に透明度の低い暗草緑色の釉がかかる。全釉で外底の釉を粗くケズリ取り、露胎部は暗赤褐色を呈している。1072・1073は中国製の染付である。1072は口縁の内弯する皿である。内面体部には細線と濃筆を使って獅子文を描いている。胎土は微細な鉄の黒斑を含むが精良で、釉はやや青みを帯びる。呉須は色濃く鮮やかに発色している、全釉で畳付の釉をフキ取るが、少量の砂が付着している。露胎部は黄褐色を呈している。1073は把手付きの水差しである。頸部は太く、口縁部はラッパ状に外方に開くものと思われるが、内面体部と頸部の境に接合痕があることから考えると、あるいは口縁部は単なるラッパ口ではなくもう少し複雑な器形かもしれない。外面体部は竹状の文様で4分割され、2単位の山水文と「寿」字を形取った松樹文、瑞果文が描かれている。把手は型造りの中空で、直径約3㎜の空気抜きが穿孔され、花弁文が描かれている。胎土は少量の鉄を含むが精良で、釉はやや青みを帯び、呉須の発色は極めて良好である。外底には体部と異なる灰みを帯びた釉がかけられ、おそらく内外から畳付にまわったであろう釉は丁寧に面取りするようにケズリ取られ、露胎部との境は黄橙色に発色している。割れ口には漆による補修痕が見られる。なお、同種の文様を持つ水注の存在が知られている。1074は中国製の褐釉天目茶碗である。高台はいわゆる椎茸高台で、高台径は比較的小さい。灰白色の堅緻な胎土で、黒褐色の釉が外面体部下半を露胎で残してかけられている。1075は美濃瀬戸系の黒釉天目茶碗である。高台は低い輪高台である。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗灰色を呈している。黒釉が外面体部下半を露胎で残してかけられているが、火中して釉は泡立っている。露胎部への化粧はされていない。1076は産地不明の褐釉の小壺である。口縁部を内側に巻き込んだ器形で、断面台形の大きく高い高台を削り出している。外面体部には回転ヘラケズリ痕が見られる。胎土は淡灰白色を呈し、磁質に近く精良である。茶褐色の釉が口縁端部から外面体部にかけられるが、体部下半を露胎で残す。1077は伊万里の白磁香炉である。三足が付せられるが、脚部の表現は非常にリアルで、牙を持つ鬼面が象のように太い獣足を咬えている。胎土は非常に精良でほとんど純白に近く、釉は青みを帯びた青白磁風で光沢がある。外面は全釉され、獣足の裏の釉をフキ取るが、微細な砂が付着している。内面の露胎部は黄橙色に発色している。1078～1083は伊万里

の染付である。1078は外面体部に線描きの蓮弁文と蝶を描いたものでＳＫ―01出土995と同種である。1079は断面四角でがっしりした、径の大きい特徴的な高台を持つ鉢である。内外面体部には、おそらく鳳凰と思われる文様や雲堂文などが、細線と濃筆により描かれている。胎土は精良で、釉は青みを帯び、呉須は色濃く非常に良好に発色している。釉は畳付をわずかに越えてかけられ、畳付の釉はフキ取っているが、高台外面やわずかに内面にまわった釉に砂が付着している。火中したのか、露胎部や割れ口には煤が付着している。1080は型押しの稜花の輪花鉢である。内面体部は輪花に従って８分割され、２種類の花弁文が交互に描かれている。内底には宝尽文が見られる。外面体部には細線で輪郭を描いて濃でつぶした唐草文が巡り、外底には「渦福」銘が見られる。胎土には少量の微細な鉄の黒斑を含み、釉は灰みを帯び、呉須は灰青色に発色している。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。なお、割れ口には漆による補修痕を残している。1081・1082は同一個体の鉢である。蛇ノ目凹型高台で、内弯気味の体部を口縁端部でわずかに外につまみ出している。外面体部には細い線描きと濃筆を使った細かい牡丹唐草文が巡り、内底には松竹梅文を描いている。外面は細線で輪郭を描き、濃でつぶした唐草文を巡らせ、内底には「冨貴長春」銘をか細く書いている。胎土は純白に近く精良で、釉はわずかに青みを帯びている。呉須は淡いが良好に発色している。全釉で高台蛇ノ目部の釉を丁寧にフキ取っているが、径約6.4cmの輪陶枕痕が残っている。なお、割れ口には漆による補修痕が見られる。1083は盤である。高台内面の削りが深く、体部に比して底部は薄い。内底に淡い筆使いの、おそらく山水文と思われる文様が描かれている。胎土は灰みが強く、やや粗い。釉は粘度が高く、外面では溜り状になり、やはり灰みを帯びる。呉須は淡く不鮮明で、灰青色に発色している。全釉で畳付の釉を雑にフキ取り、砂が付着している。露胎部との境は茶褐色を呈している。1084は伊万里の染付八角鉢である。外面は染付で縁取りし、手足を渦状にした唐子像と渦状の蔓を持つ花弁文を交互に描き、内面体部上半には大きく花弁唐草文を巡らせている。釉はわずかに青みを帯び、呉須は色濃く鮮やかに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。なお、一部に火中した破片が混ざる。1085は伊万里のいわゆる青磁色絵の湯呑である。やや灰みの強い青磁の胎土に、くすんだ灰緑色の釉がかかる。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取り、露胎部は黄褐色を呈している。外面体部は赤い上絵付けの細線で４分割し、赤い線で輪郭を描き、空間を赤で埋め、服を金彩し髪を黒で染めた唐子と、緑・黄・薄紫などで描いた草花文各２単位の上絵付を巡らせている。1086は関西系と思われる端反の碗である。外面体部に草花文と昆虫文、内底に昆虫文を描いたものである。胎土はわずかに灰みを帯び、呉須も灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。1087は型押しのクローム青磁の菊皿で、おそらく関西系のものと思われる。胎土は純白に近く精良で、釉は鮮やかな若竹色である。外底には刷毛による白磁釉がかけ分けられ、畳付から高台内面を露胎で残す。一部外面から畳付にまわった釉をフキ取るものと思われる。1088は施釉軟質陶の鉢で、ＳＫ―01出土1008などと同類の交趾写しの三彩と思われる。内面には実際に竹籠を使用したと思われる型押しによる籠目が見られ、外面には細かい目の布痕が見られる。黄灰白色で軟質の胎土に、鮮やかに発色した緑釉がかけられている。1089は産地不明の灰釉の小碗である。口縁部がやや内弯するぐい呑み状の器形で、外面体部下半には回転ヘラケズリ痕を残している。灰白色で精良な胎土に、透明度の高い灰緑色の釉が外面高台付近までかかる。釉は全体に細かい貫入が走り、内底にはガラス質の溜りができている。1090は第５層出土916と同様の、白磁の戸車と思われるものである。1091は丹波焼の壺であ

る。火中して表面がカセているが、新収蔵庫地区下段ＳＫ―01出土689などとほとんど同様のものである。1092～1095は東播系の須恵質こね鉢である。1092・1093は口縁部が上方に大きく拡張したもので、口縁端面は丸みを帯びている。1092は内面体部を右下がりの斜め方向にナデ、口縁付近内外面にヨコナデを施し、外面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残すものである。胎土は砂粒を含むが堅緻で暗灰色を呈し、口縁端面は直接火を受けて黒く光っている。1093は1092と同様の胎土であるが、灰みが弱くやや精良である。1082同様の調整を受けるが、内面体部のナデは水平方向である。また、外面口縁下に重ね焼きの痕跡を残さず、口縁端面も体部と同様の発色である。1094・1095は口縁上部の押しナデにより、上端部を内側に巻き込んだものである。1094は口縁部端面に浅い１条の凹線を巡らせたもので、胎土は鉄あるいはマンガンの黒い粒子を多く含み、灰白色を呈している。体部のナデは右下がりである。重ね焼きの痕跡は残さない。1095も胎土に鉄やマンガンの黒い粒子を含み、暗灰色を呈している。外面口縁部下端に重ね焼きの痕跡を残している。1096は土師小皿で、地元版のヘソ皿である。非常に小形であるが、外底に簀子痕を持つものをベースにするものと思われる。口径5.8cm、器高1.2cmを測る。1097～1102は土師質の羽釜である。1097～1100は胎土に多くの砂粒を含むものである。通例暗褐色を呈するが、これらは灰桃褐色に焼成されている。口縁部を「く」の字状に外反させ、口縁端部を上方につまみ上げている。内面体部にはヘラケズリ痕を残し、外面口縁部付近に丁寧なヨコナデを施し、外面体部にはナデが認められる。外面体部から口縁部にかけて煤が付着している。1101は器形的には1097～1100などと似るが、胎土はまったく異なり、微細な砂粒を含み堅緻で赤褐色を呈しいる。1102は鍔部を欠くが、いわゆる紀伊型とされる羽釜である。口縁上端部の上方へのつまみ上げが弱く、端面はほとんど平坦である。1103は紀北地方に通例の瓦質のこね鉢である。内面を横方向に刷毛調整し、口縁部付近内外にヨコナデを施した後、外面を横方向にヘラケズリし、さらに内面に浅い櫛目を入れたものである。胎土は砂粒を含んで粗いが、堅緻で灰白色を呈し、器表は黒灰色に焼成されている。1104は口縁端部を丸くおさめた器形の土師質こね鉢である。器表が摩耗し調整などはあまり明瞭でないが、内面体部をナデ、内外面口縁部付近にヨコナデが施されている。外面体部にはヘラケズリの痕跡が見えるが、後にナデられているか否かは不明である。胎土は砂粒を含むが堅緻で、内部は灰黒色を呈し、器表は明黄褐色に焼成されている。内面体部には、粗く浅い櫛目の痕跡を残している。1105は瓦質の香炉と思われるものである。口縁部には抉りがあるが、実測図は抉り込まれた部分の図であるため、全体の器形を把握することが困難であると思われる。高台はバチ状に外に開いている。内外面全体にナデが施され、外面体部にはナデの後に施された横方向のヘラ磨きがかすかに認められる。胎土は砂粒などをほとんど含まず精良で灰黄白色を呈し、器表は黒灰色に焼成されている。1106は堺産と思われる焼塩壷である。布を巻いた円筒形の型を厚く粘土でつつみ込むように手捏ね成形したものである。口縁部は外面を指で押しながら内面を面取りするように尖らせながらナデている。砂粒を多く含んだ粗い赤橙色の胎土で、器表は黄橙色を呈している。なお、残存部にはスタンプなどは見られない。1107・1108は銅製の獣面の吊り金具と思われるものである。鋳造品にノミで細かい細工を加えたものである。取り外しが可能なように鍵形の切り込みを入れた船形の銅板が、中空の内面に蓋をするような形でハンダ付けされている。1109～1122はＳＧ―01内の木製溜桝（ＳＫ―07）から出土した遺物である。1109は施釉軟質陶器の灯明皿である。明茶褐色を呈する土師質の胎土に、柿釉と俗称される光沢のある透明釉が薄くかかる。1110～1122は鉄製の釘で

ある。溜桝の板材を固定するのに使われたもので、すべて通常の角釘である。

ＳＫ－０５（1123・1124）

1123は伊万里の染付である。ＳＫ－04上層出土1017やＳＧ－01出土1078などの腰の張りの少ない器形に属する碗である。外面体部には細めの線描きによる幾何文様が描かれている。胎土には非常に微細な鉄の粒子を含んで釉は灰みを帯び、呉須は灰青色を呈している。1124は美濃瀬戸系の製品と思われるが、器形は不明である。水平に折り曲げた口縁部は、直線的にカットされ多角形をなし、上面平坦部には鉄による不明文が描かれている。底部を露胎で残し、灰白色の長石釉がかけられている。胎土は灰黄白色を呈し、砂粒を含んでやや粗い。露胎で残る外底には、回転糸切痕が見られる。

(2)　第２遺構面（図42・43、図版42～44、1125～1167）

この遺構面は第４層を切り込み面とするもので、直上層は文化６年（1809）と考えられる火災層である、また、第４層は18世紀末ごろを上限とする整地層である。従ってこの遺構面は上限を18世紀末ごろとし、下限を1809年とする。ただし、遺物にはそれ以前のものが相当量含まれている。

ＳＫ－０７（1125～1131）

1125は伊万里の蛇ノ目凹型高台の染付皿である。内面には細線と濃淡２色の濃を使った花弁文と思われる文様が描かれている。胎土は微細な鉄の粒子を含むが非常に精良で、呉須の発色は良好である。全釉で内底の蛇ノ目部の釉をフキ取っている。1126は美濃瀬戸系の天目茶碗である。非常に大形で、高台は内側を抉ったいわゆる椎茸高台である。胎土は鉄の細粒を多く含んで灰黄褐色を呈し、非常に堅緻である。釉は暗茶褐色を呈する褐釉で、内底には厚くかかり、内面はガラス質で黒褐色を呈している。露胎で残された外面体部下半から外底には、暗褐色の鬼板による化粧が行われている。1127は無釉の灯明皿である。灰白色で堅緻な焼き締め陶器のような胎土を持つ。内底は一定方向にナデ、内面体部から外面体部上半にはヨコナデを施している。外面体部には回転糸切痕を残し、切り離し後外底から外面体部下半に細い幅の回転ヘラケズリを行い、底部と体部の稜を消している。器表は暗赤褐色を呈し、口縁部にはタールが付着している。1128は常滑焼の甕である。口縁部は「Ｎ」字状に折り曲げた幅の広いものである。胎土は多くの砂粒を含んで暗灰褐色を呈し、器表は暗赤褐色に発色している。1129は備前焼の摺鉢である。口縁部外面には深い２条の沈線が巡り、非常に形骸化した注口が付けられている。内外面口縁部付近にヨコナデを施し、外面体部には回転ヘラケズリ痕を残している。内面体部には浅く細い10条１単位の櫛目を密に巡らせ、内面口縁部と体部の境に両端を突らせ中央を凹ませた施文具を全周させることにより２条の沈線を巡らせ、かつ櫛目の上端を揃えている。体部は大粒の砂粒を含んで粗く、赤褐色を呈している。火中して内外全面に煤が付着している。1130は双耳の鍋である。ＳＫ－04下層出土1026と同種の暗灰色の胎土と暗緑色の釉を持つもので、口縁端部を内側に折り返して丸めたものである。1131は瓦質の蓋である。おそらく火消し壺などの蓋と思われるもので、上面中央にはつまみが付いている。円盤形の粘土板に体部を貼り付けたもので、内外全面にヨコナデが見られるが、体部から口縁部は特に強くナデられて口縁部外面は凹線を巡らせたように浅く凹んでいる。なお、上面には重ね焼きの痕跡が見られる。胎土は微細な砂粒を多く含んでやや粗く、灰黄褐色を呈し、器表は暗灰色に焼成されている。

ＳＫ－０８（1132）

1132は青磁の角瓶である。関西系のものと思われるが、釉の発色からは紀州藩の御用窯である瑞芝焼の可能性もある。型により花弁文や唐草文などを押した平らな粘土板を貼り合わせたものである。粘土板は端部を45度の角度で面取りして接合面積を大きくしている。胎土は若干の鉄の黒斑を含むが精良で、灰白色を呈している。釉は光沢のある黄緑色で、浮文上の釉の淡い部分はやや褐色みのある発色である。なお、内面にも施釉され、接合部を埋めて接着剤の役目も果たしている。

ＳＤ－０３（1133・1134）

1133は伊万里の白磁稜花皿である。外反する口縁の端部を、外方から押しナデて上方につまみ上げた器形である。胎土は純白に近く精良で、釉はわずかに青みを帯びて光沢がある。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。1134は唐津の灰釉碗で、従来の第３層出土838やＳＫ－01出土1004などとは趣の異なるものである。体部の器肉が厚く鈍重な作りで、釉も非常に透明度が高く、内底にはガラス質の溜りができている。胎土は灰白褐色を呈し、堅緻である。釉は灰黄褐色で、器表には胎土の微細な鉄の黒斑が浮き、外面体部の回転ヘラケズリ痕が透けて見える。畳付の釉のフキ取りが雑で、多量の砂が付着している。

ＳＤ－０６（1135・1136）

1135・1136は木製の継手である。高野山では標高の関係もあり、飲料水として湧き清水が利用される場合が多く、その際の導水管には節を抜いた竹が利用される。これらはその導水管の継手で、「枕」あるいは「駒」などとも俗称されている。枕大の直方体の木材を竹の太さに内部を刳り貫き、ここに節の部分が当たるように差し込んで漏水を防ぐ仕掛けである。1135は「Ｔ」字形の分岐用のもの、1136は直線的に継ぐものである。他に直角に継ぐ「Ｌ」字形のものなどもある。

ＳＥ－０２（1137・1138）

1137・1138は伊万里の染付碗である。腰の張りの弱い器形である。1137は外面体部に細い線描きによる、細長い16単位の「寿」字文を巡らせたものである。胎土は微細な鉄の黒斑を含みややサクいが、釉・呉須の発色は非常に良好である。全釉で畳付の釉はフキ取っている。1138はＳＧ－01出土1078と同じ文様を描いたものであるが、胎土は黄みを帯びやや軟質で、内外全面に黄白色の微細な斑点が浮いて染付を不鮮明にしている。なお、内面体部には軟質の陶器などによく見られる、螢と呼ばれるの斑紋が浮く。

ＳＥ－０３（1139～1141）

1139は腰のよく張った器形の伊万里の端反碗である。外面体部にはＳＥ－02出土1137と同様の「寿」字文が巡り、内底にも「寿」字文が書かれている。胎土は精良であるが、釉はわずかに灰みを帯び、呉須も灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取っている。1140は器形的にはＳＥ－02出土1137～1138などに類似する腰の張りの弱い碗であるが、文様は呉須ではなく鉄によるものである。外面体部には細線と濃筆による鉄の濃淡で島影を描いている。胎土は黄白色を呈し、軟質でサクい。発色の悪い伊万里の染付の可能性も残るが、産地は不明である。1141は土師小皿である。口縁部を内弯気味に上方に引き起こし、強いヨコナデで端部をわずかに肥厚させたものである。内面は不定方向にナデ、外底には丁寧な指ナデが見られる。胎土は微細な砂を多く含み黄白褐色を呈している。口径8.8cmを測る。

第Ⅰ期ＳＧ－０１（1142～1152）

1142は内面にヘラ描きの劃花文の見られる第６層出土925や、ＳＧ－01出土1060などと同類の中国製白磁の碗である。胎土には鉄の黒斑を含み淡灰白色を呈し、925・1060などと比して粗い。釉はやや灰緑色を帯び、透明度は高い。外面にはやや粗い貫入が、内面には細かい魚鱗状の貫入が走っている。1143は中国製の端反の青磁碗である。体部の器肉は薄く、口縁部の反りは大きい。灰白色の堅緻な胎土で、釉は淡灰緑色を呈している。釉はカセて透明度は低いが、通例は外面体部のヘラケズリ痕が透けて見えるタイプのものである。1144は中国製の碁笥底の染付皿である。比較的口径が大きく、口縁部が外反し、やや深い器形と思われる。内底に草花文を描き、外面は無文である。微細な鉄の黒斑を含むが胎土は精良で、釉は強く青みを帯び、呉須の発色は不鮮明であまり良好ではない。高台内面などに露胎部分を部分的に残して粗く全釉したのち、畳付から体部下半の釉をケズリ取っている。露胎部との境は黄橙色に発色している。1145は伊万里の青磁香炉である。第５層出土906と同様のもので、口縁部を内側に折り曲げて上端面を平らにし、外面体部上半と下半にそれぞれ幅の太いものと細いものをセットにした沈線を巡らせている。釉は光沢のある青緑色で全釉され、蛇ノ目部の釉はフキ取られている。露胎で残る蛇ノ目部は暗灰色に発色し、直径約8.5cmの輪陶枕の痕跡を残している。なお、一部火中した破片が含まれている。1146は伊万里の白磁である。口縁部が内弯する小形の碗で、小さい断面三角形の高台が付けられている。胎土は純白に近く精良で、釉も光沢がある。高台内外面に溜った釉はわずかに青みを帯びる。全釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。1147・1148は伊万里の染付である。1147は口縁の内弯する碗で、外面体部に草花文を描き、外底には「渦福」銘が見られる。胎土は鉄の黒斑を含んでやや粗く、内面器表には微量の砂が付着している。草花文と「渦福」銘は異なった職人の手（あるいは呉須、釉薬）によると思われ、外面の釉はやや青みを帯び、呉須も比較的良好に発色するが、内底は釉および「渦福」銘共に灰みが強い発色である。全釉で畳付の釉は雑にフキ取られている。1148は稜花皿である。内面体部は細線と濃筆を使った蔓唐草文で埋め、外面体部にはやや太めの筆による唐草文が巡っている。釉はやや灰みを帯び、呉須は不鮮明で淡く発色している。割れ口全面に漆が付着し、補修痕を示す。1149・1150は土師皿である。1149は外底に回転糸切痕を持つもののうち、口縁部をわずかに外反気味にヨコナデするタイプの小皿である。微細な砂粒を含むが精良な黄橙色の胎土を持つ。口径9.0cm、器高1.5cmを測る。1150は淡灰褐色の比較的よく水簸された胎土の小皿である。内底を不定方向にナデ、内面体部から外面口縁部の強いナデにより口縁部を内弯させている。外底は指頭痕を残したままで、凸凹である。口径7.9cm、器高1.7cmを測る。1151は瓦質の火舎である。ＳＧ－01出土1105などと異なり蓋受けは見られず、口縁部を肥厚させて上端部を平坦にしている。内外面は摩耗して調整などはあまり明らかでないが、口縁部から外面体部は比較的丁寧にヘラケズリされていたようである。また、外底周縁に浅い角度の面取りが行われているようで、三足の付される可能性が大きい。胎土は微細な砂粒や少量の雲母粒を含むが精良で、灰褐色を呈し、器表は黒灰褐色に焼成されている。口縁部内面には部分的に煤が付着している。1152は緑泥片岩製の一石五輪塔である。幅約12cm、厚さ約7.5cmの直方体の石材からの雑な加工である。風・空・火・水の各輪に「キャ」・「カ」・「ラ」・「バ」の梵字が彫り刻まれているが、他に銘文は認められない。

ＳＢ－０１基壇石垣裏込（1153～1161）

1153・1154は中国製の白磁である。1153は白磁の型押しの菊皿で、外底には「天下太平」の染付銘が見られる。胎土は鉄などの粒子をほとんど含まず精良であるが、火中して釉はカセている。全釉で畳付の釉をフキ取るが、少量の砂が付着している。1154は端反の皿と思われる器形である。高台は削り出し高台で、端部を突らせている。胎土には少量の砂粒を含み、釉は失透した灰白色を呈し、粘度が高い。全釉であるが施釉は雑で、高台付近および外底は露胎で残る部分があり、畳付周辺には多量の砂が付着している。内底の釉を輪状にケズリ取り、重ね焼きの痕跡が見られる。1155は伊万里の染付碗である。口縁の内弯する器形の碗で、外面体部には非常にパターン化した草花文が巡っている。胎土は鉄の細粒を含んでやや灰みを呈し、呉須は灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取り、露胎部は黄褐色に発色している。1156は第３層出土843とほとんど同一の器形・釉の鍋である。底部は小さい平底で、体部の底部際に小さい形式的な三足が付けられている。また、内底には米粒大の３カ所の目跡を残している。1157・1158は常滑焼の壷である。「く」の字状に外に折り曲げた口縁の端部を上方につまみ上げている。端部のつまみ上げは1158の方がより顕著である。1157は口縁部内外面に丁寧なヨコナデを施し、内面体部には粘土紐の指による接合痕を残し雑にナデている。口縁部内面および外面肩部には灰緑色の自然釉が厚くかかっている。胎土は微細な砂粒を含むが堅緻で灰白色を呈し、器表は暗赤褐色に発色している。1158の胎土は、1157に比してやや大粒の砂粒を含み粗い。胎土は明灰褐色を呈し、器表は暗茶褐色に焼成されている。内面口縁部にはゴマ状の自然釉が付着している。1159・1160は備前焼の甕である。1159は口縁部を折り返した扁平な玉縁を持つもので、1160は口縁部外面を３条の凹線により波状にしたものである。共に砂粒を多く含んだ粗い胎土で、暗赤色に発色している。器表は1159が黒褐色、1160が暗赤褐色に発色している。1161は石製の硯である。火中して一部が赤褐色に変色しているが、黄白色を呈した軟岩で石質はきめが粗く脆い。

Ｐ－０２（1162・1163）

1162は中国製の染付皿である。口縁の内弯する器形で砂高台を持ち、第３層出土823などと同種同文様である。胎土は少量の鉄の黒斑を含む。釉は灰みを帯び、呉須は灰黒色に発色している。釉は失透して粘度が高く、外底では縮みが生じている。全釉で畳付の釉はフキ取らず、多量の砂が付着している。1163は第１期ＳＧ－01出土1151と同種同形の瓦質火舎で、外底に三足の痕跡を残している。外面は口縁上端面と体部上半を一部に残して器面が剥離し、残存部にはヘラ磨き痕が見られる。胎土は微細な砂粒を含むが、堅緻で灰茶褐色を呈している。内面体部上半から口縁内端部に少量の煤が付着している。

Ｐ－０４（1164）

1164は中国製の瑠璃釉の小壷である。931・982などと同様に白釉と瑠璃釉の二重がけである。型作りにより上下を結ぎ合わせたもので、内面体部中位に接合痕が見られる。胎土は白磁のものに類し、白釉も白磁の透明釉に近い。白釉は内外全面にかけられ、瑠璃釉は内外面と内面体部上半まで施釉されている。釉は鮮やかなコバルトブルーに発色している。

Ｐ－０５（1165）

1165は中国製の白磁碗である。外面口縁部下端に１条の凹線を巡らすことにより口縁外側端部を外につまみ出し、上端面を平らにカットしている。高く細い高台が付き、外面体部下半を露胎で残すタイプ

である。胎土は鉄の微細粒子を含むが堅緻で、釉は透明度が高く光沢があり、灰黄白色を呈している。

Ｐ－０３（1166）

1166は錫杖などの環と思われる青銅製品である。断面は扁平ではなく楕円形である。ほとんど銹化せず、表面はブロンズの光沢を持っている。鋳造品であるが工具の刃を直角に当てて表面を磨いている。

Ｐ－０６（1167）

1167は中国製の染付である。芙蓉手で第４層出土866・867などと同じ折り縁の器形と思われるが、文様は866・867ほど定形化していない。内底には孔雀と思われる動物文を線描きと濃筆によって描き、外面は２本の垂線により４分割されている。胎土はごく少量の鉄の黒斑が認められるが精良である。呉須の発色は比較的良好であるがやや輪郭が淡く、866・867ほど鮮やかで色濃くない。全釉で畳付の釉を雑にフキ取るが、多くの砂が付着している。なお、外底には放射状のカンナ痕が見られる。

(3)　第３遺構面の遺構出土遺物（図44～46、図版44～46、1168～1227）

この遺構面は第６層を切り込み面とし、元禄４年（1691）の火災層と考えられる炭層が、特に東半においてごく薄く直上に堆積している。第６層の出土遺物で最も新しい要素は、17世紀前半40年代から50年代頃にあると思われ、第６層の整地は17世紀前半ごろを上限時期とする。従って、この遺構面は17世紀前半を上限とし、17世紀末を下限とする。

ＳＫ－０９（1168）

1168は伊万里の染付段皿である。体部を途中でいったん内側に屈曲させ、口縁部に向かって体部を外反させる器形で、断面台形の輪高台の付くタイプである。内底にはやや太めの線描きにより菊花文帯を巡らせ、空間を濃で埋め、内底には山水文などを描く。胎土は純白に近く精良であるが、釉は粘度が高く失透して光沢は鈍い。呉須はやや淡いが色鮮やかに発色している。

ＳＫ－１０（1169）

1169は中国製の赤絵で、「天啓年製」銘の見られる第３層出土824と同種のものである。染付により内外面に網代文が描かれ、上絵付けにより花びら状の小さい花弁文が見られる。

ＳＫ－１２（1170～1180）

1170～1173は中国製の白磁である。1170は双耳壺と思われるもので、外面頸部下端と肩部に各２条の沈線が巡り、体部は３本単位の櫛目により８分割されている。内面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残している。火中したのか、釉はカセて黄白色の斑点が浮き、光沢を失っている。露胎で残る内面には、胎土の黒い釉の斑点が無数に浮き上がっている。1171は水注で、いわゆる青白磁である。注口に龍首などの付せられるもので、外面体部の文様は渦文ではなく劃花文である。胎土は微細な砂粒を含んでやや粗く、灰白色を呈している。釉は透明度が高く灰青色で、溜り部分はガラス質の青白色に発色している。全体に細かい貫入が走り、火中して貫入部は黒灰色を呈している。釉は高台を越えて施釉され、畳付の釉は幅広くケズリ取られている。露胎部には煤が付着している。1172・1173はいわゆる口禿げ皿の一種で、内底に型押しによる劃花文の見られるタイプである。胎土は灰黄白色を呈し、やや軟質でサクい。火中して器表の釉はカセている。1174は中国製の染付碗である。器形は口縁がやや外反するもので、根来寺では天正13年の兵火直前頃から現われるもので、セットをなす皿は依然口縁の内弯するタイプのものである。内外面の圏線を除いて無文である。胎土は鉄の微細粒子を含み、釉には細かい黒斑が浮き上

がり光沢を欠く。1175は中国製の黒褐釉の天目茶碗である。胎土は微細な砂粒を含むが、堅緻で灰黒色を呈している。釉は厚く、内外面に禾目が現れ、表面はラスター状の金属光沢をなす。外面体部下半を露胎で残し、露胎部は黒灰色に発色している。1176～1178は伊万里の染付である。1176・1177は折り縁の皿である。1176は低い断面四角の輪高台を持つもので、内底には三方に開く花弁文が太い筆の濃により雑に描かれている。胎土は精良であるが、火中して器表がカセている。全釉で畳付の釉を雑にフキ取り、多量の砂が付着している。1177は内面口縁部に太い筆描きの雲形文を巡らせたものである。胎土は鉄の黒斑を多く含んで灰白色を呈している。釉は灰みを帯び、呉須は灰黒色に発色している。1178は染付の手塩皿である。型押しにより内面を菊皿にしている。高台は断面四角の低い輪高台である。内面体部下端には渦文が巡り、見込には花文が描かれている。胎土は灰みを帯び、釉の虫喰い部は灰黒色を呈している。呉須の発色は比較的良好で、色鮮やかである。畳付の釉のフキ取りは雑で、砂が大量に付着している。1179は美濃瀬戸系の灰釉四耳壺である。外面肩部には櫛描の波状文が巡り、波状文の下に扁平な横耳が付されている。胎土は微細な砂粒を含むが非常に精良で、灰黄色を呈している。釉は光沢のある緑茶褐色の灰釉である。1180は鉄釘である。通常の角釘であるが、２寸に満たない小さいものである。

ＳＤ－０７（118・1182）

1181は瓦質の香炉である。胎土・調整などＳＧ－01出土1105とほとんど同様のものである。内弯する体部を口縁際で肥厚させ、蓋受けを内側に引き出して上方につまみ上げ、バチ状に外方に開いた径の大きい高台が付されている。1182は緑泥片岩製の一石五輪塔である。幅12cm強（４寸）、厚さ10cm弱（３寸）、長さ49cm弱（1.6尺）の長方体の石材から削り出したもので、長い地輪を直接地中に埋め込んで設置するものである。空・風・火・水の各輪にそれぞれ「キャ」・「カ」・「ラ」・「バ」の梵字が陰刻されているが、刻印、墨書などを含めて他に銘文は認められない。

ＳＥ－０４（1183～1192）

1183は中国製の白磁碗である。折り縁の口縁部を持ち、端部を稜花にし、内面体部に型押しによる不明瞭な浮文が見られる。今回の調査によって出土した遺物の中では唯一の資料である。これは、高野山における遺物組成上の一つの特徴ともいえ、通常の都市遺跡においては芙蓉手の染付やペンシルドローイングの手法による染付、あるいは胎土目の唐津などと共伴して相当量が出土する。胎土は精緻であるがごく微細な鉄の黒斑を含み、釉は微細な黒斑が浮いてやや灰みを帯びる。1184は中国製の染付皿で、第３層出土823、Ｐ－02出土1162と同種である。釉は灰みを帯び粘度が高く、呉須は灰青色に発色している。全釉で畳付の釉のフキ取りは行われず、多量の砂が付着している。外底の一部に露胎部が残り、黄橙色を呈している。1185は伊万里の青磁である。筒形の香炉で、浅い角度で深く抉った径の小さい高台と、ダミーの獣足が三足付されている。胎土は砂粒および鉄の微細粒子を含んで粗く、灰黄色を呈している。釉は失透した青緑色で高台際まで施釉されている。なお、三足はダミーであるにもかかわらず、下端を露胎で残している。また、無釉の内底には径７㎝の輪陶枕痕を残し、「二十八」であろうか墨書が見られる。1186は備前焼の壺である。折り返した扁平な玉縁状の口縁を持ち、肩部が長い。胎土は砂粒を含んでやや粗く、灰赤褐色を呈している。口縁上端部や内面頸部に自然釉がゴマ状にかかり、器表は暗赤褐色に発色している。1187は瓦質のこね鉢である。内面体部および外面口縁部直下を横方向にナ

デ、内面口縁部および口縁端面を丁寧なヨコナデで調整し、外面体部には横方向のヘラケズリを施している。胎土は砂粒を含んで粗く、セメント質で灰白色を呈し、器表は黒灰色に焼成されている。1188～1190は瓦質の火消し壺である。丸い体部に短い頸が付く器形である。内外口縁部には丁寧なヨコナデが見られ、外面体部は接触面の大きい工具で平滑に磨かれている。灰白色の精良な胎土で微量の雲母粒を含み、器表は黒灰色に焼成されている。1191は不明の瓦質製品である。滑車状の器形で、中心に径約７㎜の孔が貫通しているが、実測図の上下は対称ではない。あるいは燭台のようなものであろうか。実測図の上面口縁部付近から外面全体に比較的丁寧なヨコナデを施している。1192は木製継手で、ＳＤ―04出土1135と同様、「Ｔ」字形に分岐するものである。

ＳＥ―０５（1193～1196）

1193は美濃瀬戸系の灰釉碗である。器形は青磁写しで、外面体部に線描きの蓮弁文を持つ可能性がある。胎土は灰黄色を呈しややサクい。透明度が高く光沢のある黄緑色の釉は内底でガラス質の溜りを作り、全体に粗い貫入が走っている。外底には径約3.6㎝の輪陶枕痕を残している。1194は美濃瀬戸系の灰釉折り縁皿である。高台は碁笥底風に浅く抉り、内底は周辺部と中心部を浅くケズリ中央部径約４㎝を凸状の蛇ノ目に残している。黄緑色の釉が全釉され、内底の凸状の蛇ノ目部分の釉をフキ取っている。露胎部は黄灰褐色を呈している。なお、外底には径約2.5㎝の輪陶枕の痕跡が半周している。1195は東播系の須恵質こね鉢である。器肉が薄く丁寧な作りで、口縁上端部をやや外方につまみ出すようにヨコナデして口縁端面をわずかに凹ませ、内外面体部上端も比較的丁寧にヨコナデを施す。胎土は微細な砂粒を含むが精良で灰白色を呈し、口縁部端面器表は重ね焼きにより黒灰色に焼成されている。1196は瓦質のこね鉢である。内面体部を横方向にナデ、内面口縁部から外面口縁部下端まで丁寧にヨコナデされている。外面体部は器表の剝落部分が多いが、横方向のヘラケズリと思われる。内面体部には浅く粗い櫛目が施されている。胎土は灰白色を呈し、砂粒を含んで比較的堅緻で器表は黒灰色に焼成されている。

ＳＧ―０２（1197～1204）

1197は中国製の劃花文青磁碗である。腰が張り、体部が外上方に直線的に開く器形である。体部の器肉は薄く、口縁端はシャープに尖っている。口縁端部に浅い抉りをいれて輪花にし、内面体部にはヘラ描きの劃花文が描かれている。胎土は暗灰色を呈し、精良で堅緻である。釉は透明度が高く艶があり、暗灰緑色に発色している。1198～1201は中国製の染付である。1198は口縁の外反する器形と思われる皿で、内底には非常に細い細線と濃筆により草花文が描かれている。また、内面体部には型押しの浅い浮文が巡っているようである。外面は無文と思われる。胎土は純白に近く精良で、呉須は淡いが明るいライトブルーに発色している。全釉で畳付の釉をフキ取るが、少量の砂が付着している。1199は端反の皿である。深い器形で、低い高台が付けられている。口縁部は端反というよりむしろ外につまみ出した感じである。内面には四角で囲んだ「亀」に似た文字や草花文が見られる。胎土は鉄の黒斑を含んで灰みを帯び、呉須も灰青色に発色している。釉は畳付まで施釉され、外底を露胎で残し、畳付の釉はフキ取っている。外底には放射状のカンナ痕が見られる。1200は芙蓉手の皿もしくは鉢である。1167と同様に定形化のあまり進んでいない段階のものと思われる。内底に草花文が描かれ、内面体部には窓が作られているが分割は明瞭ではない。外面の分割は１本の垂線によっている。胎土には比較的多くの鉄の黒斑を含み、釉にも微細な黒斑が浮いているが、呉須は色鮮やかに良好に発色している。全釉で畳付の釉を

フキ取り、多くの砂が付着している。外底には放射状のカンナ痕が見られる。1201は網代文の赤絵盤である。「天啓年製」銘を持つ第3層出土 824などの皿とセット関係をなす。純白に近く精良な胎土で、呉須の発色も良好である。全釉で畳付の釉は面取りするように三方からケズリ取っている。外底には放射状のカンナ痕が見られる。なお、上絵付けはすべて剝落して痕跡を残すだけである。1202は伊万里の染付碗である。外面体部には草花文を描き、外底に便化した「大明年製」銘を持つものである。胎土は微細な鉄の黒斑を含むが精良で、呉須もこの種のものにしては良好な灰青色に発色している。全釉で畳付の釉をフキ取るが、少量の砂が付着している。1203は唐津の碗である。内面には鉄による線描きの島影と思われる文様を描いている。高台は径が大きく丁寧な作りで、中央に「森」銘がスタンプされている。胎土はややサクいが精良で黄白色を呈し、黄白色の透明釉が高台際まできっちりと丁寧にかけられている。1204は唐津の深鉢である。釉は茶褐色の褐釉と緑釉の二重がけである。文様は先の細いヘラや太くて断面凹型の工具で、器表の緑釉を未乾燥のまま直線や波状に掻き落す手法で描かれている。胎土は灰褐色を呈し、堅緻である。割れ口には漆による補修痕を残している。1205・1206は無釉の灯明皿である。従来のもののような受け部の灯芯置きの抉りはなく、受け部の下端に3ヵ所の三日月形の穴が穿たれている。この部分に灯芯を差し込んで固定するのであろうか。共に焼き締め陶のような胎土で、1205はレンガ色を、1206は暗茶褐色を呈している。1206は内外面に多量の煤が付着している。1207は東播系の須恵質こね鉢である。口縁部は上下に大きく拡張し、口縁端面は丸みを帯びている。胎土は微細な砂粒を含むが、堅緻で暗灰色を呈している。外面口縁部下端に重ね焼きの痕跡を残している。1208は断面四角の鉄製の鎹である。銹化が進み両先端を欠いている。

ＳＢ－０１礎石掘形（1209～1227）

1209～1211は中国製の白磁坏である。高い高台を持つもののうち、磁質の胎土のタイプである。磁質で精良な胎土を持ち、透明度が高く光沢のある釉がかかっている。釉には全体に細かい貫入が走っている。1210は通常の16世紀タイプの皿である。胎土は灰白色を呈しやや粗く、釉は光沢を欠き灰みを帯びる。1211は口縁端反で内底の釉を輪状にフキ取った皿である。体部下半の器肉は厚いが、口縁部は薄くシャープに仕上げている。胎土は微細な砂粒や鉄の黒斑を含んで粗く、粘性が高く透明度の低い釉が厚くかけられ、表面に鉄の黒斑が浮いている。1212・1213は中国製の青磁である。1212は大形の袋物と考えられるが、器形は不明である。外面体部には型押しによると思われる細目の蓮弁文が巡っている。高台は下端が三角形に尖り、外端部から畳付の釉を丁寧にフキ取っている。胎土は非常にきめ細かく、精良で、淡灰白色を呈している。火中して表面がカセ、釉は失透しているが、本来は翡翠のように鮮やかに発色していたものと思われる。1213は蓮弁文の碗である。体部の盛り上がりを欠くが、丸ノミによる比較的幅の広い蓮弁文を外面体部に巡らせ、内面体部にはヘラ先による片切彫り風の草花文を描いている。胎土は灰白色を呈し非常に精良で、釉は深い草緑色に発色している。内底には茶筅によるものであろうか、無数の細かい擦痕が見られる。1214はＳＧ－02出土1201同様の中国製の赤絵盤である。1201の上絵付けによる小さい花弁文は網目内に描かれていたのに対し、1214の花弁は網目上に描かれている。1215は中国製の呉須手盤であろうか。火中して表面がひどく変質するが、内底や体部にわずかに濃筆によると思われる牡丹文のような文様が見られる。釉は白濁して泡立ち、胎土はレンガ状の赤褐色に変色している。1216は伊万里の染付碗である。腰が張り口縁の内弯する器形で、外面体部には線描きと濃筆

による水辺の風景と飛翔する２羽の鳥が描かれ、外底には「宣徳」銘が見られる。胎土は精良で、呉須は淡いが鮮やかに発色している。1217は伊万里の染付鉢である。断面台形の高台を持ち、内弯気味の体部を口縁部で「く」の字状に外に折り返している。外面は無文で、内面には草花文と思われる文様が描かれている。胎土は微細な鉄の粒子を多く含み灰白色を呈し、釉は多数の黒斑が浮かんで強い灰みを帯び、呉須は灰青色に発色している。釉は高台外面と畳付を露胎で残して内外面および外底にかけられ、露胎部は赤茶褐色を呈している。1218は古九谷の色絵の盤である。上絵はカセて飛び、文様はあまり明らかではない。内面体部には円形の窓をあけ、窓内に草花を描き、空間を桝を細かく重ねた格子状の文様で埋め、外面には渦文を描いている。格子文や渦文は茶色の線描きで、格子は黄色で塗りつぶし、渦文は緑でつぶしている。1219～1221は唐津焼である。1219は木灰釉の碗である。体部から口縁部にかけて緩やかに内弯し、内面を浅く抉った低い高台の付く器形で、内底には縮緬状の皺が生じている。畳付には４ヵ所の胎土目の目跡が残る。胎土は堅緻で灰茶褐色を呈し、釉は透明度の高いガラス質で濃灰緑色に発色し光沢がある。外面体部下半を露胎で残すが、露胎部は明赤紫褐色を呈している。1220は灰釉の袋物もしくは深鉢である。外面体部下半には回転ヘラケズリ痕を残し、高台付近から内底には刷毛状の器具による粗い調整が見られる。胎土は砂粒を含んで粗く、灰橙色を呈し、内外面にかけられた釉は灰茶褐色に発色している。外面体部下半を露胎で残し、露胎部は赤橙褐色に発色している。1221はＳＧ―02出土1203同様の唐津の灰釉碗である。鉄による文様も同様で作りも丁寧であるが、口径がわずかに小さく、外底のスタンプは見られない。なお、施釉は高台際ぎりぎりまで寄らず少し間を置いている。1222は産地不明の皿である。火中して釉は完全にとび、施釉の痕跡を残すのみである。胎土は黄白色でサクい、陶質化し器表はカセて明黄桃色を呈している。全釉で畳付の釉をケズリ取った痕跡が残る。1223は備前焼の小形の四耳壺である。肩部に細い粘土紐を貼り付けた横耳が付けられている。胎土は砂粒を含んで粗く灰黒色を呈し、内外面器表は赤茶褐色に発色し、口縁上端部や肩部にはゴマ状の自然釉がかかる。1224・1225は土師皿である。ともに火中したのであろうか器表の一部がはじけ、風化して調整痕がほとんど残っていない。1224の内面体部から口縁部のヨコナデ以外は、外底の比較的丁寧と思われる指ナデが観察される程度である。灰黄白色の精良な胎土で、1224は口径11.5cm、器高2.0cm、1125は口径10.1cm、器高1.8cmを測る。なお、1224には口縁端部にタールが付着している。1226は瓦質の風炉である。直立する頸部の外面には三角刀による縦方向の刻目を巡らせ、大きく張り出した肩には雲形の透しを空けている。内外面とも風化して調整などは明らかではないが、口縁上端部にはヘラ磨きの痕跡が見られる。灰白色の精良な胎土で、器表は外面から内面口縁部が黒灰色に焼成され、内面口縁部以下は灰白色を呈している。1227は緑釉製品である。雲形の抉りが見られ、脚台部と思われるが器形不明である。胎土は非常に精良な土師質で黄白色を呈す。外面に薄く緑釉の痕跡が見られる。

(4)　第４遺構面（図46～49、図版46～48、1228～1350）

第７層除去後地山上で検出された遺構面である。第７層は1625～30年ごろを上限とする整地層であり、層位的に見たこの遺構面は17世紀の第１四半世紀ごろに下限時期を求めることができる。しかし、出土遺物から見た遺物の下限とは相当の隔絶があり、遺物の組成も他とまったく異なった様相を示し、瓦器、土師器が主体となる。

ＳＫ－１４（1228・1229）

本遺構からの出土遺物はすべて瓦器である。1228は器肉が厚く、よく腰が張り、全体にどっしりした感じの椀である。体部はやや内弯し、径の大きい外開きの高台が付く。内面口縁部には１条の沈線が巡り、内面体部には細く密な暗文が巡っている。大部分を欠くが、内底の暗文は斜格子と思われる。外面の暗文はやや太めで、口縁部から体部上半は回転を伴う暗文を蜜に巡らせ、下半は粗く４方向からの暗文を高台近くまで施している。胎土は微細な砂粒を含むが堅緻で灰白色を呈し、器表は漆黒色に燻されている。1229は全体に内弯する器形と、径の大きいしっかりした高台の付く椀である。内面の口縁端部から約５㎜下に１条の浅い沈線を巡らせ、沈線から体部全体に細く密な暗文を施している。内底には不定方向のナデが見られ、暗文は施されていない。外面は風化して暗文はあまり明確ではないが、口縁付近に細い暗文を密に巡らせ、体部下半は３ないし４方向から暗文を施すものと思われる。高台内外面と周縁部には、高台の貼り付けに伴うヨコナデが見られる。胎土は微細な砂粒を含むが精良で灰白色を呈し、器表は暗文部が金属光沢を放つ黒灰色に焼成されている。

ＳＫ－１５（1230～1270）

大量の瓦器（1230～1235）、土師皿（1236～1270）が出土している。土師皿の大部分は回転糸切痕を持つものである。1230は内面口縁部に１条の沈線を巡らせた椀である。体部は直線的に外上方に開く器形である。内面体部の暗文は太く粗である。外面は口縁部付近にヨコナデを施し、体部は指頭痕を残したままで暗文は見られない。胎土は砂粒などをほとんど含まず、精良で淡灰白色を呈している。器表は十分に燻され、黒灰色に焼成されている。1231～1233は口縁部の強いヨコナデにより端部をわずかに肥厚させ、外面体部との境に稜が付くものである。1231は内面の暗文は粗いが細く、内底にも螺旋暗文が施されている。他は暗文が太く粗で、底部の残存する1232には内底の暗文は見られない。すべて外面体部に指頭痕を残したままで、暗文は施されていない。胎土は若干の砂粒を含むが精良で、灰白色を呈している。器表は比較的よく燻され、灰黒色に焼成されている。1233は口縁部をシャープに尖らすようにヨコナデした椀である。1234は内面に太く非常に粗い暗文を施し、外面体部には暗文は見られないが、指頭痕を指ナデで消している。胎土は砂粒を多く含んで粗く、灰白褐色を呈している。器表はザラつき、燻しも十分ではなく暗灰褐色に焼成されている。1235は内面口縁端部を弱く面取りした椀である。内面体部には比較的細いが粗い暗文が巡り、内底には雑な螺旋暗文が見られる。外面には暗文は見られず、口縁部ををヨコナデし、体部は指ナデと回転を伴わない雑なヘラケズリにより調整している。胎土は黄灰白色を呈し、微細な砂粒を多く含んでザラつく。器表は内面の一部と口縁部が燻されるのみで、他は黄灰色に焼成されている。1236～1265は外底に回転糸切痕を持つ土師皿である。1236～1243は口径14cm～16cm、器高３㎝前後の大（中）皿で、体部に３段のヨコナデを施したものである。胎土は赤橙色から黄橙色を呈し、概して赤みの強いもので、底部の径が比較的小さい。1244～1250は回転糸切痕にプラスして簀子痕を外底に残す大（中）皿である。体部にはヨコナデの段がほとんど見られず、概して底径が大きい。胎土は黄褐色から黄灰褐色を呈し、1236～1243と比して砂けが多い。口径12cm～14cmでやや小さく、器高は３㎝前後である。1251～1258は口縁部がわずかに外反し、外底と体部の境が明瞭な小皿である。胎土は1244～1250のグループに対応するものである。なお、1257・1258の外底には回転糸切痕にプラスして簀子痕も見られる。口径９㎝前後、器高1.2cmを測る。1259～1265は口縁部のやや内弯する小

皿で、外底と体部の境は丸みを帯び、あまり明瞭ではない。胎土は1236～1243のグループに対応し、1244～1250に比して赤みが強く精良である。なお、1265の外面体部には簀子痕が見られる。口径９cm前後、器高1.2cm前後のものが多い。1266・1267は体部の強いヨコナデで口縁部を肥厚させた小皿である。内底を不定方向にナデ、内外面体部から口縁部に強いヨコナデを施す。外底は体部との境を軽く指ナデするが、指頭痕を残したままである。胎土は比較的多くの砂粒を含んでやや粗く、黄褐色を呈している。口径８cm前後、器高1.5cm前後を測る。1268は器面が摩耗して調整などは明らかではないが、平らで大きな底部を持ち、体部が急角度で立ち上がる大（中）皿である。外面体部に沈線が２条残ることから、体部のナデは２段に分けて行われたものと思われる。比較的多くの砂粒を含む胎土で、黄褐色を呈している。口径15.2cm、器高3.4cmを測る。1269・1270は同一の調整を持つ大（中）皿である。内底を不定方向にナデ、体部から口縁部にヨコナデを施す。口縁部は特に強くヨコナデし、端部をわずかに外反させる。外面体部下端から外底に丁寧な指ナデを施し指頭痕を消し、体部下半にヨコナデを一周させて体部と底部の境を丸くしている。ともに砂粒をあまり含まず精良な胎土で、1269は黄灰褐色、1270は黄灰橙色を呈している。1269は口径13.6cm、器高3.2cm、1270は口径13.2cmを測る。

ＳＫ－１６（1271）

1271は土師大（中）皿で、外底に回転糸切痕を持つもののうち、ＳＫ－15出土1236～1243のグループに属するものである。胎土には砂粒をほとんど含まず精良で、灰橙色を呈している。なお、外面全体に煤が付着している。口径13.0cm、器高2.8cmを測る。

ＳＤ－０８（1272・1273）

1272は常滑焼と思われる甕である。口縁部を「く」の字状に大きく外反させ、口縁端部を上方につまみ上げるようにナデることにより、内側に凹線を巡らせたように凹ませている。胎土は砂粒を含んでやや粗いが堅緻で、灰黒色を呈している。口縁内面および外面頸部下端に灰緑色の自然釉がかかっている。1273は土師質の羽釜である。口縁部を「く」の字状に外反させ、口縁端部を内側につまみ出し、端部をわずかに凹ませる。胎土に多くの砂粒を含むＳＧ－01出土1097～1101などのタイプのものである。通例暗褐色を呈するが、1273は灰茶褐色に焼成されている。

ＳＤ－１０（1274・1275）

1274はＳＢ－01礎石堀形出土1224・1225などと同様の土師皿である。やはり器表の一部がはじけて剥離している。内面体部から口縁部にヨコナデを施し、外面体部下半から外底には丁寧な指ナデが見られる。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、灰黄色を呈している。内外面口縁部には厚くタールが付着している。口径12.2cm、器高2.5cmを測る。1275は褐色系の小皿である。体部を直線的に外上方に引き上げ、口縁端部の押しナデにより内面口縁部をわずかに凹ませる。外面体部下半は指頭痕を残したまま凸凹で、外底は指ナデにより平らに調整されている。微細な砂粒を含むが比較的精良な胎土で、明茶褐色を呈している。口径9.3cm、器高2.3cmを測る。

ＳＥ－０９（1276～1309）

比較的多くの遺物を含む。しかし、同様に多量の遺物が出土するＳＫ－15とは遺物の様相が若干異なり、瓦器や回転糸切痕を持つ土師皿は小量である。また、新収藏庫地区の整地層などにおいて、回転糸切痕を持つ土師皿と拮抗あるいは凌駕などの関係を持ってきた、外底に簀子痕を持つ一群も出土しない。

これはおそらく新収藏庫地区の整地層で見た状況と異なり、実際にはその両者が時間的に近接した存在ではないことを示すと思われ、他の共伴関係からも首肯される。1276は東播系須恵質こね鉢である。口縁部は肥厚するが、上下への拡張はあまり著しくない。内面体部に粗いナデを施し、口縁端面の強いヨコナデにより内面体部上端が凹線を巡らせたように凹んでいる。外面体部は粘土紐の巻き上げ痕を残したまま雑にナデられている。砂粒を含みやや粗い胎土は、黒灰色を呈している。なお、外面口縁部下端に直接の重ね焼きの痕跡を残している。1277～1279は瓦器である。1277は浅い器形の椀で、断面三角形の低い高台が貼り付けられている。内底にはやや太めの螺旋案文が見られる。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で灰白色を呈し、器表は比較的良好に燻され黒灰色に焼成されている。1278も浅い器形の椀であるが、実測図は体部が若干ねすぎている。内面体部には非常にまばらな暗文が巡っている。外面体部には指頭痕を残したままである。砂粒を多く含む灰褐色の胎土で、器表の燻しも不十分で、器面はザラつき灰黒褐色に焼成されている。1279は小椀であるが、実測図の口径は少し小さいようである。内面口縁部に１条の沈線を巡らせ、体部は粗く密な暗文が巡っている。外面口縁部をヨコナデし、体部は高台際まで比較的密な暗文が見られる。胎土は灰白色を呈し、砂粒を含まず精良で、器表の燻しも十分で暗黒色に焼成されている。1280～1286は外底に回転糸切痕を持つ土師皿である。1280はＳＫ―14出土1236～1243と対応する中皿である。1281～1284は口縁が内弯気味の1259～1265のグループに属する小皿である。また、1285・1286は口縁部が外反気味のＳＫ―15出土1251～1258に類するものである。1287～1299は亜白色系の胎土を持つ土師皿である。1287～1295は中皿で、内底を不定方向にナデ、内面体部から口縁部の強いヨコナデは真上に抜き上げている。外面口縁部にも強いヨコナデを施し、体部との境は稜をなす。外面体部から外底は、丁寧な指ナデにより調整している。胎土は微細な少量の砂粒を含むが精良で、灰黄褐色ないし灰白色を呈している。口径11cm～12cm、器高2.8cm前後を測る。1296～1299は1287～1295と同様の胎土の小皿である。調整もほとんど同じであるが、外面のヨコナデは体部下半に及び、指ナデは外底のみに施される。口径8.9cm前後、器高1.8cm前後である。1300は外底に簀子痕を持つタイプの小皿である。この遺構からは唯一の出土で、混入の可能性もあるが、胎土は1287～1229のグループのものと近似する。1301・1302も亜白色系の胎土を持つ土師中皿である。内面体部を一定方向にナデ、外面体部から外底を指ナデした後、内外面口縁部から体部上半にヨコナデを施している。外面体部の指ナデはやや雑で、わずかに凸凹が残る。胎土は精良であるがやや砂けがあり、黄灰色を呈している。破片が小さく正確ではないが、口径10cm～11cm、器高2.8cm前後のものと思われる。1303も1301・1302と同様の胎土を持つものである。調整もほとんど同様で、外面体部下半に若干の凸凹を残すが、内面体部のヨコナデは1301・1302より深く、体部下端から施されている。1304～1309は土師質の釜である。すべて胎土に多量の砂粒を含んだＳＤ―08出土1273などと同様のもので、暗灰褐色ないし灰茶褐色を呈している。なお、1304の外面体部には、形骸化した非常に小さい断面三角形の鍔が付せられている。なお、1304の外面、1305の内面には多量の炭化物が付着している。

ＳＧ―０３（1310～1350）

1310～1316は中国製の白磁である。1310・1311は腰が張り、体部の器肉の薄い碗である。比較的高い高台が付き、外面体部下半を露胎で残すタイプである。1310は端反で、口縁部を水平にカットしている。共に内面体部に櫛描きの劃花文が見られ、外面体部には細い線描きの縦線を巡らせている。胎土には微

細な鉄の細粒を含むが精良で、釉は透明度が高く光沢があり、乳白色を呈している。1312・1313は体部の器肉がやや厚く、内面体部にヘラ描きによる劃花文を描く碗である。胎土は鉄を多く含んで灰白色を呈し、釉は光沢のある淡灰緑色に発色している。釉の透明度は高い。1314は口禿げの皿である。内底と体部の境には１条の沈線を巡らせている。やや灰みを帯びた精良な胎土に、失透した灰色の釉がかけられている。なお、外底の釉は刷毛がけである。1315も口禿げの皿であろうか。器形はむしろ劃花文の青磁皿のそれである。平底の小さな高台で、体部は途中で屈曲して立ち上がる。胎土は砂粒や鉄の黒斑を多く含んでやや粗く、灰白色を呈し、失透した灰白色の釉が外底を露胎で残してかけられている。1316は通例割高台の見られるタイプの白磁坏である。胎土は微細な鉄の黒斑を含むが精良な磁質で、透明度の高い灰白色の釉が外面体部下半を露胎で残してかけられる。なお、外面体部には回転ヘラケズリ痕が透けてみえる。1317～1319は中国製の青磁である。1317はおそらく1318のように折り縁の鉢と思われる。内外面無文、あるいは外面に型押しの蓮華文を持つタイプである。胎土は鉄の黒斑を多く含んだ灰色で、粘度の高い光沢のある灰緑色の釉が厚くかかる。全釉後畳付の釉を三方から面取りするように丁寧にケズリ取っている。露胎部との境は黄茶褐色に発色し、露胎部は黒灰色を呈している。1318は内面に型押しの蓮弁文を持つ鉢である。口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を上方に折り曲げつまみ上げている。胎土は精良で灰白色を呈し、火中して表面がカセるが粘度の高い青緑色の釉が厚くかかっている。1319は無文の盤である。やや鉄分の多い灰白色の精良な胎土で、光沢のある灰緑色の釉が厚くかかる。全釉で、畳付の釉を三方から面取りするようにケズリ取り、露胎部との境は黄茶褐色に発色している。1320は中国製の褐釉茶入れである。内面体部には轆轤による引き上げ痕を残し、外底には回転糸切痕が見られる。暗赤褐色のきめ細かく非常に精良な胎土である。火中して釉はカセているが、茶褐色の釉が体部下半を露胎で残してかけられている。内面及び外面の露胎部は赤褐色を呈している。また、外面体部下端から外底にかけて、径１㎝近くの大きい目跡が３カ所認められる。1321は美濃瀬戸系の灰釉おろし皿である。比較的大きい器形で、体部の立ち上がりは弱い。内底には深く鋭いヘラによるおろし目が見られ、外底には回転ヘラケズリ痕を残す。釉は内面体部から外面体部上半あるいは口縁部周辺までかけられ、外面の大半を露胎で残すものである。胎土は砂粒を含んでやや粗く、黄灰色を呈している。1322は常滑焼の大形の壺である。口縁部は「N」字状に折り曲げるが折幅はさほど大きくなく、口縁部下端と頸部の間に間隔はない。内面頸部は粗く横方向にナデられ、口縁部周辺は丁寧にヨコナデが施されている。胎土は砂粒を多く含んで粗いが堅く、黒灰色を呈している。器表は暗黒褐色に発色し、外面口縁部から頸部には薄く自然釉がかかっている。1323・1324は瓦器の椀である。1323はＳＫ―15出土1234と同一タイプの、内面に太く粗い暗文の見られるものである。外面には暗文は見られないが、体部に指ナデを施している。胎土は砂粒を多く含んで粗く、灰白褐色を呈している。器表は灰褐色に焼成され、燻しは不十分である。1324は高台が欠失している。体部の丸い1323はＳＫ―14出土1229に似た器形である。内底を不定方向にナデ、体部には回転を伴う刷毛調整したのち、太く非常に粗い暗文を、内底には螺旋暗文を施している。体部の暗文は、下方から上方に向かってわずか８条ほど巡るにすぎず、暗文の幅は太いものは３㎜を超える。外面は口縁部にヨコナデを施し、体部は指ナデで調整する。灰白色の砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、器表は十分に燻され暗黒色を呈している。なお、暗文部は金属光沢を放っている。1325～1344は土師皿である。1325・1326は外底に回転糸切痕を持つ小皿である。とも

に外面体部と底部の境の明瞭な、口縁部のやや外反するＳＫ―15出土1251～1258のタイプである。1325は砂粒をほとんど含まない精良な胎土で黄白色を呈し、1326は少量の砂粒を含んで黄橙色を呈している。口径８㎝強、器高1.4㎝前後である。1327～1337は外底に簀子痕を持つものである。中皿には指ナデによりほぼ完全に簀子痕を消したもの（1331）、雑に消して簀子の痕跡を残すもの（1328・1332）、完全に簀子痕を残すもの（1327・1329・1330・1333）などがある。小皿はすべて簀子痕を残したままであるが、口径８㎝強の通常の小皿（1334・1335）と口径７㎝に満たない非常に小さいもの（1336・1337）がある。1338～1343はＳＥ―09出土1287～1299と同様の亜白色系の胎土と調整を持つ皿である。1338～1342は口径11㎝～12㎝、器高2.5㎝前後の中皿である。なお、1339は外底に明瞭な簀子痕を残し、外面体部のヨコナデも比較的低くまで及んでいる。1343は小皿で1296～1299と同様に調整されている。口径8.6㎝、器高2.0㎝を測る。1344は1338～1343と類似した胎土の土師小皿である。胎土は亜白色系で微細な砂粒を含むが精良で、灰白色を呈している。内底の中央部を一定方向にナデ、内底周縁部から外面体部にかけて強くヨコナデして口縁部を外反させ、端部をわずかに肥厚させている。外底から体部との境までを指ナデで丁寧に調整する。口径8.8㎝、器高1.6㎝を測る。1345は瓦質の甕である。口縁部を外方に「く」の字状に折り返した器形であるが、あまり見慣れないものである。内面体部はヘラケズリで調整し、内外面頸部には指頭痕を残したままで、口縁部内外にヨコナデを施している。外面体部をヘラケズリし、肩部には間隔約５㎜の櫛状工具で縦方向に不規則な櫛目を入れている。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗灰白色を呈し、器表は黒灰色に焼成されている。1346は瓦質の火鉢である。体部は内弯し、口縁部を肥厚させて内側に引き出し、上端面を平坦にしている。外面口縁部下端に２条の凸帯を巡らせ、間を１単位が約５㎝幅のスタンプを押している。表面が風化して調整などはあまり明らかではないが、内面にヨコナデを施し、口縁上端面から外面の凸帯下端付近までをヘラで磨いているようである。胎土は微細な砂粒と少量の雲母粒を含みやや粗く、灰白色を呈し、器表は黒灰色に焼成されている。1347・1348は土師質の釜である。ＳＥ―09出土1304～1309のタイプのものであるが、1347は胎土に比較的大粒の砂粒が少なく、赤灰褐色を呈している。1348は通常の大粒の砂粒を多く含んだ粗い胎土で、暗灰褐色を呈している。1349は滑石製の鍋である。非常に丁寧な作りで、ナイフの痕跡はほとんど残らない。おそらく刃を立てて磨いたものと思われ、外面口縁部などはヨコナデのような痕跡が見られる。石材は均質で、表面は滑らかである。1350は木製の船形である。一木を刳り抜いたものであるが、相当写実的である。中央に帆柱用と思われる径約５㎜、深さ約５㎜の孔を穿け、舳先、舷側に約1.5㎝間隔に径約2.5㎜の穿孔が見られ、舳部には貫通しないやはり径約2.5㎜の孔が穿たれている。玩具とは思えず、むしろ宗教的行事に使用したものであろう。

第V章　まとめ

発掘調査の成果については第III章・第IV章で報告したとおり、各種の遺構が検出されるとともに豊富な遺物が出土しているが、特に中世末から近世の遺物にみるべきものがある。本章では調査地点に建立されていた子院について考察することでまとめとしたい。

高野十谷のうち最も早く開かれたのは壇上伽藍に近い本中院谷であり、次いで西院谷・南谷・谷上院谷の各谷が開かれたといわれる。壇上伽藍の周囲に位置するこの4谷は4ヵ院と呼ばれ中世から近世を通じ学侶方の大半の子院が集中していた。

調査地点の位置する南谷は10世紀には開かれていたといわれ、鎌倉時代後期には作成されていたとされる「信堅院号帳」によれば8院が記されている。また、文明5年（1473）の「高野山諸院家帳」では29院を加え計37院がみえるが、うち4院については廃院になったと記されている。しかし、いずれも主だった子院が記されているにすぎず、わずかこれだけの数であったとは考えられないといわれている。江戸時代初期正保3年（1646）の『御公儀上一山図』に付されている「高野山絵図之帳」によれば、南谷には学侶方30院・行人方241院・客僧坊7坊の計278院が記されている。時代が下って天保10年（1839）の『紀伊続風土記』によれば、元禄高野聖断によって一山の行人方子院902院が廃された後も、南谷には学侶方36院・行人方29院・聖方2院の計67院があり、ほかに16院が廃院になっていると記されている。

今回の調査地点に建立されていた子院をこの多くの中から比定することは、子院名を記した遺物あるいはその片鱗を示す遺物が出土しない限り不可能であるが、幸いなことに高野山には江戸時代各期の絵図が残されている。これを参照すれば、江戸時代以降について子院を比定することは比較的簡単であるが、絵図の残らない江戸時代以前については子院名を示す遺物の出土が認められなかったため不可能といわざるをえない。しかしながら、寺地が頻繁に変更されるとは考えられないことから、江戸時代各期の絵図を通じ同じ場所に描かれた子院は、鎌倉時代後期とされる『信堅院号帳』や室町時代中期の文明5年に記された『高野山諸院家帳』において南谷にその子院名を見いだせるならば、それらは江戸時代の絵図に描かれた場所と同じ位置に存在していたものとすることが可能ではないかと思われる。

これら高野山内の子院名を知る資料としては『高野山古絵図集成』(日野西真定・1983）が詳しく、以下、同書に収録されている鎌倉時代後期とされる『信堅院号帳』、『高野山諸院家帳』(文明5年・1473）と、作成年代の判明している『御公儀上一山図』(正保3年・1646)、『高野山絵図』(承応2年・1635)、『高野山総図』(万治元年・1658)、『高野山壇上并寺中絵図』(元禄6年・1693)、『高野山壇上寺家絵図』(宝永4年・1707)、『高野山古絵図』(寛政8年・1796)、『高野山細見絵図』(文化10年・1813)、『高野山一覧全図』(明治17年・1884)、『高野山焼火全図』(明治21年・1888）などの絵図、及び『紀伊続風土記』(天保10年・1839）を参考にして子院の比定作業を進めることにしたい。

なお、『信堅院号帳』は『高野山古絵図集成』によれば原本は見付かっていないが、元禄8年（1695）に入滅した隋心院尊海の写本が金剛峯寺に残り、これには大楽院信堅の自筆本から随心院尊海が写したと記されており、「信堅の撰ということが正確であれば、信堅は、元亨2年（1322）西大楽院にて、64才にて寂したとあるから、鎌倉後期の撰としなければならない。[注]」とされる資料である。

それでは調査地点に建立されていた子院についてであるが、各調査区の冒頭でその概略は記しておいたが、現時点までに公表されている絵図及び文献で判明している範囲内で、その消長をながめてみたい。

駐車場用地調査区に相当する地点は、江戸時代は各時期を通じ、絵図により「大楽院」に比定することができる。また、『信堅院号帳』・『高野山諸院家帳』においても南谷にその名を見出せることから、少なくとも鎌倉時代後期までさかのぼることが可能であろう。また、明治17年の『高野山一覧全図』まで同地にその寺名を見ることができ、明治21年の火災後発行された『高野山焼火全図』では西院谷に寺名が見えるところから、明治21年の火災直前に移転したものと思われる。このように「大楽院」は、江戸時代から明治時代中期までの間を通じこの地に位置しており、鎌倉時代後期までその存在をさかのぼることが可能であろう。

「大楽院」跡については計４面の遺構面を検出し、そのそれぞれに建物跡・池・井戸などが伴うが、最も新しい第１遺構面は文化６年（1809）の火災層を切り込んで営まれ、遺物からみて19世紀中葉から後半を下限とするが、『紀伊続風土記』は天保10年（1939）に編纂されたものであり、遺構面と年代的にも一致する。この『紀伊続風土記』の「高野山之部巻十五寺家之五本中院堂社院家南谷」の項の記述によれば、開創基舜大智房とある。基舜については『紀伊続風土記』「高野山之部巻三十五高僧行状之部巻之二浄恵」の項に長寛２年（1164）に化したとあることから、少なくとも12世紀前半代には建立されていたものと考えられる。

「大楽院」は『紀伊続風土記』「高野山之部巻十五寺家之五本中院堂社院家南谷」の項によれば室下三宇、和州三院・河州一院・摂州二院・隠岐一院・備中一院・當国二院、所領高三十五石、名室とあり「地理東は釈迦文院と対向し北は大路あり西に溝あり南院門前庭あり西南の方は證覚院に接す南は龍生院に隣る地坪統して九百十二坪半あり、文化６年７月焼失の寶器左にしるす」とあることから、発掘調査地点は境内の東北部寺域の約半分に相当すると考えられ、文化６年に火災に遭っていることが分かる。また、棟宇十二として本堂（東向四間四方向拝流破風）、大日堂（同向四間四方）、護摩堂（同向三間四間）、客殿淨厨（十間十間半）、玄関（千鳥破風）、鐘突堂（八尺四方）、所化寮（二間半二十間）、寶庫一戸、雑庫一戸、表門裏門路次門、寶塔とが記されている。第１遺構面と符合する時期に描かれた『高野山細見絵図』には建物２棟が描かれているだけであるが、境内中央北側に大きな建物が描かれている。この建物が『紀伊続風土記』に記述された客殿淨厨と考えられ、発掘調査によって検出したＳＢ―02がその規模からみてこの客殿淨厨に相当するものと思われる。また、境内南西部には東面する南北棟の建物が描かれているが、文化６年の火災13年前に作成された『高野山古絵図』にも、ほぼ同じ位置に描かれた建物に向拝が描かれているところからこの建物を本堂とみることができ、検出遺構のＳＢ―01に相当するものと考えられる。他の建物については、調査区域外の南側及び西側が想定される。

第２遺構面が営まれていた時期は、下限が文化10年の火災であるが、その上限は遺物からみて18世紀末とみられ非常に短い。この時期と符合する絵図としては『高野山古絵図』があり、これには境内中央北側に大きな建物が、前述したように南西部に向拝を持つ建物が描かれている。前者がおそらくＳＢ―03に相当する客殿淨厨であり、後者が本堂とみられる。この時期の本堂とみられる建物跡については検出できなかったが、基壇とみられる石垣を２列検出しているところから、同じ位置にＳＢ―01に先行する建物を想定することができる。なお、本遺構面が営まれていた期間の短いことは先にも述べたが、前代

の子院建造物が元禄４年（1691）の火災で焼失したものとすると約100年間の空白期間が存在することとなる。しかし、元禄の火災２年後の『高野山壇上并寺中絵図』には客殿とみられる建物が、火災16年後の『高野山壇上寺家絵図』には客殿浄厨と本堂とみられる建物が描かれているところから、元禄の火災直後から諸建物が徐々に再建されていったと考えられ、本遺構面の上限は17世紀末から18世紀初頭までさかのぼることができるものとみられる。

第３遺構面及び第４遺構面については寺域を示す絵図はあるものの、建物について記述した文献及び建物を描き込んだ絵図がなく、建物については全く不明であるが、第３遺構面のＳＢ―04がその規模から見て客殿浄厨に相当するものとみられる。しかし、第４遺構面のＳＢ―05についてはその性格は不明であり、その時期も柱穴からの出土遺物が皆無であることから不明といわざるをえないが、中世までさかのぼる可能性も残る。

次に新収藏庫用地調査区であるが、この調査区は３ヵ院にまたがる接点部分に当たることは既に述べたが、上段に相当する部分は『御公儀上一山図』・『高野山絵図』・『高野山総図』には「阿逸多院」が描かれている。「阿逸多院」は『高野山諸院家帳』にも記載されていることから、室町時代中期までその存在をさかのぼることが可能であろう。しかし、「阿逸多院」は元禄高野聖断によって潰寺され、その敷地は「生宝院」と入れ替えられている様子を元禄６年の『高野山壇上并寺中絵図』に見ることができる。なお、「生宝院」は『高野山壇上寺家絵図』では「正宝院」と記されているが、その後は廃寺になったのか以後の絵図からその姿を消している。替わって『高野山古絵図』から『高野山細見絵図』に至る絵図には「如意珠院」が描かれている。同寺は元治元年に焼失し以後境内地だけが存続していたが、明治23年に子院の整理が行われた際に廃寺になっている。なお、「阿逸多院」については『紀伊続風土記』「高野山之部総分方巻之十二南谷」の項「宝積院」の文中に「開基眞紹僧都……承和12年本院を創造し大師附属の彌勒尊を安置して名つく……當院の名元禄中台命を奉りて寶積院と號す寺記を按するに往生院谷寶積院の本尊大師の眞影を迎請し稱して阿逸多坊寶積院と呼ふと見えたり」とあるが、「宝積院」は『高野山諸院家帳』では谷上院谷にその名が見え、『御公儀上一山図』では往生院谷に、『高野山絵図』では蓮華院谷に、『高野山壇上并寺中絵図』では往生院谷にその名が認められる。しかし、当院は元禄高野聖断により潰寺とはなったが立寺が認められ、やはり潰寺になった「阿逸多院」跡へ移転したものとみられ、「阿逸多院」と「宝積院」との間には『紀伊続風土記』に見られる前述されているようなことはなかったのではと思われる。

次に下段調査区に相当する部分であるが、『御公儀上一山図』から『高野山総図』までは東側に「龍生院」が、西側には「花厳院」が描かれている。『高野山壇上并寺中絵図』には東側に「龍生院」が、西側は「花厳院」にかわり「證應院」が描かれている。これは元禄５年の元禄高野聖断により「龍生院」・「花厳院」ともに裁断を受けるが、「龍生院」が立寺を許されるのに対し「花厳院」は潰寺となったことによるものであろう。『高野山壇上寺家絵図』では「證應院」に替わって「真如院」が描かれている。『高野全山絵図』から『高野山細見絵図』に至る間の絵図では、「龍生院」に替わり「龍照院」が、「真如院」に替わり「證覚院」が描かれている。なお、「龍照院」は後に千手院谷に移転したものとみられ、明治23年子院整理の際千手院谷で廃寺になっている。「證覚院」は元治元年の火災で焼失し境内地だけが残っていたが、明治23年子院整理の際廃寺になっている。

以上新収藏庫調査区に相当する子院の変遷を追ってきたがこれを整理すると、上段については「阿逸多院」→「生宝院」→「如意珠院」、下段東側については「龍生院」→「龍照院」、下段西側については「花厳院」→「尭應院」→「真如院」→「證覚院」と変遷したことになり、上段では最も新しい第１遺構面を「如意珠院」に伴うもの、下段東半部分については「龍照院」に、同西半部分については「證覚院」に伴うものとすることが可能である。

最も新しい遺構面に相当する「如意珠院」・「龍照院」について、『紀伊続風土記』「高野山之部巻十五寺家之五本中院堂社院家南谷」の項では文末に「録外行人方上通三箇院中下通合廿六箇院、同非事史方但西光院谷之内二箇院」とあり、学侶方子院の記載のみであるが、行人方の子院である「如意珠院」・「龍照院」についてはその詳細は不明であるものの、「龍照院」については「大楽院」の項に「南は龍生院に隣る」と記されており、これが「龍照院」のことと思われる。しかし、『紀伊続風土記』「高野山之部総分方巻十二南谷」の項に、「如意珠院」として「境内周五十間餘、本尊地蔵菩薩」、「龍照院」については「境内周六十八間、本尊無量壽佛、坊舎、倉庫、門、開基詳ならす」と記されており、「如意珠院」については建物など詳細は不明である。学侶方の「證覚院」については、「紀伊続風土記」高野山之部巻十五寺家之五本中院堂社院家南谷の項に「南院の前東南によれり、開基證覺作州の人山に登て本院を建立す正徳三年の十月示寂す、坊宇四十四坪、門一所、所領高五石五斗配知す」とあり、『高野山細見絵図』では境内地北側中央に南北棟の建物１棟と西側に門が描かれる。しかし、文化10年の作とされる無題の「高野全山及び周辺の絵図」では、建物は無く、塀に囲まれた境内地だけが描かれている。これは、文化６年の火災後、少なくとも文化10年に「高野全山及び周辺の絵図」が描かれた時点では、再建されていなかったことを示しているものと思われる。

以上、調査地点について子院の変遷をながめてきたが、駐車場用地調査区は鎌倉時代後期から明治17年までを通じて学侶方の「大楽院」が位置し、以後空地のまま今日に至ったと考えられ、いずれの検出遺構も「大楽院」に伴うものとすることができる。一方、新収藏庫用地調査区については、上段が３ヵ院、下段東側が２ヵ院、同西側が４ヵ院の変遷が知られる。最も新しい遺構面は、上段が「如意珠院」、下段東側が「龍照院」、同西側が「證覚院」に、また上段の15世紀代から16世紀前半代の遺構については「阿逸多院」とすることができるが、下段の15世紀代から16世紀前半代の遺構については目下のところ不明といわざるをえない。また、上段と下段の間で検出された道路が、正保３年の『御公儀上一山図』には認められられることや、中世には下段に「大楽院」が上段に「阿逸多院」が位置していたと考えられることから中世にはこの道路が存在していた可能性があり、出土する遺物からみて明治時代の子院整理時あるいは霊宝館が建設された大正時代までは機能していたものと思われる。

このように近世高野山の姿は絵図や文献からある程度想定することはできるものの、各子院の姿や開創から近世までについては発掘調査の成果を待つ必要がある。今後、山内の再開発に伴う発掘調査の資料の増加や、公開されていない膨大な量の種々の文献資料が残ると聞き及んでいることから、いずれこれら資料により開創から現在に至る甍を並べた高野山の姿が解明されることになるものと期待したい。

第Ⅵ章　高野山の歴史と子院の変遷

はじめに

高野山の歴史は、弘仁７年（816）弘法大師空海によって密教修禅の地として開創されたことに始まる。以来、密教修禅の道場として密教寺院の建設、弘法大師信仰や弥勒浄土信仰・阿弥陀浄土信仰が複合的に融合しあって、全国を風靡した高野山霊場信仰に基づく貴紳者の堂塔建設や高野聖による庵や寺院建設など、高野山の12世紀にわたる歴史の流れの中で幾多の寺院が山内に建設された。平安末期の頃には山内の各谷筋の奥にまで高野聖の庵や寺院が建設され、ほぼ現在みられる山内の状況に近い状態にまで発展をしていたようであるとされる。

しかし、山上仏教都市の宿命でもあるが、堂塔への落雷により大火災となって大多数の寺院が焼失するという惨事が記録によると11度に及んだといわれている。まさに高野山の歴史は火災とともに歩んできた歴史ともいえよう。しかも長い時の流れの中で失われた記録も多く、必ずしも塔頭子院の開基時期が明確でない子院も多い。このような事情もあってか、天保10年（1839）に編纂された『紀伊續風土記』においても、開創以来の寺院数について、「諸谷の別所私庵等を相併せは幾千區なるや古代の分野碁布縦横して實に算計しかたく又その轉換廃立せるに至ては桑海陵谷の變態ありて一概に辨別すへからす」と記述している。

山内各所は寺院の遺跡が幾層にも重なり、掘削中に焼土跡が確認されることも多い。まさに高野山の地中は、高野山の歴史が秘められた一大遺跡といっても過言でない状況にある。ましてや、多くの子院は開基当時の場所にあるとは限らず、たびたび移動しており時代時代の所在を突き止めることは、記録の散逸や焼失もあって不可能である。故に、ここでは高野山の概略の歴史の流れをみながら子院の歩みを大観し略記するにとどめたい。

1　草創期と子院

高野山は、弘法大師空海によって真言密教の理想を実修する修禅の地、また、大師自身の入定の地とする目的によって弘仁７年（816）に朝廷に願い出て下賜された真言密教実践を目的に開創された山である。

大師の上表にたいし朝廷の勅許が下されるや、大師は実恵や円明等の諸弟子を高野山に派遣され伽藍建立事業に着手されている。大師自身も弘仁９年（818）秋には登山され事業の指揮を取られたようだが、弘仁14年（823）東寺別当に任じられ、その経営を命じられるなど世事が多く諸弟子に建設をまかされていたようである。大師が本格的に建設事業に力を注がれたのは、天長９年（832）に京都高雄の地を去って高野山に居を移されて以降のことと思われる。

大師構想のもとで進められた高野山金剛峯寺の伽藍は、奈良時代寺院とは全く異なった伽藍配置を持ったもので、毘盧遮那法界体性２基（大塔・西塔）を左右に配し、講堂（現金堂）をその中心前方に建立するという密教独自の理論に基づく伽藍建立を計画された。またその２基の塔形式も新しいインドの

塔形式を強く残した多宝塔形式の塔が計画されるなど、金剛峯寺伽藍は雄大な構想を持って計画されたものと考えられる。

大師の高野山金剛峯寺建立は、私寺としての建設であったため、国からの援助は得られず、広く人々からの勧進に依らなければならなかったもようで、承和元年（834）８月の造塔知識文（『性霊集』巻８）に「一銭一粒のものを添へて、斯の功徳を相済へ」と諸々の檀越に対して援助を願われている。困窮する経済状態並びに都を遠く離れた紀伊山中の深山幽谷地での建設という立地条件も重なって、その建設事業は大師の意志にかかわらず遅々として進まなかったようである。

高野山の経営を甥の真然に託して大師が入定された承和２年（835）ごろに完成していた建物は、『金剛峯寺建立修行縁起』によれば、16丈の多宝塔１基（大塔）、講堂（金堂）、僧坊が建立されていたに過ぎなかったとし、高野山第二世真然僧正の代になって真言堂２宇、９丈の多宝塔（西塔）、鐘堂、経蔵、食堂、中門等の堂塔が建立された旨を伝えている。

しかし『金剛峯寺建立修行縁起』が伝える16丈の多宝塔が、大師入定時に完成していたかは不明である。なぜならば、大師入定後に一番弟子の東寺長者実恵が、再三にわたり高野山の造塔修理料等を上奏していることや真然大徳の上奏によって貞観３年（861）に大塔修理料として紀伊国正税稲4,900束を、翌年にも不足分として稲2,000束を追加して下賜されている状況からみて、大塔が竣工をしていた可能性が少なく、大師の後を継いだ高野山第二世真然大徳によって完成をみたようである。

高野山第二世真然大徳は、若干30歳で未完成の高野山金剛峯寺の経営を大師より委ねられた。高野山金剛峯寺は、大師が入定される直前の承和２年（835）２月にようやく定額寺の勅許を得、国の保護援助を受ける立場を得たものの、紀伊国司が金剛峯寺別当を兼ね、国司の管理下にあって定額寺としての保証もない状態であった。収入としては、かろうじて承和２年（835）正月に設置許可を得ていた年分度者試度の修繕料米10石と油１石の定められた収入しかなく、それ以外には、東寺で執行される後七日御修法出仕僧得分収入のみで、それらの収入の一部を修理費や雑費に充当するという極めて苦しい経済状態にあり、伽藍建立の進展は極めて遅々たるもので、現状維持が精一杯の状況であったと言われている。

このような高野山の窮状に対して、東寺長者実恵が承和８年（841）燈明料にも事欠く事情を朝廷に訴え、他の定額寺に準じて燈分ならびに供養仏餉二座料を施されんことを請い、燈分料、仏餉料2,800束と金剛峰寺料として5,616束の稲がようやく支給されることになった。実恵僧正の援助を得ながら高野山第二世真然大徳によって伽藍建設が進められていたが、その建設事業の進展は相変わらず遅々たるものであったようである。

高野山の伽藍建立に対し惜しみない助力をされていた実恵僧正が62歳で入寂された承和14年（847）年に中門の落慶をみたようであるが、その後、貞観３年（861）真然大徳が紀伊国税の稲4,500束を大塔修理料として賜るまでの16年間は、ほとんど国からの目立った援助はなかったようである。

また、翌貞観４年（862）稲2,000束を大塔修理料として再度朝廷より下賜されている。貞観18年（876）には伊都・那賀・牟婁・名草の四郡に散在する38町歩が不輸租田として認められ、高野山最初の寺領が確保されるなど経済的好転にともない、貞観年間には伽藍建設も軌道に乗ってきたものと思われる。このように朝廷からの援助を獲得しうる状態にこぎつけるには、真然大徳の血のにじむような努力の賜物であるが、実恵入寂後に東寺長者となった真然大徳の師、真雅僧正の朝廷への働きかけが背景にあった

のではないかと考えられるが、記録は伝わっていない。

東寺長者真雅僧正が入寂した元慶3年（879）以降、真然大徳は東寺長者を歴任した。真然大徳の80歳代には朝野の信望もあつまり、高野山の伽藍建設も急速に進展をみせ、真言堂、准胝堂、西塔などの諸堂が順調に建立され、仁和3年（887）ごろには伽藍諸堂の完成をみた。開創以来実に70有余年の歳月を要して伽藍諸堂に甍が聳え、大師の壮大な計画に基づく高野山金剛峯寺の伽藍が完成した。

伽藍諸堂の整備を終えた真然大徳は、仁和5年（889）に弟子寿長を初代金剛峯寺座主職に就け、また座主については真然大徳直系の高野山止住僧をもって充てることを定め、寛平3年（891）に入寂した。ようやく基礎の整った高野山であったが、第四世無空の時代に、真然大徳が東寺より借覧していた宗宝の『三十帖策子』の返却問題が起きた。座主無空は返却を拒絶して延喜16年（916）に策子を携え一山の僧を率いて下山したため、山上にはほとんど人影が認められないという荒廃状態がおとずれた。

『三十帖策子』は、延喜18年（918）6月に伊賀蓮台寺で無空が寂したことにより、翌延喜19年東寺に返納され借覧返納事件は落着した。しかし高野山の荒廃が著しいこともあって、東寺長者観賢は金剛峯寺座主を兼務し、座主不在となった高野山に正別当を設けて管理にあたらせた。正別当には、真然大徳と観賢僧正の共通の弟子である峰禅が任じられ、東寺の配下に入ることになった高野山への融和策が講じられた。さらに観賢僧正は、宗祖空海に大師号の諡号を得るため朝廷に上表を行った。

この上表にたいして延喜21年（921）に醍醐天皇より「弘法大師」の諡号が贈られ、10月27日に勅使と観賢僧正が檜皮色装束と大師諡号を持って奥院に参拝し、大師の御入定されている御姿を拝し、大師の衣を着せ奉った。これ以来、御衣替の行事が続けられることになった。この頃より大師が奥院の霊窟に入定され、今なお留身されて衆生救済教化活動をされているとする弘法大師入定信仰が世に広まった。また、大師は禅定に入って、五十六億七千万年後に弥勒如来が下生され説法されるのを待ちつつ、一切衆生の救済したもう不滅の仏であるとの思想が普及し、聖地高野山から信仰の霊山高野山へと信仰の形態を変える重要な時期でもあった。

天暦6年（952）奥院大師廟塔が雷火によって焼失したが、和泉講師雅真によって復興された。雅真は復興事業にさきがけて、御廟の左に丹生・高野両社を創祀した。また雅真は大塔修理料や年分度者の復活を計り、准胝悔過法会の再興に努めた。しかし、正暦5年（994）7月6日、落雷によって御影堂を除く壇上の伽藍諸堂が焼失し、高野山は重大な危機に直面することになり2度目の衰退を招くことになった。この危機に対し初代検校となった雅真は山麓天野社に避難して曼荼羅院を臨時の僧坊とし、東寺長者寛朝を通じて藤原道長の姉東三条院詮子から天野近辺の6カ郷の庄園の寄進を受け天野社領とした。長徳4年（998）俗別当紀伊国司大江景理を奉行として高野山の復興事業が着手されることになったが、寛朝、雅真、詮子が相次いで没したことや、国司景理の非協力的な態度もてつだって復興事業は挫折した。

草創期の子院

草創期の高野山の歴史は苦難の連続であったと言っても過言ではない。草創期の苦難の道を歩み始めた高野山にはいかほどの塔頭寺院が建立されたのであろうか。確実な史料が伝わっておらず、『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図や後世の文献史料に頼らざるを得ない。それらの史料にあっても塔頭寺院の開基

人物や創建時期に相違がみられるものがあって、にわかには信じがたい面を持っているが、次ぎにその様子を概観してみたい。

『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図には、御影堂の後方に僧坊が描かれている。さらに大塔の東方に東南院、北東に中院の2院が描かれている。康保5年（968）の作とされる『金剛峯寺建立修行縁起』には伽藍諸堂の記述の中に「二十一間僧坊一宇」とあり、『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図に描かれている僧坊に当たるものと思われる。『金剛峯寺根本縁起』の絵図に描かれている東南院は、弘法大師空海の十六弟子の一人である智泉の開基と伝えられる僧院で、天長2年（825）に伽藍建設事業に従事していた智泉が37歳で東南院において寂したことを伝える記述が『性霊集』にあり、大師の住坊とされる中院とともに、高野山にあって最も早く建立された子院であったと思われる。また、東南院は『金剛峯寺根本縁起』や『金剛峯寺建立修行縁起』が伝える僧坊の完成以前には、建設事業に従事していた諸弟子の住坊であり、建設事務所的役割を持った僧院であったかもしれない。大師住坊の中院、智泉開基とする東南院の存在した地域は本中院谷とされるが、この谷には十大弟子の真如親王開基とする遍明院や親王院が建立されたようで、山上で最も早く開かれた地域であった。

後世の史料である『諸院家帳』や『紀伊續風土記』等の伝える子院の開基年次を参考に開創された弘仁7年（816）から10世紀末までのおよそ180年間に、伽藍を中心として壇上のすぐ北の中院を中心とした本中院谷地域から隣接する北西の谷上院谷、西方の西院谷、南方の南谷に子院が建立されていったものと考えられる。その位置も伽藍とあまり離れることのない位置に建立されていったようである。子院数も20箇院を下回る程度であったようであるが、諸史料で開基僧名の相違がみられるなどがあり、どの程度の建立がみられたかは今後の発掘調査による結果をもとに考察する必要があろう。

2　中興期と子院

10世紀末の復興事業の挫折で荒廃をよぎなくされていた高野山も、11世紀に入ると本格的な復興が行われることになった。その復興事業の口火を切った人物は祈親上人定誉であった。祈親上人は、興福寺系の持経者でかつ密教僧の小島真興に師事し、仙救に灌頂を受けるなど密教的色彩の強い観進僧であったといわれる。その祈親上人が長谷寺参篭中に夢告を受けて長和5年（1016）に来山し、高野山の再興を奥院大師廟に誓い、祈誓の鑽火をともした。この際にともされた燈火を持経燈といい、一名貧女の一燈といわれる燈火の起こりになったといわれる。

祈親上人定誉は、厳冬中に在山しうるよう暖房施設である土室を僧院に造るなど工夫をおこない、天野に避難している住僧に冬期住山を勧め、寛仁元年（1017）に初めて御影堂で彼岸会を行った。祈親上人の行為は、高野山の住僧にも力を得させることとなり、行明や興胤等によって本格的な復興事業が開始されることになった。この頃、祈親上人は東室、行明は北室、興胤は西室の僧坊を建立したといわれる。

治安3年（1023）10月、東寺長者仁海によって勧誘された高野浄土観に応じ、藤原道長が高野山に来山した。道長は金泥法華経と自筆の墨書理趣経30巻を奥院御廟前で供したのち埋納し、兜率浄土往生を祈り、政所河南の地（慈尊院付近の紀の川南岸の地）を寄進した。道長の高野参詣後は天皇や貴族の参詣が相次ぎ、道長の先例に習って山上での法要や庄園の寄進が行われた。万寿3年（1026）には、藤原

道長の娘上東門院彰子が落飾後に大師廟前に納髪を行った。この彰子の行為は、高野山の納髪納経の最古の例といわれる。永承３年（1048）10月に道長の子藤原頼通が参詣し、道長の前例に従い金泥法華経１巻と墨書理趣経30巻を大師廟前に埋納し、政所河北の地を寄進した。こうした摂関家の高野参詣及び庄園の寄進は、高野山復興に活力を与え、また都から遠く離れた地方的な高野山を一挙に天下の霊場としての地位を与えることになった。しかし当時の高野山の院宇は、僅か16宇に過ぎなかったといわれる。

復興事業が徐々に進展をみることにより、高野山の教学面にも刺激を与えることになったようで、中院流の祖となった明算が長久元年（1040）に中院を再興した。明算は仁海の弟子成尊から小野流を学び、延久４年（1072）に帰山して中院流を開いた。また帰山後の明算は、祈親上人の遺言を継いで堂宇の建設にも尽力し、昼夜不断の理趣三昧会や尊勝陀羅尼会を興すなど高野山の復興に尽くした。

延久４年（1072）には大御室性信（三条院皇子）が来山し、奥院御廟の川北に庵を構えて参篭した。また性信親王は、伽藍壇上に灌頂院を造営されようとされたが、完成前に崩御された。性信親王の遺命によって灌頂院の建設が進められ、応徳３年（1086）春秋二季の灌頂が始められて阿闍梨三口が置かれた。性信親王の来山参篭は、事相面で広沢流導入の契機となり、代々御室法親王や院の参詣の緒ともなったといわれる。

院政時代に入ると高野山の浄土観はますます広がりをみせ貴紳の参詣が続くが、その中にあって画期的なできごととされる白河上皇の登山がある。白河上皇の登山参詣は寛治２年（1088）のことであったが、『栄華物語』の「紫野」段によると「雪など降りていと哀なりけり」と表現される冬の登山であった。上皇の霊場「高野山」への熱烈な崇敬の念は、徒歩による難渋な登山でありながらも物ともしなかったようである。この時の白河上皇の登山参詣では、三口の阿闍梨を高野山に置いて伝法灌頂を継ぐこと、一山の象徴である根本大塔を復興することを宣下され、その復興事業に教懐を中心とした山内在住の念仏聖30人を組織し、大塔再建観進活動が命じられた。また上皇は、観進を命じた三十口聖に対し、その供米として安芸国能美庄を施入された。この大塔再建は、15年の歳月を経て康和５年（1103）に完成した。白河上皇の御幸は、時あたかも復興の途上にあった一山に与えた効果は大きかった。

天治元年（1124）には鳥羽上皇も登山参詣された。鳥羽上皇は、その登山参詣において東塔・西塔の２塔を造立することを宣旨され、新たに別所聖人30人を組織され造立に当らせた。東塔は白河上皇御願で長者勝覚が、西塔は鳥羽上皇御願で越中守公能の成功（じょうこう）によって建立された。大治２年（1127）10月、白河・鳥羽両上皇が揃って登山され東西両塔の落慶供養に臨まれた。鳥羽上皇が命じ組織された三十口の聖人にたいして、報奨として安芸国可部庄用途108石が寄進された。大塔再建、東西両塔の建立にみられるように観進聖は、高野山の復興に大きな役割を果たしたが、これら聖と呼ばれる人々の来山は11世紀に入ると徐々に増加をみ、高野山に聖達の止住地の別所が出来上がったようである。11世紀の中頃には南別所の名が文献に表れ、12世紀の初めごろにかけて小田原別所・東別所・往生院別所の各別所が成立し、高野聖の数が急速に増加したといわれる。高野山に止住した高野聖達は全国を遊行し高野浄土信仰の普及を行ったことから、高野浄土信仰はますます盛んとなって納骨や納髪、大師廟前への埋経も盛んに行われたようである。高野聖の活躍は、信仰面のみならず、財政面にも大きな貢献を果たしたのではないかと思われる。

高野浄土観の浸透は貴紳の参詣を盛んにし、また私的な堂塔建立も盛んに行われることになった。藤

原道長の登山参詣以来、院政期に入っても藤原氏の登山参詣は盛んで、白河・鳥羽両院の供奉による参詣、私的な参詣が続けられた。また、康和元年（1099）の藤原師実による埋経など、代々藤原氏一族による大師廟前の埋経も続けられたようである。天仁元年（1108）には藤原雅実によって堀河天皇の御髪が大師廟前に埋納されるなど、納骨・納髪も盛んであったと考えられる。

堂塔の建立については、久安4年（1148）の藤原忠実発願による谷上金剛心院の建立、長者深覚の無量寿院、平等坊永巌の平等院、貫意の禅定院、覚法法親王の勝蓮花院、美福門院の菩提心院や六角経蔵など、貴族・僧侶・親王・女院による子院建立が盛んに行われ、山上に堂塔の甍が増していった。

高野山に堂塔の建立が続き、寄進庄園も増し安定期を迎えようとしていた高野山にも、世に風靡した末法思想と阿弥陀浄土信仰の影響が顕著に表れるようになった平安時代末期、永久2年（1114）に仁和寺出身の覚鑁が高野山に入った。覚鑁は華蔵院宮聖恵親王（白河院第5皇子）を通じて鳥羽上皇の信任を得た。覚鑁は鳥羽上皇御願寺として大治5年（1130）5月小伝法院を建立し、さらに長承元年（1132）大伝法院と密厳院の完成にともなう落慶供養に鳥羽上皇の臨席を得た。この時、鳥羽上皇より奥院・西塔料として安芸国沼庄を、伝法会料として石手・弘田・山東・岡田・山崎・相賀・志富田の7ヵ庄の寄進を受けた。このうち、相賀と志富田は『金剛峯寺根本縁起』に示されている寺領であったことから、本寺の金剛峯寺方の反感を買った。当初、大伝法院領が200余町であったが、保延2年（1136）に400余町、治承2年には大・小伝法院を合わせ1,500町にもおよび、仏餉人供料を合わせると2,726町となり金剛峯寺方の本寺を圧倒する勢いを示したため、より一層本寺の反目をつのらせることになった。さらに長承3年（1134）に鳥羽上皇の院宣によって、東寺長者による金剛峯寺座主職の兼務を排して、自から本寺と末院の座主職に就いたため、東寺・金剛峯寺方の強い反感を受けた。東寺と金剛峯寺方の有力者が鳥羽上皇に憤奏したため、保延2年（1136）両座主を同門の真誉に譲ったが、東寺長者定海の金剛峯寺座主職の復職などをめぐって紛争が続き、保延6年（1140）12月本末両派の合戦となった。この合戦に敗れた覚鑁は、院僧700余人とともに根来に逃れることになったが、真然大徳の時に行われた大伝法会を再興して教学を興隆し『五輪九字明秘釈』を著わして、密教と浄土教の理論的な折衷を試み、弥陀即大日、念仏即真言、極楽浄土即密厳浄土の思想を唱えるなど貢献した。

久安5年（1149）5月大塔に落雷し、御影堂を除く伽藍諸堂が類焼し烏有に帰した。ただちに参篭中の高野御室覚法法親王は復興を命じ、東寺長者寛信の奏上による斡旋などがあって平忠盛が成功により大塔建立奉行に任命された。忠盛の死後、清盛がこれを引き継ぎ大塔は保元元年（1156）に完成した。この頃、保元・平治の乱の余波を受けて、平治の乱の首謀者信西一族の勝賢や明遍が来山した。藤原敦光の子長光、清盛から遁れるために入山出家した宰相入道成頼なども来山止住した。また、歌人として有名な西行も来山した。安元元年（1175）五辻斎院頌子内親王は、鳥羽法皇追善のため東別所上乗院内に建立されていた談義所の蓮華乗院を治承元年（1177）3月壇上伽藍の地に移建するにあたり移建勧進奉行を勤め、また、治承4年（1180）には平清盛から高野山に命じられた紀州一之宮造営賦役の免除交渉に成功するなど活躍した。

平安末期には、本寺（金剛峯寺）と末院（大伝法院）との争いが絶えなかったようだが、大伝法院・蓮華乗院などの研究錬学機関が整い、覚鑁による大伝法院流の樹立、『十巻抄』の撰者で有名な保寿院流の永厳、永厳の流れをくむ心覚による『別尊雑記』の図像集の撰集などにみられるように、高野山での

密教事相・教相の研究が活発であった。

中興期の子院

中興期の高野山は復興と隆盛の歴史でもあったが、草創期にみられた密教修禅道場としての立場に霊場「高野山」の要素を加え、復興を果たした時期といえる。

『高野春秋』の正暦5年（994）秋7月6日の条によると、落雷により伽藍の諸堂が焼失した火災で「寺家類災本中院谷、南谷、及東別所は往生院峯際まで焼失」と古山史に言うとして塔頭寺院の類焼状況を記述している。この火災によって伽藍周辺に所在していた塔頭寺院の大半は焼失したものと思われるが、祈親上人定誉による再建の進展にともない、祈親上人の東室、行明の北室、興胤の西室等の再建、さらに中院流の祖である明算による中院の再興と徐々に塔頭寺院の再建が行われたようである。しかし、永承3年（1048）の藤原頼通の登山参詣の頃には、寺僧住坊16宇程度に過ぎなかったといわれる。

藤原道長などの摂関家や皇族など貴紳の参詣が盛んとなり、天下の霊場としての地位を確立していくにつれ貴紳の堂塔建立も相続いた。白河上皇による大塔・東塔、鳥羽上皇による西塔、大御室性信親王による奥院庵室・伽藍灌頂院、藤原忠実・頼長による金剛心院・南北二塔などの造営再興がそれである。さらに久安5年（1149）5月、大火によって御影堂を除く諸堂が烏有に帰した際にあっても、平忠盛・清盛の大塔再建造営が行われた。また、美福門院の六角経蔵・菩提心院、五辻斎院の蓮華乗院など、高野山浄土信仰が盛んになるにつれて堂塔伽藍の造営再興が続いた。

院や貴紳による寄進造営のほか、高野山来山止住僧などによる堂塔僧院の建立も盛んに行われた。深覚の無量寿院、平等坊永厳の平等院、寛意の禅定院、覚法法親王の勝蓮華院、覚鑁の大伝法院・小伝法院・密厳院等の建立、明遍の蓮華三昧院、重源の新別所専修往生院などに代表される高野山隠遁者による山内各所に現われた別所の成立にともなう寺院建立も盛んであった。この別所は、11世紀後半に南別所が、12世紀に入ると中・小田原・五之室・千手院・東・往生院の各谷地域に成立し、12世紀中頃までにほぼ山内全域に塔頭寺院や別所寺院が建立され、現在の規模に匹敵するほどの状況になっていたらしいとされる。

3　継承・守勢期と子院

鎌倉時代に入っても、藤原基房・後鳥羽上皇・九条道家・後嵯峨天皇・後宇多天皇など天皇や貴族の参詣が続いたが、武士の参詣止住も著しくなった。源平の戦乱後の恩賞を不服として出家した佐々木高綱入道了智や同信綱（虚仮阿弥陀仏と称す）、熊谷直実蓮生房らが高野山に入った。

鎌倉時代初期の高野山には、守覚法親王や木工允（もくのじょう）友時により平経正や平重衡の遺骨が奥院に納骨された。また、後白河上皇の命によって、平忠盛・清盛により再建された大塔で平氏怨霊追善法会が実施されるなど、平安時代末期に関係を持った平氏関係の菩提や追善が行われた。なお、平氏没官領の備後国太田庄を法華房鑁阿が後白河上皇に高野山へ寄進されるよう斡旋し成功するなど、鎌倉幕府体制への移行のなかで高野山の基盤強化も行われた。太田庄の寄進を斡旋した法華房鑁阿は、天野社に和泉国近木庄を寄進して法華八講を興し、打ち続いた戦乱犠牲者の無縁の尼60人を社頭の精舎に住まわせ、念仏や転経を勧めるなど慈善事業を行っている。すなわち、法華房鑁阿は、平安末期から鎌倉期にかけて活躍

した聖心・明遍・西行・重源・行勝・体阿弥・念阿・守覚・信助などの高野山勧進僧の一人でもあった。勧進僧の一人である行勝は、元暦元年（1184）ごろに大峯山から高野山に居を移した験者で、一心院谷に妙智坊・法智坊・蓮智坊・華智坊・経智坊の5坊を建立経営した。また行勝は、八条女院御願による不動堂を建立した。この行勝を慕って源頼朝の三男貞暁が来山し、自らも一心院谷に寂静院を建立した。貞暁は高野法印・鎌倉法印と呼ばれ、隠然たる勢力を持っていたといわれている。

承久元年（1219）源実朝の室政子によって実朝の菩提を弔うために金剛三昧院が建立され、本尊の正観音胎内には実朝の遺骨が納められている。貞応2年（1223）には、多宝塔や経蔵が金剛三昧院境内に完成した。また貞暁が政子の援助を得て、3代将軍実朝追善のため阿弥陀堂と五輪塔3基を一心院谷に建立した。喜禎4年（1238）政子の13回忌に当り、足利義氏が金剛三昧院内に大仏殿を建立した。このような鎌倉幕府援助のもとで建立された金剛三昧院の初代長老には、栄西の弟子で幕府の崇敬を受けていた行勇が就任し、禅・律・密の三宗兼学の寺とした。このため金剛三昧院は、12代まで禅宗系の長老が代々住職を勤めた。高野山の建築に残る会下などの様式には禅院の名残があるのも、このころの僧院様式を伝えるものといわれる。

また鎌倉幕府は金剛三昧院のほかにも、弘安4年（1281）に勧学院・勧修院を創建して高野山の僧侶に修法と学問の奨励を行った。さらに安達泰盛の指導と援助で建長5年（1253）三教指帰に始まる高野版印刷事業が開始され、教学面のみならず高野山の文化の発展に大きく寄与した。泰盛は、遍照光院覚鑁の発願によって開始された平安時代以来の木造町率都婆を石造町率都婆に改めるために行われた勧進に対し、協力して勧進を行うなど高野山に大きな文化的足跡を残している。

金剛三昧院と鎌倉幕府・安達一族の間にみられる密接な関係は、他の子院と武士との関係を深めることになったようで、深覚の開基とされる無量寿院と牧氏、遍照光院と仁科氏など地方武士と高野山子院との間に師檀関係が成立して、堂塔や子院建立が行われ宿坊制度の原型が出来上がったと言われる。

天皇や貴族のあいだにも、平安後期に引き続き参詣や堂塔の建立がみられる。堂塔の建立としては、正治2年（1200）後鳥羽上皇御願により伽藍内に孔雀堂が、承久3年（1221）には道助法親王により光台院がそれぞれ建立されているが、平安時代後期にみられた皇族や貴族により建立された堂塔住坊の数とは比較にならないものであって、むしろ武士階層による堂塔建立が著しかった。

一方、新別所専修往生院で行われていた重源の二十四蓮社友による不断念仏を範として、建保4年（1216）に往生院の二十五三昧講が成立し、明遍の蓮花谷聖や覚心系の萱堂聖、千手院聖、五室聖など、それぞれの谷に特色のある聖集団が成立し、その活動も活発化した。しかし、これら聖集団の多くは、建治元年（1275）に一遍上人他阿が千手院に止住して以来上人の影響を受け、南北朝以降には時宗化が進行したとされる。

これに対して高野山本来の密教教学は、鎌倉時代の初期に学僧の覚海が正統的な密教教学の復興を企てた。その覚海の門下に法性・道範・尚祚・真弁が出た。この4名の学僧は、覚和・信日・信堅・玄海などの学僧と共に高野八傑と称されるなど、密教学道も活発化した。

鎌倉時代の高野山の発展に最大の貢献をした足達一族が平頼綱と争った霜月騒動で失脚し、やがて後嵯峨天皇の譲位後、大覚寺統（南朝）と持明院統（北朝）との分裂、後醍醐天皇の倒幕挙兵、鎌倉幕府の滅亡という政治の流れを経て、政治的社会的動乱の時期である南北朝時代を高野山は迎える。

当時、一大勢力を持っていた高野山は南北両朝の双方から挙兵などの誘いを受け、政治的な選択を迫られた時代でもある。南朝の後醍醐天皇は、鎌倉時代以来教学が盛行していた高野山に、長日談義の新学堂（愛染堂）を建立した。また不断愛染護摩供を始行されたり、延元３年（1338）に来山された際には『金剛峯寺根本縁起』に御手印を押して寺領の保証を行い、大塔料の太田庄、蓮華乗院の南部庄の安堵を通知している。一方、北朝方においても高野山に対し、光厳院が高野山の旧領を安堵した。また、足利尊氏も寺領に対して段銭や諸役の免除、守護不入の権利を高野山に与えるなど、両勢力の背後に政治的意図のある甘言や懐柔策を行っている。このような両勢力の誘いに対し、正平３年（1348）３月、衆徒520名が連署して、南北両勢力のいずれにも荷担せず出兵もしないこと、寺領を侵す者には南北両勢力を問わず一致協力して放逐するという決議を行い中立の原則を貫いた。

また南北朝の動乱期は、高野山の経済的な面にも動揺をきたした時代でもある。高野山の遠隔地の大庄園が守護地頭などに度々押領され、紛争が絶えず、徐々に収入が減少していった。高野山はこの減収に対する策として寺領有力者の子弟を出家させ寺領の治安維持を計る一方、大内氏と成慶院、足利氏と安養院、南部氏と遍照光院というように有力守護と高野山の寺院が宿坊契約や師檀関係を結ぶなど積極的対策も講じられた。このような事情を裏付けるように、『金剛峯寺衆徒契状』には、契約に違反して旅人引き（客引き）をする者には罰を加え、宿坊を破却することを取り決めている。

このように南北朝動乱期における高野山は、政治的経済的に諸方策がとられて一山の安泰が計られた。南北朝時代の高野山は、後醍醐天皇の愛染堂建立以外に注目すべき堂塔の建立は記録に表れないが、塔頭子院が有力守護などと宿坊契約や師檀関係が結ばれたことから、子院の規模の拡張などがあった可能性もあるが明確ではない。

南北朝時代の高野山の教学や信仰は鎌倉時代の活発化を受け継ぎ、後醍醐天皇の勅願によって創建された新学堂（愛染堂）に20人の学道衆と５人の権学衆が置かれ、蓮華乗院の本会と勧学院の勧学会などの機関に、新たな密教学道研究機関が加わり教学の盛行をみた。不二門思想を説いた長覚や而二門思想を唱えた宥快が出て、密教本来の立場から密教教学の復興を唱え、やがてこの運動は室町時代初期の応永の大成という高野山密教教学や学道組織の確立に繋がっていった。一方、鎌倉時代に組織化が進んだ高野聖集団は、鎌倉時代後期の一遍上人の来山によって時宗化が進み、南北朝時代には時宗化の傾向が加速し、口称念仏の声は全山に響き渡るほどになっていった。

室町時代の高野山は、足利義満や義持などが足利尊氏の参詣を前例としたことにより、代々の将軍が参詣した。その際には『金剛峯寺根本縁起』や“飛行三鈷”の拝観が行われ、根本縁起記載の旧領安堵の再確認を幕府に求めるなど寺領の保護に努力が払われた。やがて室町幕府の権勢が衰え、各地に戦国大名が割拠したいわゆる戦国時代には、遠隔地の高野山の庄園は実質的に崩壊した。高野山は各地の有力大名や豪商富豪と宿坊契約や師檀契約を結び、経済的維持が計られた。このような宿坊契約や師檀契約は、寺僧や高野聖などの廻檀廻国によって緊密に結ばれた。寺僧や高野聖の廻国などの行動範囲の拡大は、奥院への納骨や供養碑の勧進活動を活発化させ、奥院の建碑の中でも30cm程の一石五輪塔がこのころから極めて多くなるのも、このような背景があってのことだと考えられる。

南北朝時代から密教以外の思想を排除し、密教思想本来の教学を求めて長覚や宥快を中心に進められてきた教学運動は、室町時代初期の応永14年（1407）南都より研学堅義を移入して山王院に堅精大義を

興し、蓮華乗院・勧学院の学道組織が改められるなど、教学の確立を計った応永の大成が行われ、教学の黄金時代が築かれた。

このような教学の隆盛によって、一山を念仏の山と化す程の勢いであった時宗化した聖達に対し、応永20年（1413）高野五番衆契状により、高野山での高声念仏・金叩き・屁頭陀・踊念仏・庵室の新造禁止などの処置がとられている。

聖の勢力拡張によって庵室の建築が盛んであったようであるが、堂塔の目立った建立はみられなかったようである。しかし、応永18年（1411）に堺の草部屋道普が金堂と奥院御廟の上葺を行い、また同21年には大塔下層の上葺を行っている。また文明２年（1470）十穀是吉によって奥院御廟の修理を行うなど、維持管理の寄進行為が豪商などの手によって行われた。

宿坊関係はさらに広範囲に普及し、正長元年（1428）に千葉胤直と蓮華三昧院、永亨11年（1439）松平親氏と蓮花院（大徳院）、古川公方と桜池院が契約を結んでいる。天文22年（1553）には上杉謙信が無量光院清胤に帰依するなど、室町時代後半には、高野山との間に一族や家臣団、領国全体を単位とした宿坊契約が結ばれたといわれる。

またこのころ、諸堂の維持管理・年貢の徴収・出納事務を代行して経済を掌握していた行人と学侶の間でしばしば紛争が生じ、永亨５年（1433）には学侶の要請で登山した守護代遊佐越前守と行人方との間で合戦が起こり、『検校帳』によると山上の大半が焼失したとされる。

永正18年（1521）２月に西院谷の寺院から出火し壇上伽藍、南谷の北半分、本中院・小田原・千手院・往生院の各谷の堂塔・経蔵など１宇も余さず烏有に帰した。そのために阿本や阿純が復興のため勧進活動に着手したが、天文３年（1534）の弘法大師700年御遠忌に僅かに御影堂が急造されたに留まるなど衰退を極めた。

継承・守勢期の子院

鎌倉時代の高野山の堂塔建立は、正治２年（1200）後鳥羽上皇御願による伽藍境内に建立された孔雀堂、建久９年（1198）八条女院御願による不動堂、承久３年（1221）道助法親王による光台院建立、元暦元年（1184）以降に建立された一心院谷の５坊、源頼朝の三男貞暁による寂静院の建立がある。この時代で最も注目されるのが北条政子による貞応２年（1223）の金剛三昧院建立、弘安４年（1281）の北条時宗による勧学院建立などにみられる鎌倉幕府の影響下による寺院建立である。鎌倉幕府は、この金剛三昧院を中心として高野版の開版、教学の奨励を行うなど高野山の文化振興の促進を果たし、高野山に大きな足跡を残した。

鎌倉幕府と金剛三昧院の関係は、地方武士と塔頭寺院との間に師檀関係を生むこととなり、堂塔や子院建立が行われた。また鎌倉時代には聖集団の組織化が進み、各谷に特色のある聖集団が成立し、庵室などの建立も盛んになったものとみられる。

南北朝時代は南北両朝の対立の影響を受けて、高野山は守勢期でもあって、後醍醐天皇による新学堂（愛染堂）の建立はあったが目立った寺院建立はみられなかったようである。しかし、塔頭寺院は、有力守護との間で宿坊契約や師檀関係を結ぶようになり、経営維持が計られた。

室町時代に入ると、遠隔地の庄園が実質的には崩壊することになったことから、各地の有力大名や豪

商富豪と宿坊契約を結ぶなど塔頭寺院の維持を計るとともに、寺僧や高野聖の廻国による勧進活動が活発化し安定化が計られた。このころには時宗化した聖による新造の庵室などが建立されることが多かったようで、庵室などで行われた高声念仏や踊念仏などの禁止とともに庵室の新造が禁止されている。また豪商や富豪による堂塔の修理が行われたことも注目されよう。

宿坊関係も、寺僧や聖の廻国の強化によって有力戦国大名との間で広範囲に結ばれるなど普及した。しかし、行人と学侶間の争いが絶えず、紛争が原因で山上の諸坊が焼失したり、失火によって山上の寺院堂塔が広範囲にわたり焼失するなど、その末期には衰退を極めた。

4　変換期と子院

高野山の近世の幕開けは、織田信長による高野攻めに始まる。織田信長は永禄11年（1586）に入洛し、元亀２年（1571）に延暦寺の焼打ちを行うなど天下統一に対抗する勢力に対し容赦ない攻撃を加えた。高野山の衆徒が天正元年（1573）に紀和の国境に要害を構えたため、信長がそれの撤去を命じたが高野山側が拒否したことや、天正８年（1580）に荒木村重の家臣が師檀関係を頼って高野山に逃れたため、捜査に登山した松井友閑の部下32人を饗応にことよせて殺したため、信長は諸国の高野聖1,383名を安土城外・京の七条河原・伊勢蛛津河原で斬殺し高野攻めを開始したが、本能寺の変によって挫折した。

信長に代わって政権を握った豊臣秀吉は、天正13年（1585）３月根来寺を攻略して高野山に迫った。この秀吉の高野攻めから高野山を救ったのは、天正元年以来遁世し高野山に入山していた木食応其であった。応其は高野山の代表として秀吉と面会し、応其の努力によって和平が成立し、高野山は兵火から救われた。しかし秀吉は高野山寺領のすべてを没収し、後に21,000石を高野山に与えた。以降、交渉に当たった応其は秀吉の信頼を得、高野山に応其上人のために客僧坊興山寺を建立している。また秀吉は母天瑞寺殿追善のため青巌寺を建立している。さらに、秀吉は応其に命じて室町時代の大火で焼失していた大塔や金堂など25棟の堂塔の再建を行った。秀吉の亡き後も、豊臣家と高野山は応其を介して強い関係を維持していたようで、後に関ヶ原の戦いで西軍の将として徳川家康と戦い敗れた石田三成が、慶長４年（1599）に悲母追悼のため奥院に経蔵を造立して高麗版一切経を納めている。慶長５年（1600）関ヶ原の戦いでの西軍の敗戦によって、応其は高野山への危害を恐れ江州飯道寺に逃れて一生を終えた。

徳川家康が天下を奪取した江戸時代に入っても、秀吉が高野山に与えた寺領21,000石は引き続き安堵されることになったが、江戸時代の高野山は幕府の峻厳な規制を受けることになった。また高野山にあって学侶・行人・聖の三派がそれぞれ勢力争いを繰り返したことから、幕府はこの３派の争いを利用して高野山を巧みに統制したといわれる。慶長11年（1606）家康は時宗化した聖方に対し、聖方の36道場を新言宗に帰入するよう命じた。家康が没した後、学侶方（青巌寺）・行人方（興山寺）・聖方（大徳院）が幕府を意識して家康の木像や東照宮を建立するなど互いに張り合った。

寛永７年（1630）10月、大塔に落雷炎上し、五社拝殿・六角経蔵・中門を除く伽藍諸堂と本中院谷・小田原谷・青巌寺・宝性院の堂宇が焼失した。

寛永15年（1638）無量寿院主澄栄が、行人が受ける資格のない堂上灌頂を行人の応昌に授ける約束をしたが、学侶の反対で澄栄の約束が二転三転したため、行人2,500人は学侶と絶交し、学侶に対抗して行人側が、大塔棟札を心柱に打ったことが問題となり、翌年学侶方が幕府に訴える堂上灌頂の争いが生じ

た。学侶・行人の争いは双方が幕府に訴え、その裁定を仰ぐという形で何回となく争いが続き、元禄5年（1692）幕府の裁断に服従しなかった行人627名を流罪335名を山外追放とし、翌6年10月行人寺902軒を取り潰し280軒だけを存続させた、いわゆる元禄聖裁まで約半世紀にわたって続いた。この聖裁によって、正保元年（1644）ごろには学侶坊210軒、行人坊1,440軒、客僧坊42軒など合計1,865カ寺あった塔頭子院数は、行人寺902軒が取り潰されたことにより計963軒となった。この元禄ごろから山内に店舗が設けられ、現在の町家発生の因となった。

文化6年（1809）7月、南谷から出火し、中門・六角経蔵・鐘楼・愛染堂・三昧堂・蓮華乗院・東塔・勧学院等が類焼した。さらに、天保14年（1843）にも火災が発生し、御影堂・灌頂堂・大塔・金堂・鐘楼・孔雀堂・准胝堂・山王院・同鐘楼・荒川経蔵・中門・蓮華乗院・三昧堂・愛染堂などの伽藍諸堂がことごとく焼失した。万延元年（1860）の大火では青巌寺も焼失した。

江戸時代にも高野山は幕府や諸大名と宿坊関係を結び、関係大名を通じて文人や絵師の登山が多くなり、塔頭寺院に障壁画などを残している。また、これら師檀関係を基に各大名は奥院に巨大な五輪塔供養碑などの建碑を行っている。塔頭寺院と大名の師檀関係によって、幾度も発生した火災での焼失による危機に対し、大名から塔頭寺院に援助の手が差し伸べられたものと思われ、再建も順調に行われたようである。

慶応4年（1868）3月の王政復古により、9月には明治と改元された。高野山では学侶・行人・聖の三流を廃し、青巌寺と興山寺を一本化し金剛峯寺とした。明治4年（1871）の上地令によって21,000石を返還し、加えて3,000ヘクタールの山林を返上したことから、千年にわたる宗教教団は生活の糧を失った。明治17年（1884）13の字から成る高野村が誕生し、明治5年の女人禁制の解除とともに高野山は近代化に向けて歩むことになった。当時の高野山は寺院436軒、人口772人であった。明治初年には680カ寺が現存していたが、財政の窮乏のため山内寺院の整理統合が急務であった。明治21年（1888）3月23日に発生した火災によって五之室谷・千手院谷・小田原谷・蓮華谷で寺院77軒、町家70余戸が焼失した。このため明治24年（1891）一山が協議し130カ寺を残し、他を廃寺とした。大正2年（1913）には宝性院と無量寿院を合併し宝寿院と改称した。昭和元年（1926）金堂から出火し、孔雀堂・六角経蔵が焼失した。この時金堂内陣の諸尊像がことごとく焼失し、弘法大師空海ゆかりの仏像が高野山から姿を消したことは惜しみても余りある惨事であった。

昭和7年（1932）9月には金堂が再建され、昭和9年（1934には）宗祖1,100年御遠忌が執行され、昭和12年（1937）には大塔が完成した。昭和21年（1946）1月には高野山新言宗が設立された。昭和40年（1965）には高野山開創1,500年記念大法会が、昭和48年（1973）には宗祖生誕1,200年記念大法会が、昭和59年（1984）には宗祖御入定1,150年御遠忌記念大法会がそれぞれ執行され、平成2年9月には高野山の基礎を確立した伝灯国師真然大徳1,100年御遠忌大法会を迎えようとしている。

変転期の子院

室町時代末期の永正18年（1521）の火災によって焼失した塔頭寺院が十分に復興をみていなかったと思われる時期に、織田信長・豊臣秀吉による高野攻めがあり、山内の塔頭寺院の復興も遅れがちであったと考えられる。安土桃山時代にはいかほどの寺院が存在していたかは不明である。しかし秀吉の天下

統一が実現した桃山時代に入ると、秀吉の信任を得た木食応其の力もあってか、客僧坊興山寺や青巌寺が秀吉によって建立された。さらに秀吉は、永正18年の火災で焼失した大塔や金堂など25棟の堂塔の再建を行うなど復興も順調に進展をみたものと考えられる。秀吉の亡き後も、応其を介して豊臣家との関係が維持されたようで、関ヶ原の合戦前年に石田三成が奥院に経蔵を建立している。

江戸時代に入ると、金剛峯寺は徳川幕府の峻厳な規制を受けることになったが、正和３年（1646）の『御公儀差上一山図』裏書によれば、学侶坊210軒、行人坊1,440軒、非事吏坊120軒、客僧坊42軒、三口聖坊52軒、総計1,864軒の塔頭寺院が存在していた。しかし、学侶と行人の紛争が続き、「元禄聖裁」が下され、その聖裁によって元禄６年（1693）には行人方寺院902軒が取り壊されている。

江戸時代後期には、文化６年（1809）、天保14年（1843）、万延元年（1860）と伽藍地区を中心に大火が続いた。この火災によって焼失した伽藍大塔は、昭和12年（1937）に至るまで復興されることはなかった。塔頭寺院にあっても、火災焼失の憂き目を受けた寺院もあったが、大名と宿坊契約に基づく大名からの援助もあって再建も順調に行われたようである。しかし、小坊にあっては再建されなかった寺院も多かった。

明治維新の風が吹き荒れた明治時代初期に現存していた塔頭寺院は436軒と江戸時代前期の正保元年（1644）ごろの1,865寺に比べ激減している。

明治維新による体制の大変革は、高野山にも大きな波として押し寄せ、学侶・行人・聖３派を廃し、青巌寺と興山寺の合併、上地令による21,000石の寺領返還や3,000ヘクタールの山林の返上にともない宗教教団の生活の糧を失うなど基盤が大きく揺らいだ。この経済的窮乏は、山内寺院の整理統合を急務の課題とした。そのような状況下の明治21年（1888）、五之室谷の寺院から出火し寺院77軒と町家70余戸が焼失した。この火災がもとで、明治24年（1891）に焼失を免れた359軒の寺院を統廃合して130軒を残し、他を廃寺とする処置が取られた。この統廃合は、現在の大師教会の地にあった宝性院を谷上の無量寿院と合併し、宝寿院と改称して作業は終了した。

大正時代に入るとようやく復興の兆しがみられ、大正10年（1921）に高野山の宝物を保管し陳列公開する施設として、高野山霊宝館が勧学院前の南谷の一画に開設された。復興の途次にあった高野山に、昭和元年（1926）金堂から出火し孔雀堂・六角経蔵が焼失するという惨事が襲った。

昭和９年（1934）宗祖1,100年御遠忌大法会を迎えるに当たり、各方面の寄進を受け昭和７年（1932）に金堂が再建され、御遠忌法会後の昭和12年（1937）大塔が再建された。昭和59年（1984）の宗祖御入定1,150年御遠忌大法会の記念事業として孔雀堂や東塔が再建された。現在、高野山内には117カ寺を有し、その内全国の檀信徒の宿泊所として53カ寺の宿坊寺院が存在し、弘法大師空海が真言密教の修禅道場として開創された弘仁７年（816）以来12世紀余の歴史の変転を過ごしながらも、脈々とその法灯を伝えている。

参考文献

1　「紀伊名所図絵」歴史図書社復刻　1970
2　「紀伊続風土記」厳南堂復刻　1975
3　財団法人元興寺文化財研究所「高野山発掘調査報告書」1982
4　日本歴史地名大系第31巻「和歌山県の地名」平凡社　1983
5　日野西真定「高野山古絵図集成」1983
6　安藤精一編「和歌山県の文化財」第１巻　1983
7　兵庫県教育委員会「魚住古窯群」兵庫県文化財調査報告書第19集　1983
8　堺市教育委員会「堺市文化財調査報告第13集」1983
9　九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」1984
10　和多秀乗「高野山の歴史と信仰」『高野山』法蔵選書27　1984
11　角川日本地名大辞典　30「和歌山県」1985
12　財団法人高野山文化財保存会「重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書」1986
13　図説日本の歴史　30「図説和歌山県の歴史」1988
14　財団法人和歌山県文化財センター「㈶和歌山県文化財センター年報1987」1988
15　和歌山県教育委員会「伊都地方広域遺跡群詳細分布調査概報」広域遺跡群詳細分布調査３　1989

図1

上段表土（1～67）

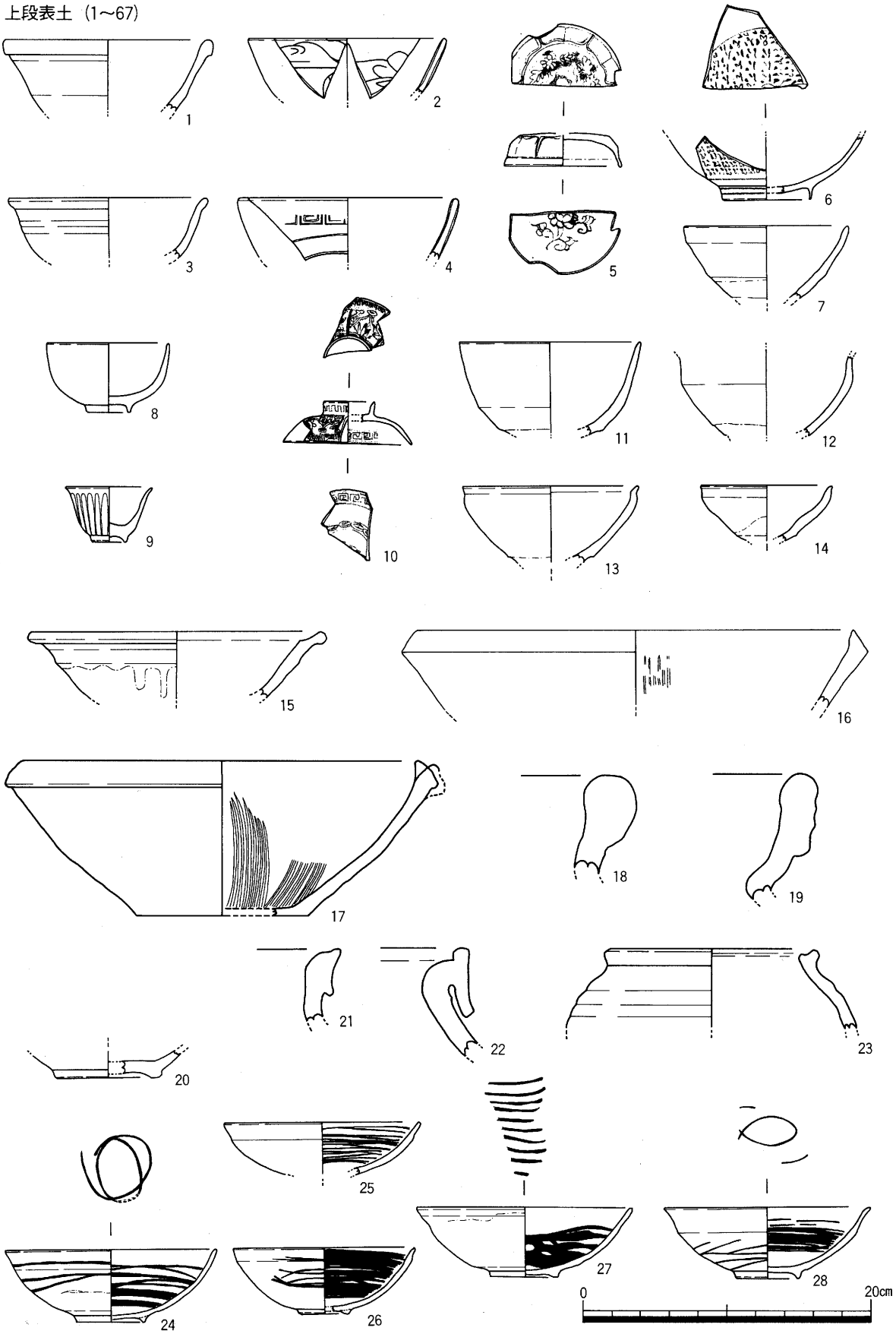

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
20cm

図 2

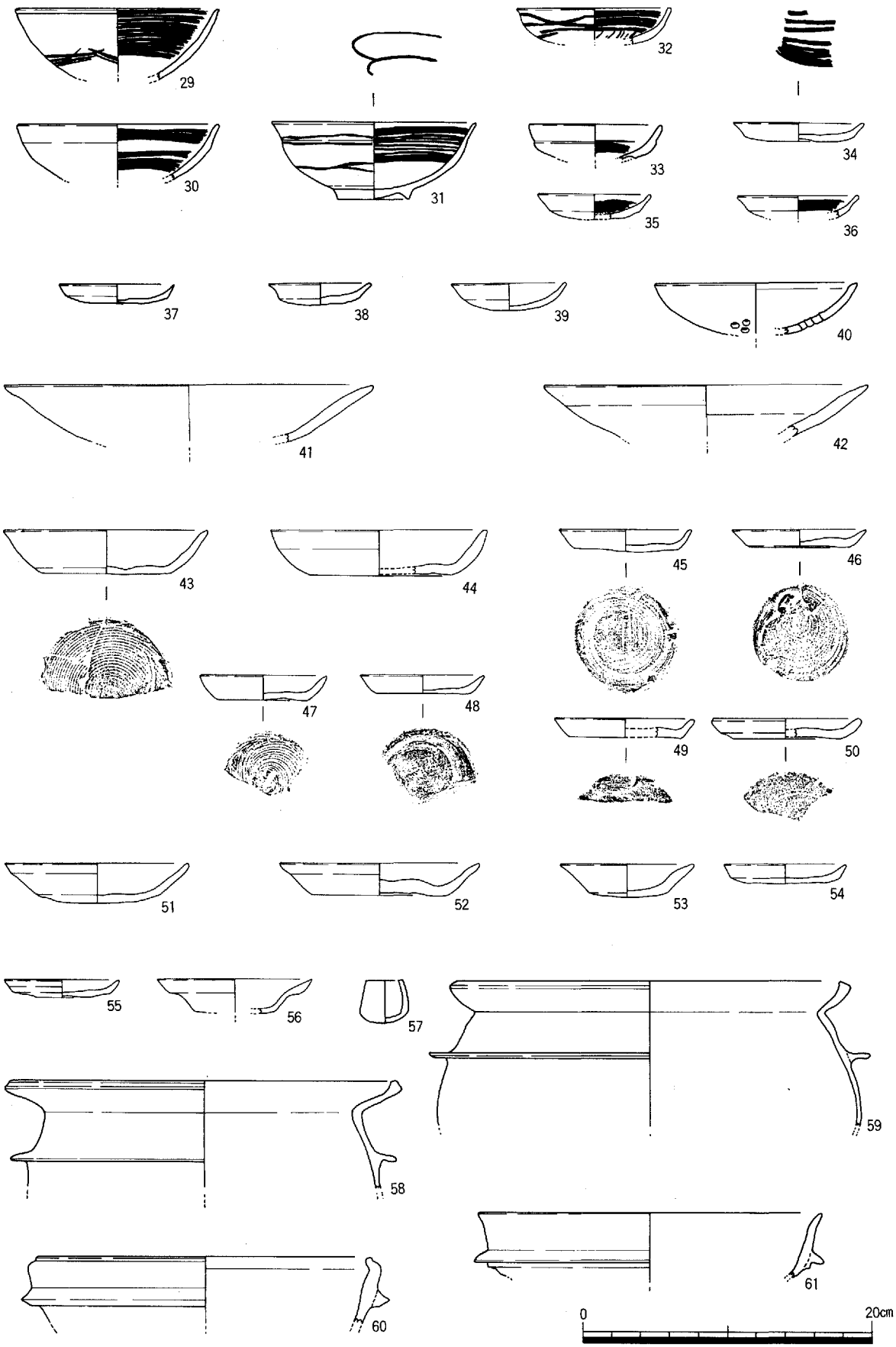

29
32
30
31
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
20cm

図 3

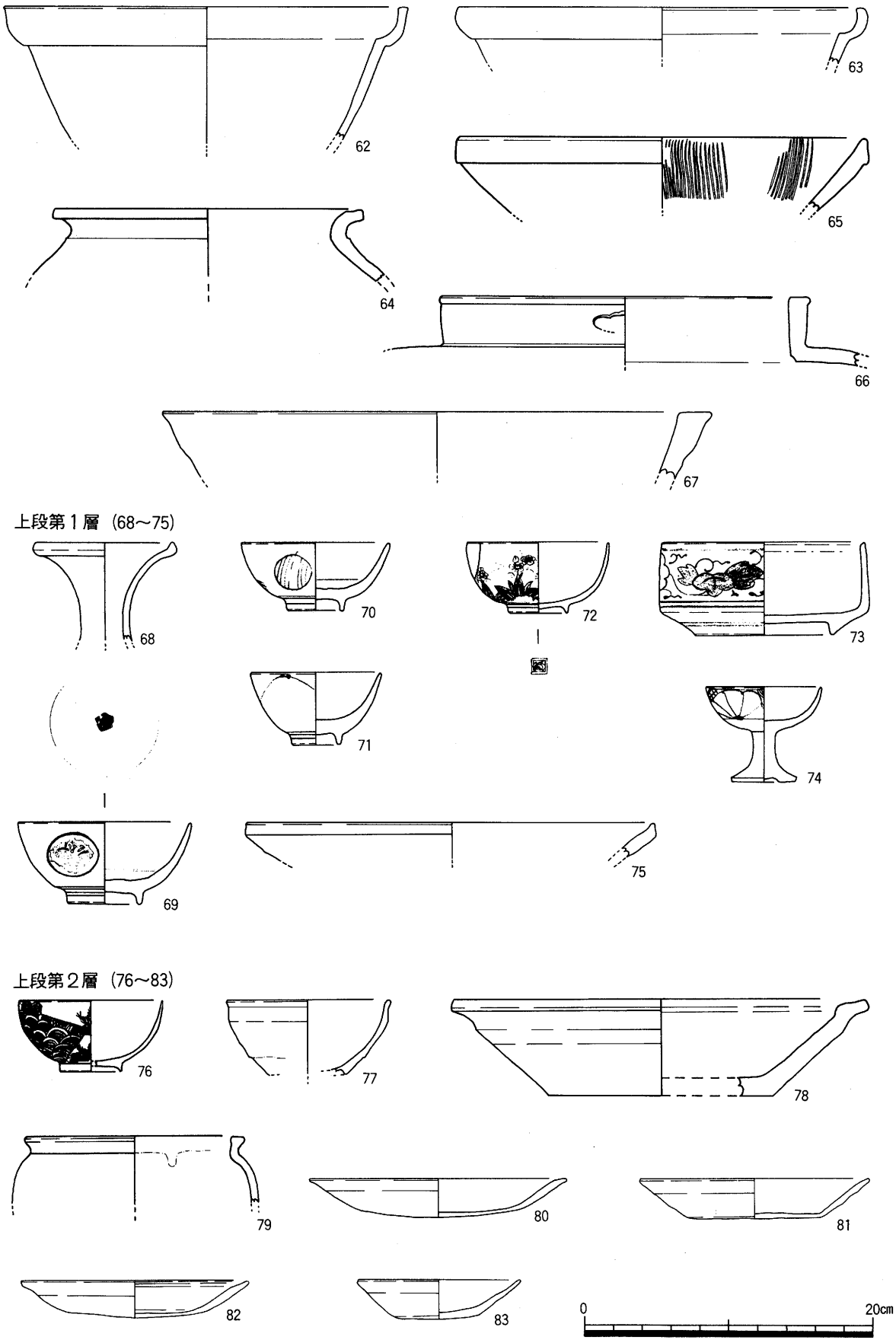
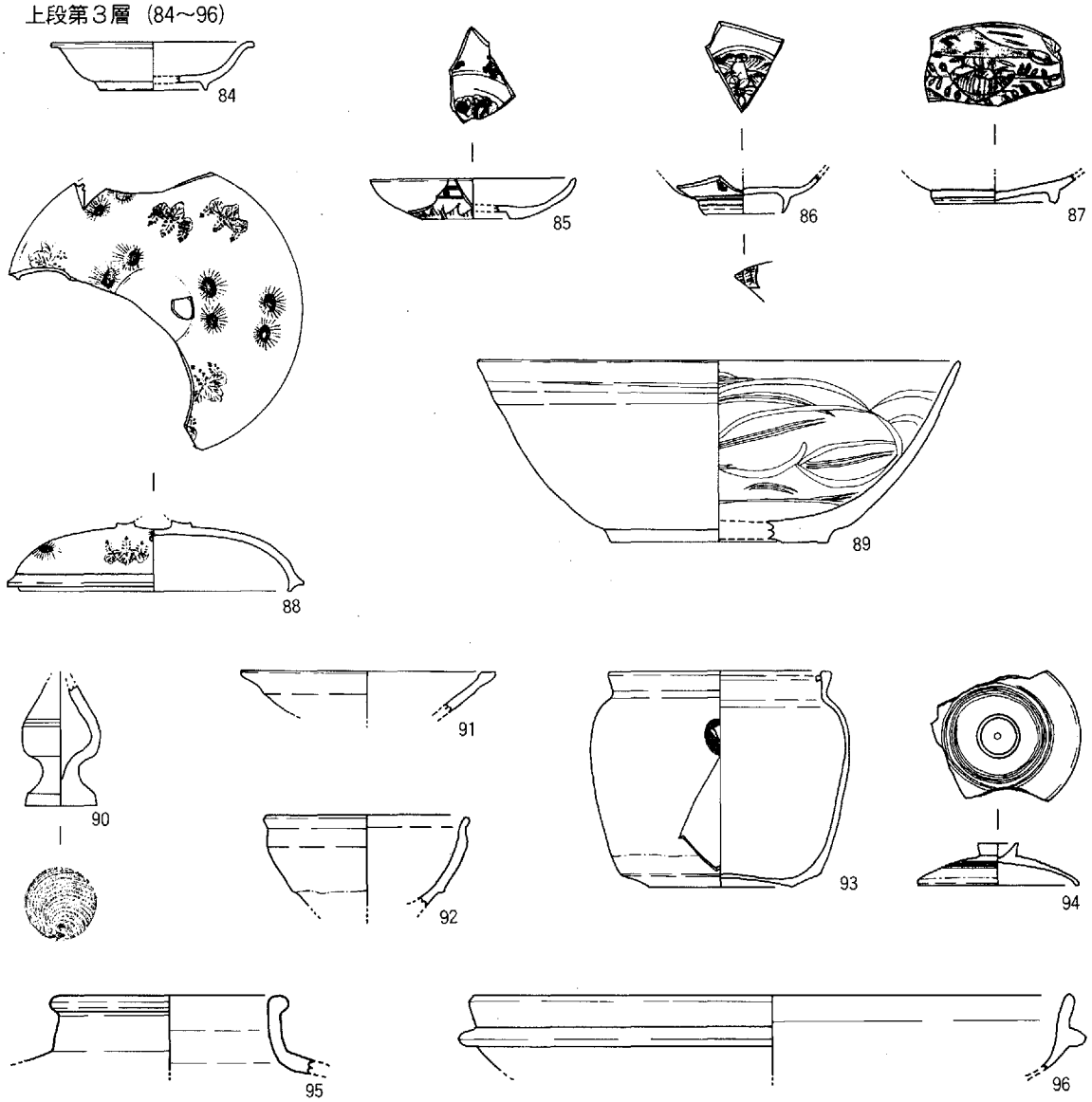

62
63
64
65
66
67
上段第１層（68～75）
68
69
70
71
72
73
74
75
上段第２層（76～83）
76
77
78
79
80
81
82
83
0
20cm

図4

上段第3層（84～96）



上段第4層（97～130）

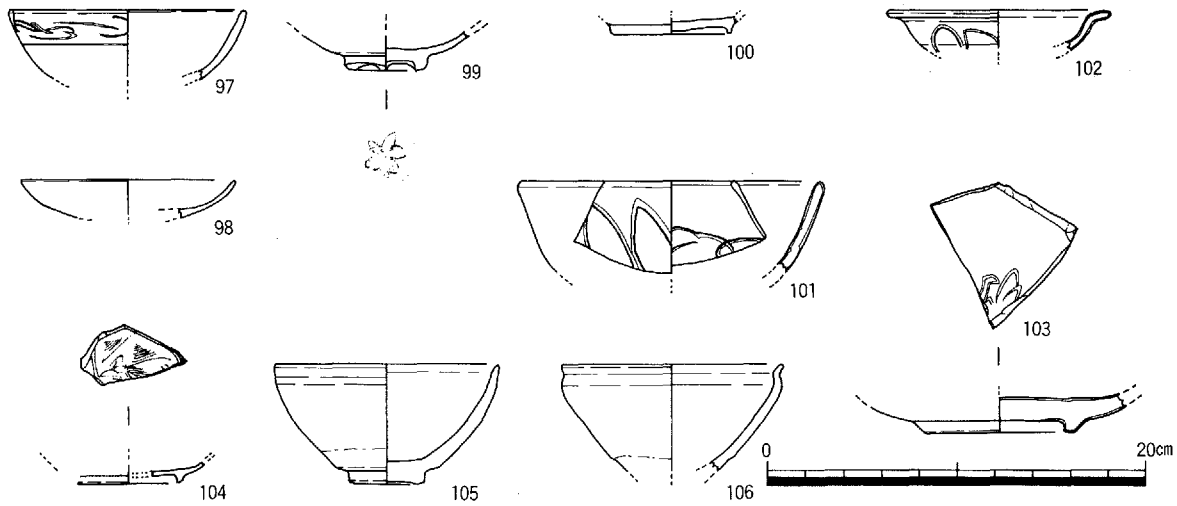


図5

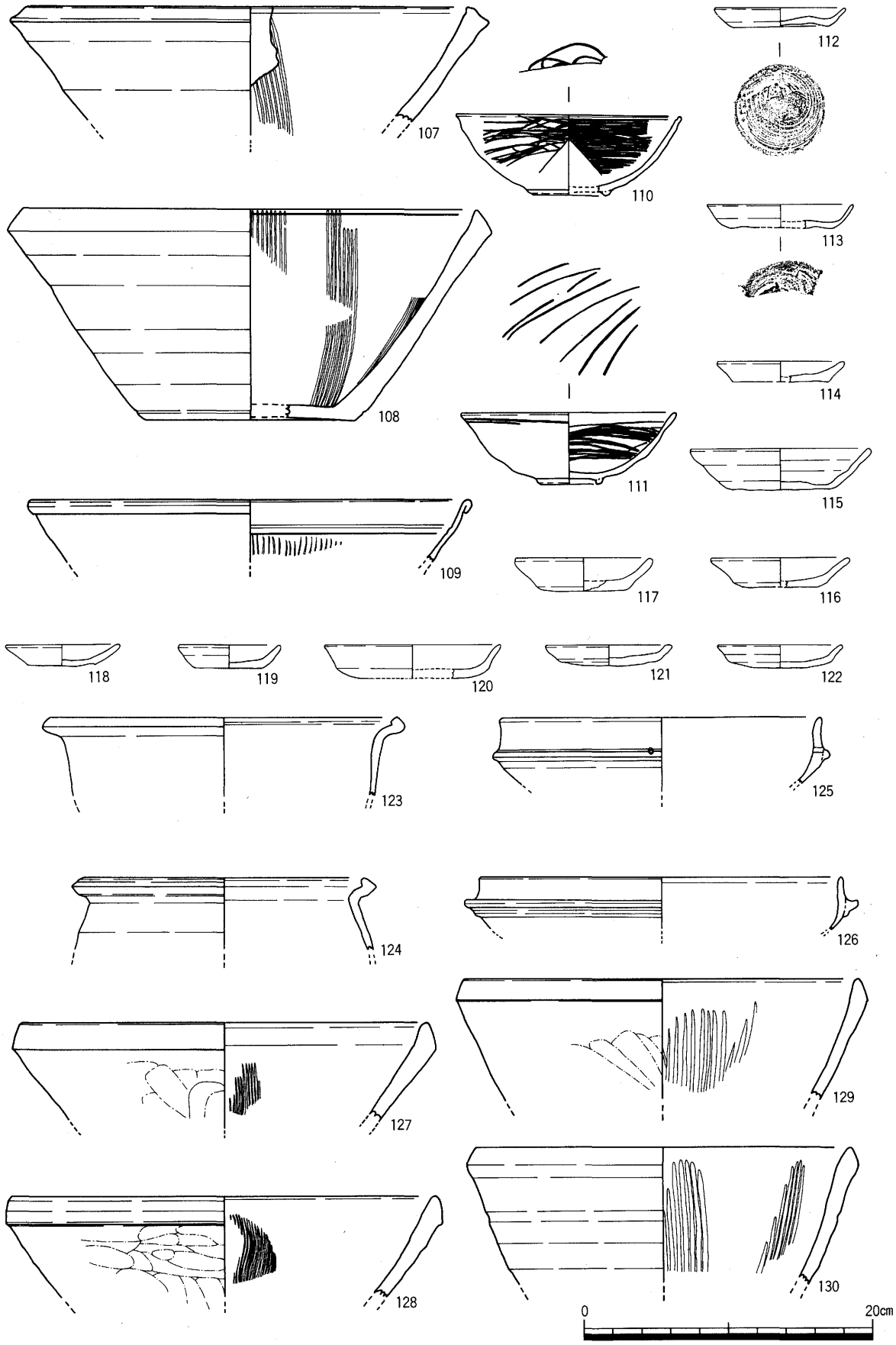

107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0
20cm

図 6

上段整地１層（131～166）

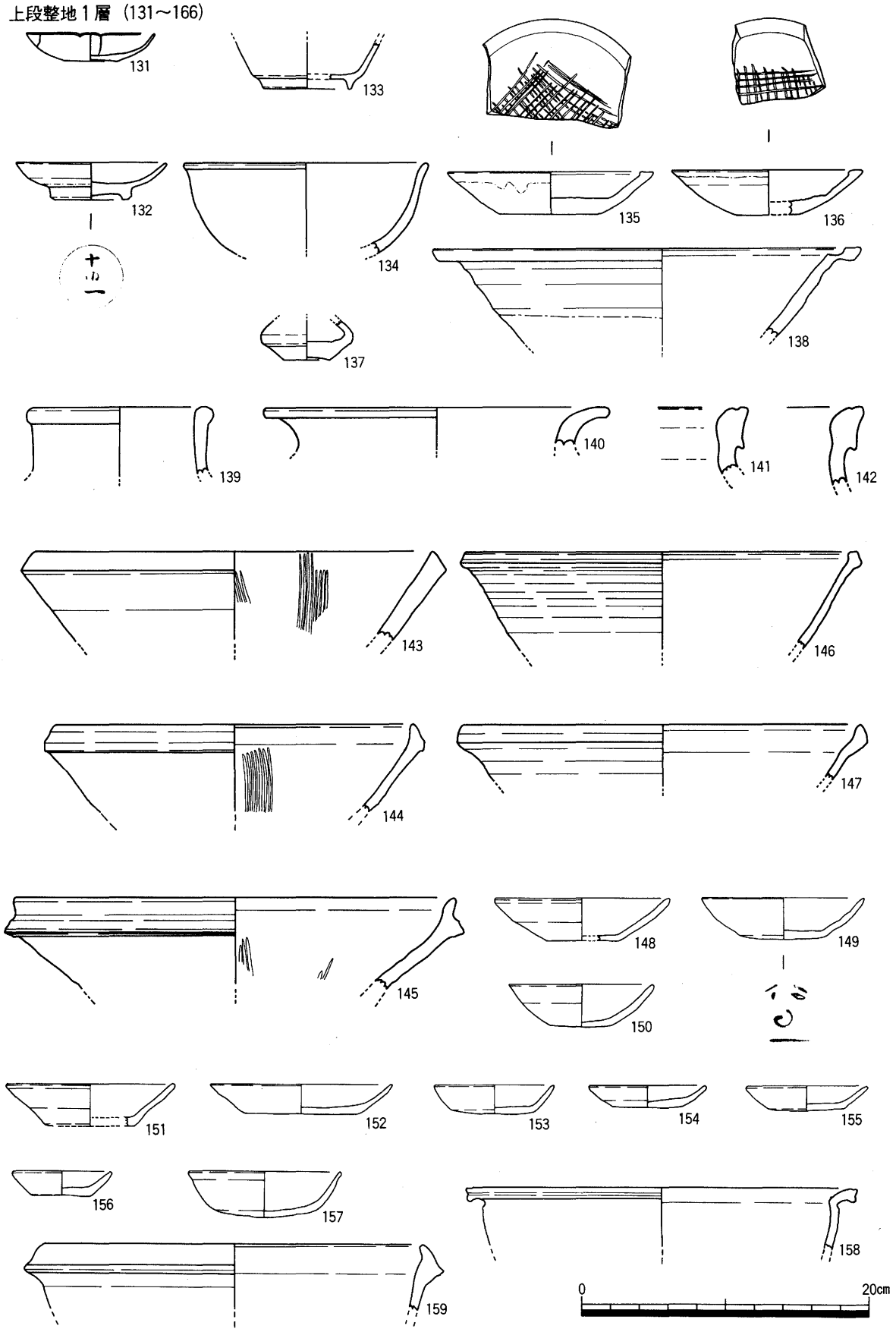


図7

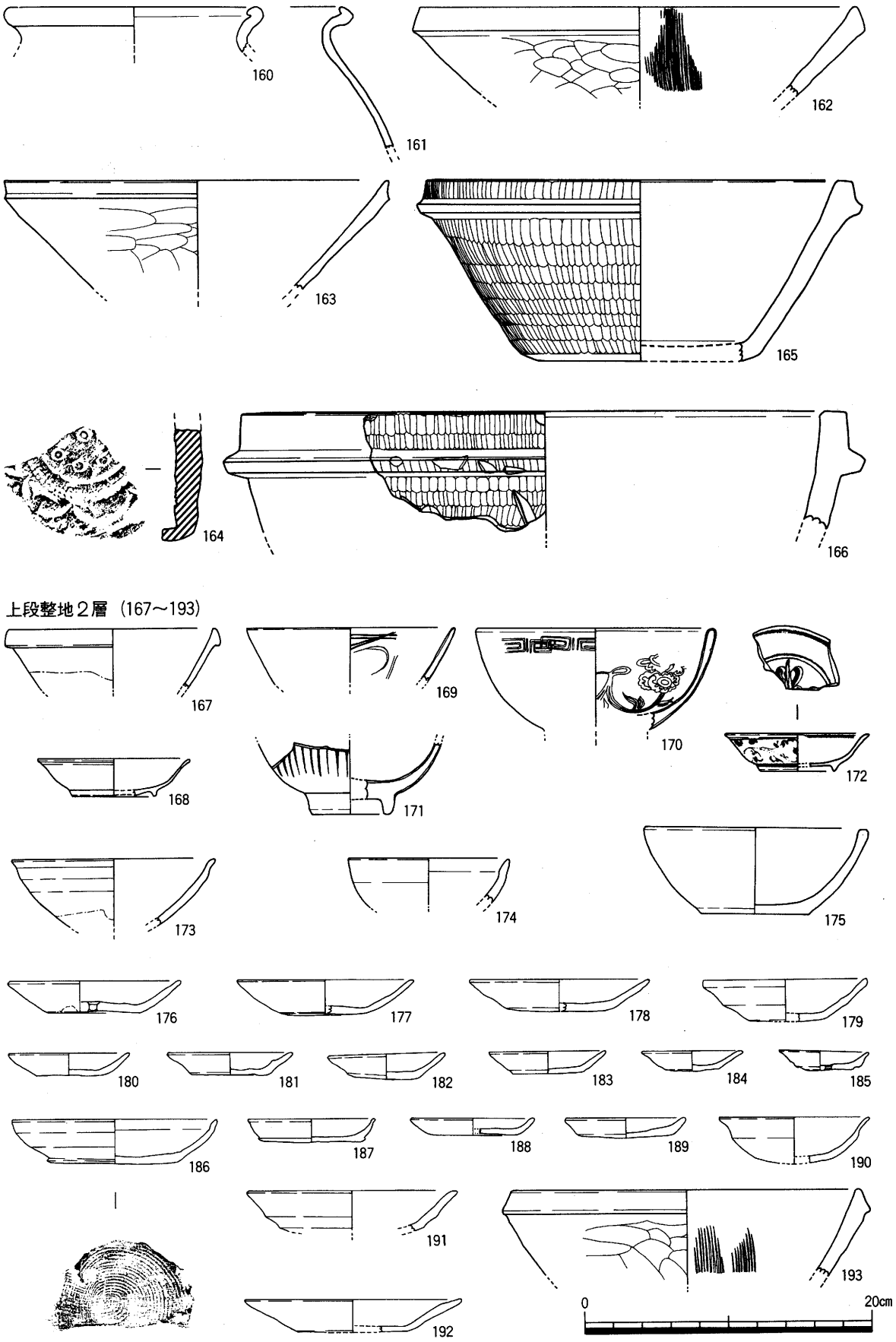
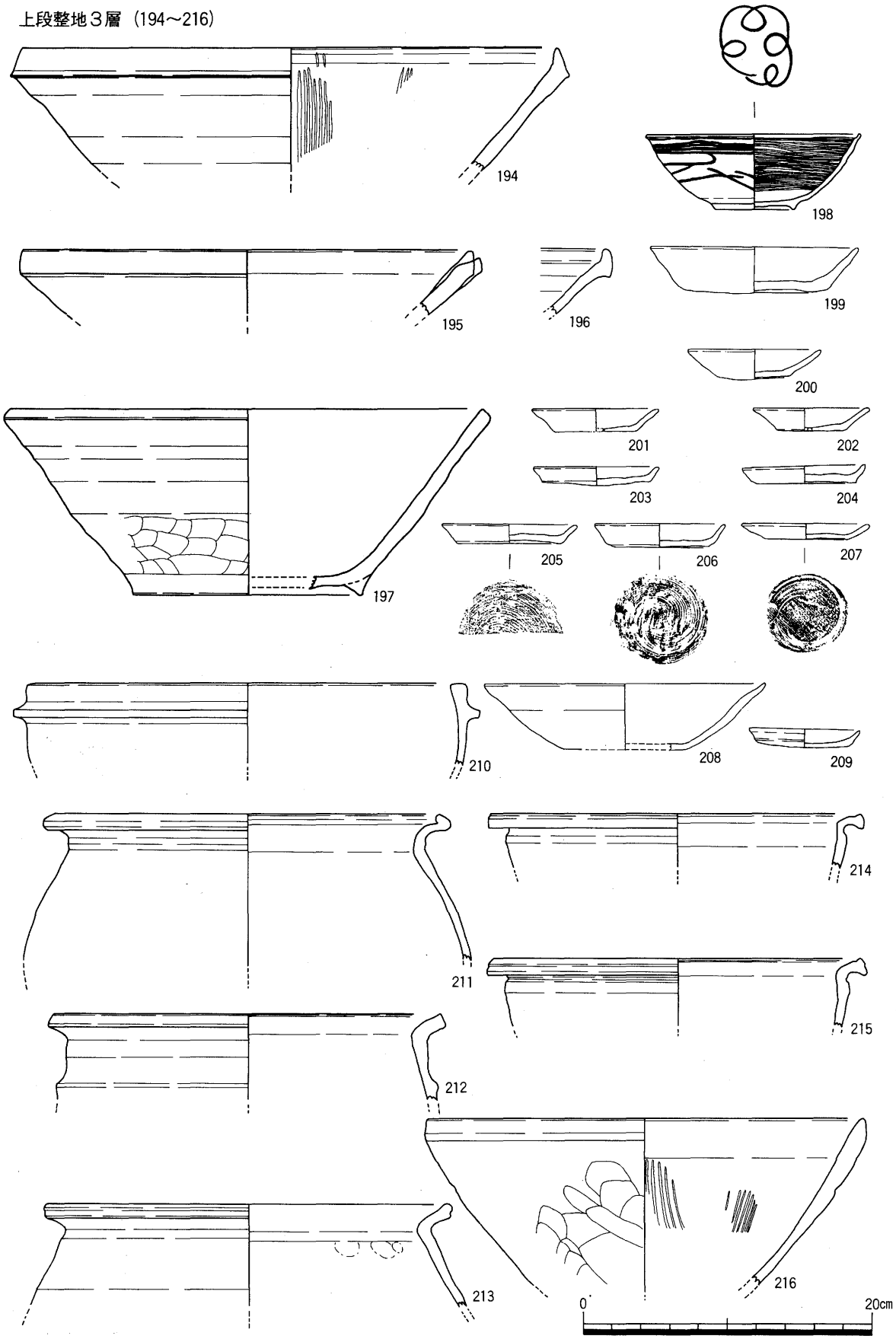

160
161
162
163
165
164
166
上段整地2層（167～193）
167
169
170
172
168
171
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
193
192
0
20cm

図 8

上段整地３層（194～216）



上段整地４層（217～259）

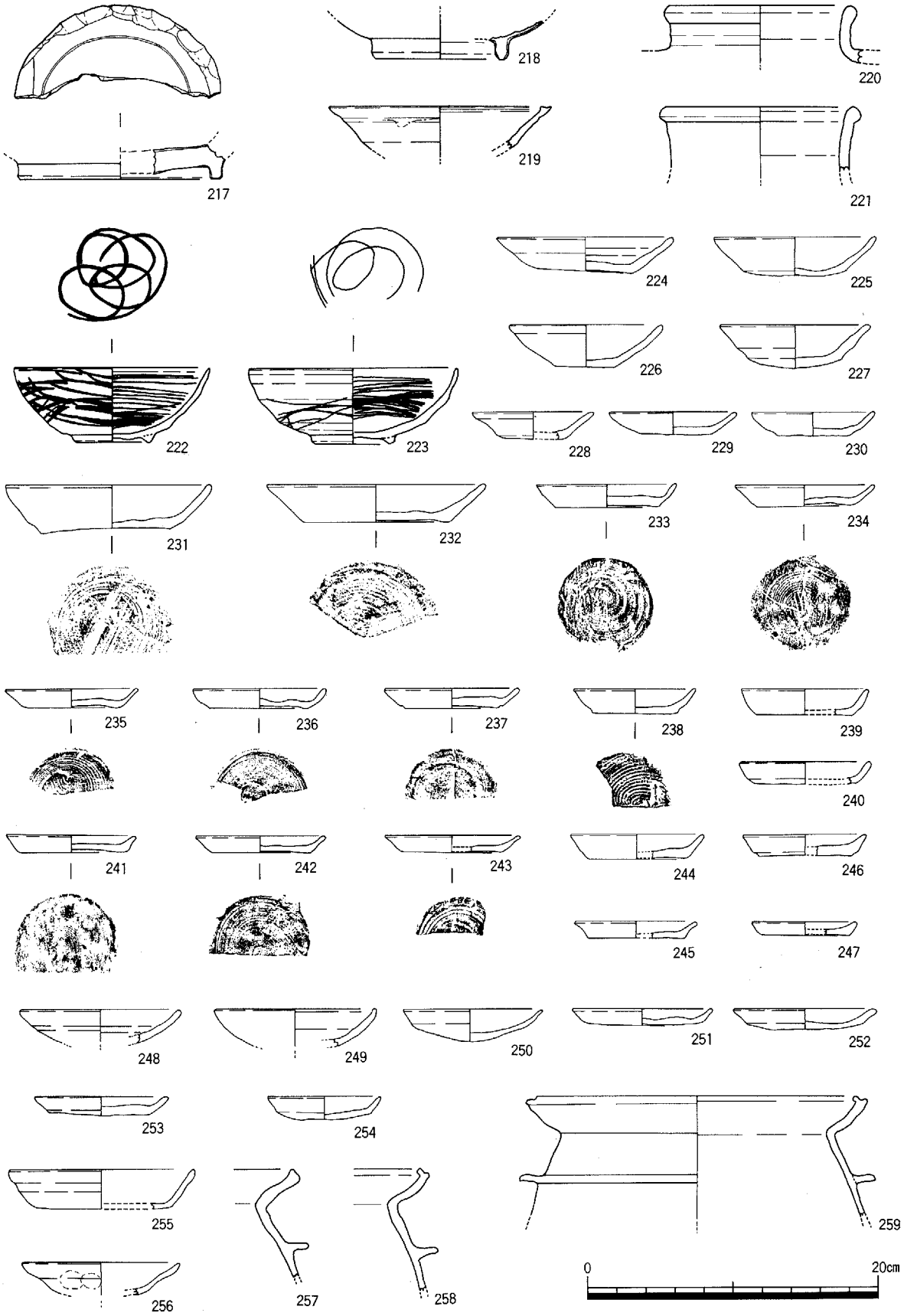
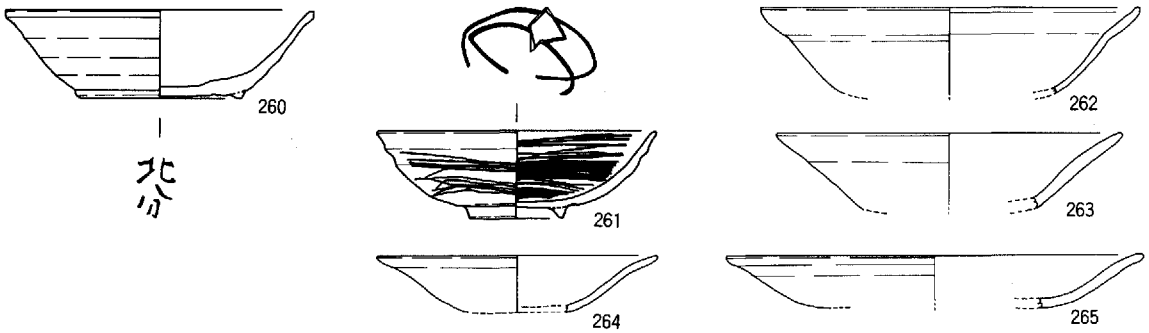


図10

上段整地５層（260～266）



上段整地６層（267～294）

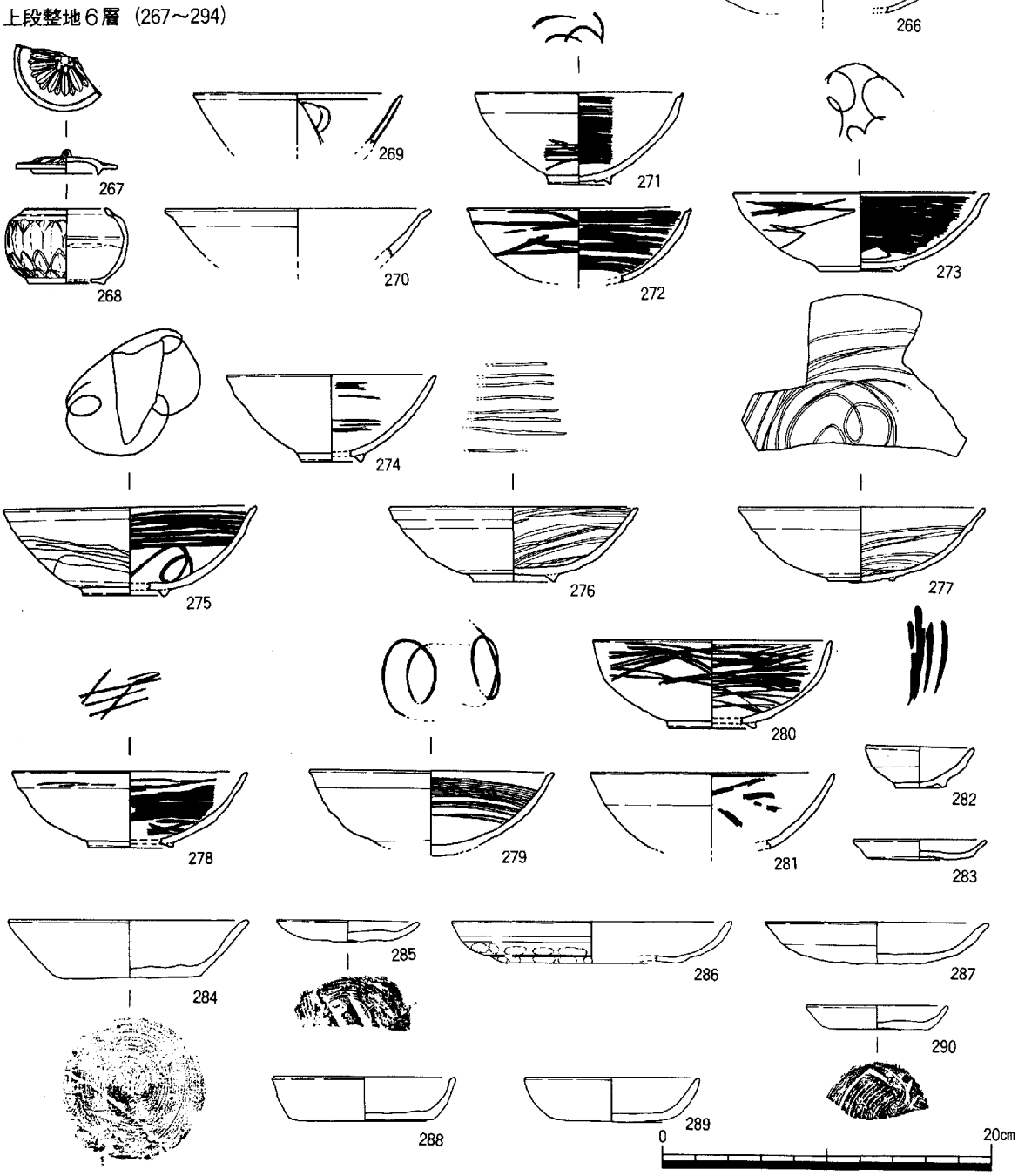
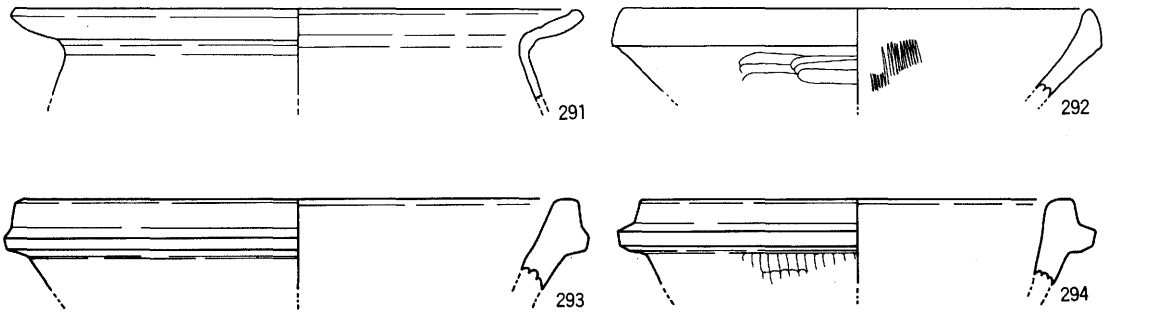


図11



上段整地７層（295～355）

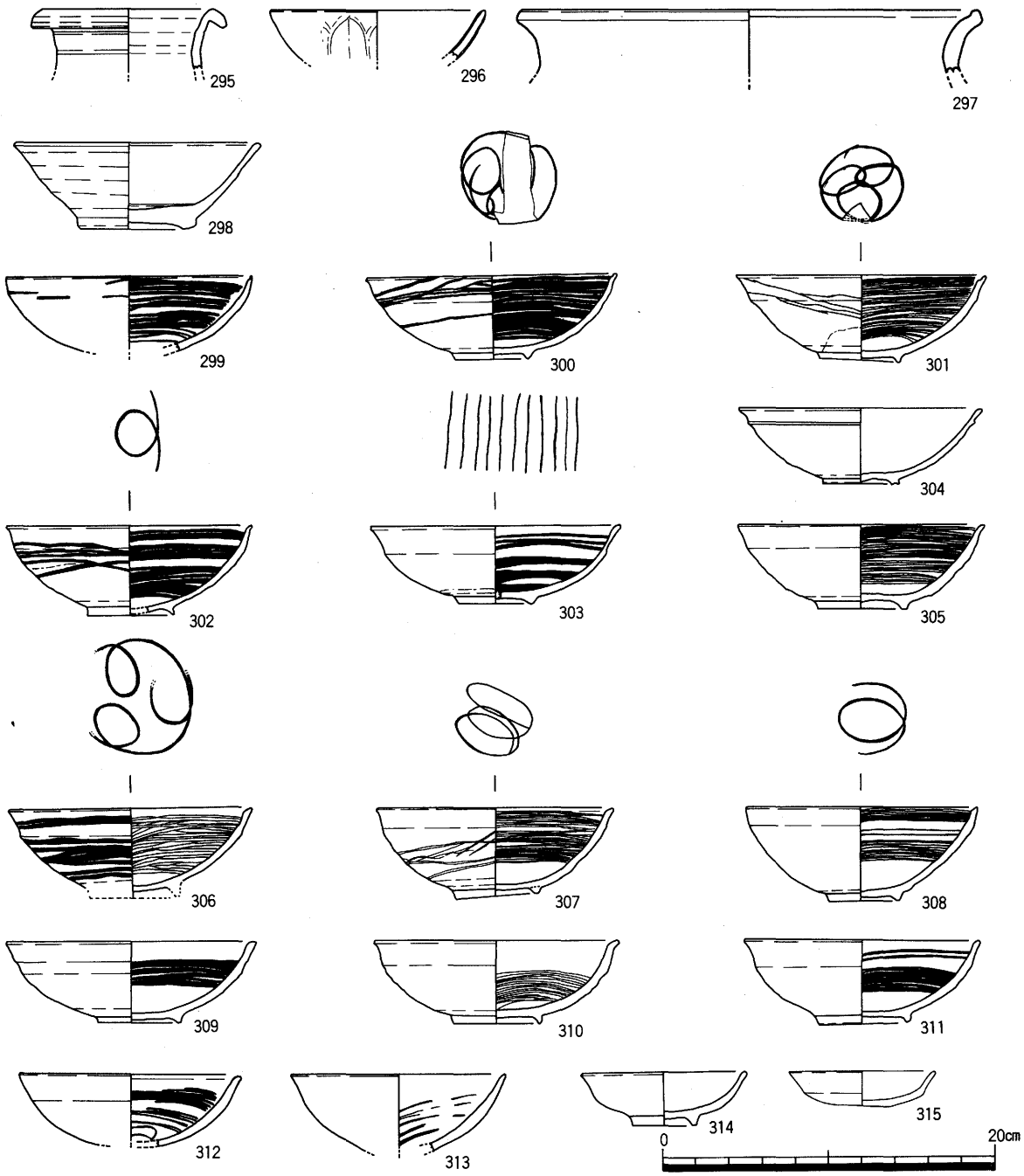
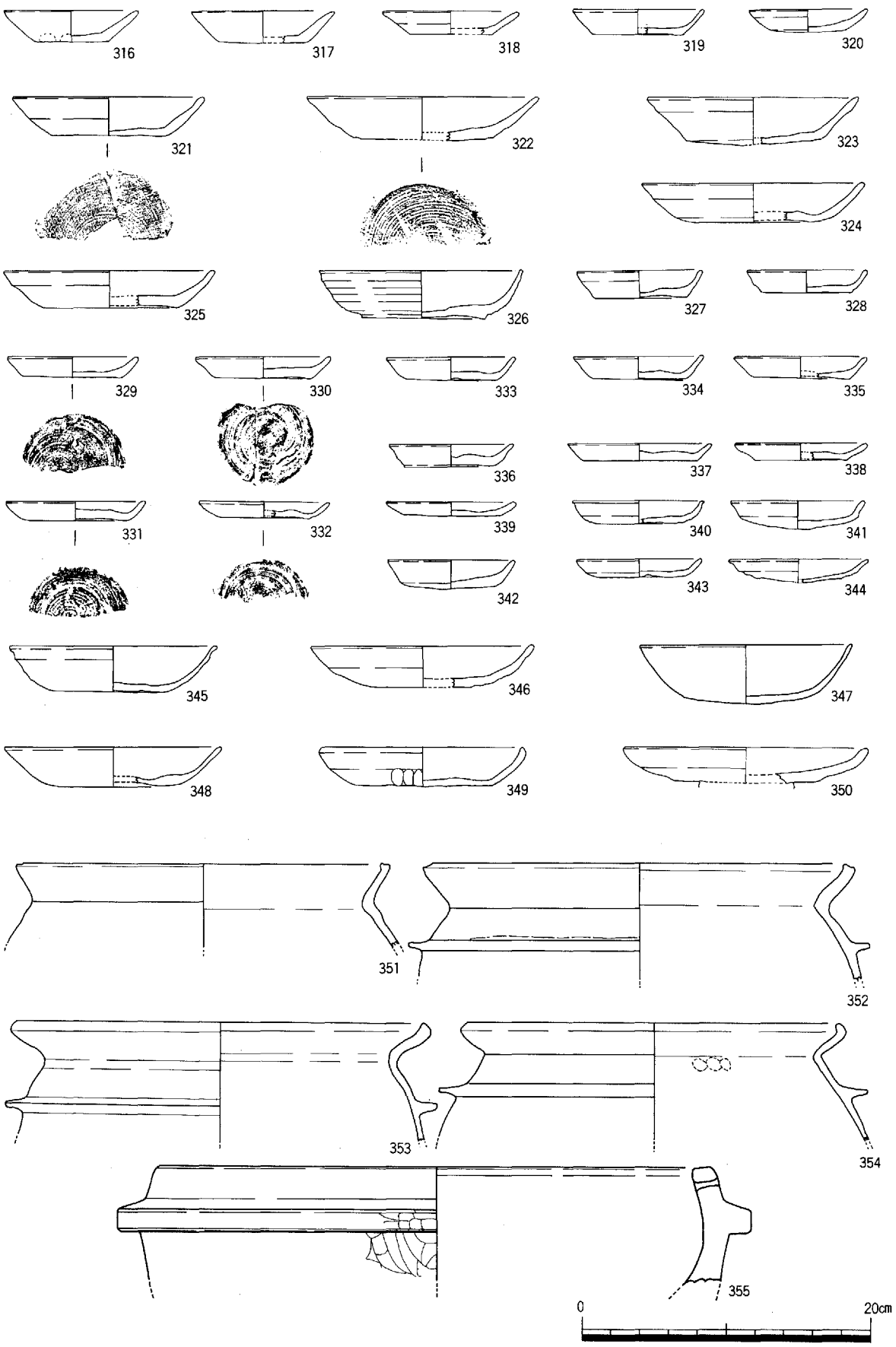


図12


316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
333
334
335
336
337
338
331
332
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
0
20cm

上段整地８層（356～361）

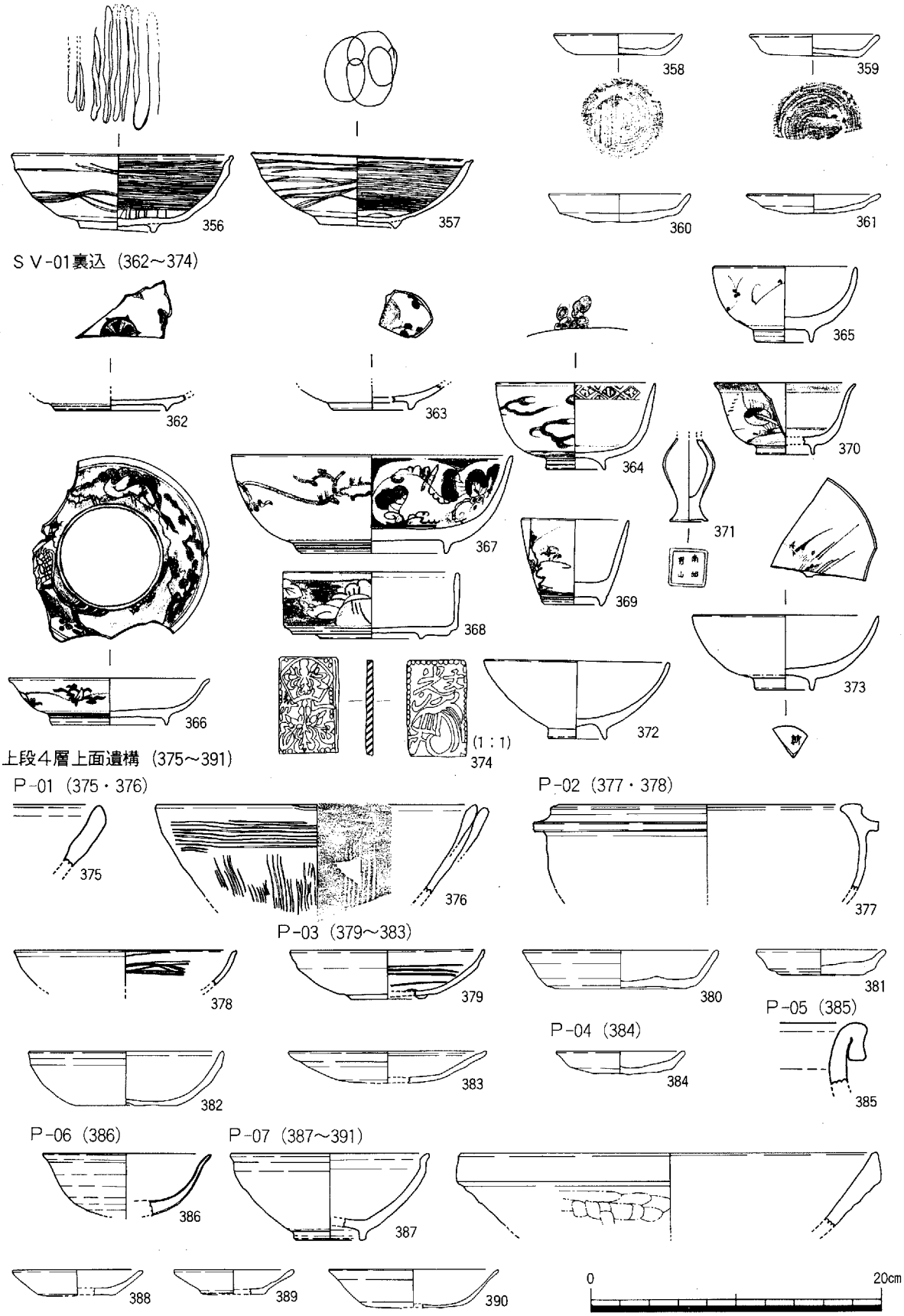


図14

下段表土（392～455）

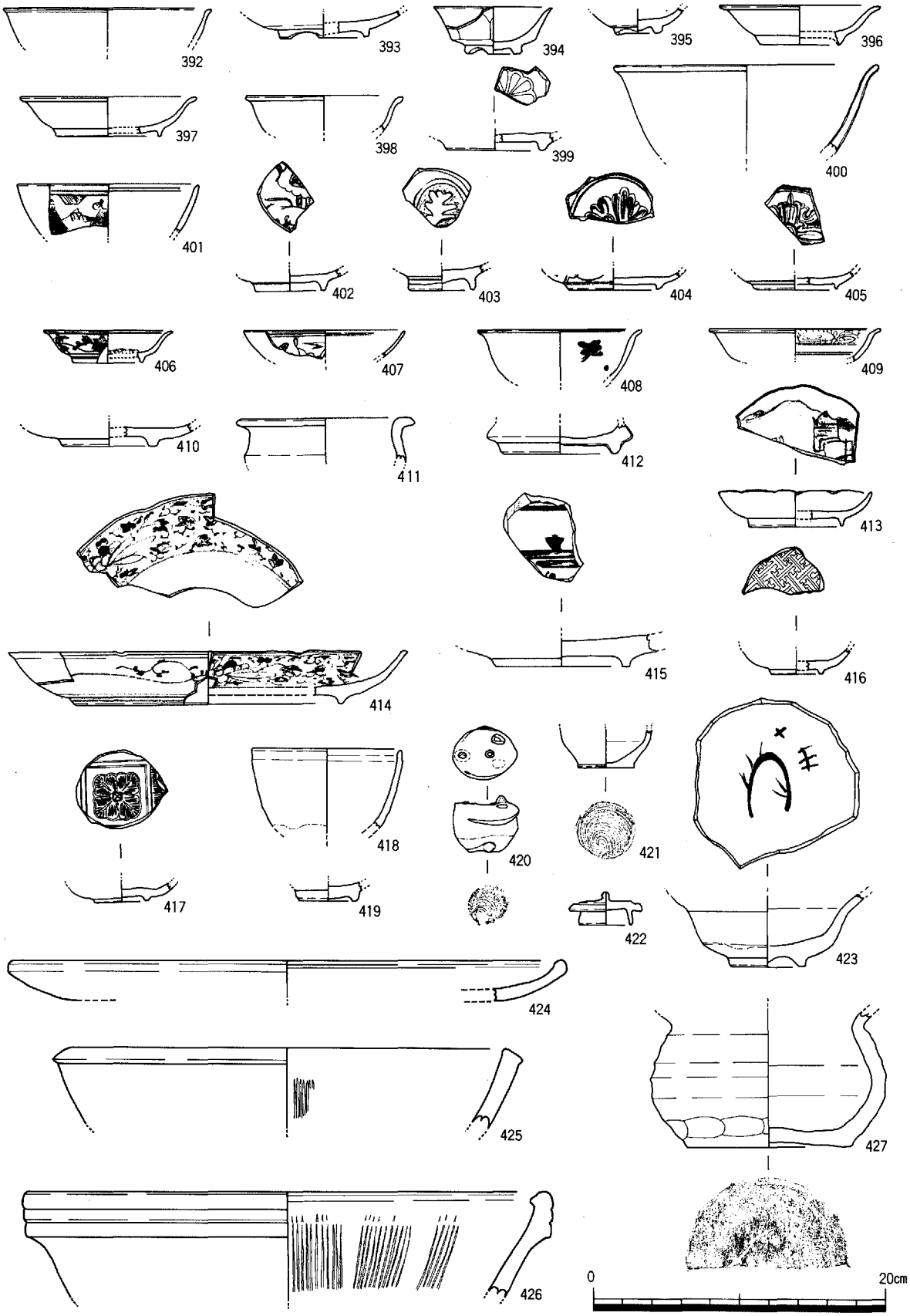


図15

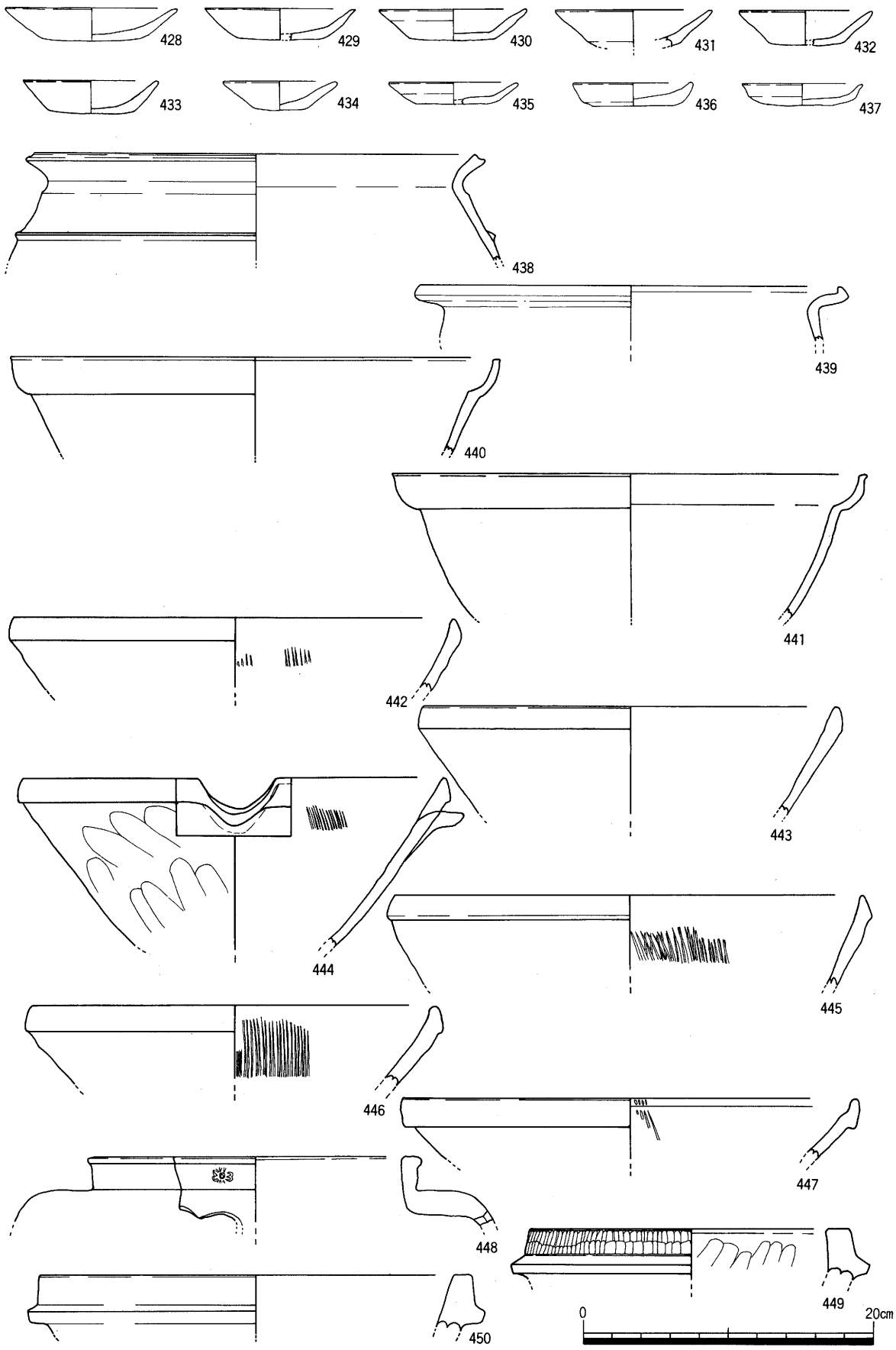
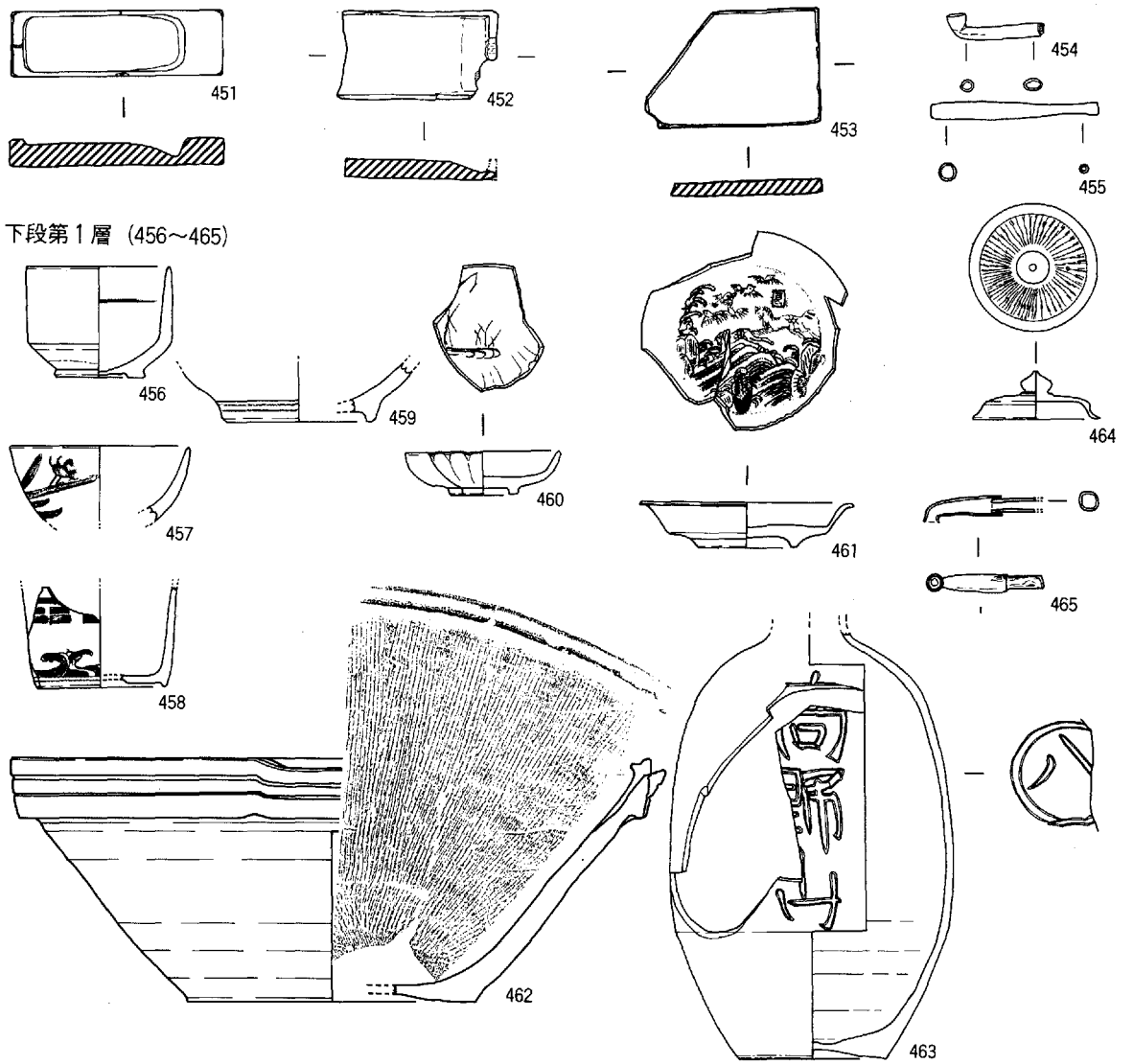

428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
0
20cm

図16



下段第２層（466～487）

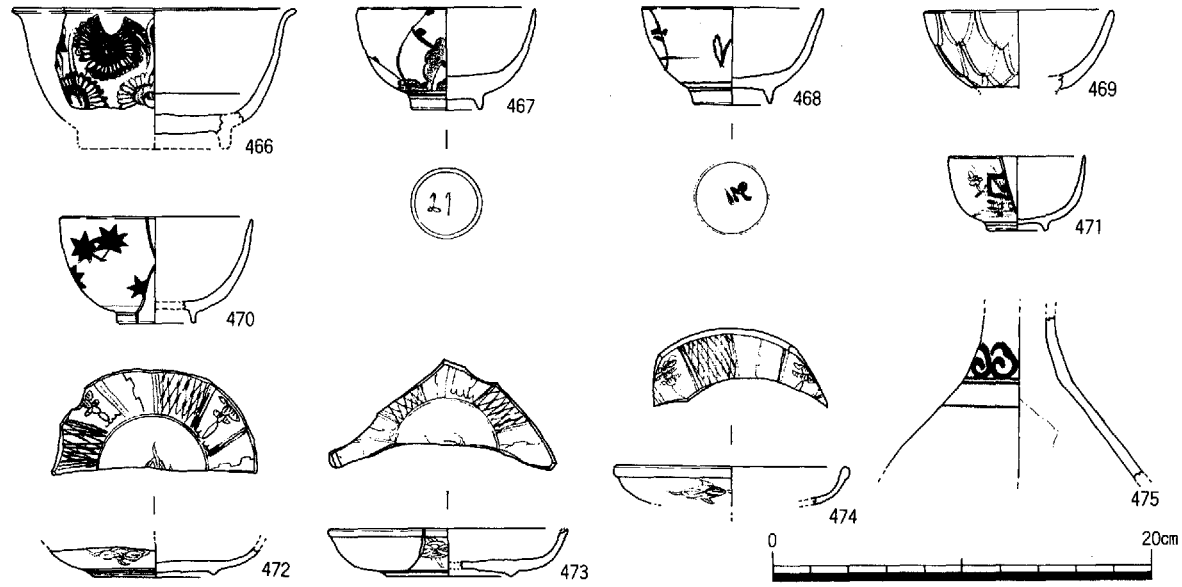
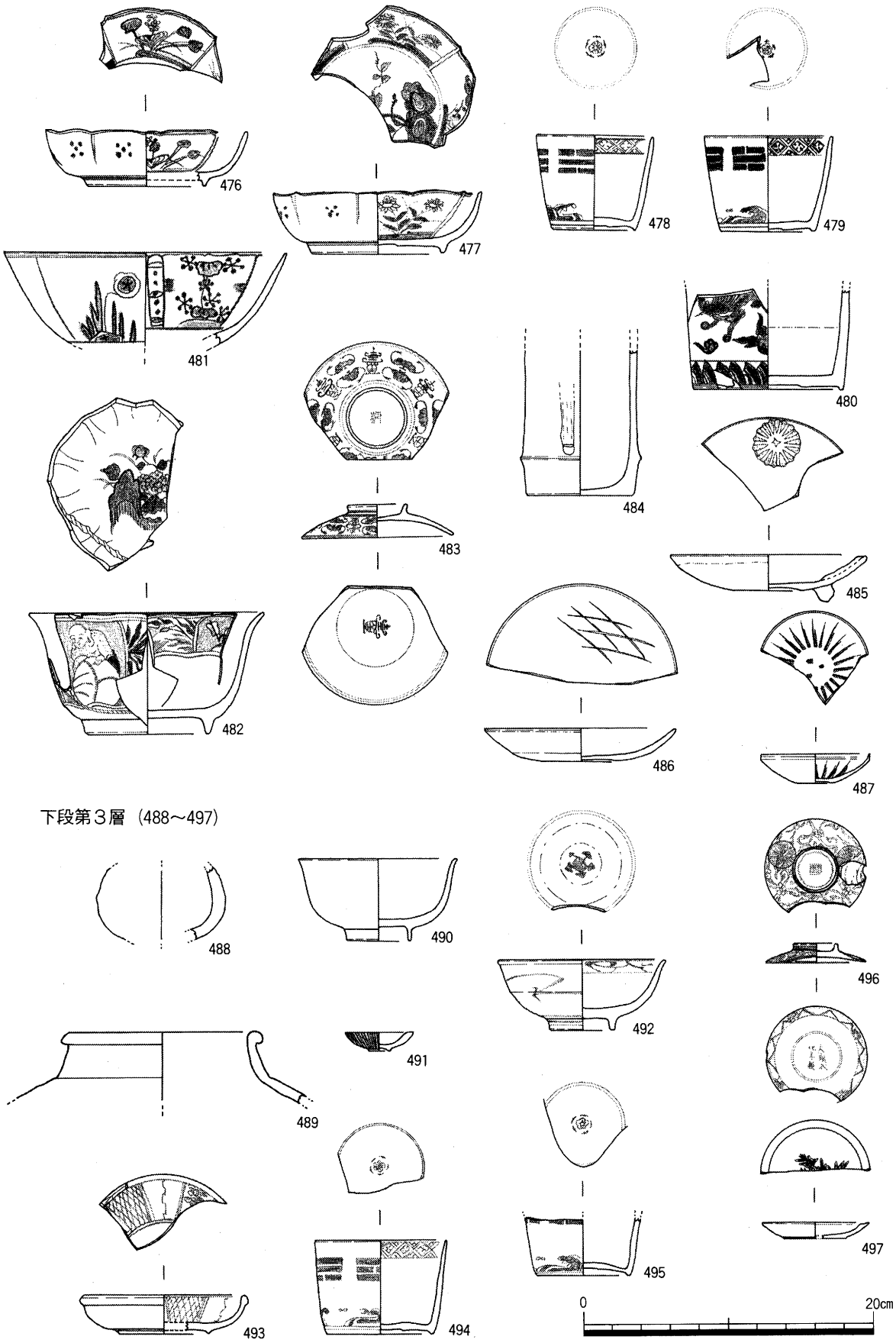


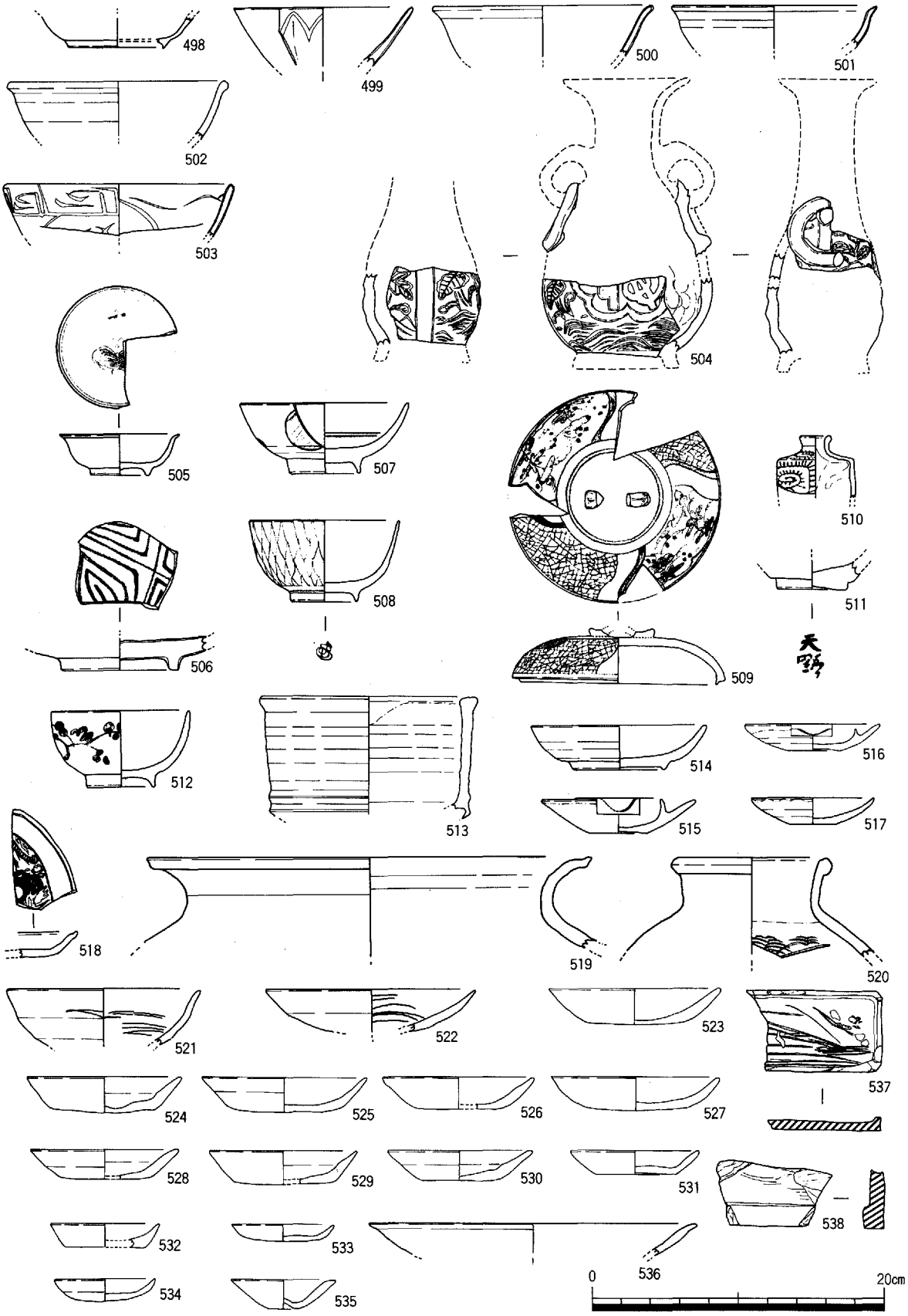
図17



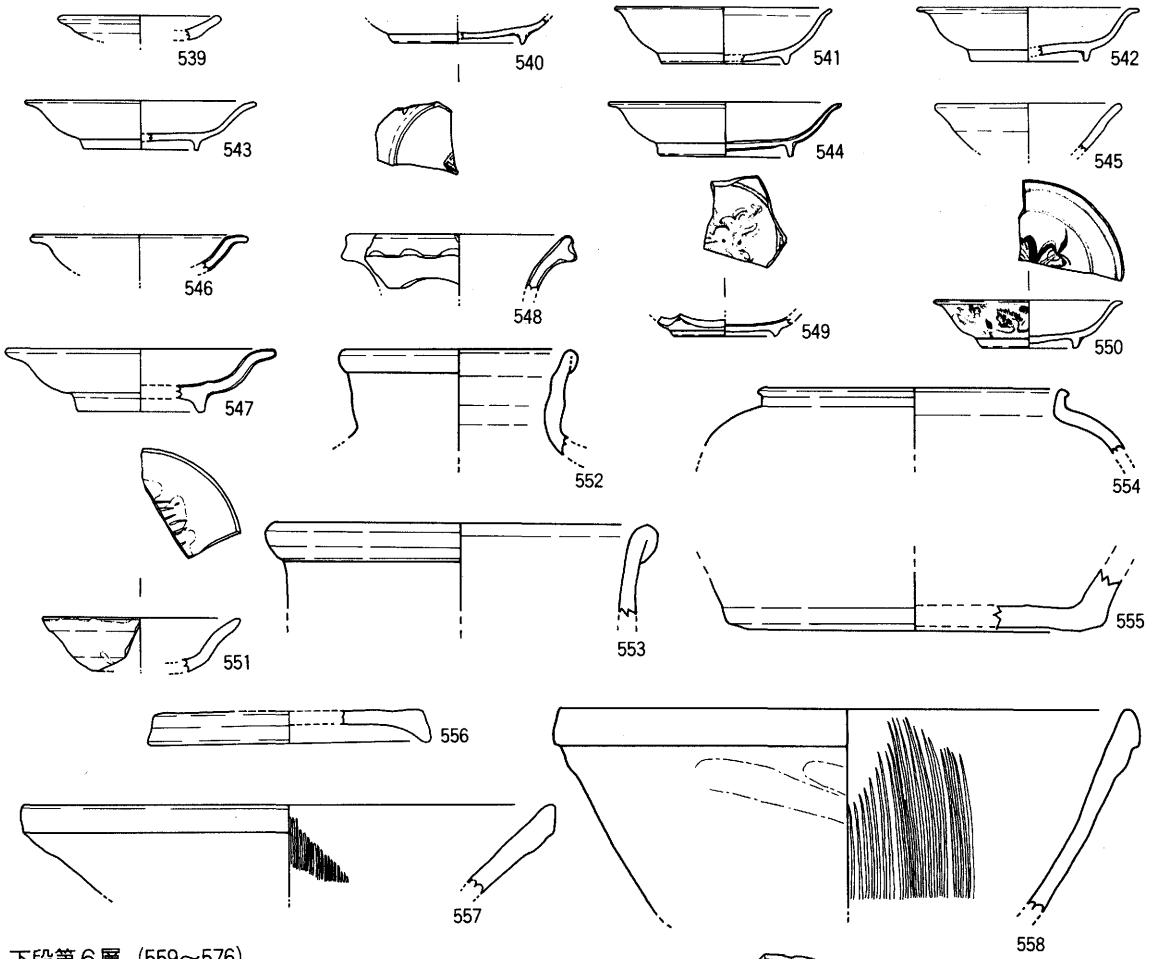
下段第３層（488～497）

図18

下段第４層（498～538）



下段第５層（539～558）



下段第６層（559～576）

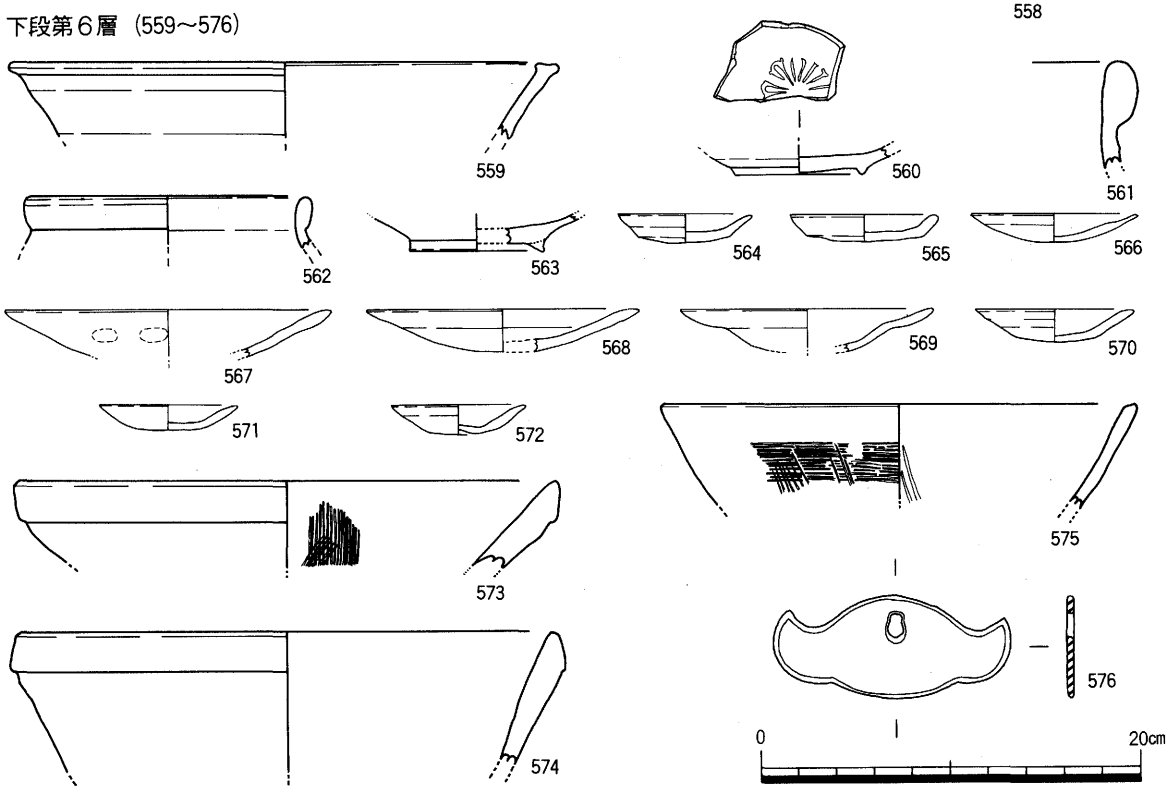
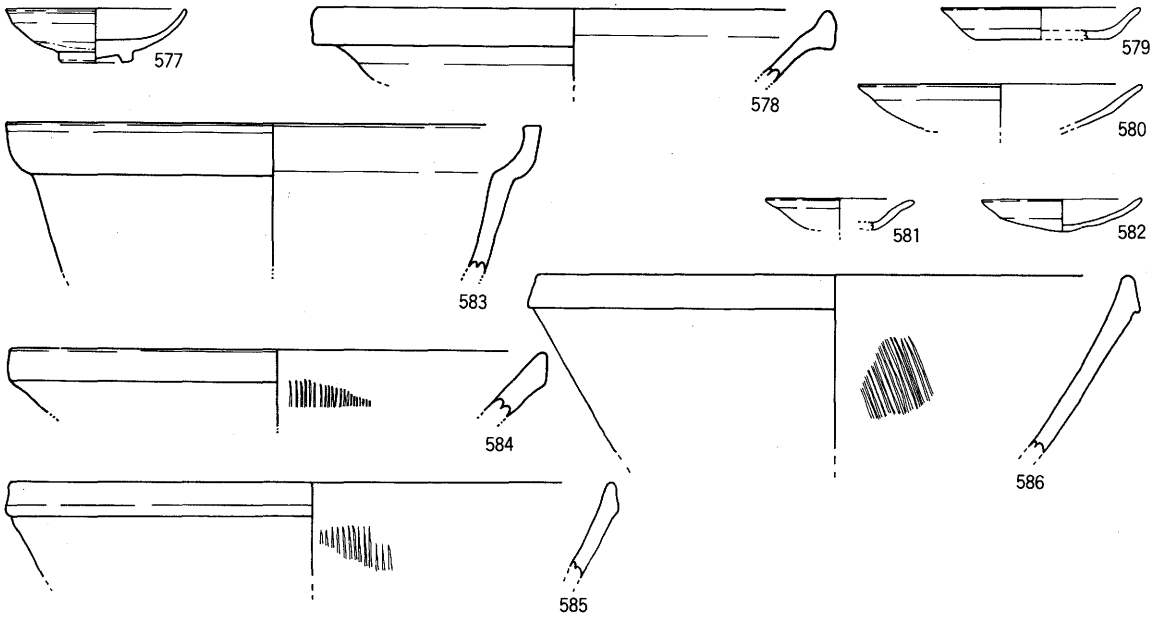
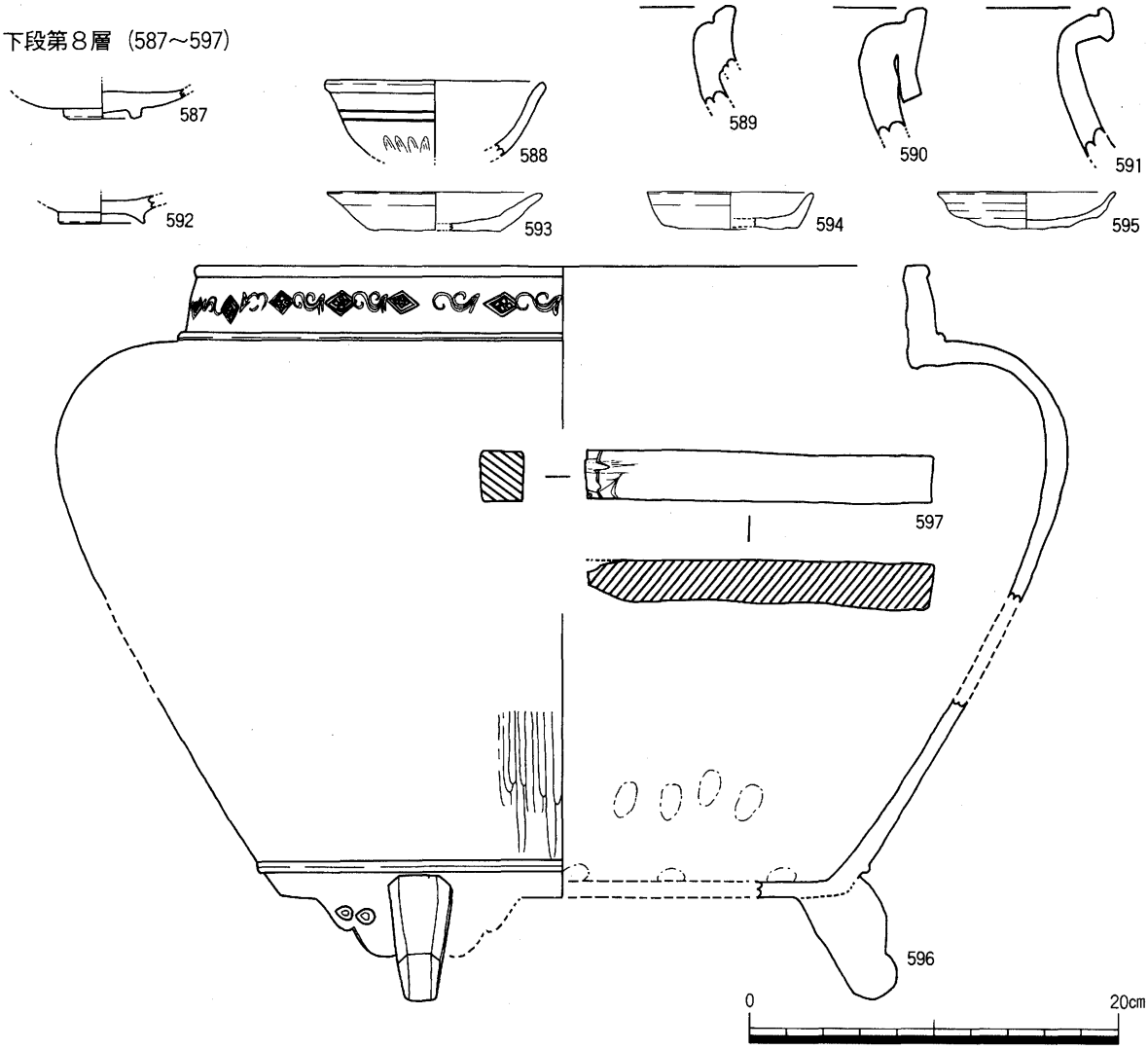


図20

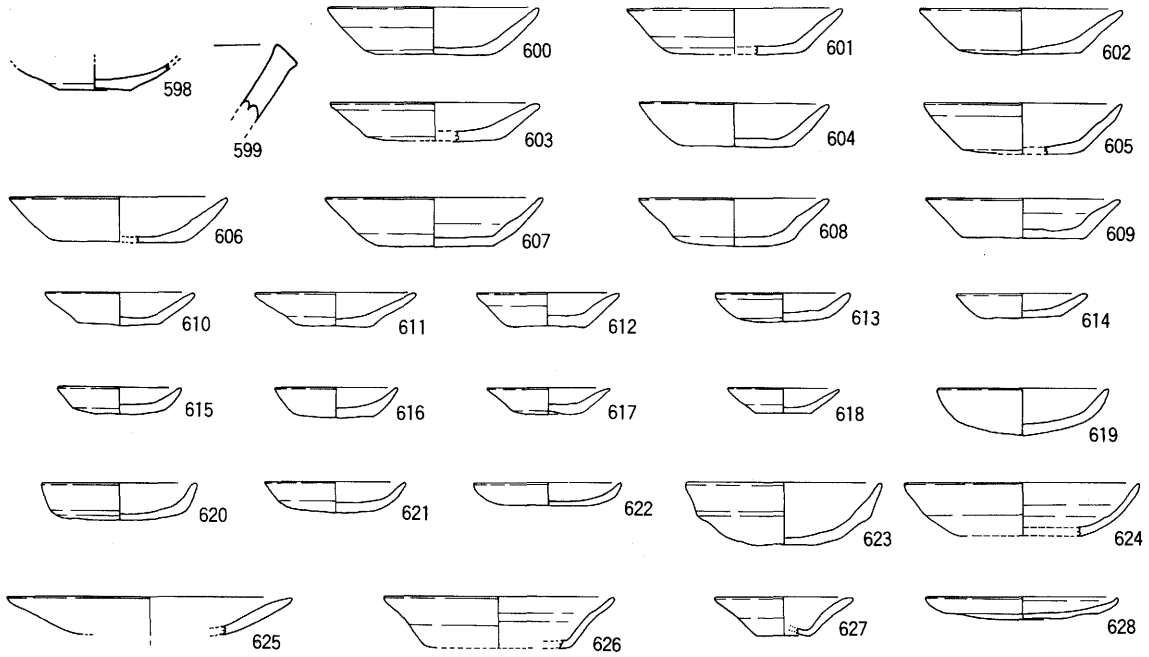
下段第７層（577～586）



下段第８層（587～597）



下段第９層（598～628）



下段第10層（629～656）

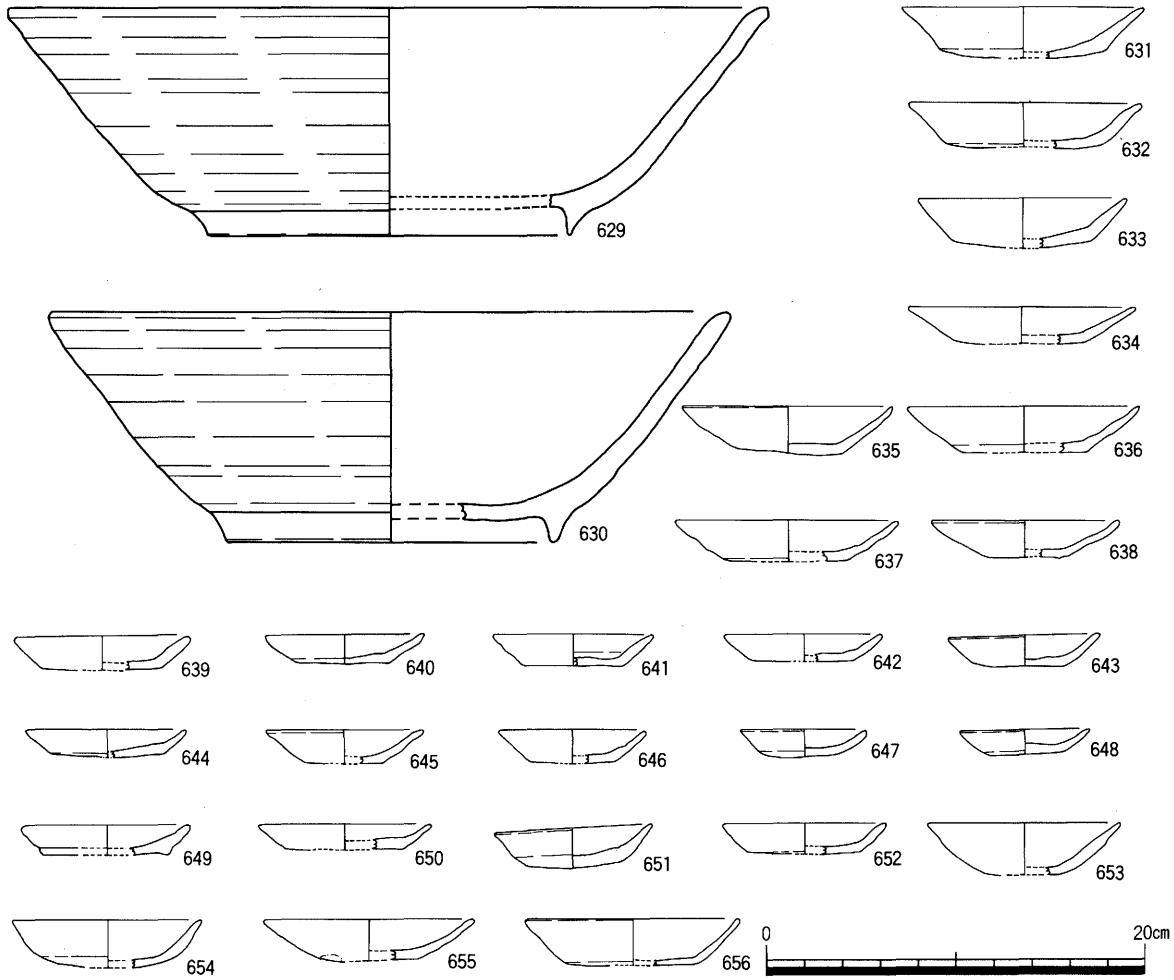


図22

下段第11層（657～667）

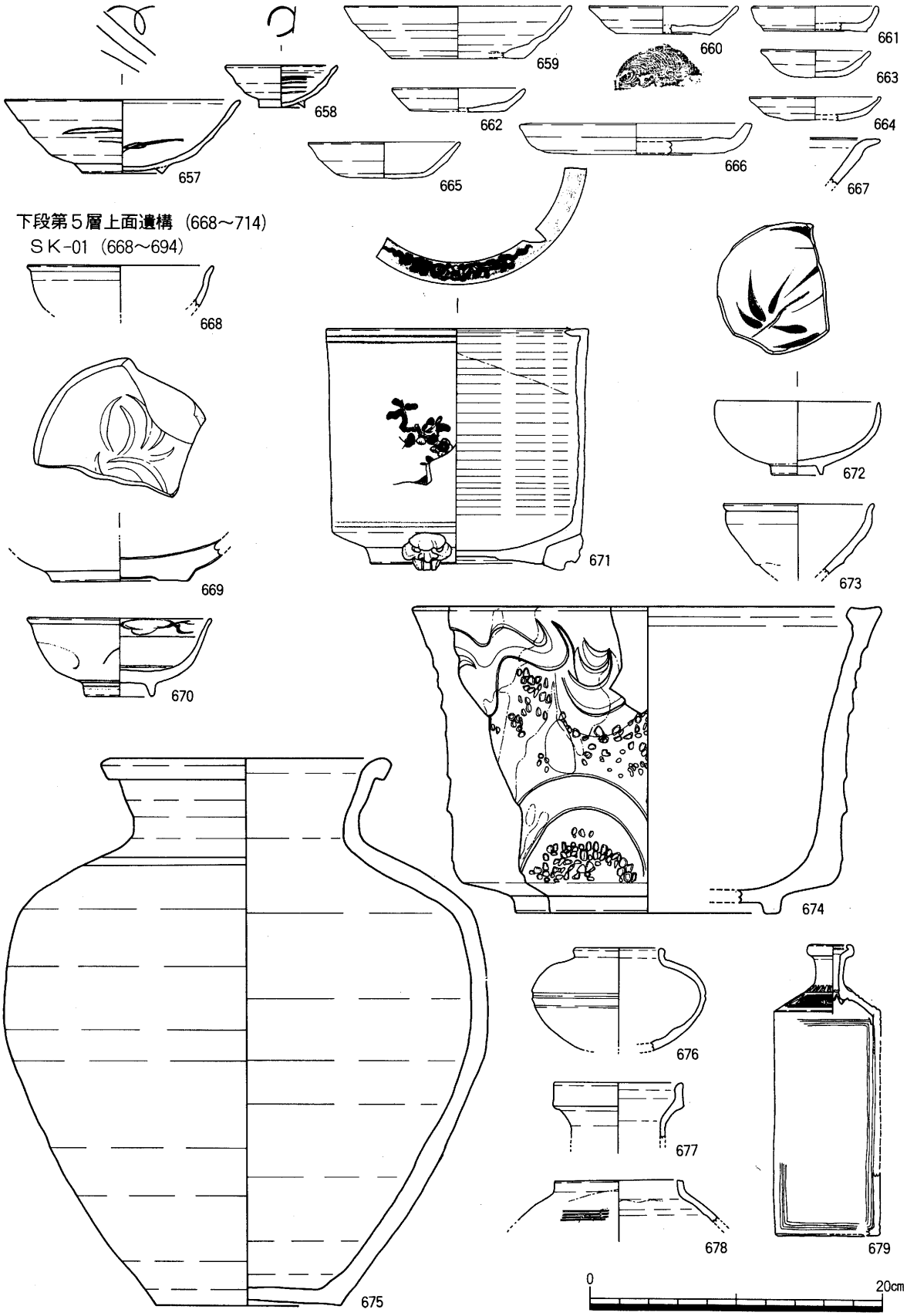


図23

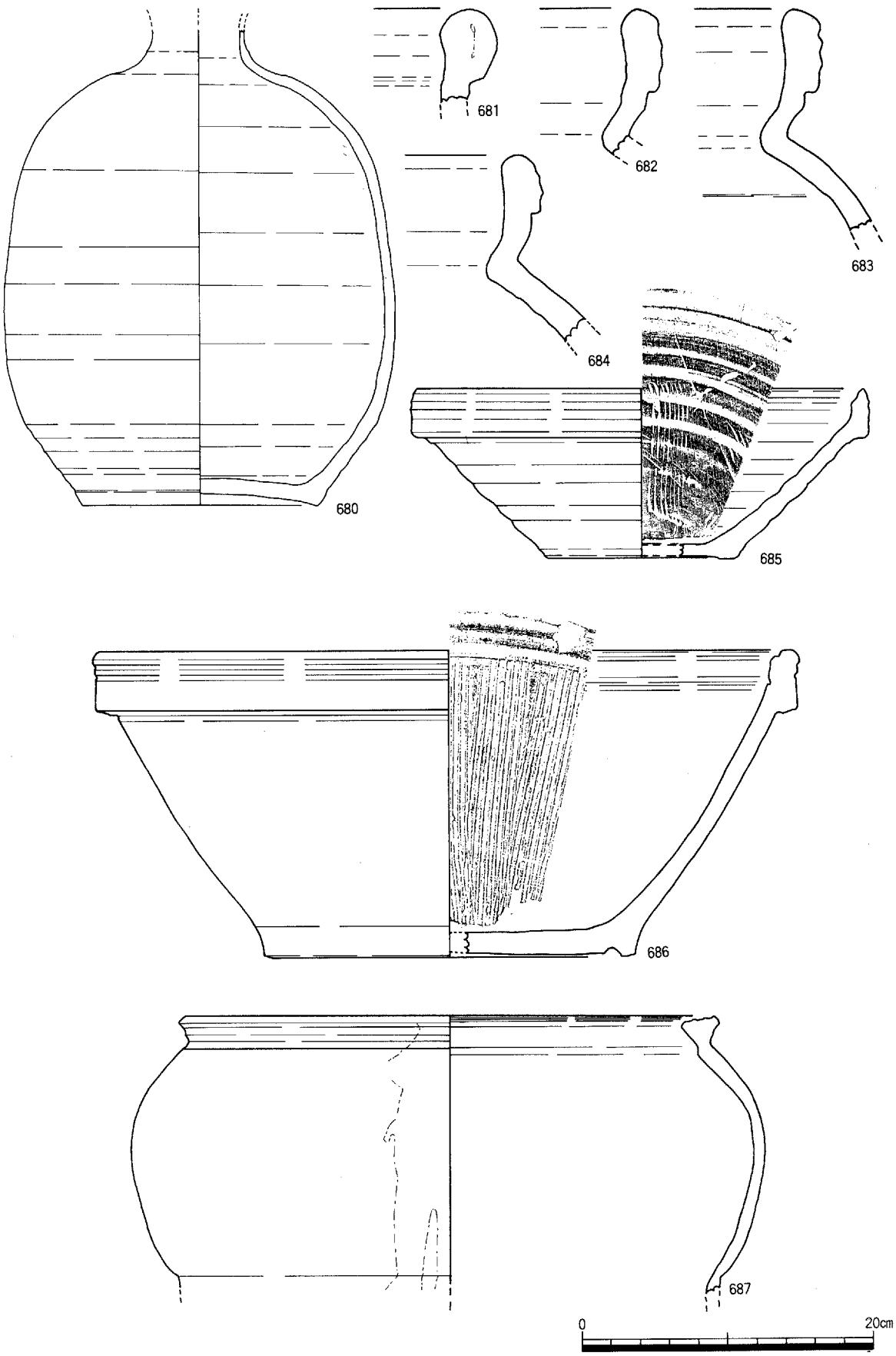
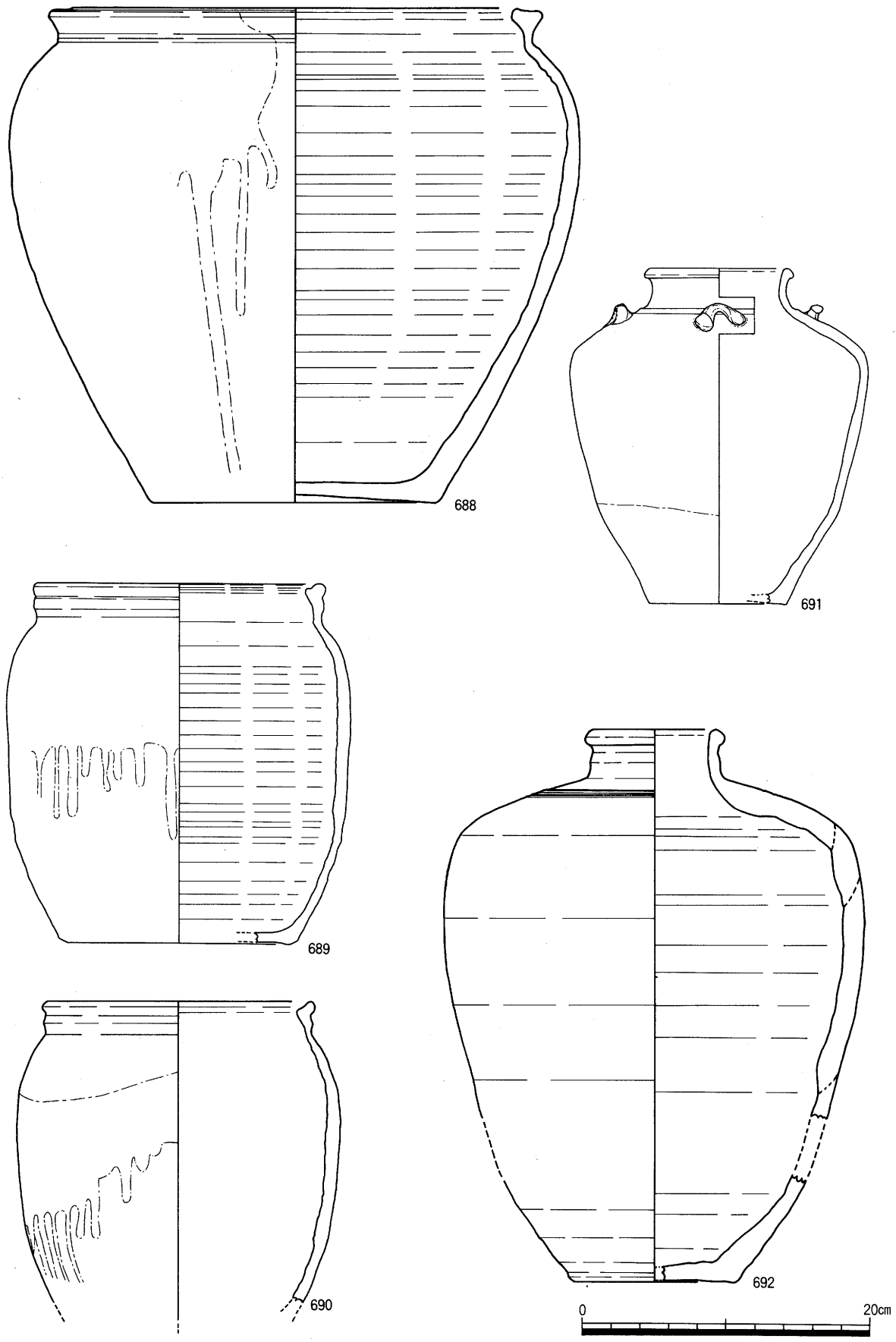


図24



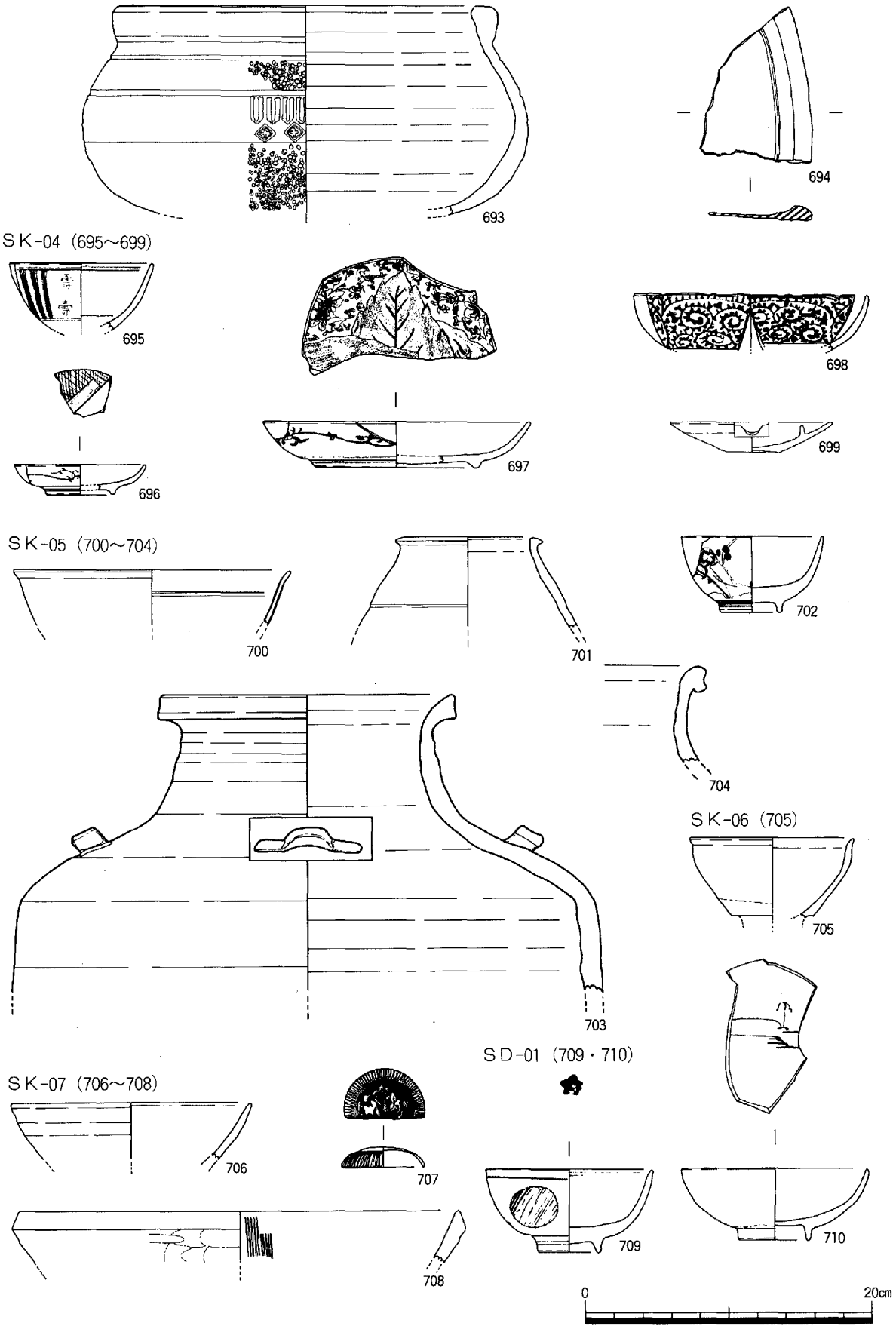
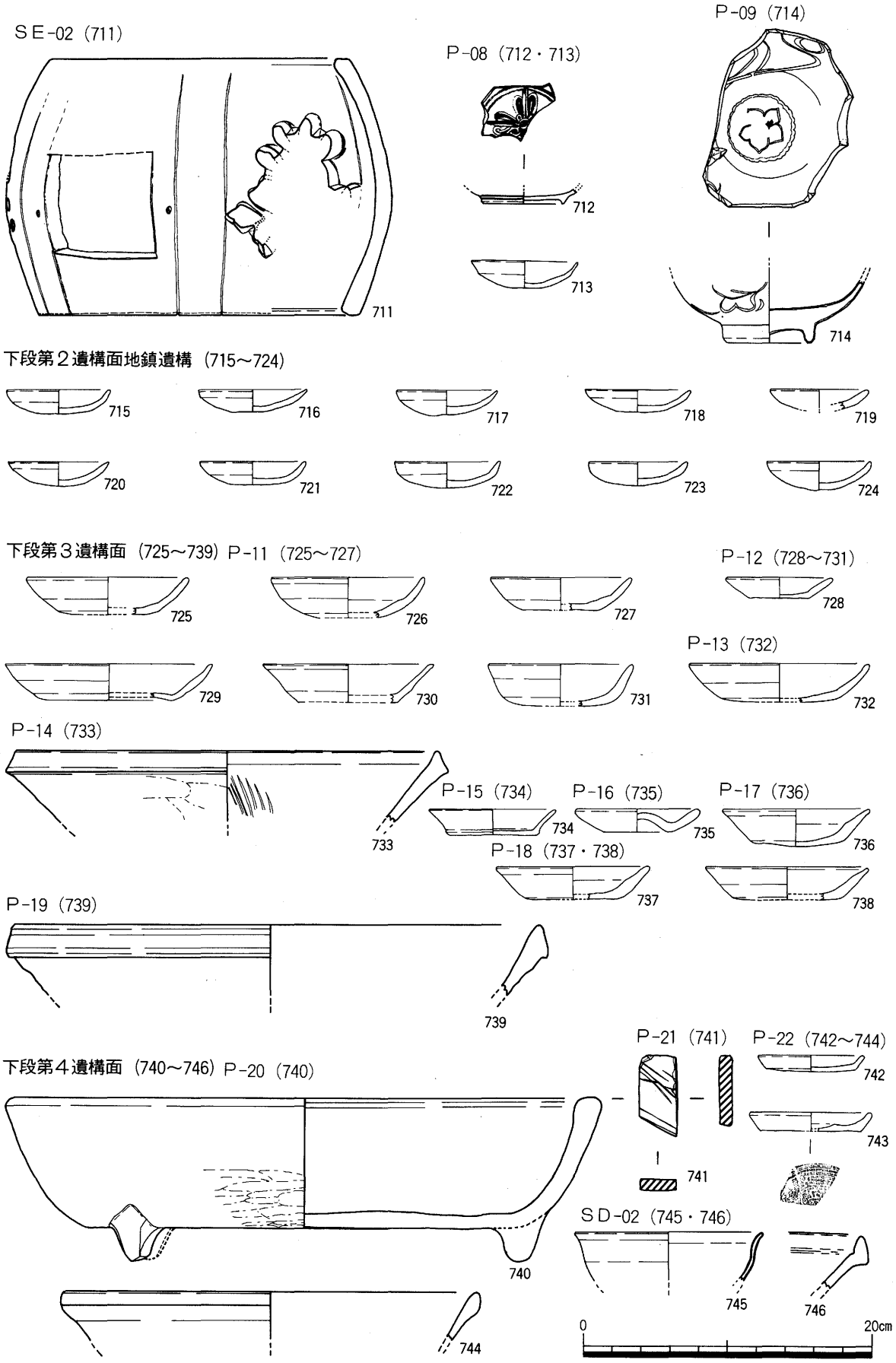

693
694
SK-04 (695~699)
695
696
697
698
699
SK-05 (700~704)
700
701
702
703
704
SK-06 (705)
705
SK-07 (706~708)
706
707
708
SD-01 (709・710)
709
710
0
20cm

図26


SE-02 (711)
711
P-08 (712・713)
712
713
P-09 (714)
714
下段第2遺構面地鎮遺構 (715～724)
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
下段第3遺構面 (725～739) P-11 (725～727)
725
726
727
P-12 (728～731)
728
P-13 (732)
729
730
731
732
P-14 (733)
733
P-15 (734)
734
P-16 (735)
735
P-17 (736)
736
P-18 (737・738)
737
738
P-19 (739)
739
下段第4遺構面 (740～746) P-20 (740)
740
744
P-21 (741)
741
P-22 (742～744)
742
743
SD-02 (745・746)
745
746
0
20cm

第1層（747～794）

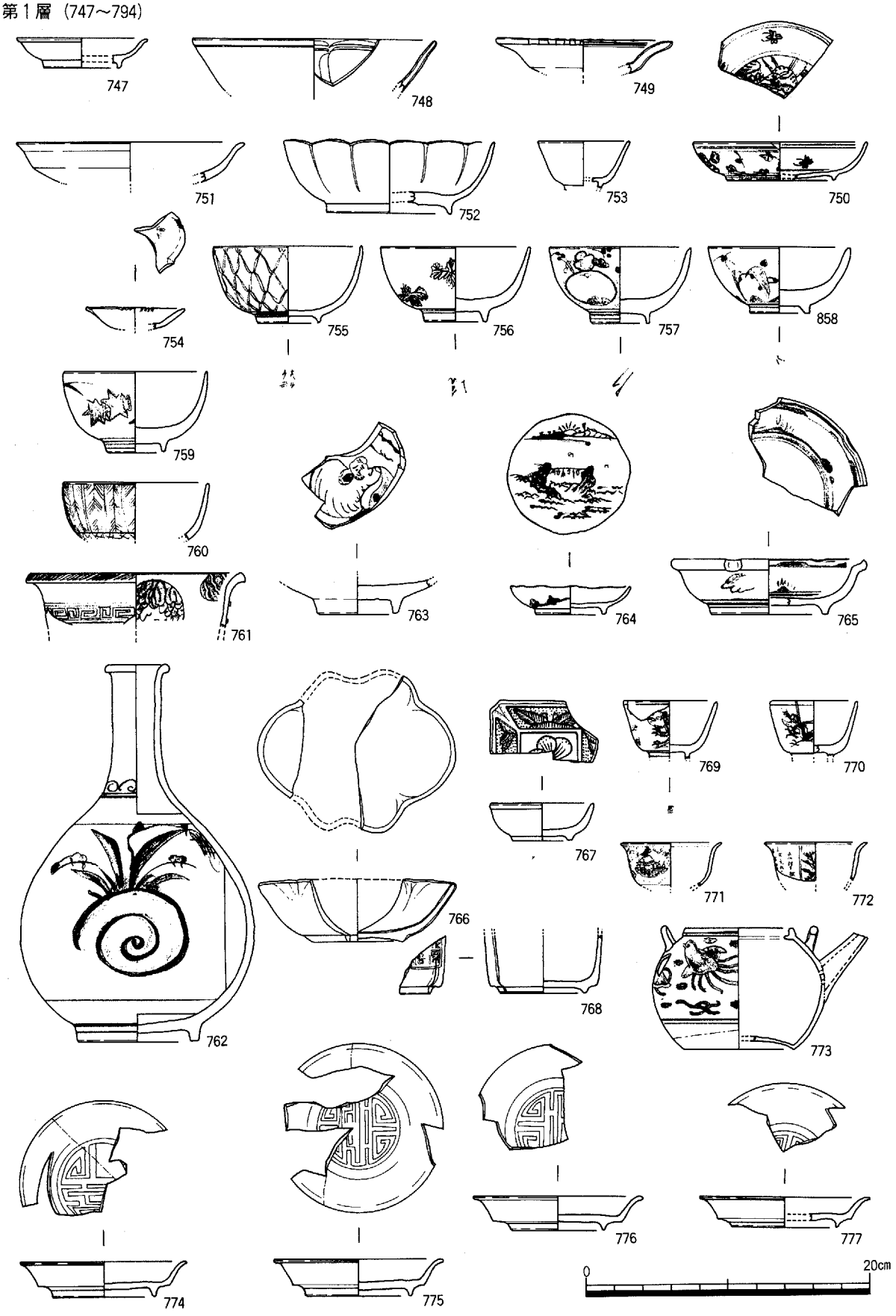
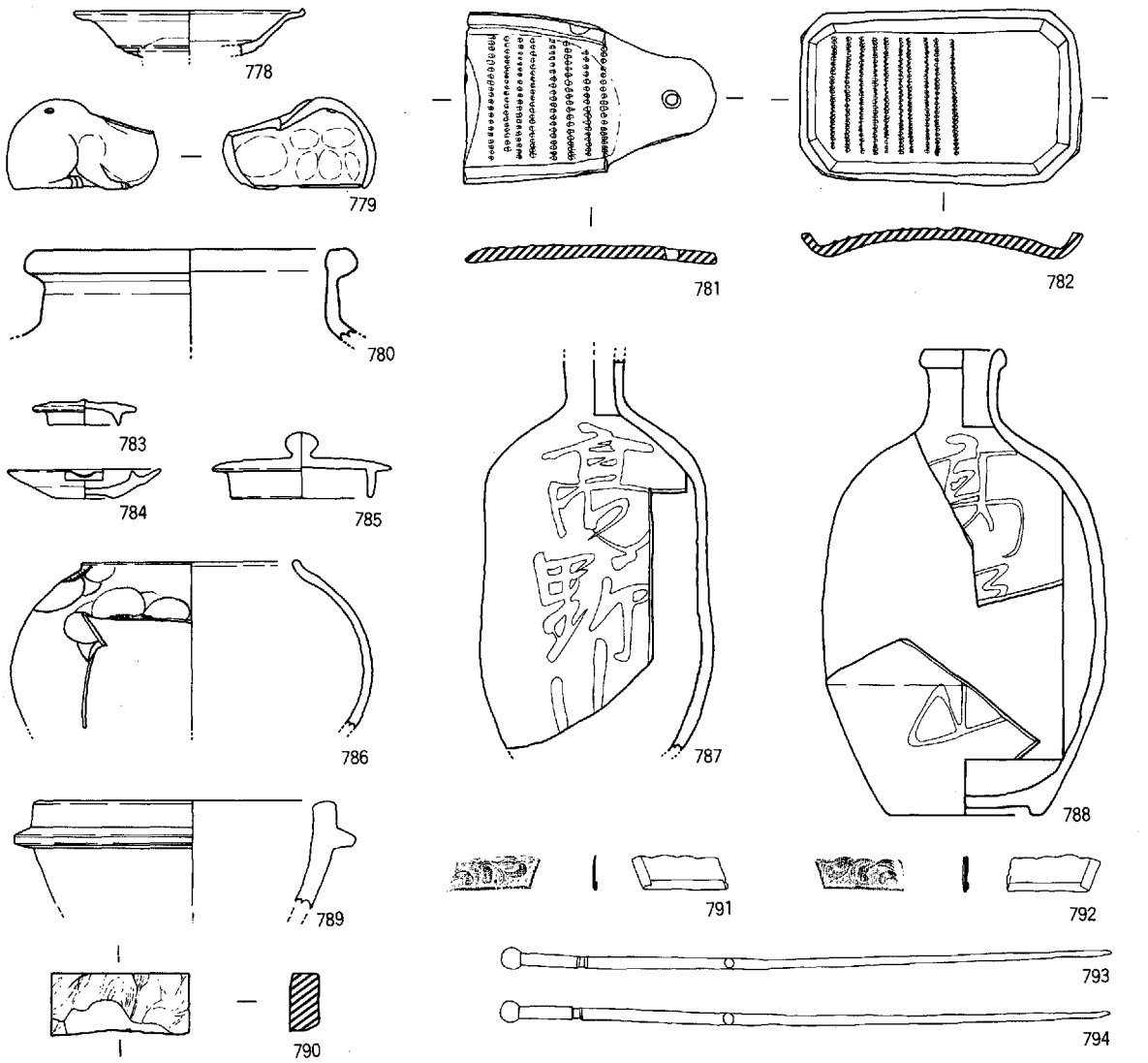

747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
858
759
760
761
763
764
765
762
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
0
20cm

図28



第2層（795～817）

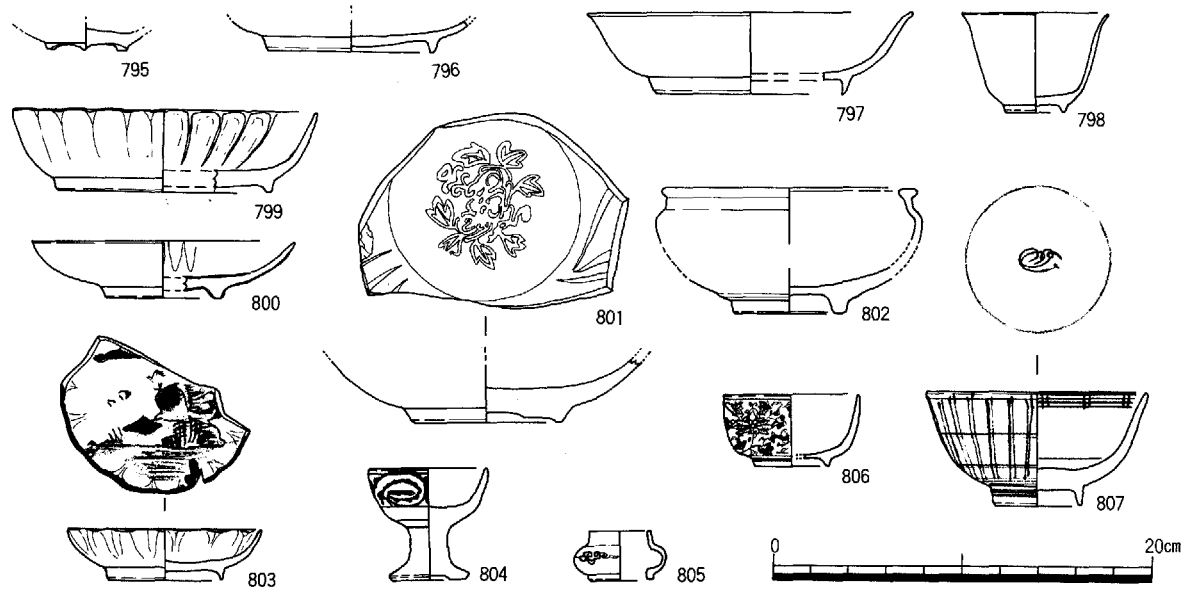


図29

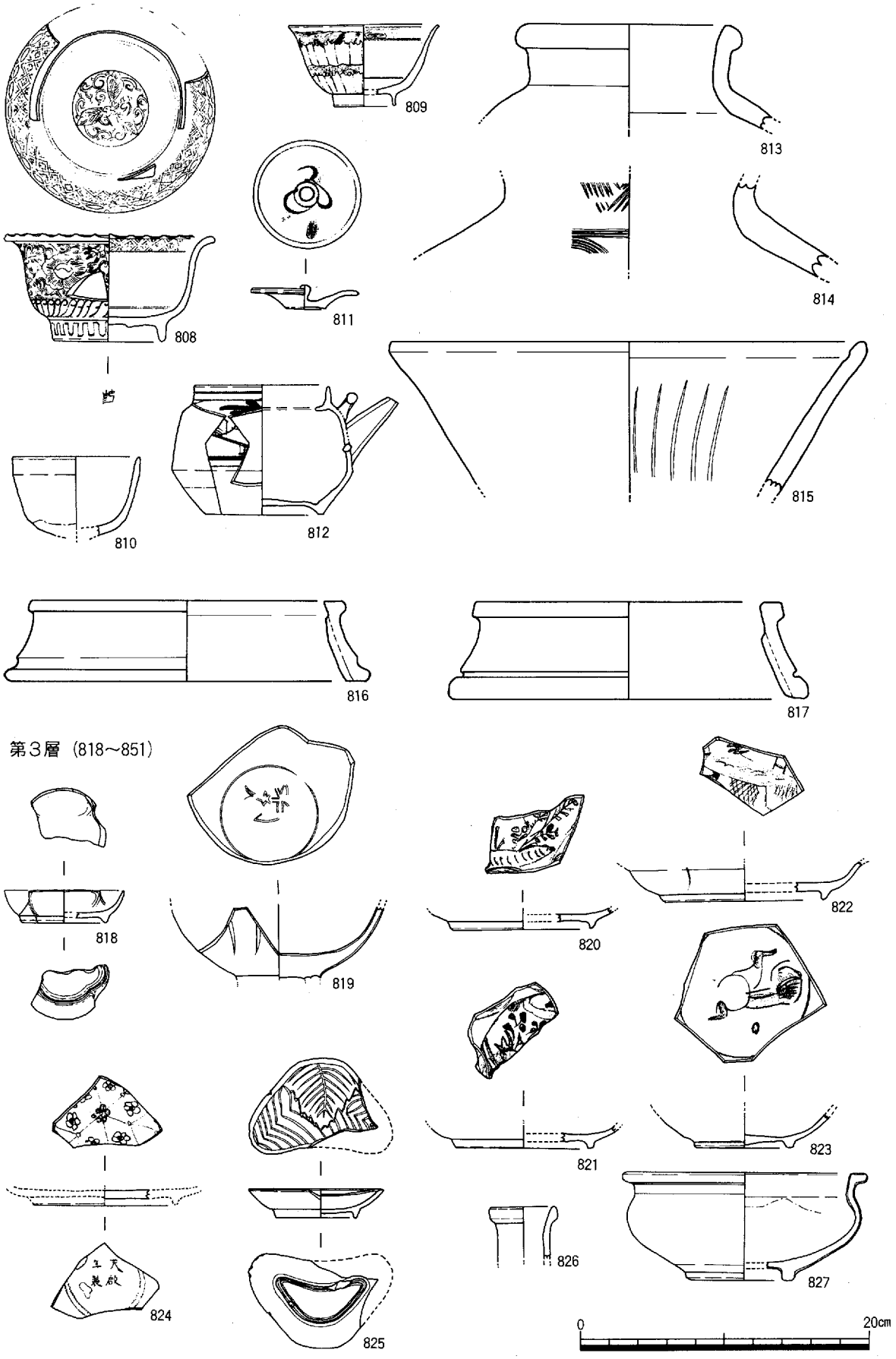
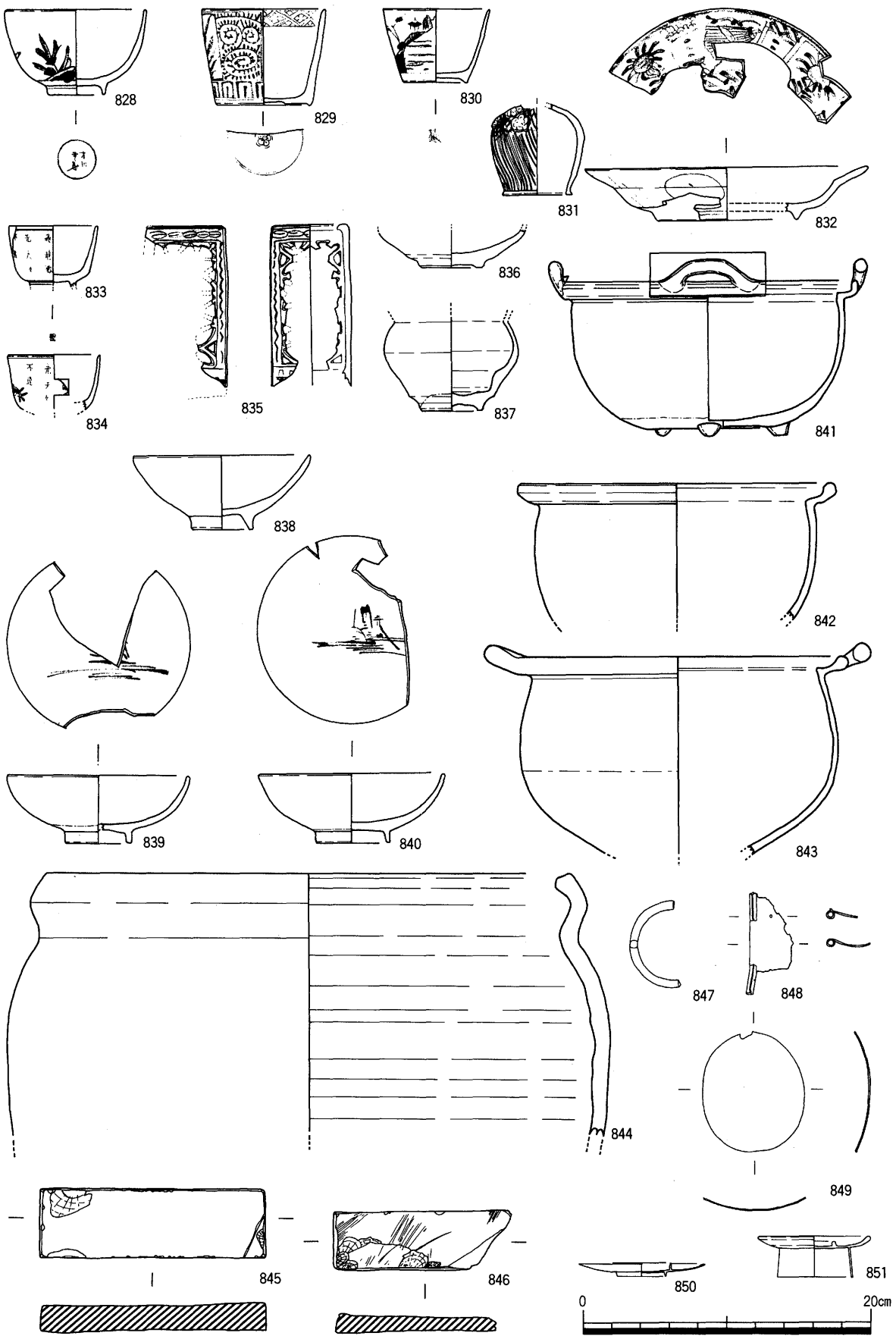

808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
第3層（818～851）
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
0
20cm

図30


828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
0
20cm

第4層（852～891）

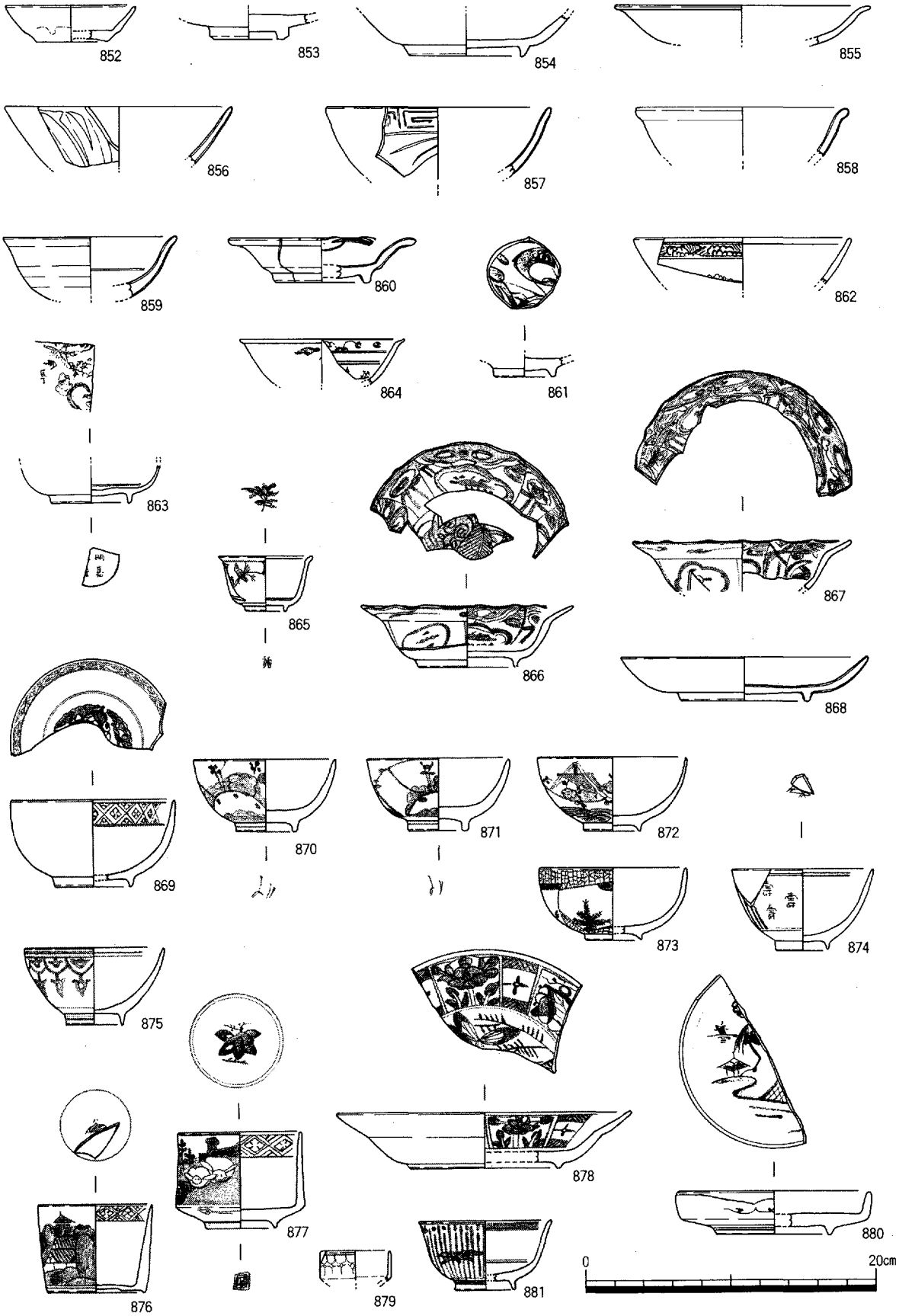
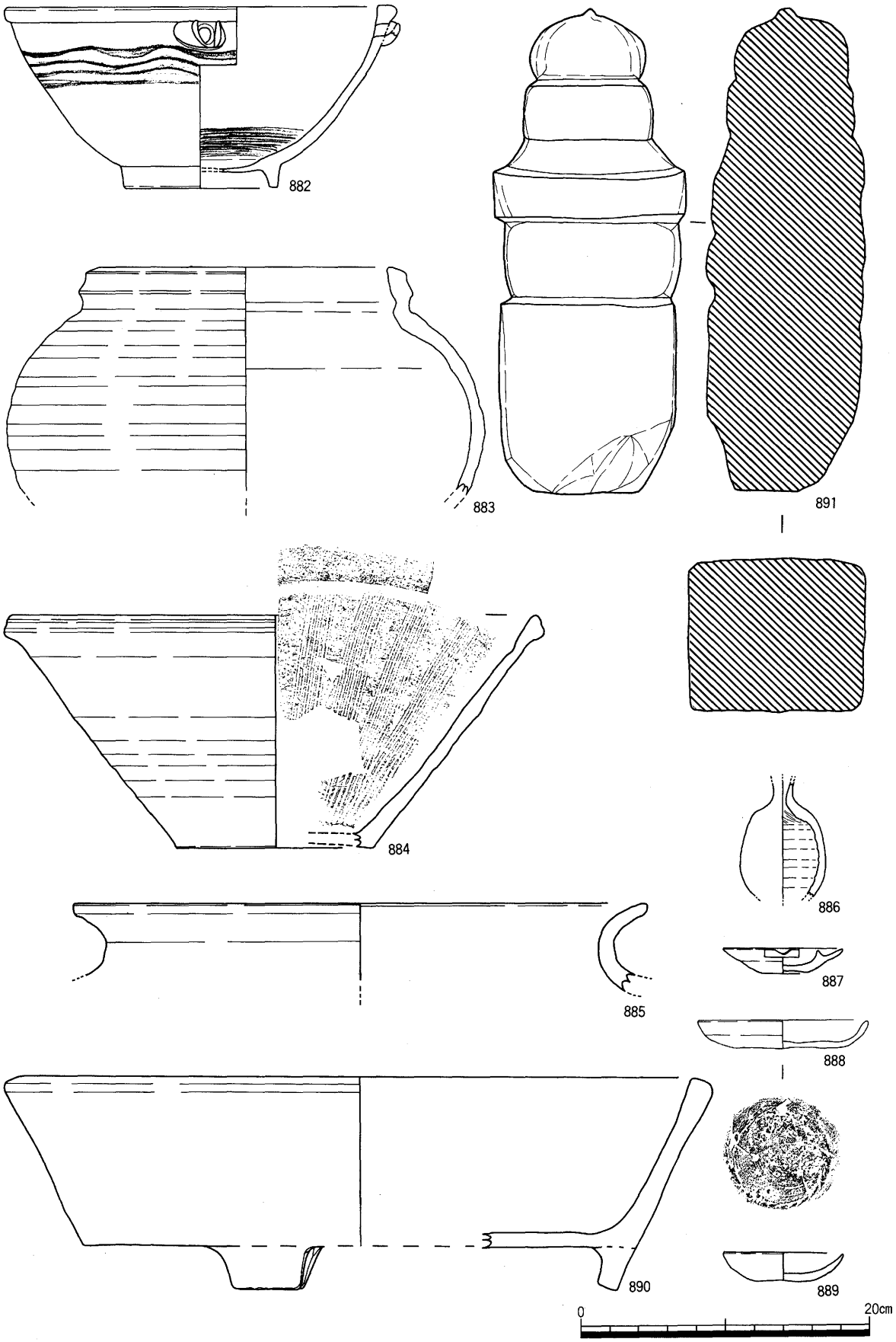

852
853
854
855
856
857
858
859
860
862
864
861
863
865
867
866
868
869
870
871
872
873
874
875
878
877
880
876
879
881
0
20cm

図32



第５層（892～922）

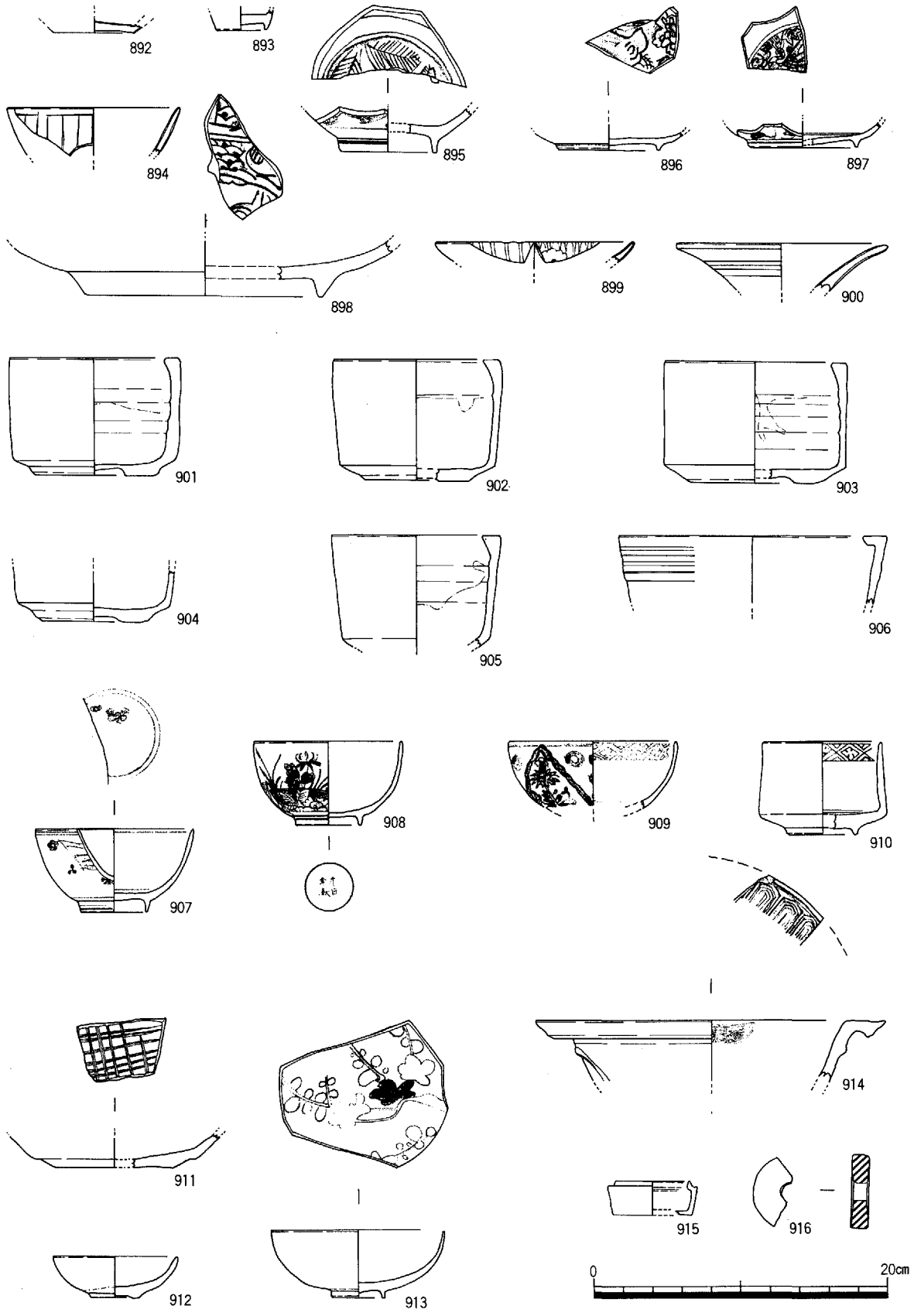
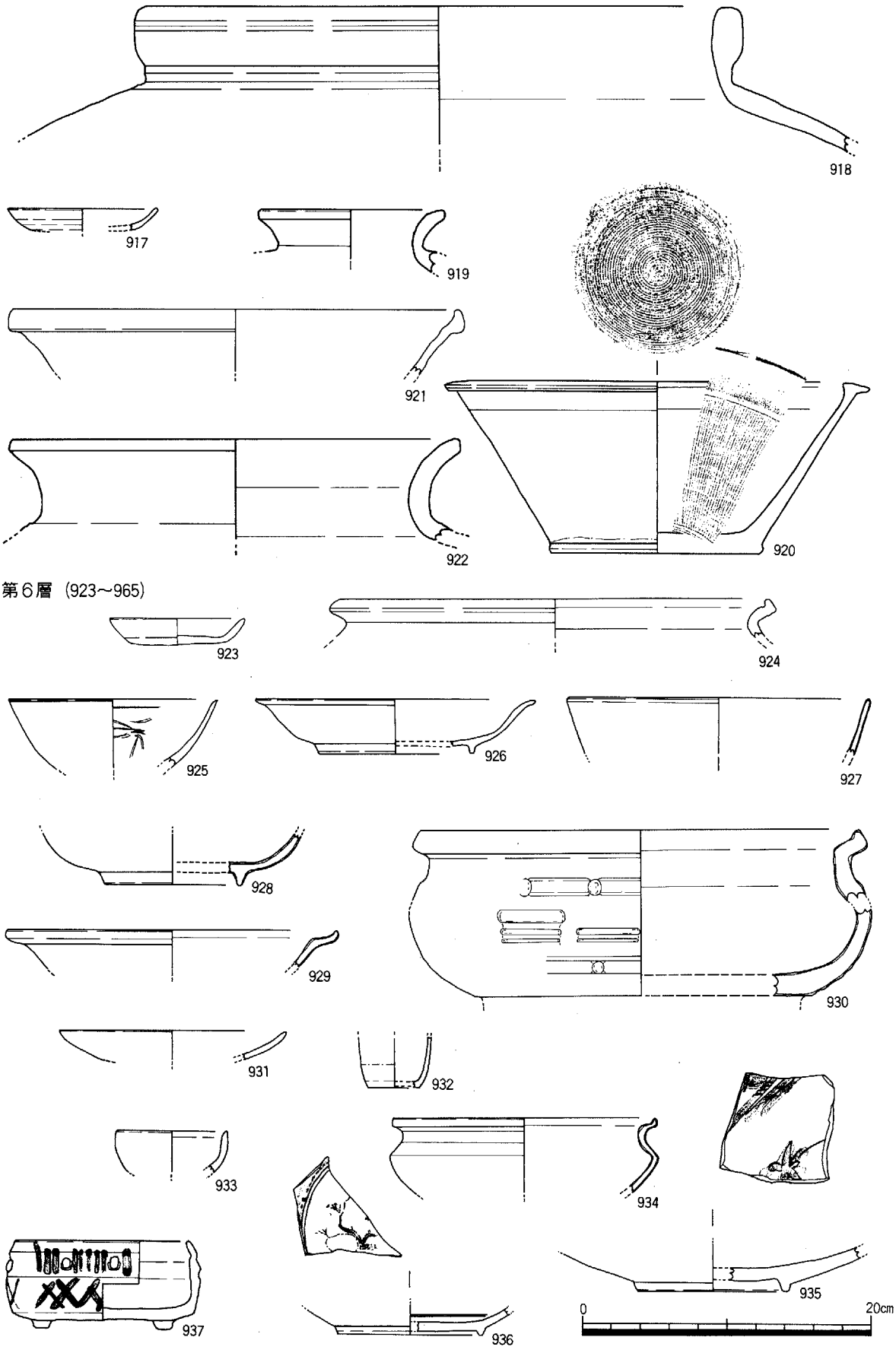
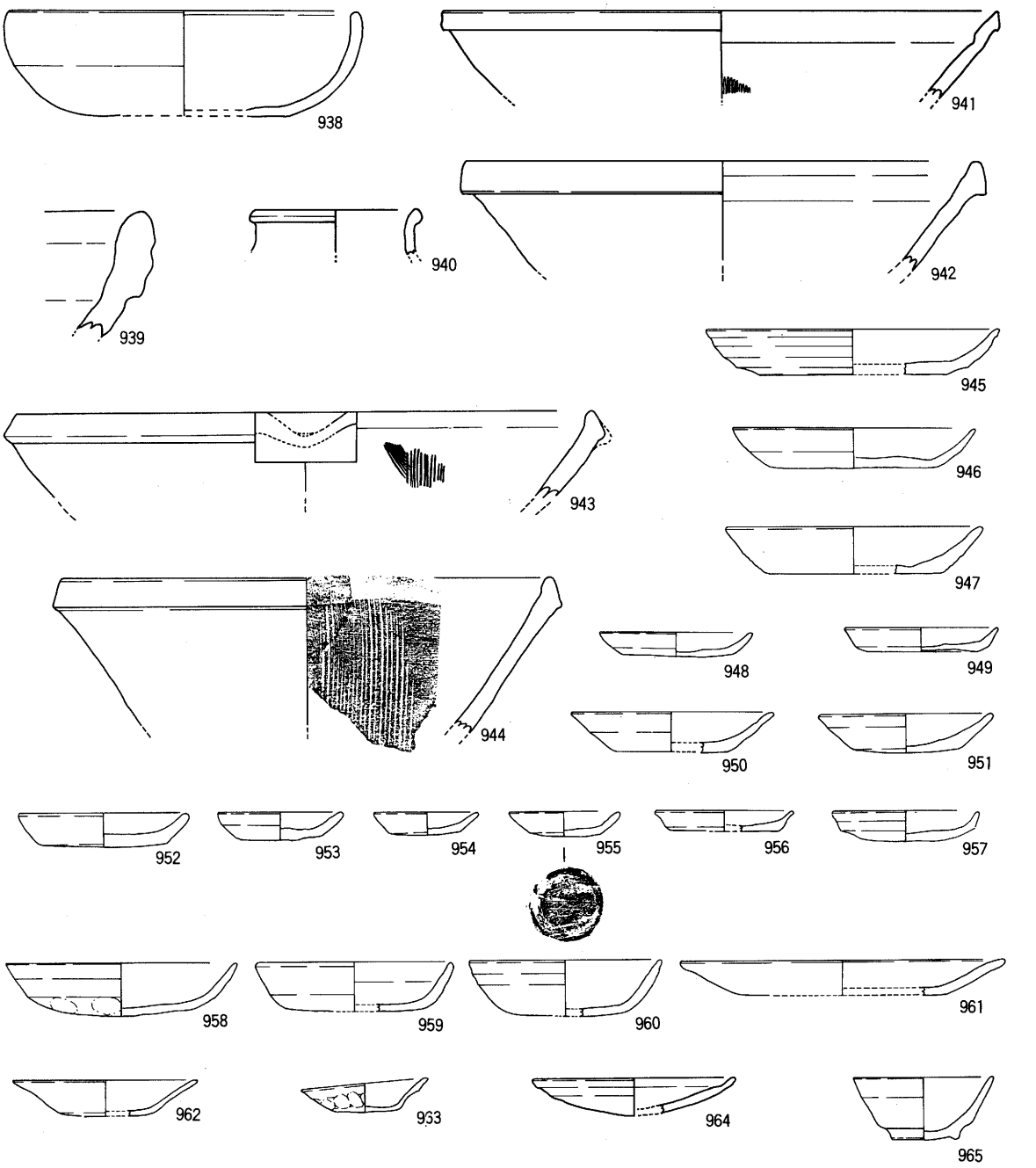

892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
0
20cm

図34


918
917
919
921
920
922
第6層 (923～965)
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
0
20cm


938
941
940
942
939
945
943
946
947
944
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965

第7層（966～992）

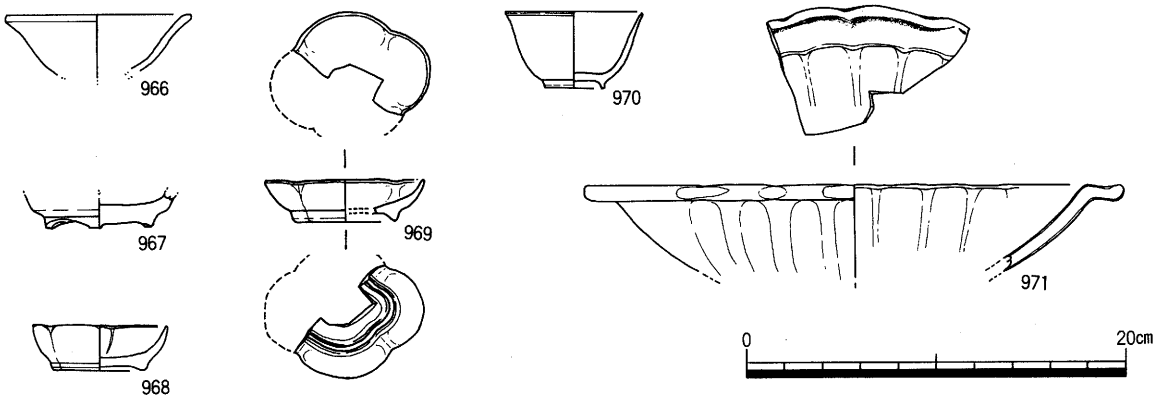
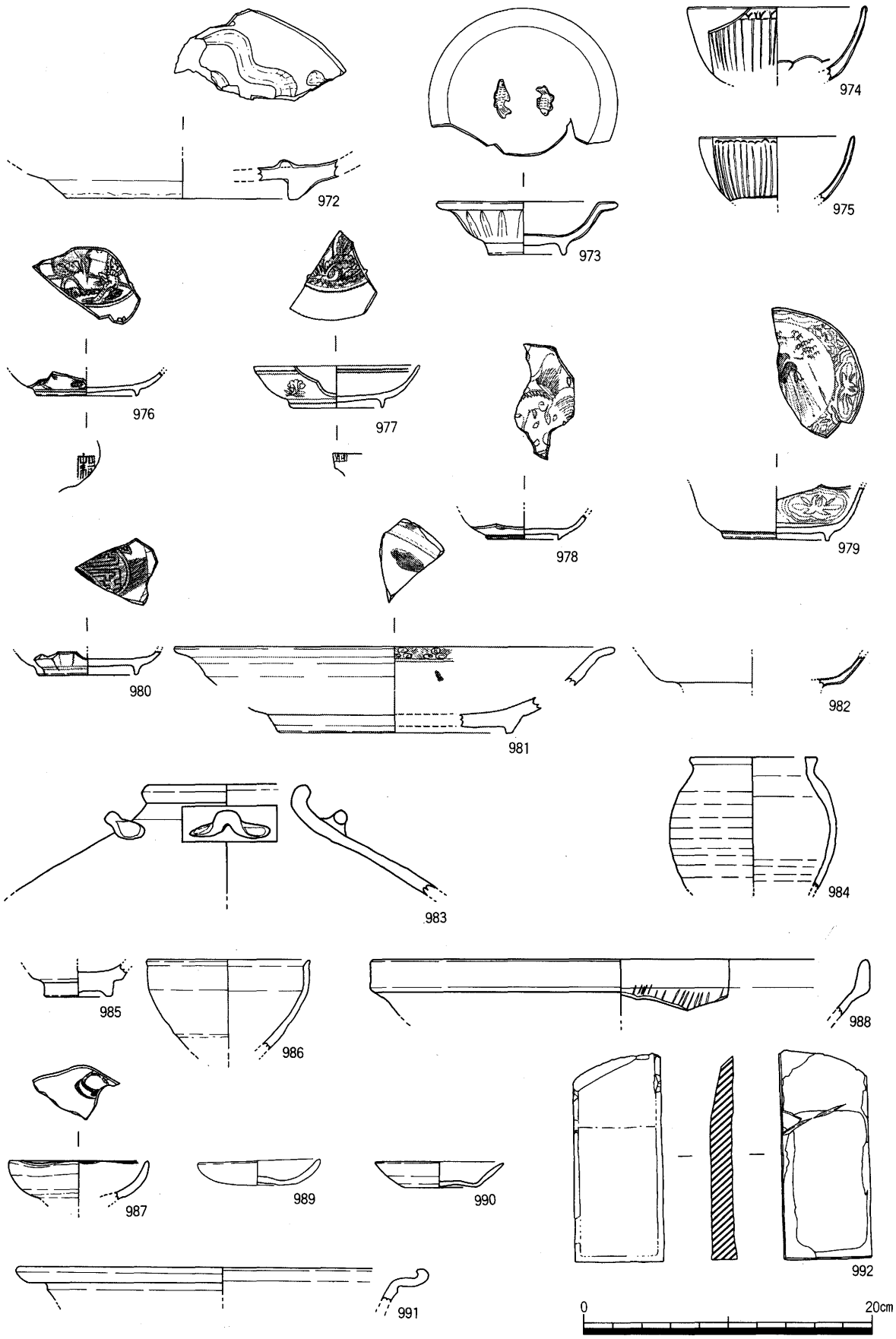

966
970
967
969
971
968
0
20cm

図36


972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
0
20cm

第１遺構面 (993～1124) ＳＫ-01 (993～1012)

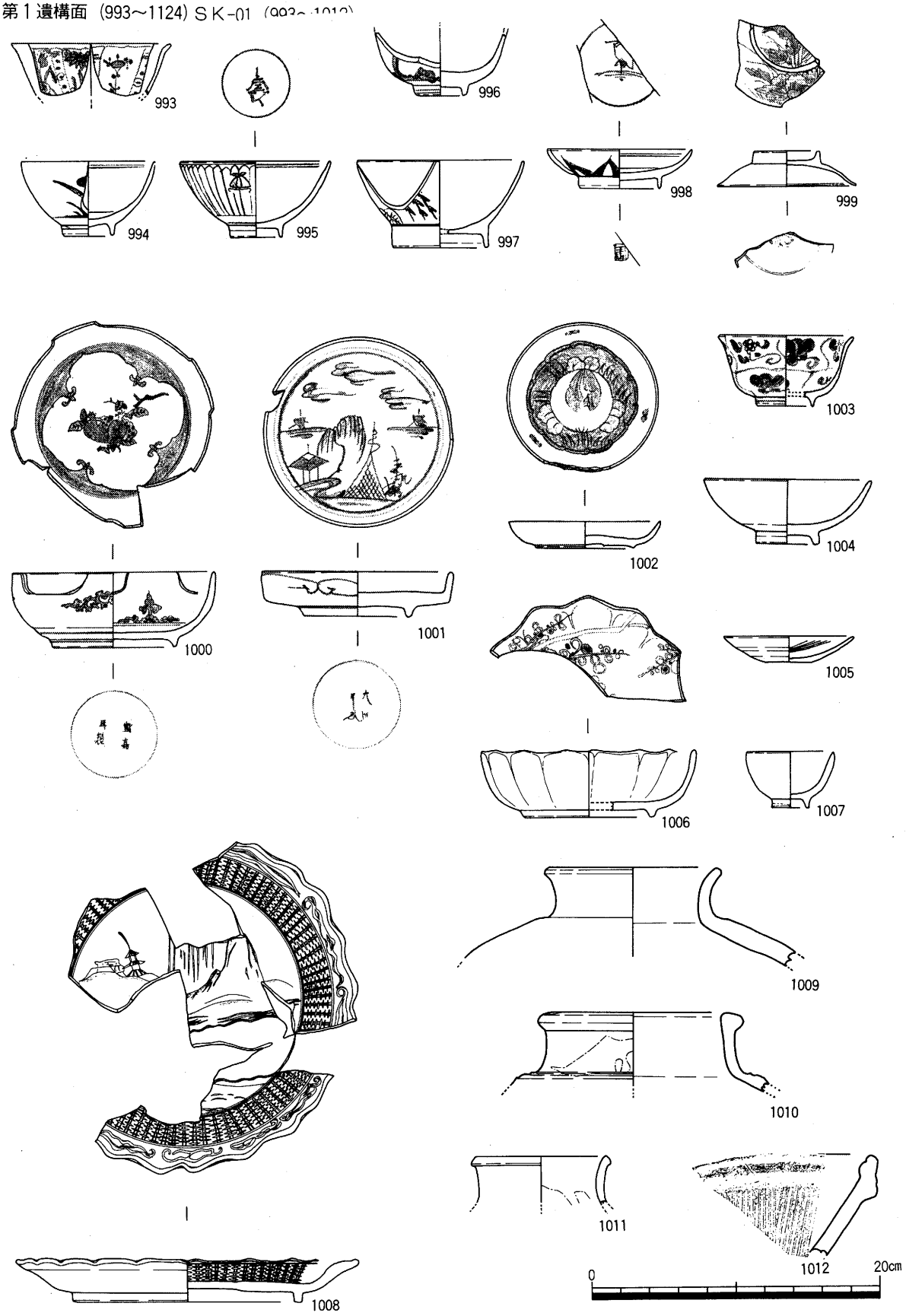
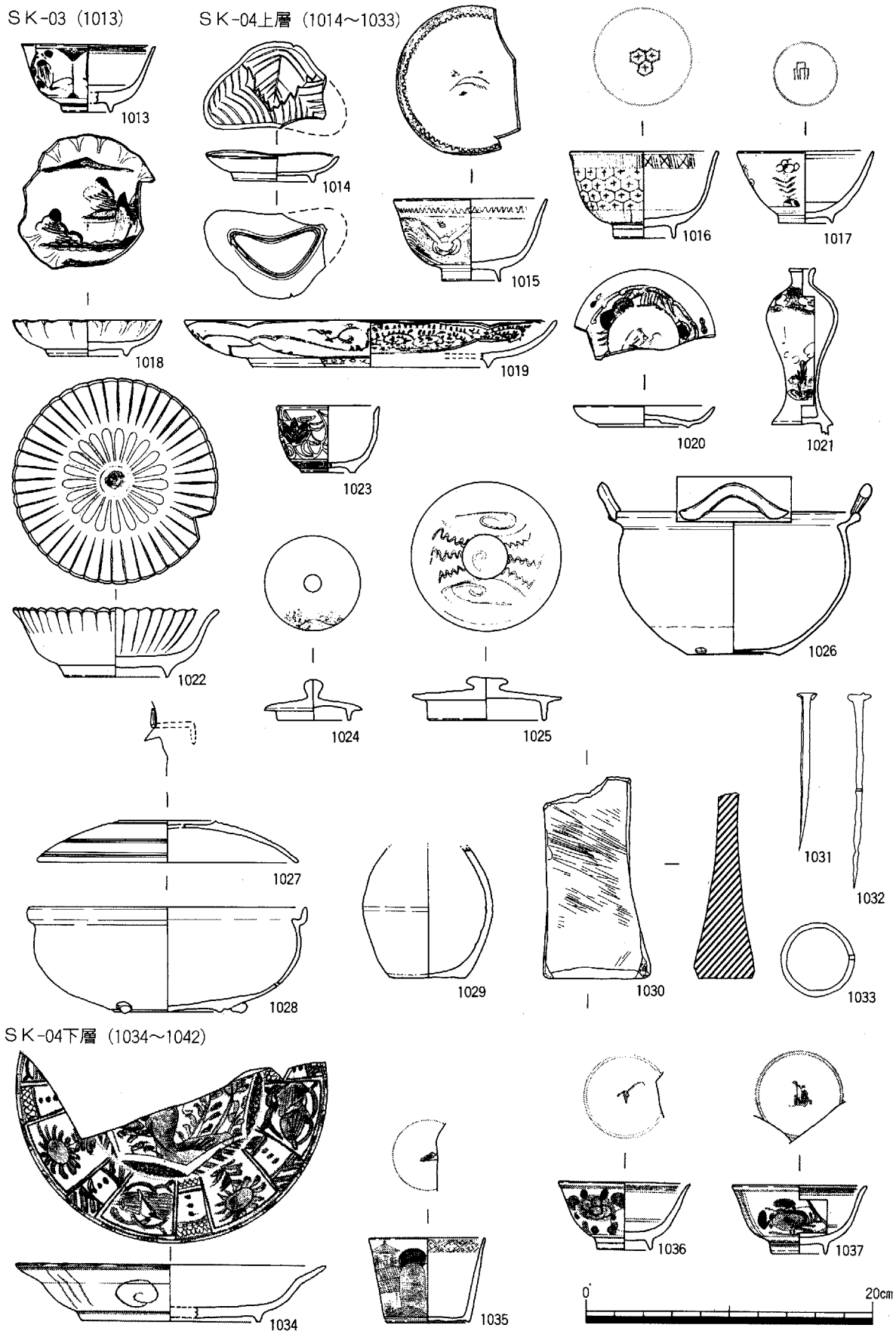


図38


SK-03 (1013)
SK-04上層 (1014～1033)
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
SK-04下層 (1034～1042)
1034
1035
1036
1037
0
20cm

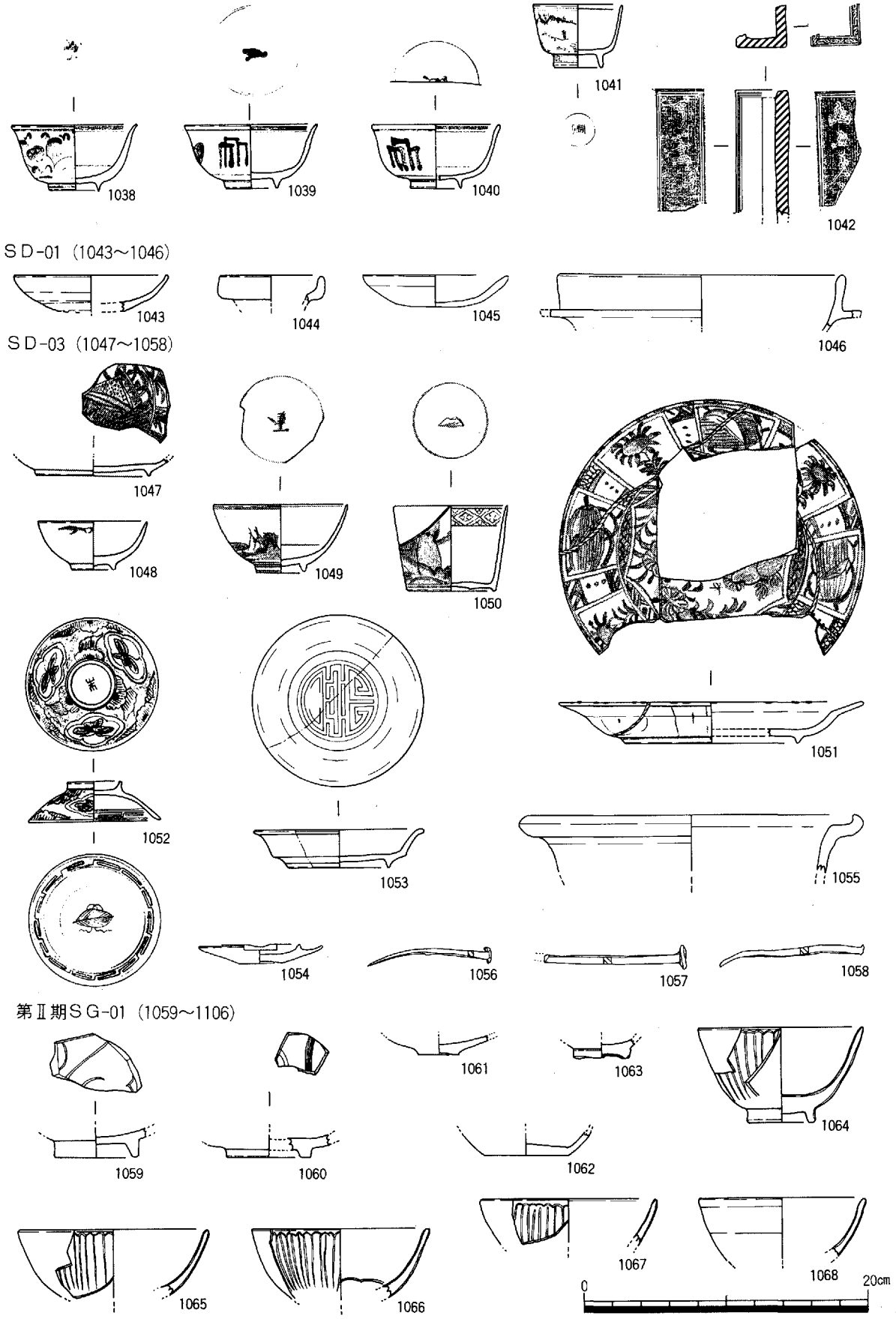

1038
1039
1040
1041
1042
SD-01（1043～1046）
1043
1044
1045
1046
SD-03（1047～1058）
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
第Ⅱ期SG-01（1059～1106）
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
0
20cm

図40

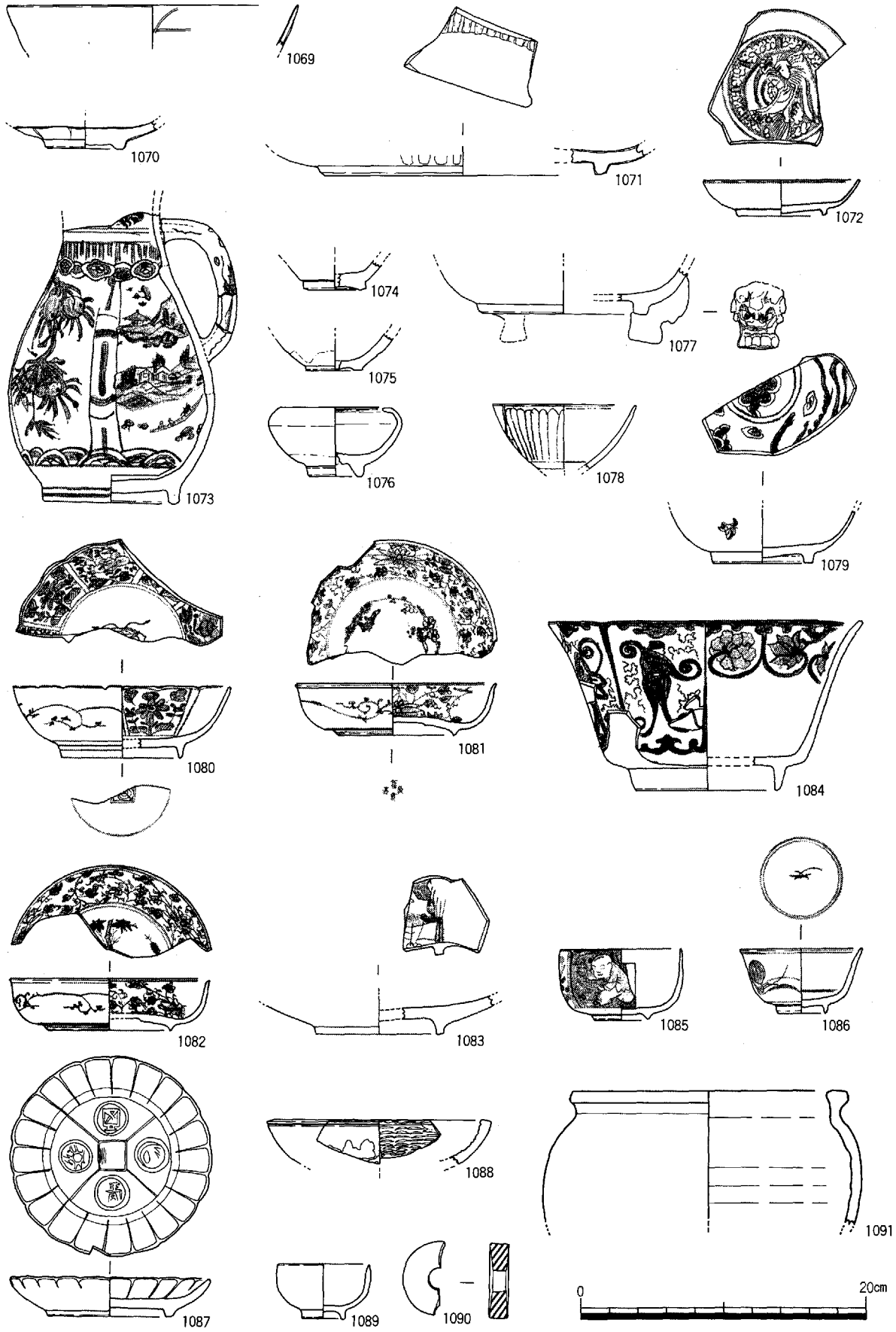

1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
0
20cm

図41

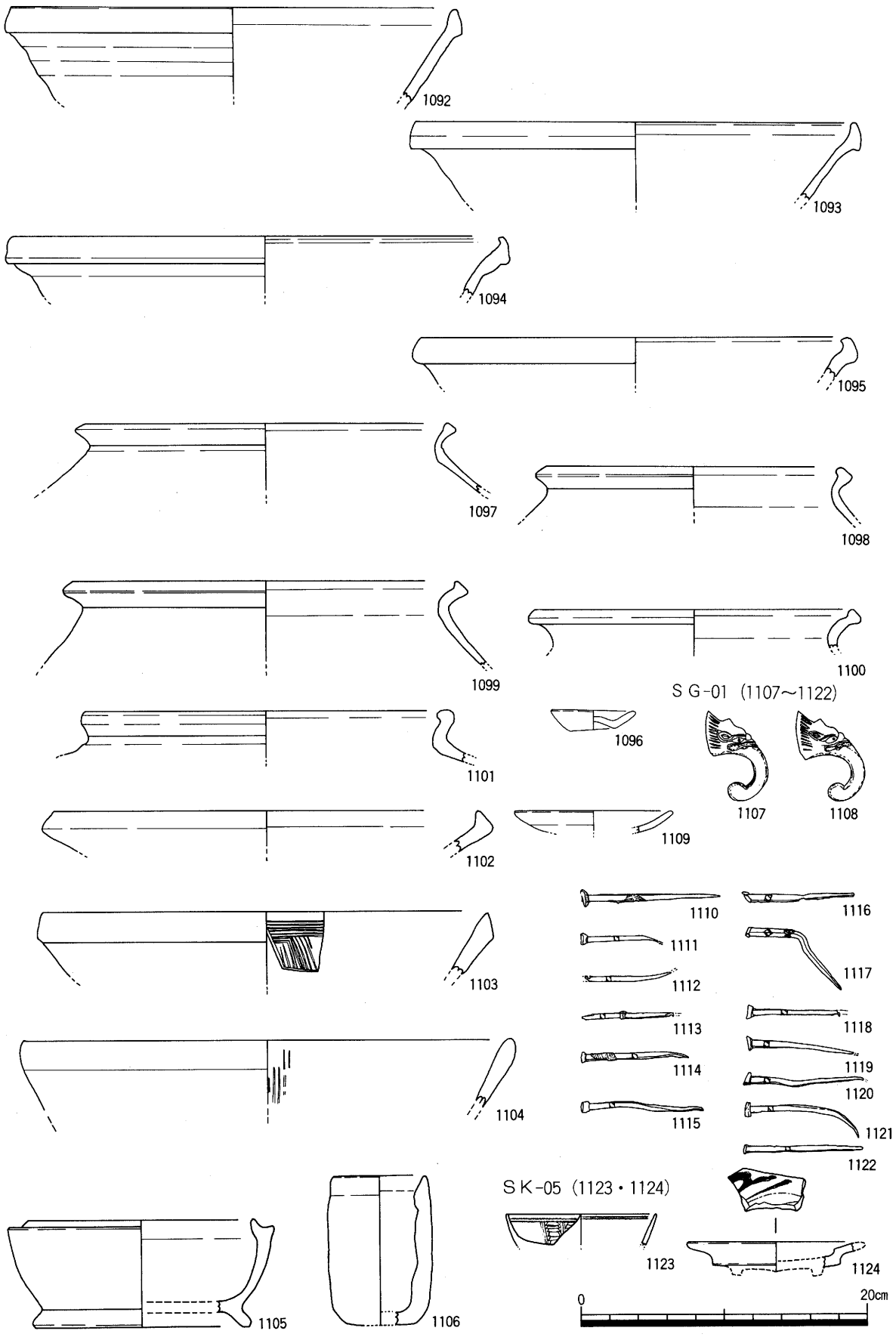
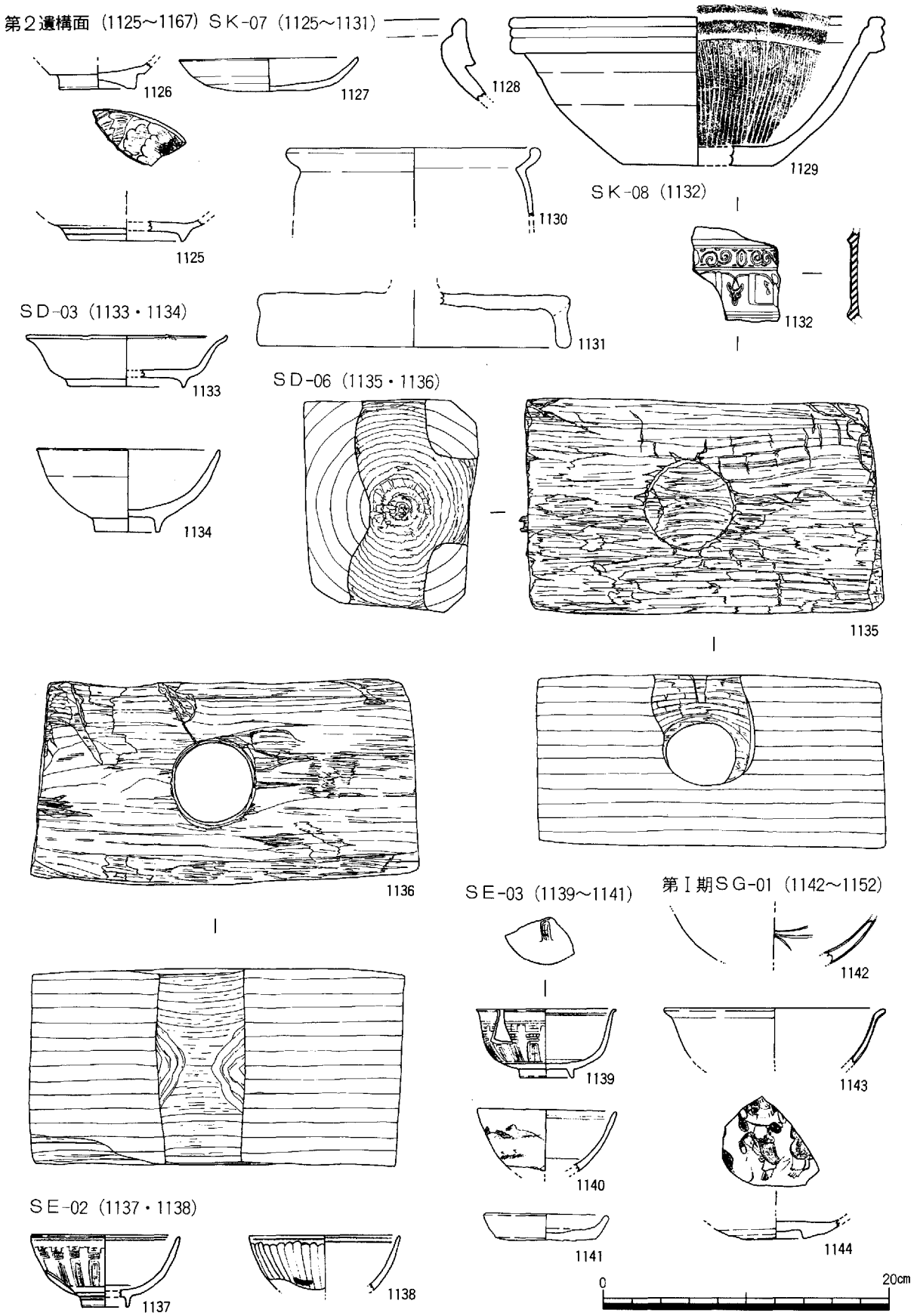

1092
1093
1094
1095
1097
1098
1099
1100
SG-01 (1107～1122)
1096
1101
1107
1108
1109
1102
1110
1116
1111
1117
1112
1103
1113
1118
1114
1119
1120
1104
1115
1121
1122
SK-05 (1123・1124)
1123
1124
1105
1106
0
20cm

図42


第２遺構面（1125～1167）ＳＫ-07（1125～1131）
1126
1127
1128
1129
1130
1125
ＳＫ-08（1132）
1132
1131
ＳＤ-03（1133・1134）
1133
1134
ＳＤ-06（1135・1136）
1135
1136
ＳＥ-03（1139～1141）
第Ⅰ期ＳＧ-01（1142～1152）
1142
1139
1143
1140
1141
1144
ＳＥ-02（1137・1138）
1137
1138
0
20cm

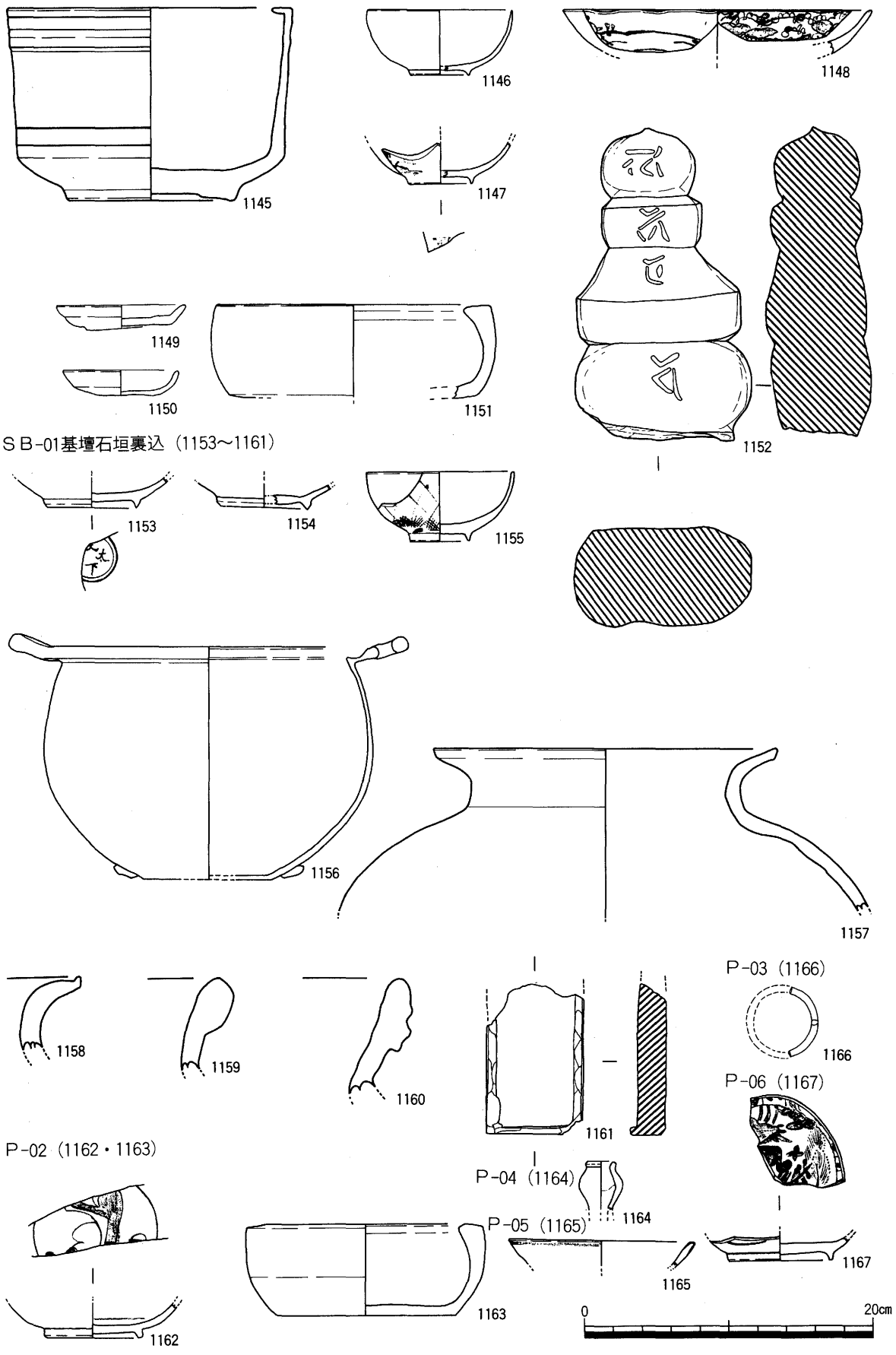
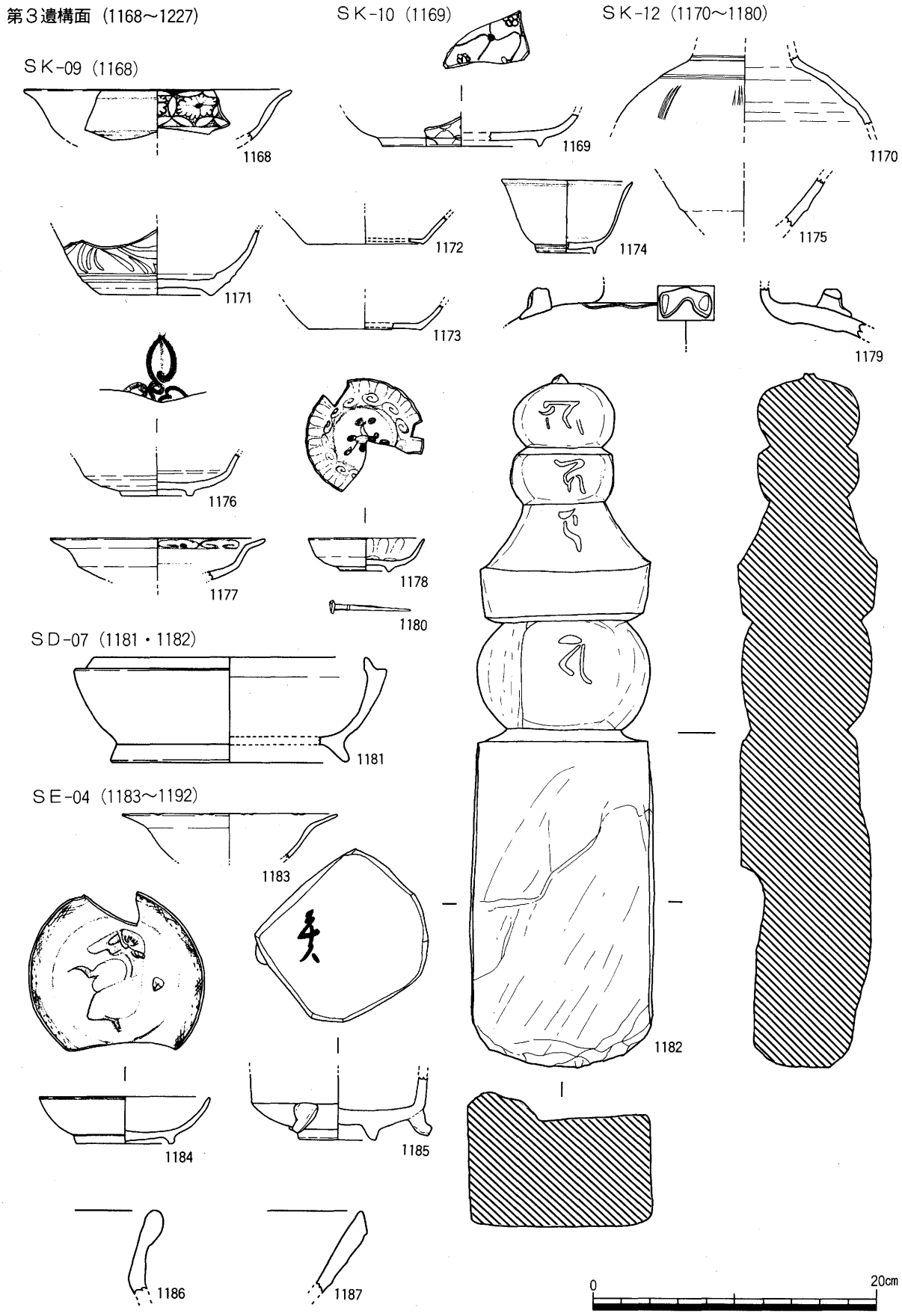

1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
SB-01基壇石垣裏込（1153～1161）
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
P-03（1166）
1166
P-06（1167）
P-02（1162・1163）
P-04（1164）
1164
P-05（1165）
1165
1167
1162
1163
0
20cm

図44


第３遺構面（1168～1227）
ＳＫ-10（1169）
ＳＫ-12（1170～1180）
ＳＫ-09（1168）
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
ＳＤ-07（1181・1182）
1181
1182
ＳＥ-04（1183～1192）
1183
1184
1185
1186
1187
0
20cm

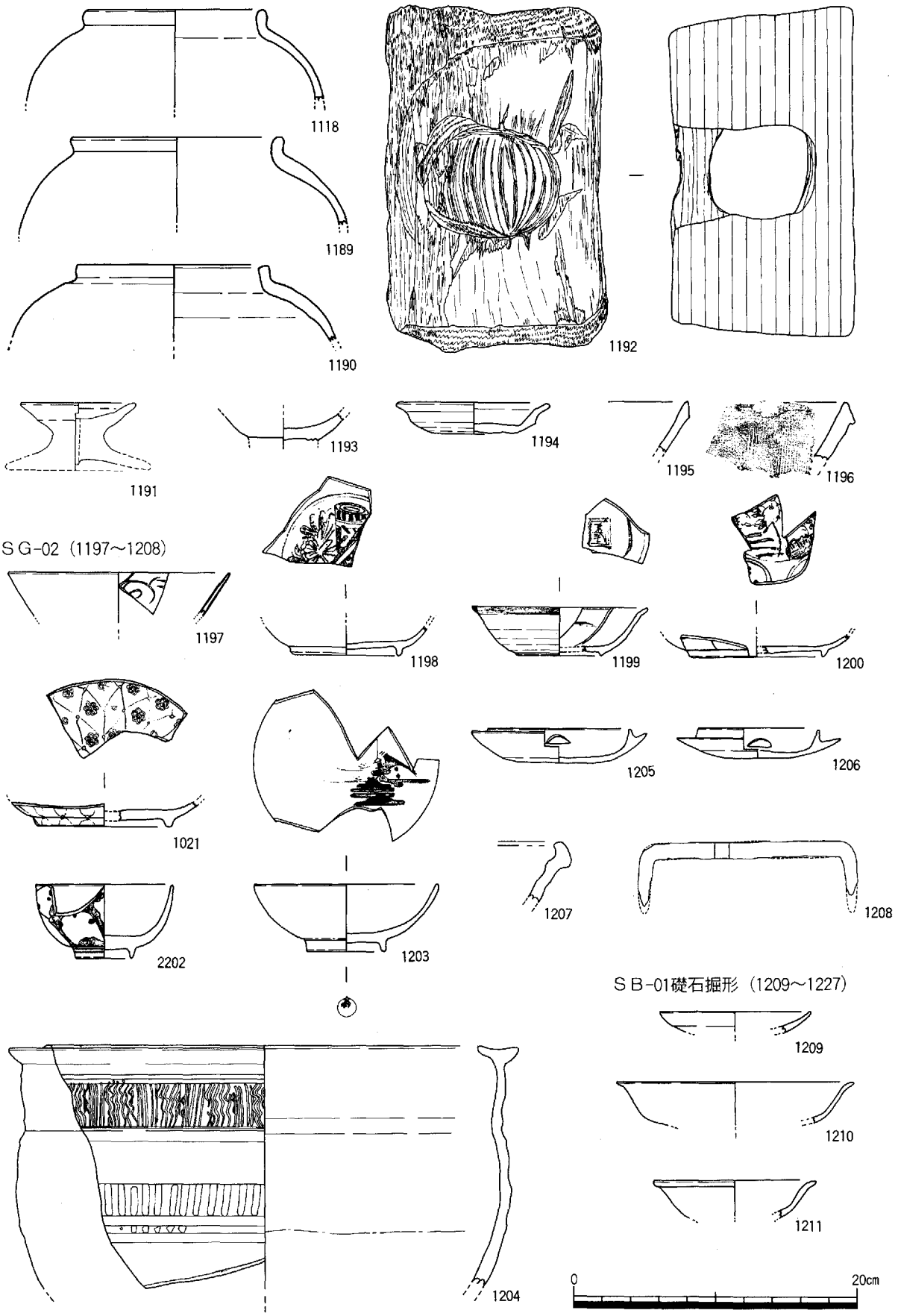
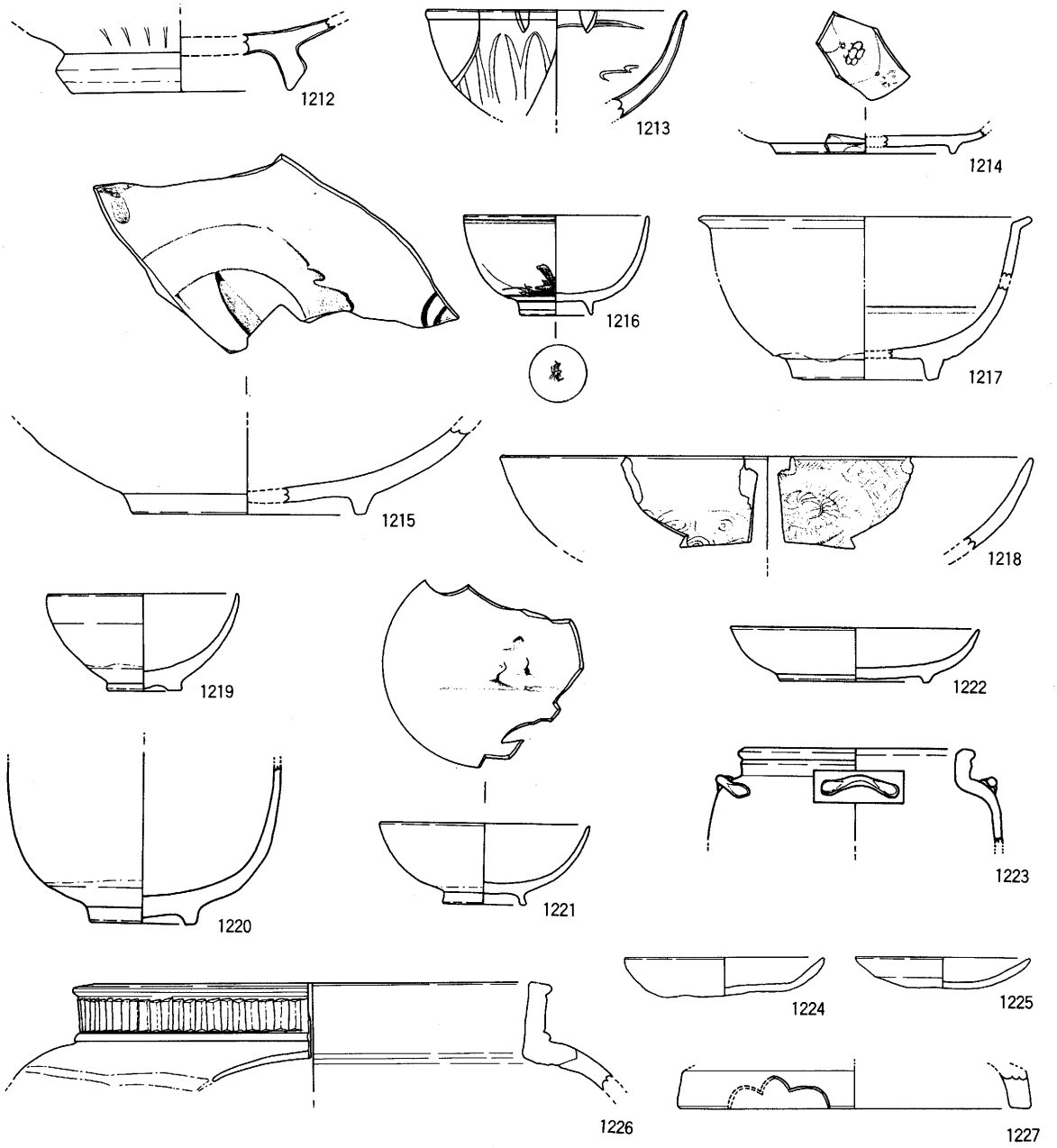
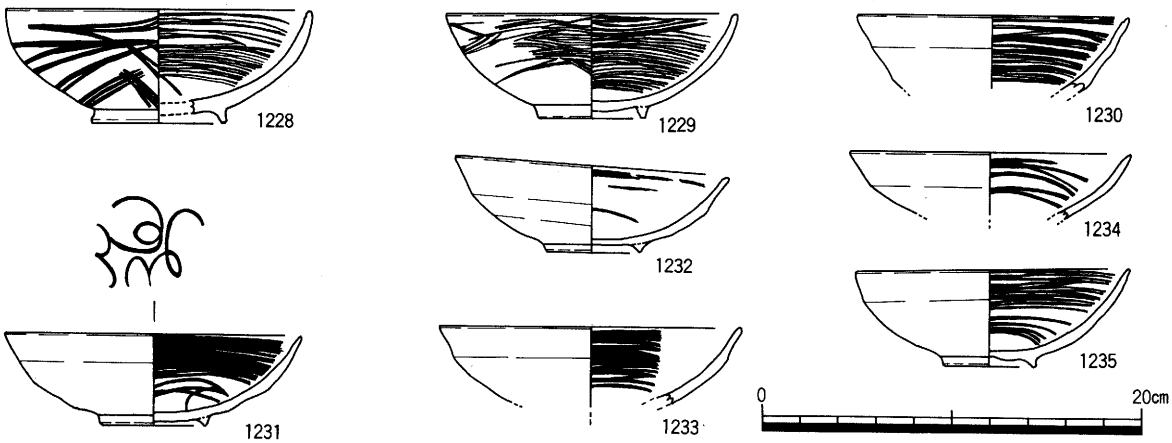

1118
1189
1190
1192
1191
1193
1194
1195
1196
SG-02（1197～1208）
1197
1198
1199
1200
1021
1205
1206
2202
1203
1207
1208
SB-01礎石掘形（1209～1227）
1209
1210
1211
1204
0
20cm

図46



第４遺構面（1228～1350）ＳＫ-14（1228～1229）　ＳＫ-15（1230～1270）



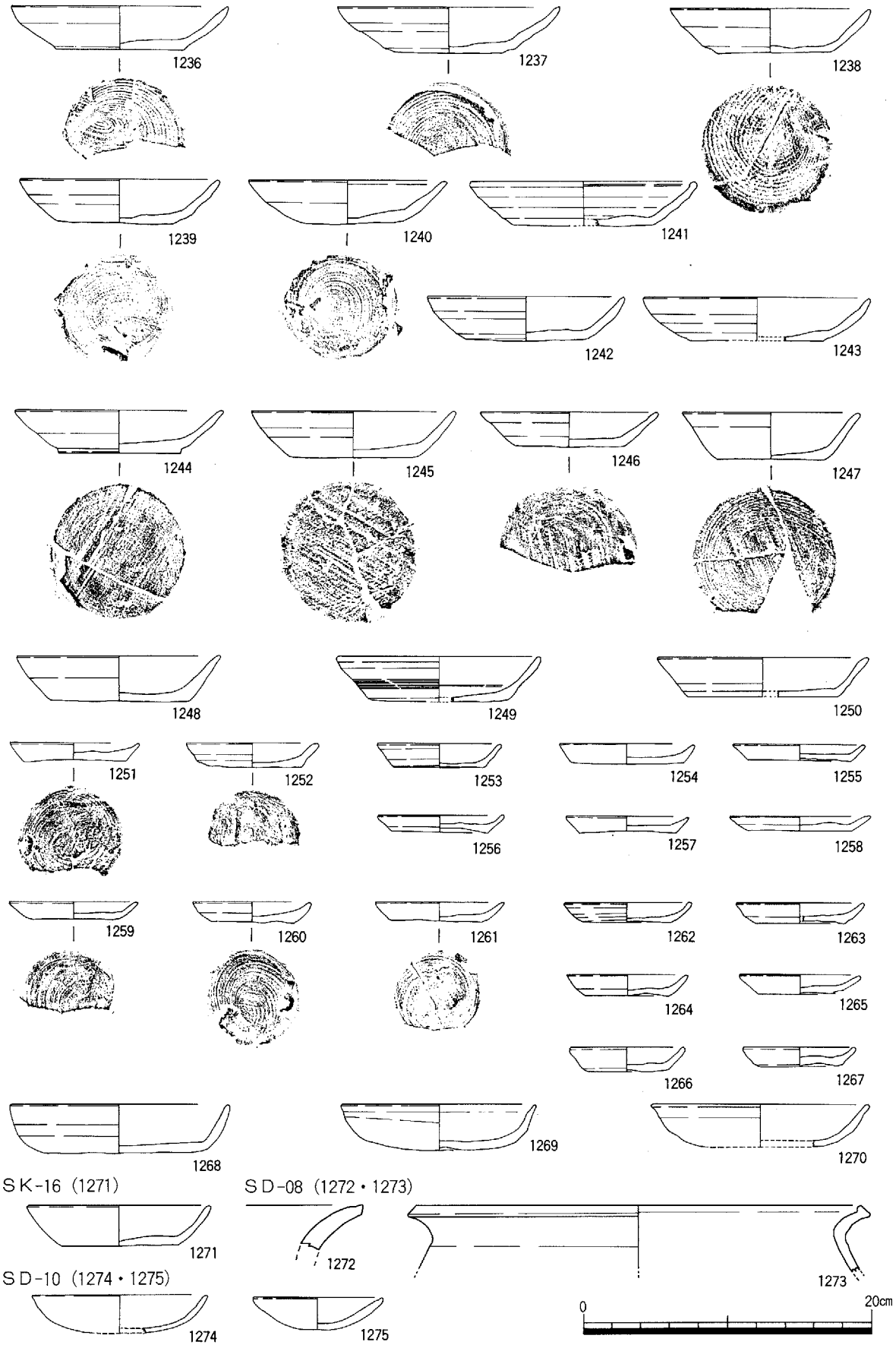
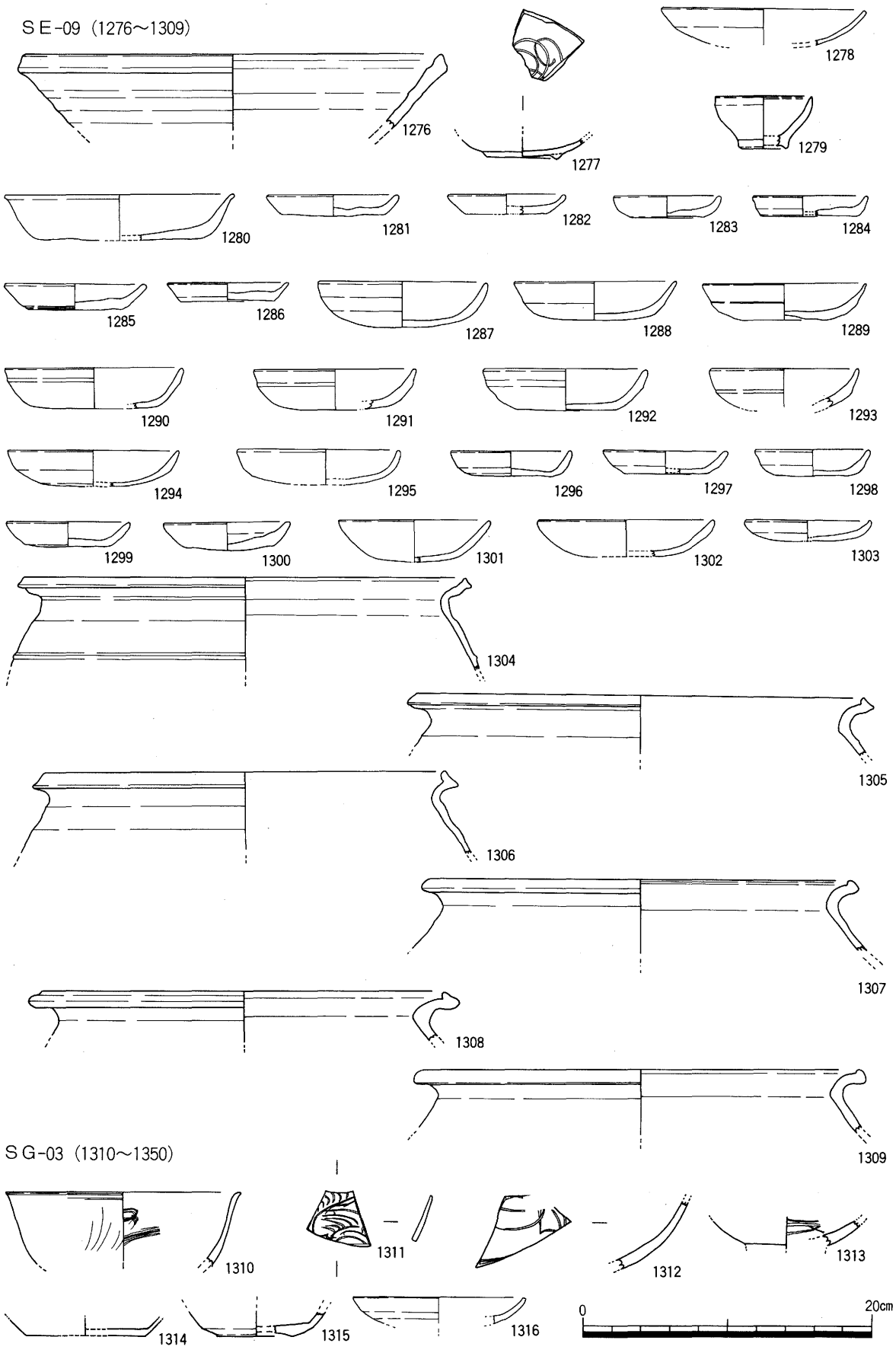

1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1270
SK-16 (1271)
1271
SD-08 (1272・1273)
1272
1273
SD-10 (1274・1275)
1274
1275
0
20cm

図48


SE-09 (1276～1309)
1276
1277
1278
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
SG-03 (1310～1350)
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
0
20cm

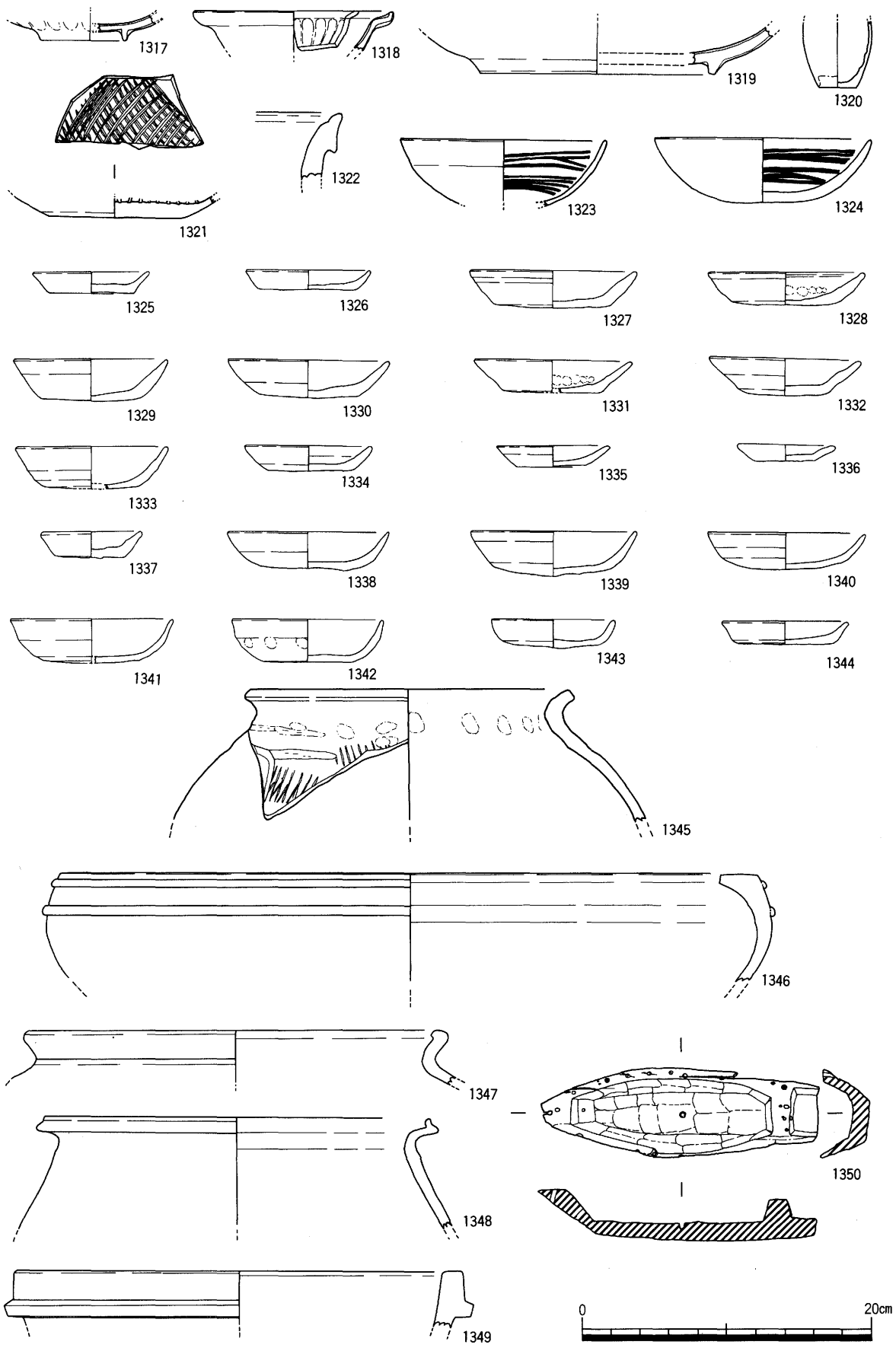
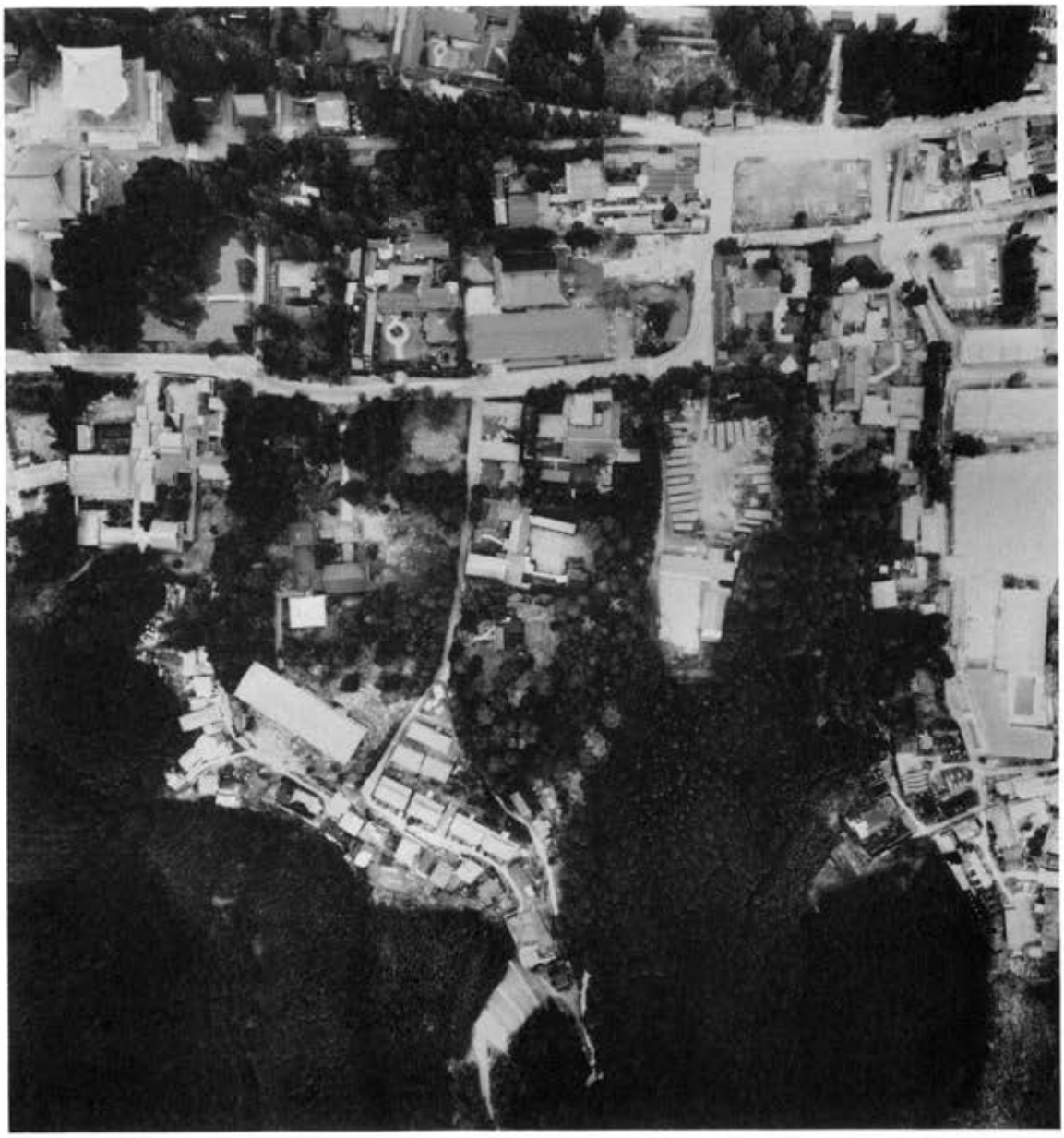

1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
0
20cm

図　　版

山内全景



靈宝館周辺

1　第1面全景（南から）

2　第1面下段全景（西から）

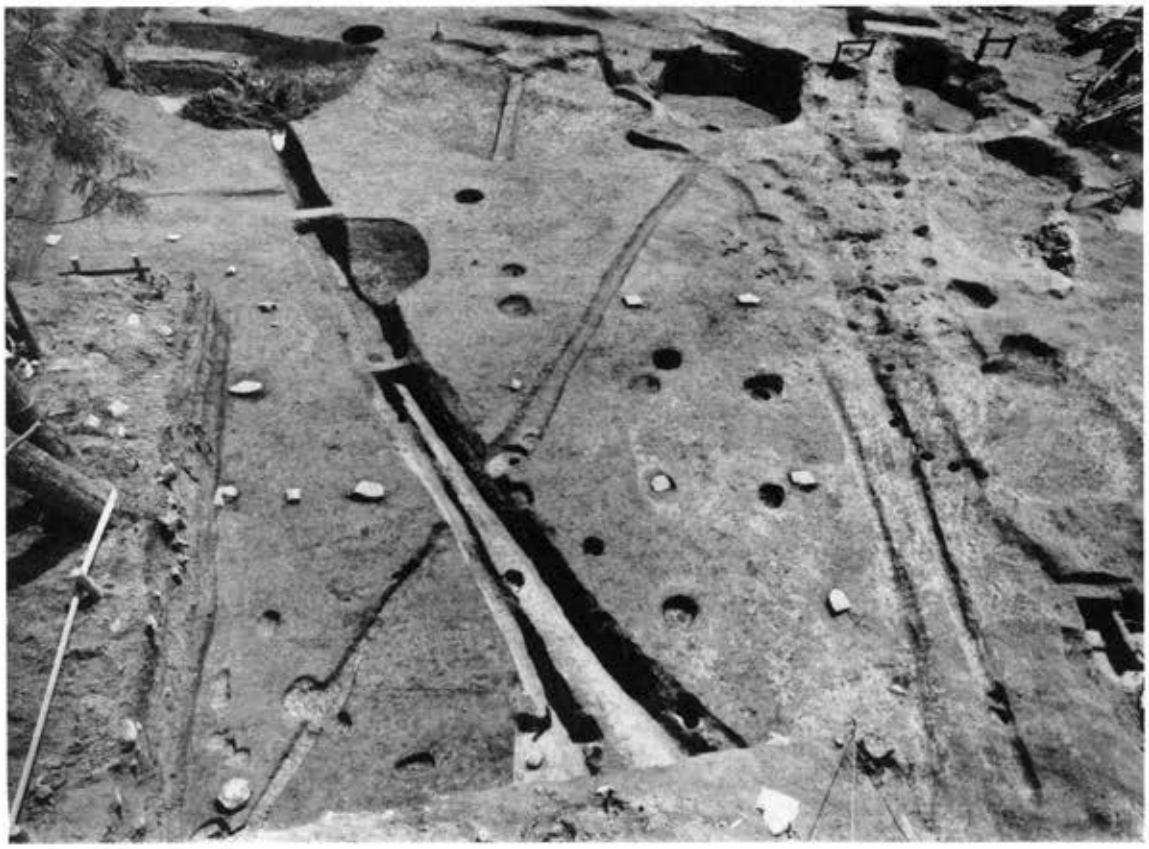
1　第２面上段全景（東南から）

2　第２面下段東半全景（北から）

1　第３面全景（南から）

2　ＳＢ－01（東から）

1　ＳＢ－02（南東から）



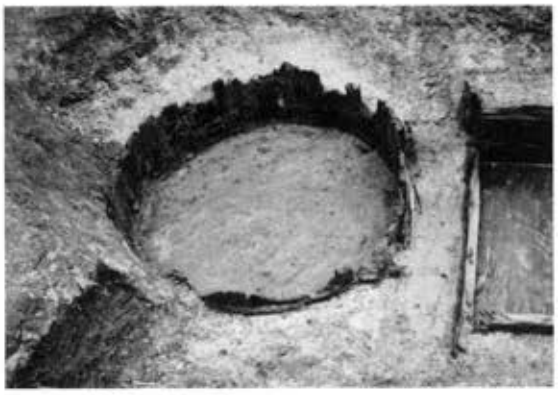
2　ＳＢ－03（北から）

1　ＳＶ—01（北西から）

5　ＳＶ—03・04（北西から）

2　ＳＥ—01（北から）

6　ＳＫ—01（北西から）



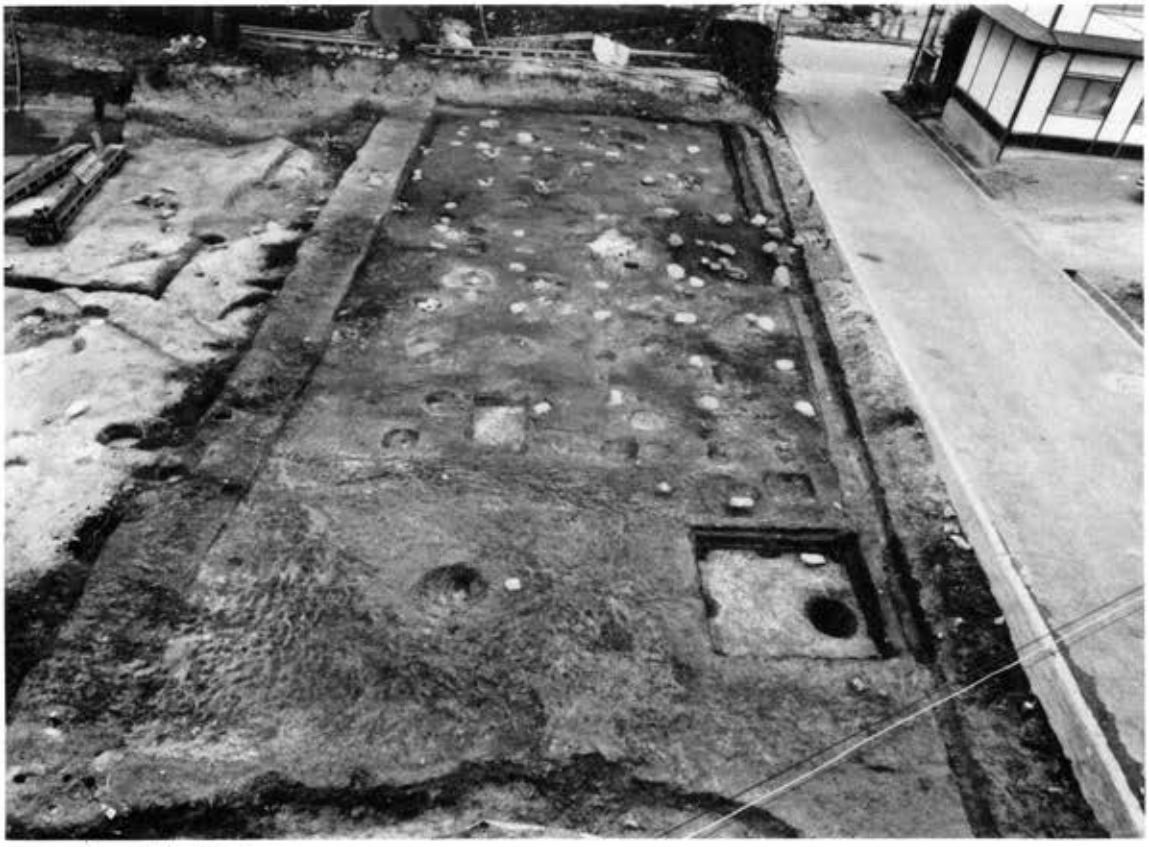
3　ＳＫ—02（西から）

7　ＳＫ—03（西から）

4　ＳＫ—09（西から）

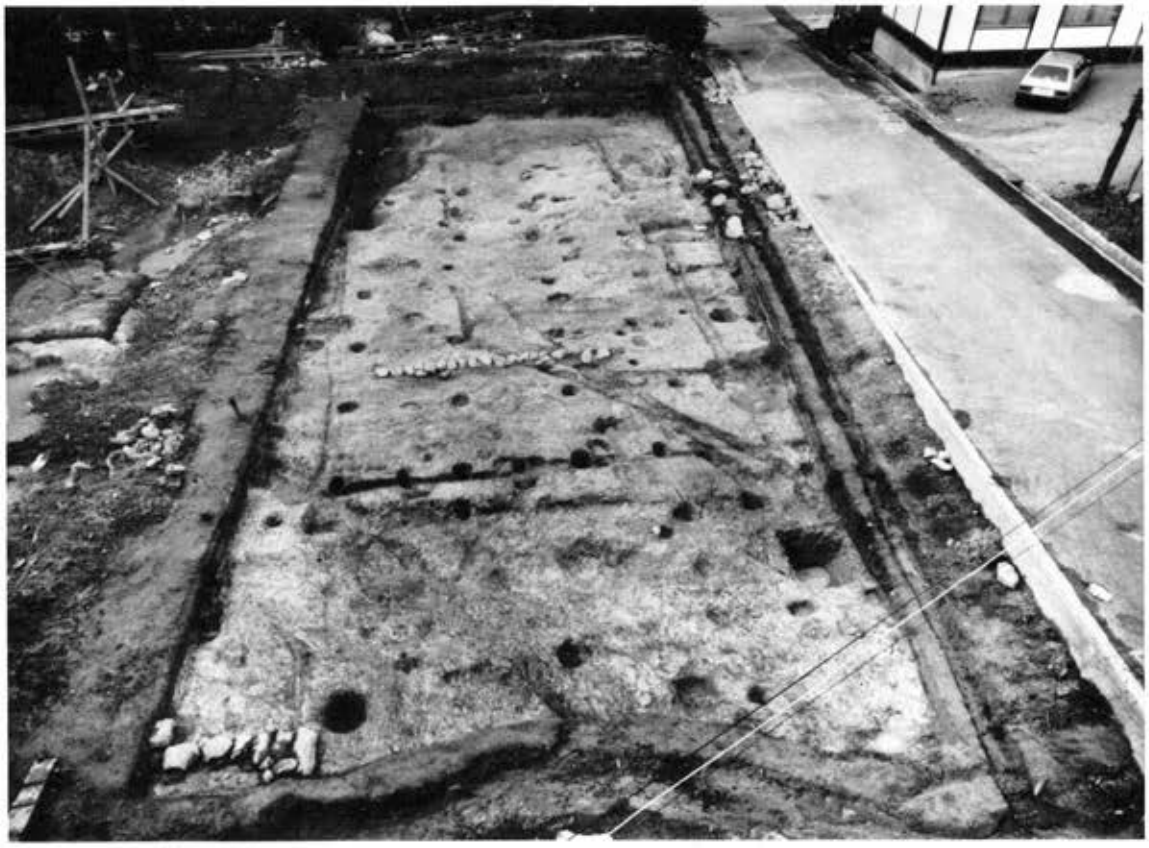
8　ＳＸ—01（西から）

1　第 1 面西半全景（南から）

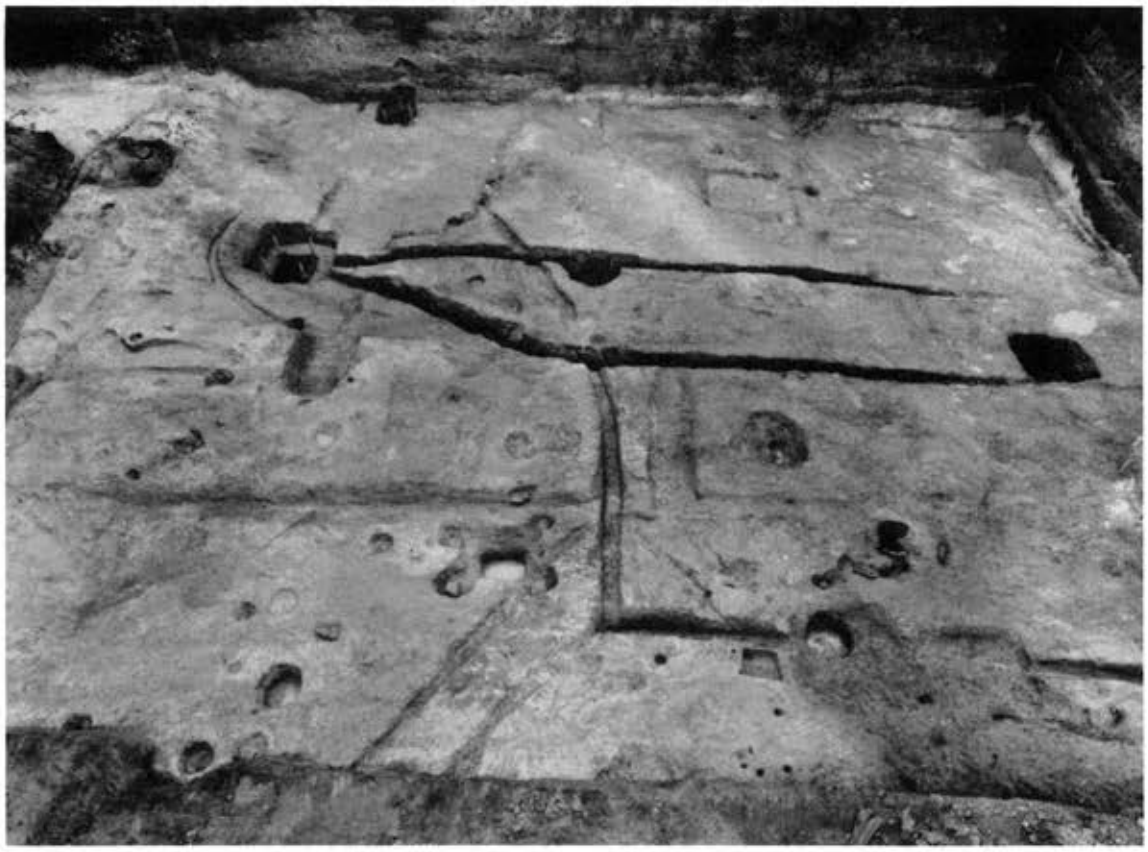


2　第 1 面東半全景（南から）

1　第2面東半全景（南から）



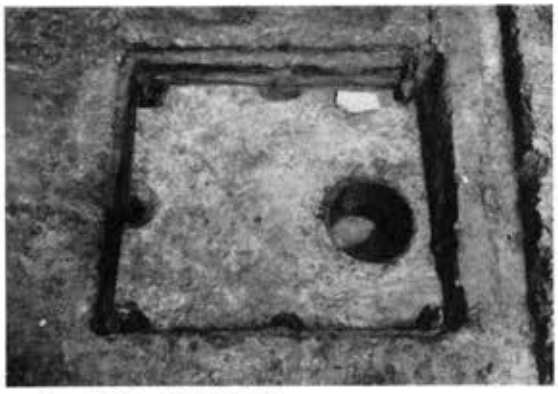
2　第3面東半全景（南から）



1　第３面西半全景（東から）

2　ＳＶ―01（東から）

4　ＳＫ―04（東から）



3　ＳＫ―08（南から）

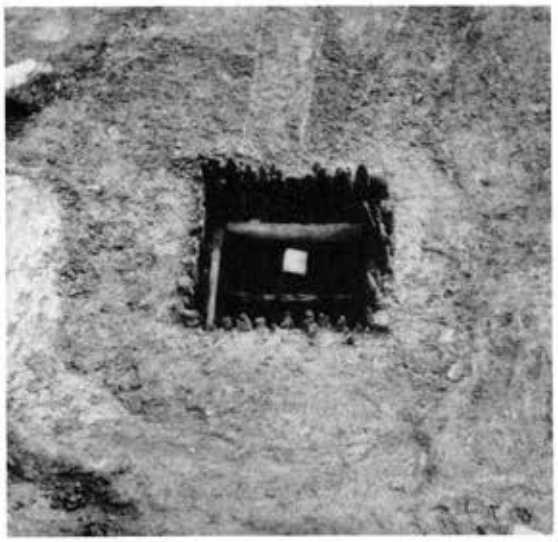
5　ＳＫ―07（北から）

1　ＳＥ－01（東から）

4　ＳＥ－02（東から）

2　ＳＥ－03（西から）

5　ＳＥ－06（西から）



3　ＳＥ－04（南から）

6　ＳＥ－04導水管検出状況（南から）

1　ＳＥ—05（東から）

4　ＳＥ—07（西から）

2　ＳＥ—09（南から）

5　ＳＧ—01第Ⅱ期（東から）

3　ＳＧ—01第Ⅰ期底の杉皮検出状況（東から）

6　ＳＧ—02（北から）

1　ＳＧ—03（北から）

5　ＳＫ—14（東から）

2　ＳＫ—05（東から）

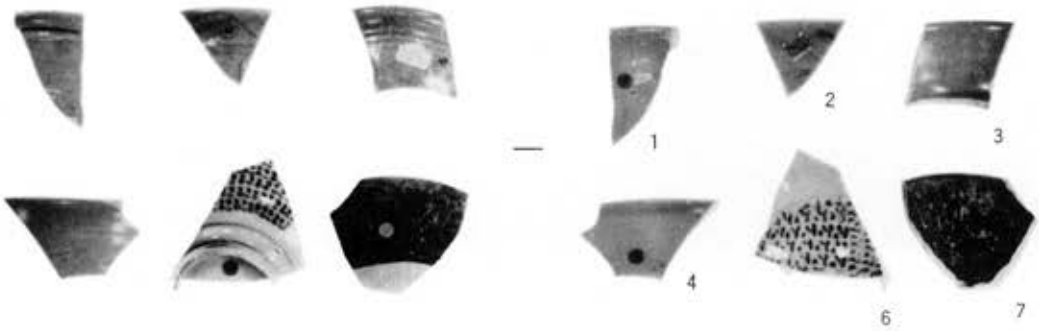
6　ＳＫ—13（南から）

3　ＳＫ—13蓋除去状況（西から）

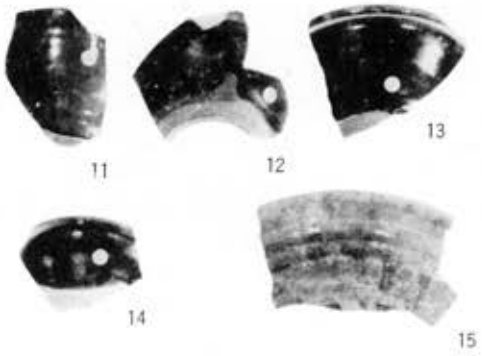
7　ＳＫ—13礫除去後（西から）

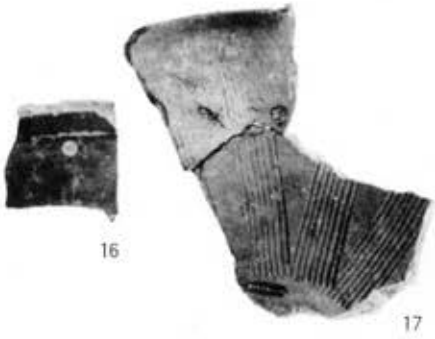
4　ＳＤ—09内ジョイント出土状況（東から）

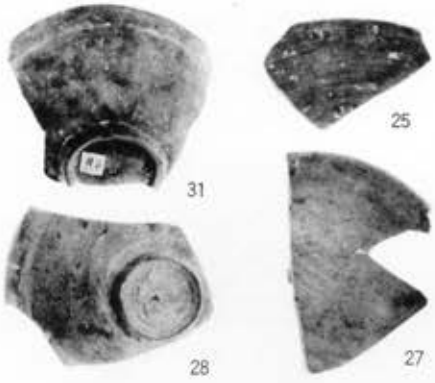
8　ＳＤ—06内ジョイント出土状況（東から）



5







29

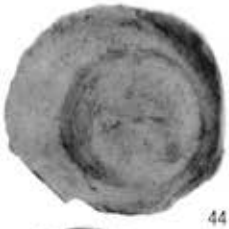
30

24

37

38

40


44

43

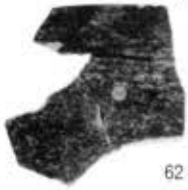
46

45

59

60

61


62

65

68

74

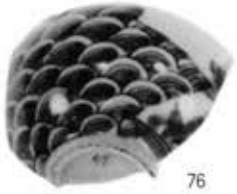
70

72

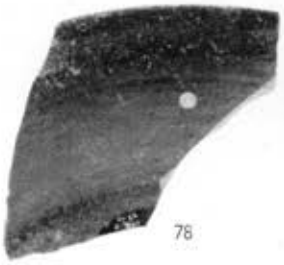
71

69

73

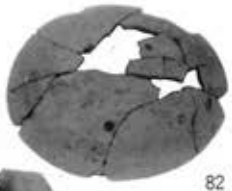

76

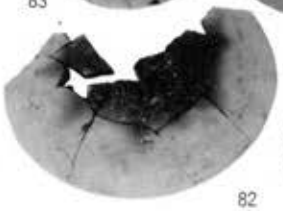
77


78

79

83


82


82

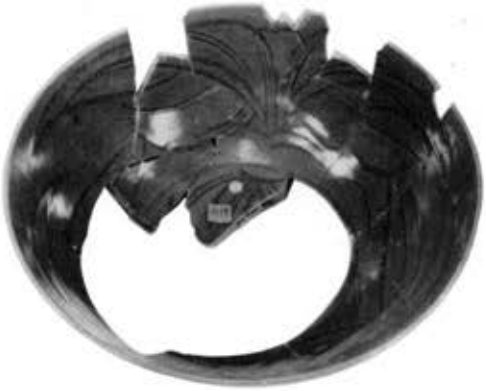
81

84

85

86

87



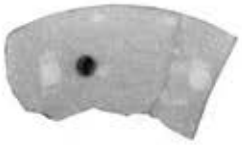
89

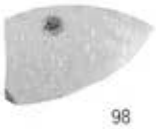
88

90

91

92


97

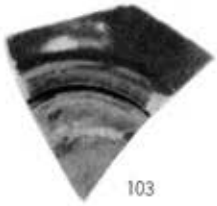

98

101

102

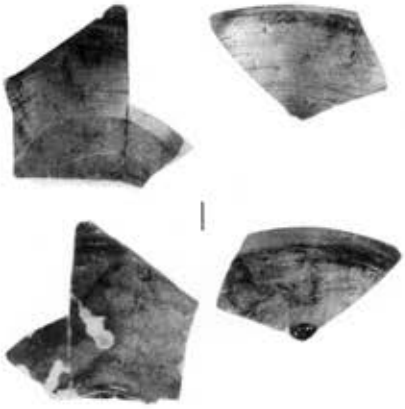
99

104


103

105

108


110

111

115

116

118

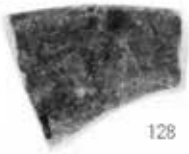
119

123

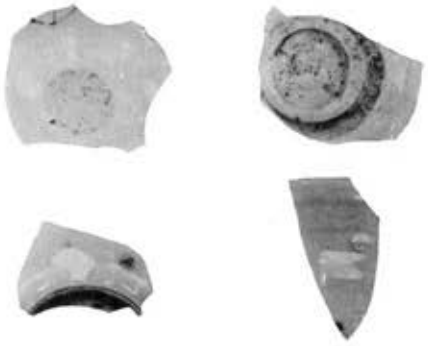
124

125

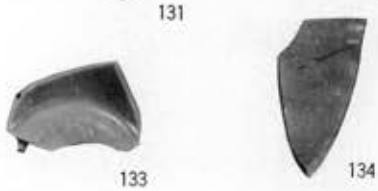
126


128

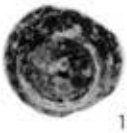
130



131 132

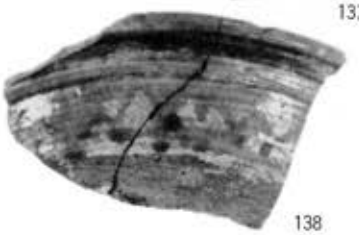


133 134



137

137



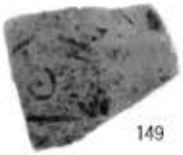
138

145

144

146

147



149

150

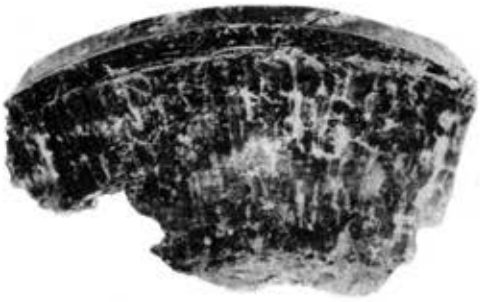
158

155

156

159

161



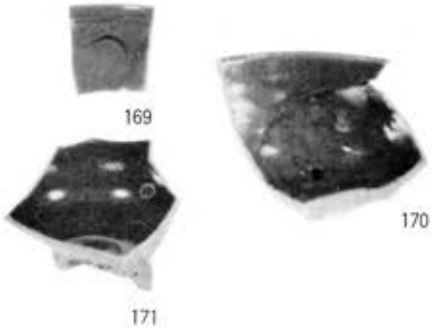
165

167

168

172

172



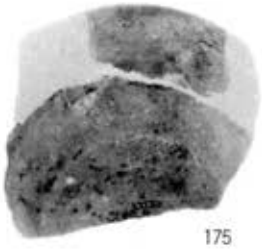
169

170

171

174

173



175

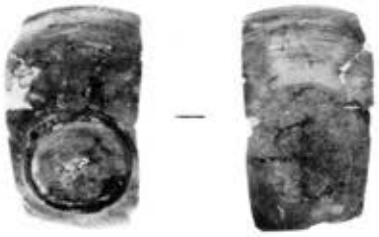
176

180

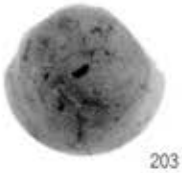
184

185

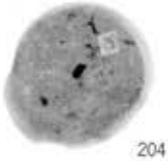
197



198

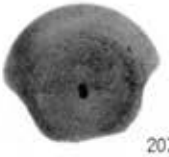


203



204

205



207

210

212

211

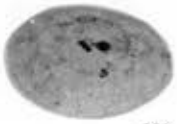
215

222

225

236

224

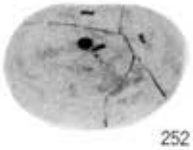


229

231

241

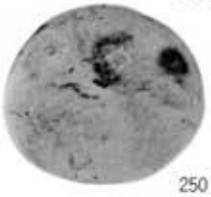
233



252

212

254



250

260

261

267

268

268

269

275

282

283

284

298

300

301

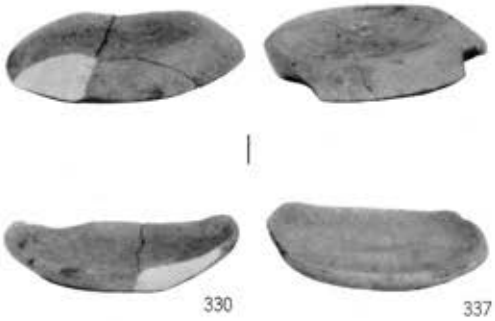
305

307

308

314 315

322



330 337

345

353 352

351 354

356

357

358

360

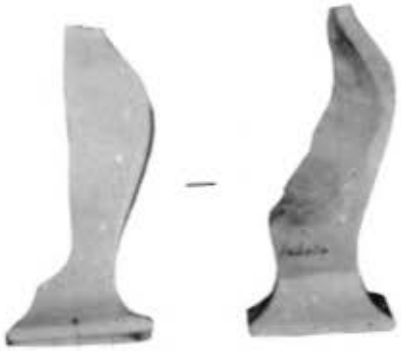
364

369

366

367

368

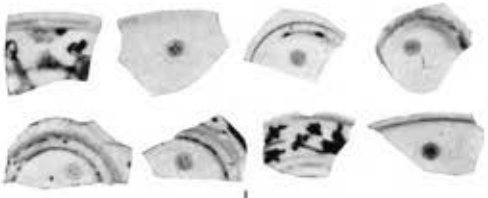


371

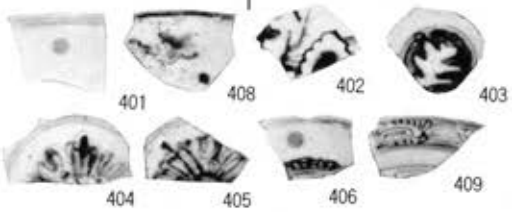
372

374

392 393 394



395 396 399



401 408 402 403 404 405 406 409

410 411 412

413 414

420 421 422

423

427

451

452

453

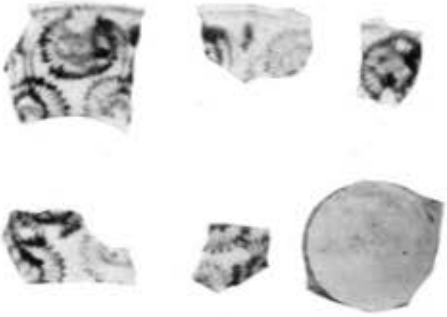
457

456

461

462

463



464

467

469

472

472

477

481

479

480

482

483

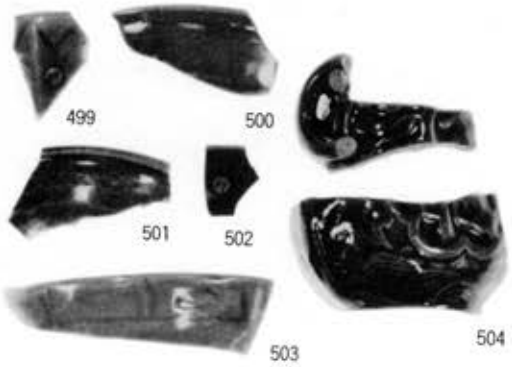
484

486

487

490

492


499
500
501
502
503
504

505

505

509

507

508

514

512

511

513

524

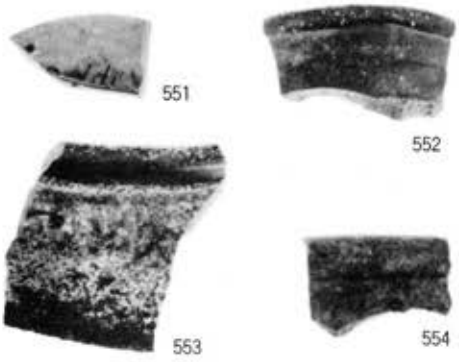
534

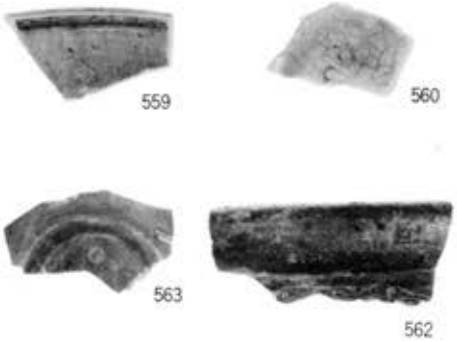
519

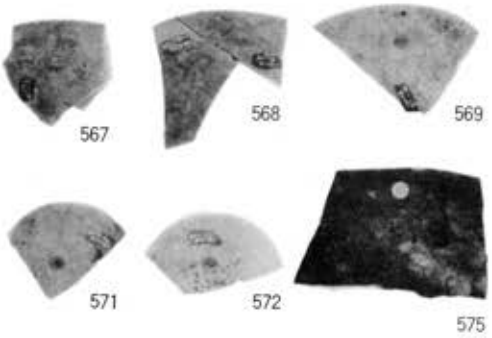
520

541 542 543

549 550 548

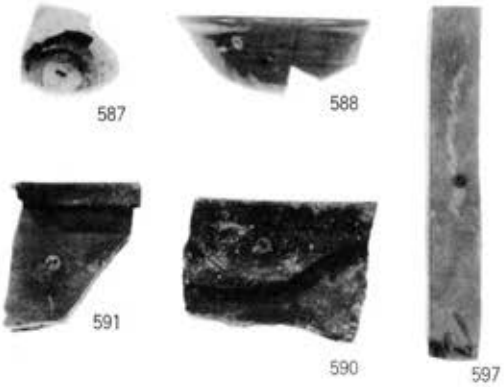

551 552 553 554


559 560 563 562

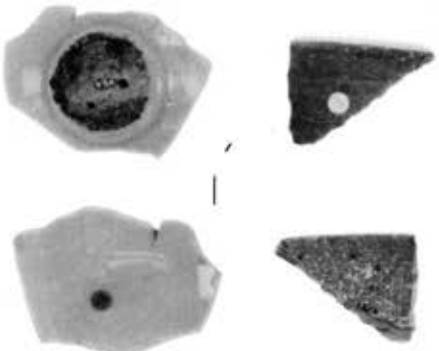

567 568 569 571 572 575

576

575

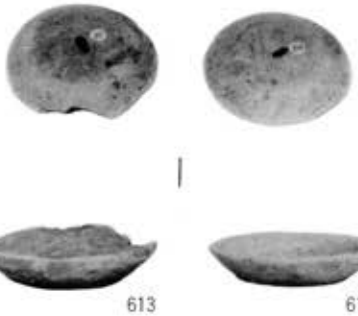

587 588 591 590 597

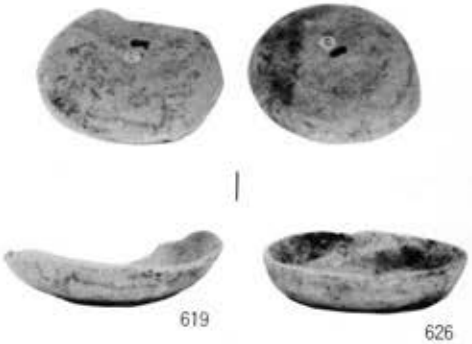
596


598

599

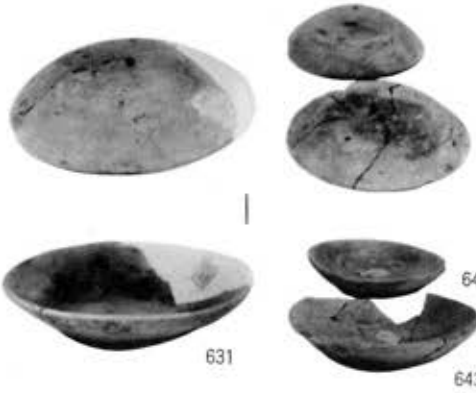
602 607

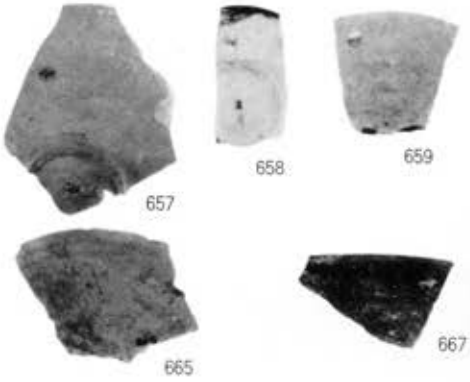

613 614


619 626

629

630


631 643 647


657 658 659 665 667

671

674

674

675

680

686

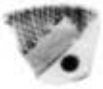
689

691

693

695

697


696

698

703

701

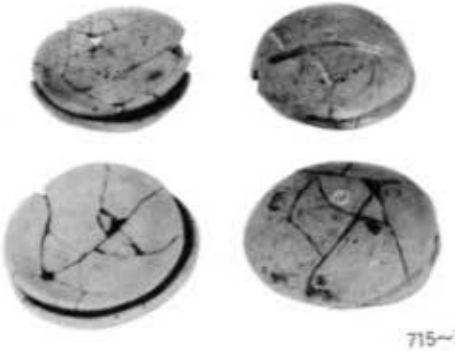
704

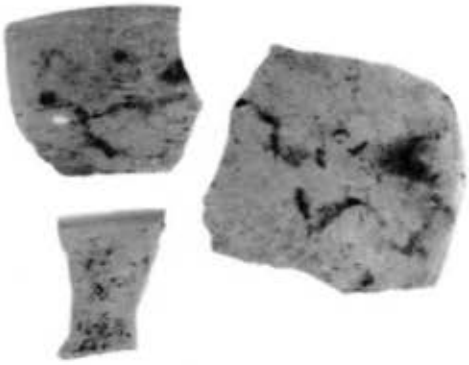
706

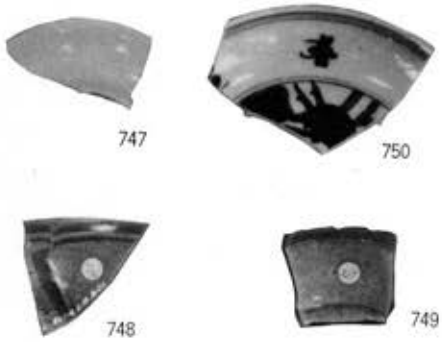
707

711

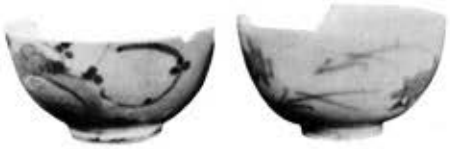
714

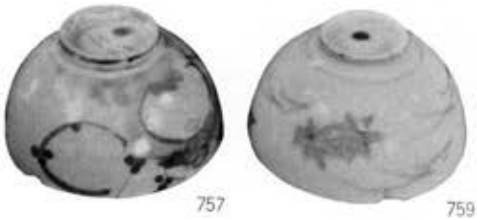

715~724


740


747 750 748 749

755 756



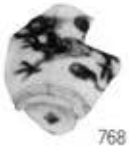

757 759

760

764

763

765

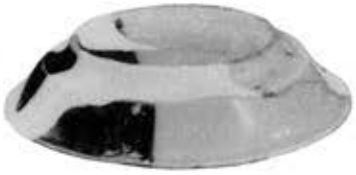

768

771

762

766

767 768



775

779

781

782

800

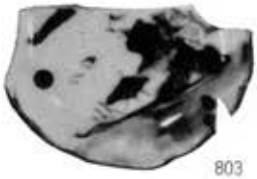
802

802

801

798

799



803

806

807

804

808

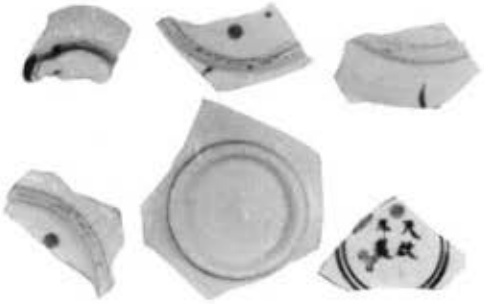
811

812

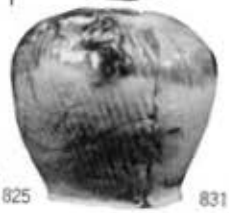
813

815

816



825

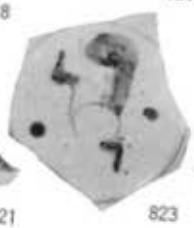

831

818

820

822

821


823

824

828

829

832

833

834

835

836

837

839

840

838

841

843

850

851

849

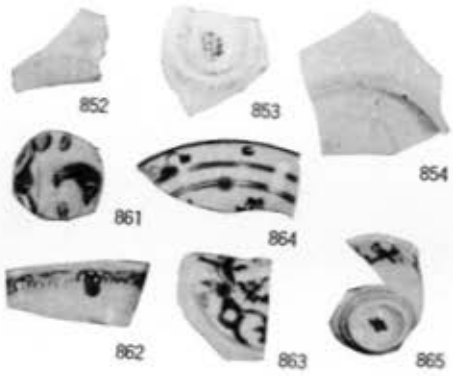
856

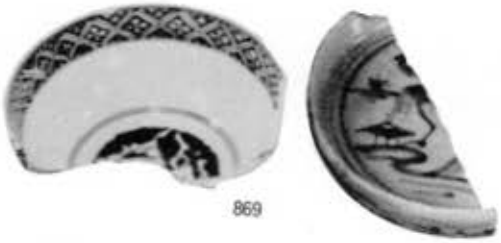
857

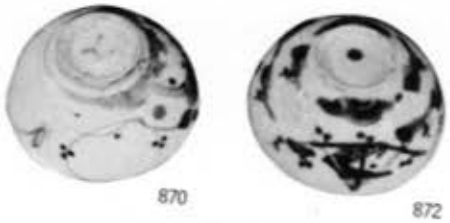
858

859

868


852
853
854
861
864
862
863
865

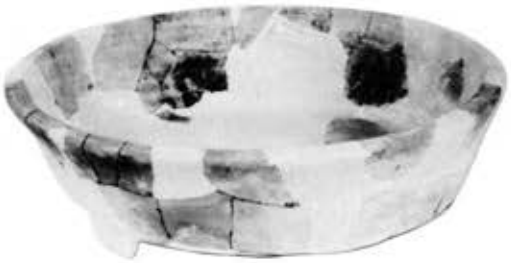

869
880


870
872

874
875

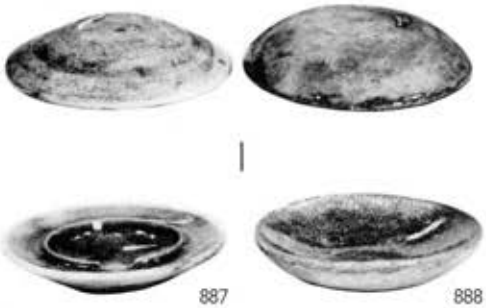
876
877

882

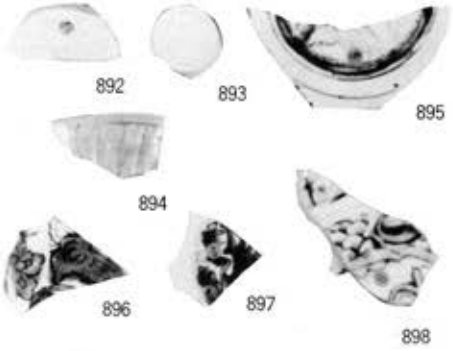


890

891



887 888



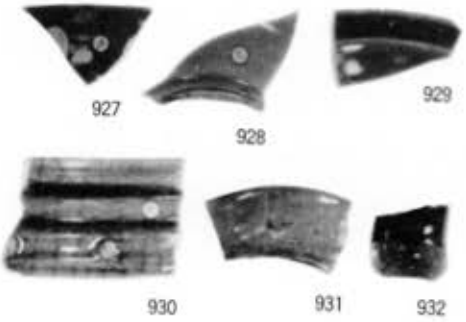
892 893 895 894 896 897 898

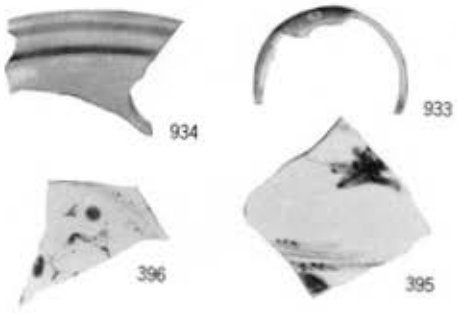
901 902

909 909

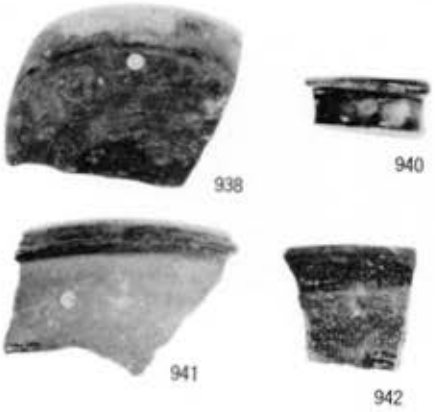
912 913

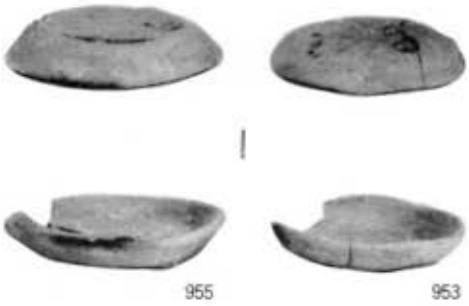
920


927
928
929
930
931
932


934
933
396
395

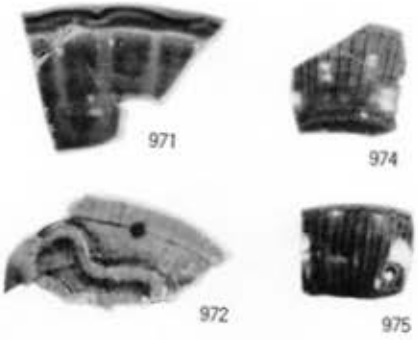
937


938
940
941
942


955
953

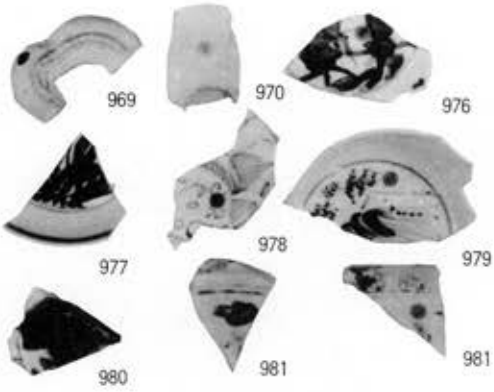
958

957
965


971
974
972
975

—

973



984

1001

—

1000

1004

1008

1014

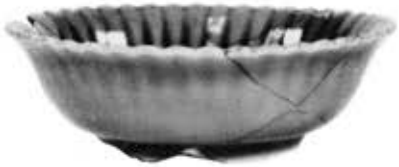
1021

1018

1015

1017

1018



1022

1026

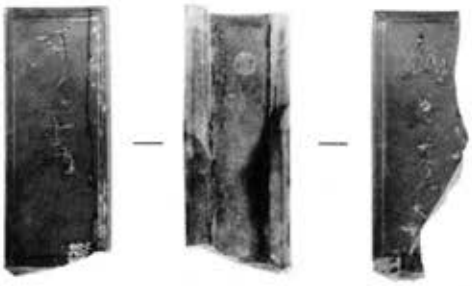
1034

1035

1041

1036

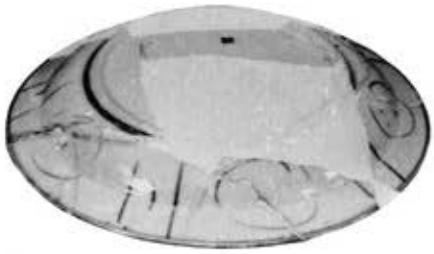
1037



1042

1048

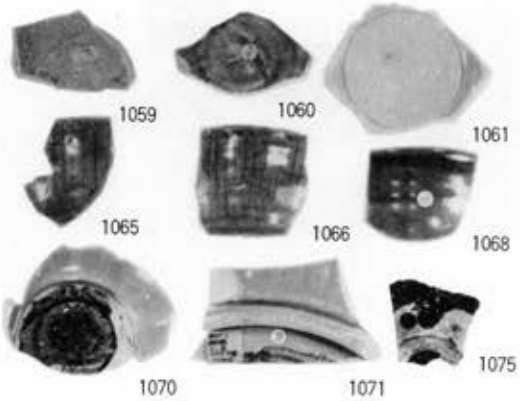
1049



1051

1052

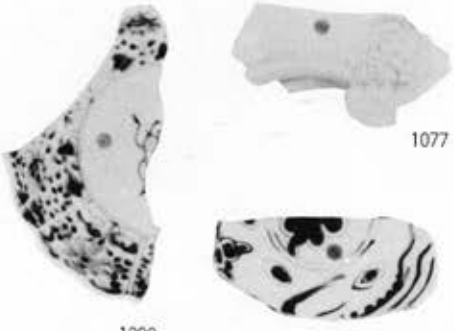
1064



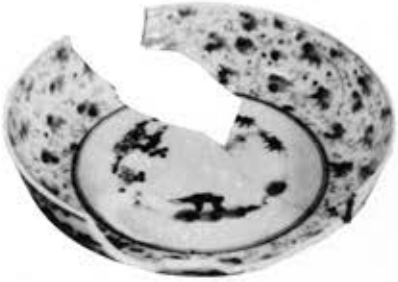
1059 1060 1061 1065 1066 1068 1070 1071 1075

1073

1072



1077 1080 1079



1081

1084

1086

1085

1092

1093

1106

1094

1095

1105

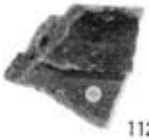
1108 1107

1110～1122

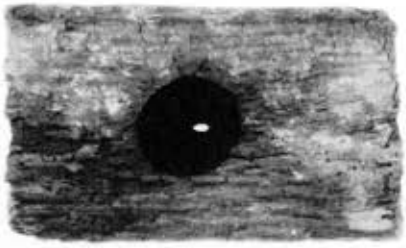
1126

1127

1131


1128

1130



1135

1129

1137

1139

1138

1140

1142

1143

1144

1145

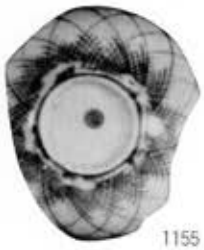
1148

1147

1152

1153

1154


1155

1156

1157

1158

1160

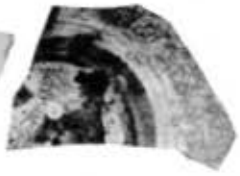
1163

1162

1164

1167

1170


1171

1147

1172

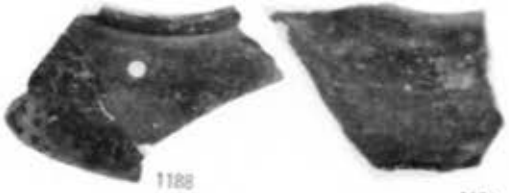
1173

1174

1177

1180

1182


1188

1189

1184

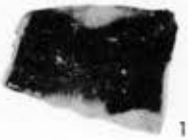
1185

1191

1194

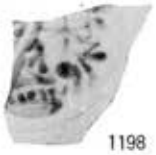
1193

1195



1169

1120



1198

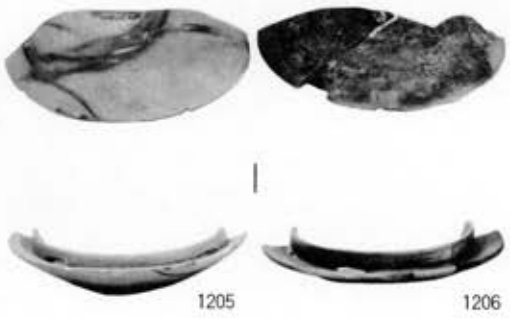
1199

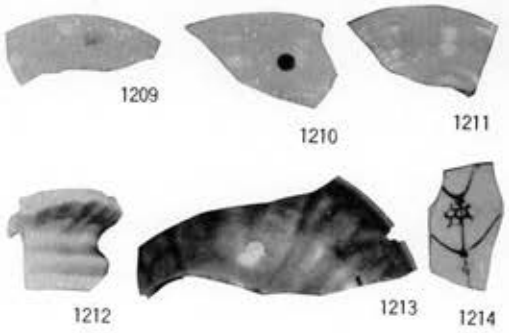
1201

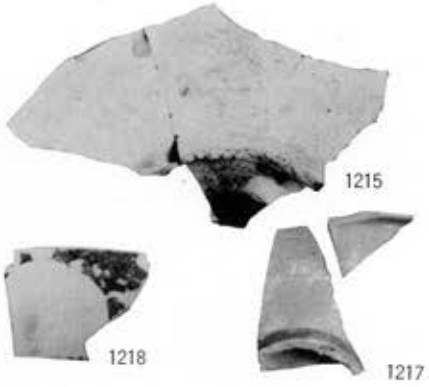
1202

1203

1204


1205
1206


1209
1210
1211
1212
1213
1214


1215
1218
1217

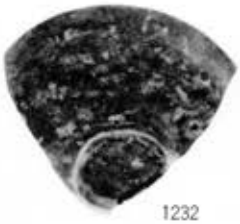
1216

1219

1220

1228

1229


1232

1231

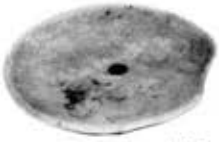
1235

1240

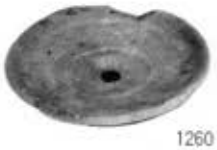
1239

1244

1245


1255

1257


1260

1265

1266

1257

1269

1276

1304

1307

1308

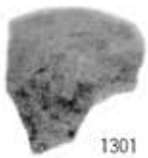
1280

1281

1285

1290

1289


1301

1295

1296

1300

1310

1313

1312

1311

1314

1315

1316

1317

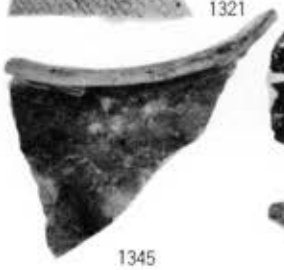
1318

1319

1320

1321

1322


1345

1346

1349

1339・1343

1335・1337

1332

1338

1334

1330

1350

金剛峯寺遺跡

— 高野山霊宝館新収蔵庫及び
駐車場建設に伴う発掘調査報告書 —

編　集
発　行　　(財) 和歌山県文化財センター

発行日　　平成 2 年 3 月30日

印　刷　　有限会社　真陽社